

908-Se221ウ
1200700963725

908
SE221
ウ

(2)



始



29. u. 22
1951. 24

欠

欠

908
S=221
1(2)

外ならない。で、早くから或商人の家へ年期奉公に出されたが、そこで過した六年は全く時間の徒費であつたと、彼自身は云つてゐる。それと云ふのも、彼の幼い魂はその時分から既に詩に走つてゐたからで、早くから子供らしい詩作をして、遊び仲間からは詩人と云はれてゐた。

兎に角、父親は子供の文學的趣味に屈服して、幾分でもその趣味に適ふやうにと云ふので、彼を羅馬教の法律の教授の下に送つた。一説に據れば、この教授はダンテの友人ビストイヤのキノといふ人で、有名な學者でもあれば、詩人でもあつたと云はれる。が、いづれにしてもボツカチオに科學的熱情を吹き込むことは出来なかつた。彼は再び六年間を無駄にしたと云つてゐる。

凡そ千三百三十三年頃、ボツカチオはナポリに居を定めて商業に従事してゐた。ナポリに於けるロベルト王の朝廷には、伊太利や佛蘭西の多くの文學者が出入してゐたが、その中にベトラルカも交つてゐた。ボツカチオはまだ親しくベトラルカと相識るには到らなかつたけれども、これ等の詩人達の奇智や婦人達の美しさに活氣づけられ、色どられたロベルト王の明るい朝廷の雰圍氣の中に愉快な數年間を過して、いよいよ俗事に携はるのが厭になつたらしい。その間、偶然にもヴァーヅルの墓といはれてゐる墓所に詣でて、詩人として立つ決心を定めたとも云はれてゐる。千三百四十一年の復活祭の前夜、サン・ドレンツォの教會に於て、彼は初めてロベルト王の私生兒といはれるマリアに出逢つた。彼は彼女をその創作中にフィアマッタとして不朽にしてゐるのである。彼女を見て、彼の情熱は灼熱し、更にその情熱は彼女に依つてそれに劣らず報いられた。が、彼女が人妻としての名譽をも義務をも捨てて、彼の求むる情交に身を委ねたのは、程經た後のことである。なほこの女に就いては、諸説紛々として、中には彼女の存在をすら疑ふ者もある。けれども、彼より先に世を去つて、彼の頭に死の瞬間までも忘れ難き存在として残つてゐたことは争はれない。

ナポリに滞在中、フィアメッタの勧めに依つて、彼は初めて「フィロコポ」と稱する散文の騎士物語を書いた。この作は後年の彼に値ひしないのだが、兎も角も驅使するに難い伊太利語の散文をあれ程迄にこなしたのは注目すべきだと云はれる。ついで「テシデ」といふ叙事詩を書いたが、これは不評判で、散文の長所が詩に患ひしたものと云はれる。彼自身も絶望のあまり全然詩作の筆を擱かうとしたが、ベトラルカの諫止に依つて漸く思ひ留まつたと云ふことである。

千三百四十一年に、彼は老來わが兒の補助と同居を望んで已まぬ父親の命に應じて、フロレンスに還つて來た。當時のフロレンスは内政上の争ひのために騷擾を極めてゐた上に、わが家の陰鬱な静けさは、ナポリの歡樂盡きざる朝廷の空氣に慣れた彼には耐へ得らるべくもなかつた。その上彼は愛するフィアメッタとの離別に、身も世もあらぬ思ひに悶えてゐた。この思慕の情は、わが身を喰み切る苦しさともなつたが、更に又われとわが身を慰むる唯一のよすがともなつたのである。この時代に生れた作品は「アマトー」(詩と散文と交互に編み交ぜたもの)「ラモロサ・グイジョーネ」(一種の遊戯詩)及び「ラモロサ・フィアメッタ」の三つで、その中最後のものはフィアメッタとの關係が如何なるものであつたかを知る唯一の材料でもある。

千三百四十四年、彼は有力な友人の仲介に依つて父の許しを得、再びナポリに戻つて來た。ナポリではロベルト王の孫女ジョヰナが即位してゐた。彼女は若く美しく、その上詩人を愛し詩人の稱讚を好んだ。で、ボツカチオはその文學的名聲の蔭に隠れて、彼女の特別な優遇に與つた。その後、長年の間、彼女は彼の忠實な友であり、彼も亦心からなる尊崇を彼女に捧げてゐた。彼女が良人の暗殺を唆し、少なくともそれを默許したといふ嫌疑を懸けられ、その罪狀が極めて明白になつた時でさへ、彼はなほ僅少の人々と共に彼女の味方に立つて、彼女の汚名を雪がんだため計畫したものであつた。「デカメロン」の執筆(千三百四十四年より千三百五十年に亘る)も、フィアメッタと云ふよ

りは、寧ろ彼女の希望に基いて取り懸つたものである。

千三百五十年父の死に依つて、彼はフロレンスに歸ると共に、父の遺志に依つて弟ヤコボの保護者となつた。彼は又非常な優遇を受けて、フロレンスの共和政府に仕へ、重命を帯びて諸方に使ひした。この間に羅馬法王を始めとして、諸國の皇帝王侯とも相識るに到つたのである。が、彼はダンテやベトラルカと同じ意味に於ての政治家では決してなかつた。世知に長けた人として、王侯貴人との社交を種々な意味に於て享樂したに止まるので、フロレンス州の動搖などには、何等關心する所がなかつた。彼が外交家としての經歷に於て特筆すべき唯一の收穫は、ベトラルカの交友を得たことである。

この二人の偉大なる詩人の最初の面識は、千三百五十年ベトラルカが暫くフロレンスに逗留した間、その滞在を愉快ならしめようと、ボツカチオの斡旋これ力めた時に始まる。その後、目を經るにつれて、二人の交遊は益々その親密の度を加へ、翌年フロレンス人が新設の大學に當時名聲の高かつた人々を招聘せんとした時も、ボツカチオは極力その最も重要な地位をベトラルカに與へんことを力説した。かうして二人の親交は死に到るまで續いた。しかもその交遊の根柢には、共通の趣味と文學的探究があつたのである。

十四世紀の間、古代文學の研究は伊太利に於ても全然等閑に附されてゐた。そして、古典の歴史や詩集は僧侶の手に託されて、それを使用研究することは勿論、その保存さへ覺束ない有様であつた。ボツカチオは有名なモンテ・カジノの僧院の圖書館を訪れて、戸もなき書室に塵に埋もれた高價な寫本を見、その寫本の頁が引千斷られて、子供の讚美歌だの女の護符だのになつて行く實情を知つて、公然その無智を離すと共に、自らそれ等の古書を寫し取つて、十五世紀前半の有名な伊太利の學者達を裨益する所が極めて多かつた。一方彼は崇高なるダンテの稱揚に寧日なく、その作品を自ら寫し取つたものであつた。

かくして次に現はれ来たものが「デカメロン」である。この作は或意味に於て歐洲に於ける散文小説の起原となつたもので、一般に「伊太利散文の父」と稱はれてゐる。その文體は伊太利人のやうに優美で婉め易く、粗野なシニズムから絶望の戀の溜息に到るまで、あらゆる感情の陰影を表はすことが出来る。凡ての國語に於ける革命と同じく、要するにこれも「自然に還つた」もので、伊太利人の特徴たる表現の直截を具體化したものとも云はれよう。その結果、概念に於ても表現に於ても、時として粗野と猥褻に流るゝ嫌ひあることを免れない。特にこの作中下等社會の題材を取扱つたものの場合に於て然りである。同時に又さう云ふ社會の描寫には素晴らしいものがあつて、通俗の談話にユーモアを交へ、道徳上嫌惡すべきやうな場合にも、讀者をして破顔一笑せしめるだけの力がある。

題材は高尚なベーツスから卑野な猥褻に到るまで、あらゆる方面からあらゆる材料を取つて來てゐる。但し貞婦ダリセルダの話(十日目第十話)といふやうな、道徳的にも美しい話が載せてあるからと云つて、作中の卑猥な部分をすつかり帳消しにするわけには行かない。随分猥褻のための猥褻といふやうな話も少なくないのである。が、これはどうも南歐人の直截な、包み隠しのない、奔放で情熱的な性情から來てゐるのだから仕方がない。この國民的性情を呑み込んで讀んで行きさへすれば、その思ひ切つて露骨でナイーフな男女關係の物語も、わが國の作品に間々見られるやうな、思はせ振りの性慾描寫よりも、却て挑發的な要素が少くない。それはそれとして、たゞ面白く笑つて讀了することが出来るやうに思ふのは、單に私人の僻目であらうか。私としては飽くまで、この作の時代を帯びた、粗枝大葉の直截な文體なり描寫なりが作中の卑猥な要素を救つてゐるものと信ずるものである。

なほ、この作が卑猥であるといふ非難を避けるために、強ひてこの作を諷刺と皮肉を主としたものやうに見做さうとする人々もある。實際、この作の中には、羅馬教會、特にその僧侶の墮落腐敗に對する辛辣な諷刺と攻撃が多きを占めて、例の卑猥な物語と殆ど對立をなすものと云つてもいい。が、それはたゞ對立をなすと云ふに止まつて、一

方が他方を蔽ふことにはならない。それに、その皮肉も、現在から見ればそれ程根本的なものとも思はれない。作者が晩年その態度を悔いて、再び教會に歸依した事實に見ても、凡そその邊の消息は分るのである。私は寧ろこの作者を感情的な弱い人だと思ふ。昂奮して、詩作の筆を燒かうとした一事か。見ても、そこに愛すべき弱者の面影が見えるではないか。

前にも云つたやうに、この作は歐洲に於ける散文小説の濫觴をなすものだと言はれてゐる。が、それだけに又テクニクの上から見れば、随分幼稚なものだと云はざるを得ない。大抵の話が長篇小説の筋書のやうなものに留まつてゐる。が、流石に天才者の筆になつたものだけあつて、その中には現在のテクニクから見て、立派に短篇小説の體を具へたものもないことはない。が、さう云ふ藝術的に見て價值のある作、殊に場面の活躍した描寫と云つたやうなものは、いづれも下等社會の實相を寫した、所謂卑猥な作品の中に多いのだから困る。その中であつて、たゞ一つこれなら藝術的に見ても價值がある上に、何處から見ても卑猥でないと思つたのは、五日目の第九話に出る鷹の話である。人々の思ひ／＼ではあるが、私はこの作を「デカメロン」百話の中の第一の傑作だと思ふ。少なくとも一般に推稱されるグリセルダの話などよりは、何の位佳いか知れない。と云つて、この作にも未だ性格らしい性格もなければ、背景らしい背景もない。が、この作にはちやんと焦點がある。謂ふ所のクルーシャル・モメントがあつて、それに全體の重量がかゝつてゐるから、讀んでゐて息も繼がれない面白味がある。立派な短篇小説でもあるが、書き直せば、すぐ近代的な一幕物にもなる。實際、私は翻譯しながら、いつか折があつたら、この材料に暗示を得た一幕物を書いて見ようかとも考へたものだ。處が、その後になつて、エミール・ゾラの「ジュヴエナル」を讀んで見ると、ちやんとこの話がエピソードとして作中の要所に使はれてゐる。たゞボツカチオが鷹を料理して喰はせるのに對して、ゾラは愛猫を料理して作中の主人公に喰はせる相違があるばかりだ。しかも、その使ひ方が實に換骨脱胎の妙を極めてゐる

のである。私はがっかりして筆を投じた。

序ながら、「デカメロン」の案を粉本としたり、若しくはその一部を材料として採用した人々には、ソラの外に、なほ獨逸のレツシング(賢人ナターン)の中に一日目の第三話を取る)、英吉利のチヨースア、リドゲイト、ドライデン、キーツ、テニンソン等の大きな名前をいくらかも挙げる事が出来る。が、面白いことには、ボツカチオ自身も佛蘭西の批評家によつて、佛蘭西古代の物語を剽竊したと非難されてゐることである。剽竊か剽竊でないかは暫く措くとして、「デカメロン」の中の何れだけが他から材料を取つたもので、何れだけが彼の創意、若しくは経験に基づくものであるかを調べて見るのも面白からうと思ふが、私の力に及ぶことでもないから止めて置く。

その後十年の間、彼はフローレンスに定住して、時々外交上の使命を帯び、又は友人を訪問するために市を去ることとはあつても、居を移すやうなことはなかつた。一方「デカメロン」は益々上流社會の紳士淑女、しかも相當の見識を有つた年配の人々の間に耽讀せられるやうになつた。

千三百六十年、彼はフローレンスの騒がしい巷から退いて、出生の地セルタルドに歸臥したものと思はれる。この退隱生活の魅力を、彼は法悦を以て書き綴つてゐる。そして、その翌年彼の生涯に於ける不思議な轉換が起つた。それは、若し彼にして直ちにその不信心な生活や文學的述作から脱却しなければ、必ずや近き將來に於てその死を免れざるべしと、自分の懺悔僧から云ひ聞かされたのであつた。その他、かうした事柄を方々から聞き及ぶに到つて、彼の多感な性質は太く動かされた。實際、彼の生活は奔放不羈なるもので、その作品も屢々道徳に背馳してゐた上に神聖な羅馬教會の制度なり僧侶なりを痛烈な諷刺で攻撃して來たことは、一部の「デカメロン」を讀んでも首肯されることである。今や突然の死に脅されて、彼はその藏書を賣り文學を捨て、餘生を懺悔と宗教的修練に送らうと決心した。それに關して、彼はベトラルカに書を送つて悶々の情を訴へてゐるが、それに對するベトラルカの涙に滲む友

情を今日なほ吾々は目撃することが出来るのである。この崇高な友情に動かされて更生したボツカチオの晩年の作品が多く宗教的色彩を帯びて來たのも怪しむに足りない。

次の十年間彼は所定めぬ生活をした。が、主としてフローレンスとセルタルドに居を構へ、ベトラルカその他の友人の訪問や、外交上の使命を帯びて屢々その家を去つた。一面、彼は書籍の購入に多額の金を費したために、常に貧乏をつゞけてゐたらしい。が、その獨立心は非常に旺盛で、彼の友人や嘆美者に依つて提供された數々の非常な好意を決然として斥けてゐた。この間四つの重要な羅句語の作品を残してゐる。

千三百七十三年、彼はセルタルドに於ていたく病魔に冒され、瀕死の状態に陥つた。そして、その結果から完全に恢復することは出来なかつた。が、病魔と雖も、彼の知的精力を屈服せしめることは出来なかつた。フローレンス人がその大學に「神曲」の講座を設けて、それをボツカチオに提供するや、齡傾ける老詩人は進んでこの至難の仕事を引請けた。その最初の講義は實に千三百七十三年十月二十七日を以て閉かれたのである。が、その翌年、無二の親友ベトラルカの死を聞くや、強くその心を打たれ、この打撃は終に癒される時が來なかつた。かくて亡友の記念に必死の努力を捧げ、ベトラルカの美嗣子を指導して、亡き詩人の羅句語の叙事詩「アフリカ」の出版に盡瘁した。因に、この作はベトラルカ自身あの有名な「ラウラに與ふるソネット」よりも傑作だと信じてゐたものと云はれる。

かくしてボツカチオにも最後の日が來た。その遺言に依つて、彼の藏書はその懺悔僧に残され、懺悔僧の死後はフローレンスの修道院サント・スピリトに譲られることになつた。更にその僅かな財産は弟に遺された。千三百七十五年十二月二十一日チエルタルドに於て、先立てる私生兒の後を追つて世を去ると共に、彼の遺骸はその地のサント・ヤコボ及びサント・フィリツポの教會に葬られた。(大部分エンサイクロペディア・ブルタニカに據る。)

目次

第一日	一
第一話	一九
第二話	三
第三話	六
第四話	九
第五話	三
第六話	四
第七話	六
第八話	五
第九話	五
第十話	四
第二日	六
第一話	六
第二話	七
第三話	七
第四話	八

第五話	八
第六話	九
第七話	三
第八話	三
第九話	二
第十話	二
第三日	七
第一話(略)	一六
第二話(略)	一六
第三話(略)	一六
第四話(略)	一六
第五話(略)	一七
第六話(略)	一七
第七話	一七
第八話(略)	一八
第九話	一八
第十話	一八

第四日	二〇
第一話	二一
第二話(略)	二二
第三話	二二
第四話	二二
第五話	二二
第六話	二二
第七話	二二
第八話	二二
第九話(略)	二二
第十話	二二
第五日	二九
第一話	二九
第二話	二八
第三話	二六
第四話(略)	二九
第五話	二九
第六話	三〇
第七話(略)	三〇
第八話	三〇

第九日	三二
第十話	三二
第六日	三三
第一話	三三
第二話	三三
第三話	三三
第四話	三三
第五話	三三
第六話	三三
第七話(略)	三三
第八話	三七
第九話(略)	三七
第十話	三七
第七日	三五
第一話(略)	三五
第二話(略)	三五
第三話(略)	三五
第四話(略)	三五
第五話(略)	三五
第六話(略)	三五

第七話(略)	三五五
第八話(略)	三五五
第九話(略)	三五五
第十話(略)	三五五
第八日	三五六
第一話(略)	三五六
第二話(略)	三五六
第三話(略)	三五六
第四話(略)	三五六
第五話(略)	三五六
第六話(略)	三五六
第七話(略)	三五六
第八話(略)	三五六
第九話(略)	三五六
第十話(略)	三五六
第九日	四三三
第一話	四三三
第二話	四三三
第三話	四三三
第四話	四三三

第五話	四四〇
第六話	四四八
第七話	四四八
第八話	四四八
第九話	四四八
第十話	四四八
第十日	四七一
第一話	四七一
第二話	四七一
第三話	四七一
第四話	四七一
第五話	四七一
第六話	四七一
第七話	四七一
第八話	四七一
第九話	四七一
第十話	四七一

デカメロン

ボツカ子 才作
森田 草平 譯

第一日

如何なる動機から以下擧ぐるやうな人々が集まつてお互ひにさうした物語をするに至つたかを、一應作者が説明した後で、バムビネアの辛領の下に、各人その最も得意とする所を語る。

淑女方よ、私は貴方が天性いかにも情深くいらせられることを思ふにつけ、この作品が最初の程は貴方の心にさぞ容易ならぬ、忌はしい印象を興へることであらうと氣遣はれます。と申すのは、近頃、それを見た方は云ふ迄もなく、たと話を聞いただけの人達をも哀愁の念に打たれさせずには置かない、あの凄惨な傳染病の惻ましい記事をその冒頭に掲げてゐるからで。が、それだからと云つて、何處迄も悲嘆の涙に暮れて讀み通さねばならぬものだなぞと誤解して、のつけから怖氣を震ひ、讀讀を中止するやうな

デカメロン

ことのないやうにお願いして置く。さうした恐ろしい冒頭は、貴方方にとつて、正しく旅人の目の前に聳える峻嶒な山に外ならない。その山の向うには美しく快い平原が横はつてゐて、そこに到る紆曲折の勞苦が大きければ大きいだけ、それが旅人達の眼に一層心地よく映るのと同じ理窟です。そして、享樂の飽滿に續いて苦痛の生ずると同じやうに、あの悲慘事も亦、それに續く喜びによつて局を結ばれます。

で、その短い間の悲哀——短いと申しますのは、それが僅々數語に盡きてゐるからで——の後には、直ぐさま上に私のお約束して置いたやうな、悅樂と甘美とが遣つて來るのですが、而もそれは、かやうな冒頭の後では、何かそれに対する明確な證言でもない限り、恐らく何人も期待しないだらうと思はれるやうなものです。尤も、私にした處で、もつと他の餘り峻嶒でない道を執つて、最後の目的地へ貴方方を御案内することが出來たら、喜んでそれに就いたこととせう。ですが、かうした前置を省いては、後に皆さんのお讀みになるやうな事柄が何う云ふ風にして起つた

か、それを明かにすることが出来ないで、謂はゞ已むを得ずかうした手法を取つた次第でございます。

さて、主基督の降誕以來千三百四十八年を経過した頃、伊太利隨一の美しい都だと云はれてゐる、あの高雅なフロレンスの市にいと怖ろしい死の疫病が遣つて参りました。それが天譴運行の作用によるのか、それとも我々の罪業に對する正當な怒りとして、神が人間に下し給うたのか、いづれにしても、二三年前東洋に發生して、そこで無数の人間を僵した後、なほ停止せず、次第に蔓延して、到頭この西方の地域迄も禍を蒔き散らしつゝ歩み寄つて來たのでした。

處で、この悪疫に對しては、人間の智慧や分別では如何とも施す術がなかつたのです。勿論、その處置には手脱りのないやうに、市内はわざ／＼そのために任命せられた役人の手で幾多の汚物から清められた上、なほ患者の市に潛入することを禁じて、健康者の保護に就いても屢々協議を凝らしたが、更にその效がありませんでした。同様に、篤信の人達の手で、一度ならず、一絲紊れない行列とか、又はその他の方法で、神に捧げられる祈りも哀願も何の驗を顯はしませんでした。

しかも、前述の年の春の初めに到つて、この疫病は人の魂を銷し又人の眼を蔽はしむる程凄惨な作用を呈し始めました。が、このペストは、東洋のそれとは違つて、鼻の出

從つてそれに対して適當な治療法を施すことが出来なかつたためか、兎も角も快癒するものは極めて稀れで、殆ど凡ての者が、多少の遲速はあつても、前述の徵候が現れてから三日以内に僵れました。しかも大抵熱もなければ、その他の發作もないといふ有様でした。

このペストは益々猖獗を極めました。と云ふのは、患者との往來によつて、恰度火が近邊にある乾燥した燃料に燃え移るやうに、どん／＼健康體に傳染して行つたからですね。實際、啗に患者に近寄つたり、若しくはたゞ言葉を交したばかりで、健康體がそれに感染して等しく死の萌芽を身に受けると云ふに止まらないで、患者が一寸使用したか手にしたかした衣服又はその他の物に手を觸れてさへ、もうその疾患が觸つた者に感染するやうに見えた程、この災禍は停止するところを知らなかつたのでございます。

處で、私がこれから云はうとしてゐる事柄は、どうも本當らしく聞えない上に、私にしてからが、これが若し世人の多くや私自身の目撃したことでなければ、いくら信頼するに足る人々の口から聞いたところで、頭から信用する氣にはなれなかつたでせうよ。何しろこの傳染病は、啗に人間から人間に傳染したばかりでなく、一層恐ろしいことには、ペスト患者又は、ペスト死亡者の所持した物品に觸れたものは、如何なる動物と雖も、この病菌に取り憑かれて、瞬く

血が避くべからざる死の徵候となつてあらはれるやうなことはなく、疫病の初期に當つては、男女を問はず、鼠蹊部又は腋窩に一種の腫物を生ずるのを常としました。それが時には普通の林檎位の大きさであるかと思へば、時には又鶏卵大ともなつて、人に依りその數に多少の差はあつたものの、端的にペストの腫物と稱ばれてゐました。で、この腫物は、今も申したやうな鼠蹊部又は腋窩から始まつて、忽ちのうちに處嫌はず他の凡ての五體に蔓延して行くのです。ね。

が、後にはその症狀が別の經過を取るやうになつて、多くの患者は腕と云はず、腰と云はず、四肢の全部に互つて黒褐色の斑點を生じました。それも或者は形は大きいのが少なく、又或者は形は小さいが數が多いといふ風にです。ね。そして、以前にはあのペストの腫物が不可避的死的確な前徵であり、只今でも時折はさうした患者を見受けると同じやうに、今やこの斑點はそれが現れた患者にとつて致命的なものでした。

加ふるに、この疫病の治療に對しては、如何なる醫術も藥劑も更に效能がないやうに思はれました。この疾患の性質がさうなのか、それとも醫者達の無知からしてか、(當時は科學的に養成された醫者の外に、少しも醫學上の修業を積まない男女の醫者があつて、醫者の數は非常に多かつたものでした。)この疫病の正しい原因を知ることが出来ず、うちこの疫病のために僵れた程、暴威を振つて傳播して行つたものですからね。かうした現象に就いては、私は一度ならずその實例を見たものだが、特に或日のこと、上に述べたやうに、この眼でそれを目撃したのでした。この疾病で僵れた或貧乏人の襤褸を街路の上に投げ出して置いたところへ、二頭の豚が遣つて來て、最初はこの動物特有の遣り方で、暫く鼻で掻き廻してゐましたが、それから口に咬へてあちこち振り廻したものです。暫く經つと、それが毒でも喰つたやうに痙攣を起して、散々汚したその襤褸の上に打つ倒れたまゝ往生してしまひました。

かう云つたやうな、及びこれに類した、若しくはこれよりも甚しい多くの機縁に促されて、生き残つてゐる程の者は戦々競々として種々の豫防策を講ずると共に、誰も彼も皆同じ一つの慘酷な標的に向つて走りまゐりました。つまり自分だけが助かりたいといふ一心から、患者並びに患者に附屬した物は、一切これを避け通れようとしたのです。ね。

で、二三の人々は、己の生活を節し、凡ての過度を制することに依つて、この疫病に對抗することが出来ようといふ意見でございました。この連中は團體を作つて、自餘の者とは別になつて、病人のゐない家に閉ぢ籠つたまゝ、一緒に暮しました。彼等は此處で上等な食物と、精選された酒とを極めて適宜に攝つて、あらゆる放恣を絶ち、音樂そ

の他手に入るだけの娯樂で心を慰めながら、強ひて他人に接しよらうともしなければ、又屋外の疫病や死に心を煩はすこともありませんでした。

が、他の者はそれと反対の意見を抱いて、かう主張してゐました。曰く、この種の疾病に對する最も確實な療法は、矢鱈に酒を呷つて、贅澤な生活をし、唄を歌つたり冗談口を利いたりして歩き廻るなど、何でも出来る限りの享樂を恣にして、あらゆる事件を笑つて、しやれのめして済すにあると。そして、事實その言葉を、彼等は力のつよく限り實行しました。夜と云はず、晝と云はず、此處彼處の居酒屋に飛び込んで、無茶苦茶に飲む。そればかりか、見ず知らずの家にも入り込んで、更に是をかける。いふ風で、享樂や歡樂の手段の有無以外のことは、一向念頭に置いてゐませんでした。實際又そんな事が手もなく遣つてのけられたのです。と云ふのは、死が眼前に迫つてゐるやうに思はれたので、誰も彼も自分の所有物を捨て、顧みなかつたからですね。だから、大抵の家は主人なしで、偶々この連中が入つて行くと、別な人間が出て来て、恰度主人がゐると同じやうにして、一同を待遇してくれるのですよ。で、さうした意見を抱いてゐた連中は、その獸的な考へを懸命に實行しましたが、しかし又一方では極力病人に面接することを避けてゐました。

かうした災厄のつゞく間に、この都では俗界や宗教界の法規の威信が殆ど地に墮ちて破壊し盡されました。それと云ふのも、その當局者や執行者どもが、他の市民同様に病みついたり、又は死んだり、さうでない者でも部下が手薄になつて、到底公務を司ることが出来なくなつてゐたからですね。そんな譯で、人は爲たい放題の事を勝手にすることが出来ました。

更に、別なのは、上述の二者の間を行く連中でありました。前者のやうに食物の攝取を甚しく制限するやうなこともなければ、又後者のやうに飲酒その他の遊蕩に於ける不節制を極めようともしない。どつちかと云へば、意に満つるだけ飲食もすれば、強ひて贅居などすることもなく、勝手にそこらあたりを歩き廻りました。たゞ手に花や香ひのある藥草、又は種々難多な香料を持つてゐて、時折それを嗅ぐのです。つまりそれ等の香氣によつて腦を爽快ならしめるのは、特に保健上有效だと信じてゐたのです。と云ふのは、空氣全體が死體、病體、又は藥劑などから發散する臭氣で充滿してゐるやうに思はれたからです。

が、或人々は、彼等にとつては恐らくそれだけ 全な譯ではあつたでせうが、一層残忍な態度を取りました。そして、この疫病に對しては、それを避けるといふこと程、有效にして且確實な方法はないと云ふのでした。この確信の

下に、多くの男女は、何等の躊躇もなく、たゞ自分だけ助からうといふ一念から、彼等の故郷、住宅、親戚、財産を棄て、自分達の別荘又は他人の別荘へと落ち延びたものでございます。恰もこの度の疾病によつて人間の罪業を罰しようとしてゐる神の怒りが、地上普ねく人間を追跡しないで、たゞこの市の城壁内に愚圖々々してゐる者だけを滅ぼすものだと思つてゐるか、さもなければ、この市には最早誰一人残つてゐてはならない、つまりこの市の最後が来たと思つてゐるかのやうでございました。

このやうに皆意見を異にしてゐたものゝ、皆が皆死亡した譯ではありませんでした。と云つて、皆が皆安全に遁れられた譯でもありません。どの意見の者でも、その居所の如何に拘らず、多數の人々が罹病しました。そして、殆ど全然顧られないまゝに憔悴して死んで行くのでした。つまりそれは、自分達がまだ丈夫でゐた時に、今も尙達者である人々に、その籠を垂れて置いたのですからね。

市民が市民を避け、隣人が殆ど隣人の看病をせず、親類が親類同志の往來をしないなどは、云ふまでもありません。實際この惨事は男女の胸に異常な恐怖を充したもので、その結果兄は弟を、叔父は甥を、姉は弟を、時には妻が夫を見殺しにしました。中にも一番怖ろしく、殆ど信じ兼ねるやうなことには、両親でさへ自分の子を避けて、宛然自分

の子ではないやうに、訪ねてもやらなければ、看護してもやらなかつたものです。このやうに世間一般が非人情になつたので、一たび罹病した無数の男女にとつては、どうしても病人を見捨てかねた極く少數の友人の同情とか、又は分に過ぎた莫大な報酬に釣られて、やつと侍いてゐる召使の貪慾とかいふものの外には、俾るべきものは何一つありませんでした。しかもさう云ふ召使さへ滅多にはありませんでした。それに、かうした仕事を敢てしようといふ者どもは、男でも女でも一向氣の利かないのが多く、看病などいふことにはまるで不慣れで、たゞやつと患者が望むものを取つて渡すか、又は病人の臨終を見守る位が關の山でした。

しかも、この看病に對する報酬が彼等の身の破滅になつたことも、一再に留まりませんでした。なほ患者は隣人、親戚、友人から見離され、その上召使なども容易に見附けられないといふことからして、未だ嘗て耳にしたこともないやうな習慣が行はれ始めました。即ち、いかに上品で、貞淑で、美しい貴婦人でも、一度病褥に横はつたとなると、若いと年寄りとを問はず、男の召使に看護をして貰ふことを毫も取らないばかりか、病氣の上から必要とあれば、忽ち彼等の前で、全然婦人達の前と同じやうに、些の羞恥の念もなく、全身を露はして厭はないのでした。恐らく、

この慣習は、後日恢復した人達にあつては、貞操観念の低減を誘致することになつたでせうよ。それに、死んで行く人も亦夥しい數に上りました。そして、その人達と雖も、想ふに、看護の手さへ行き届いたら、随分助かつたこととせうよ。

かうして必要な看護の缺乏と疾病の猖獗とのために、日夜々市内で死んで行くものは非常に多數に上つて、その數を聞いただけでも、たゞもう眼を腫つて惘れる外ありませんでしたから、況してその惨狀を親しく見るに到つては尙更さうなんですね。

そんな譯で、生き残つた人々の間に、市民としての在來の慣習に違背するやうな、不規則なことが行はれ出したのも、殆ど已むを得ないことでした。

昔は、いや、今日でもなほそれが行はれてゐるのを見受けませんが、一般の風習として、誰かが死にますと、近隣の婦人達や業者どもは、亡き人と最も近い關係にあつた人人と一緒に、故人の家に集まつてお悔みを云ひ、一方、死者の家族や隣人の中の男子達は、大勢の市民と家の門前で出會ひます。その際僧侶どもの一團も遣つて来ますが、それは死者の身分によつて、いろ／＼程度を異にするのですね。次いで亡骸は故人と同じ身分の人々の肩に擔がれ、燭を點火し、挽歌やその他の儀式でもつて、死者が生前遊ん

で置いた教會へ搬んで行かれたものですよ。

處が、この疫病が猖獗を極め出してからと云ふものは、かうした慣習の凡て、乃至大部分が、その跡を絶つて、代りに別の慣習が起つて参りました。と云ふのは、人が死んでも、その周圍に多くの婦人が集まつて来ないばかりでなく、誰一人末期の水を飲ましてくる者もなしにこの世を去つて行くのが、大概の人の運命であつたからですね。親しい者の嘆きの聲や涙に送られるなぞといふのは、もうほんの少數者のことでした。そんな嘆きや涙の代りに、耳に入るものとしては、たゞ愉快げな笑ひ聲、大勢の戲談、擲論と云つたやうなものに過ぎませんでした。たゞもう疾病を免れたい一念から、婦人達も女らしい人情の大半を失くしてしまつて、さう云つたやうな戲談や擲論が上手になつてゐたのですね。

死亡者に十人乃至十二人以上の隣人が教會まで随つて行くもののあるのは滅多にありませんでした。しかも、その際棺を擔いでゐるのは、ちやんとした親しい市民の仲間ではなく、少數の生存者の中から驅り集められて来た、ベスト人夫と稱ばれる一種の募掘り人であつたのですね。さう云ふ連中が五六人の僧侶と一緒に、大急ぎで、それも故人が決めて置いた教會ではなく、一番手近にある教會へ駆け込む。たまには何本かの貧しい燭をとぼして行くこともあ

りますが、時にはそれさへしないこともありました。そして、教會へ着くと、僧侶どもはそれ等のベスト人夫の手を藉りて、まだるつこい儀式などに、時を費さないで、開いてゐる穴の見附かり次第、その中へ死骸を投り込むのですよ。

下層階級は云ふまでもなく、中層階級の大部分に至つても、その状態は一層凄惨な光景を呈してゐました。彼等の多くは、今に何うかなるだらうと云つたやうな期待や、或ひは單なる貧困のために自宅に留まつてゐて、隣人とも遠慮なしに往來しました。従つて日々病氣にかゝる者は千を以て算へられ、それに看護と世話とが全然行き届かないところから、大概の者はそれなりに敢なく命を終つたものです。晝となく夜となく、街の上で命を殞すものも少なくありませんでした。が、多くの者は屋内で息を引き取るには引き取つても、隣人には死骸から發散する悪臭によつて始めてその死を知られると云つた有様でした。この屋外並びに屋内からの悪臭に、もう何から何まで充ち渡りました。到る處死人ばかりといふ有様でしたからね。そこで隣人どもは、死者に對する同情の念に動かされたと云ふよりは、寧ろ死骸の腐敗から来る害毒を恐れて、大概同一の方策を取ることになりました。即ち彼等自身手を下すか、又は雇ひ入れた二三の人夫の手を藉りて、——さう云ふ者が手に

入つた場合にはですがね、——死骸をその家から曳き摺り出して、戸口に臥かせて置くのですね。特に未明などには若しその頃市中を通行する者があつたら、定めて夥しい死骸が眼に着いたこととせうよ。で、多くは棺桶を造つて入れてやりましたが、それも不足して来ると、死人を板一枚に載せるものも少なくない有様でした。

それから一つの棺に二人、三人と入れて持つて行かれるやうになりました。同じ棺に、或時は夫婦の死體が、或時は兄弟三人のそれが、又或時は父親と子供のそれが一緒に運び出されたなぞと云ふのも、算へて見れば一度二度ではなかつたでせう。二三人の僧侶が、一個の棺の前を十字架を持つて進んで行くと、それとは關係のない三個も四個も棺がその葬列の中へもぐり込んで来て、一人の死者を埋葬すればいゝつもりでゐた牧師が、六人又は八人以上のそれを引き請けなければならなくなつたと云ふやうなことも度々御座いました。それ處か、間もなく死者に對して涙も流さなければ、燭もとぼさず、葬列に列なることもしなくなりしました。いや、寧ろ人間一人死んだからと云つて、山羊一匹死んだ程にも悲しまないと云ふやうな處まで潰き着けたのですね。この點から見ればつきり判つて来たことは、普通の世態にあつては、たとひ稀有であつても小さな不幸からは、賢人といへどもいふことの出来なかつた、事に堪

へる力を、今やこの大悲惨事に遭遇して、愚者ですらそれを會得するに到つたといふことでした。

前申したやうに、あらゆる教會へ夥しい死骸が日々、いや、刻々に持ち込まれたやうなもの、さう云ふ聖別された場所を悉く收容することは到底出来ませんでした。殊に古い習慣から人は皆あらゆる死者を一つの特定の墓地に收容しようとするから、尙更さうなんです。そこで、教會所屬の墓地はもうぎつしり詰つてゐましたから、その代りに極めて深い溝を掘つて、新入りの亡者を何百となくその中へ抛り込むやうにしました。そこには、船に積んだ貨物のやうに、死骸が果々と積み重ねられて、ほんの僅かな土がその各層に振り懸けられたまゝ、その溝は忽ち溢れる程一杯になるので御座いました。

さて當市中に起つた慘狀をこれ以上細部に互つてお話しすることは止めにして、たゞ市がこんな恐ろしい運命に見舞はれてゐる一方に於ては、その周囲の田舎もそれに劣らぬ災害を嘗めてゐたことを述べるに留めませう。その慘狀に於て、市の縮圖を見るやうに思はれた小郡邑のそれについては、今更かれこれ申しますまい。が、散在せる村落、小作地などでは、貧乏で不運な百姓たちが家族もろとも、醫師の手當ても召使の看護も受けないで、街道や田畑の上又は家の中で、日となく夜となく、人間と云ふよりは、殆ど

家畜のやうな死に方をいたしました。従つて彼等も市民同様放恣に流れて、仕事や家事向きのことは一切意に介しませんでした。過去の勤勞の果實をいたはつたり、土地や家畜の手入れをしたりすることは少しも顧みないで、たゞもろ汲々として、現在そこにあるものを消費する事にのみ關心しながら、時々刻々死の到るを心待ちにしてゐるやうな觀がありました。そんな譯ですから、牛、驢馬、羊、山羊、豚、家鶏、さては人間にとつて常に最も忠實であつた犬ですらも、皆屋敷から放逐されて、勝手に耕地の間を彷徨するといふ有様でした。しかもその耕地の上には、鬱類は取り入れもされなければ、刈り取られさへもしないで、その儘立ち腐れになつてゐるのです。で、大抵の家畜は、牧者の手を俟たないで、恰も彼等自ら理性を具へてでもゐるやうに、日中喰べて歩けば、夕方は満腹して自分たちの小舎へ歸つて來るので御座いました。

ところで、今度は又田舎から市の方へ舞ひ戻ることになります。三月からその年の七月までの間に、この悪虐な疾病のために、フロレンス市の城下で生命を奪はれた人の數は十萬以上だと信じてゐる間違ひのない程、天の無情に加へて、人間のそれも可なり酷烈なものでした。恐らくこの荒廢的な慘事の起る前には、それ程多くの人民がこの市の中に住んでゐるようとは、誰しも考へてゐなかつたでせうに

ねえ。

あゝ、嘗ては華やかな僕婢を抱へ、貴紳淑女の居並んでゐた、あの王宮、美邸、貴顯の館のいかに多くが、今やその馬丁に至るまでも死に絶えて、伽藍洞になつてゐることです。由緒ある家系で血統の絶え果てたものが、いかに多いことです。又、莫大な遺産や有名な財寶で相續者のないものが、いかに多いことです。將又、ガリエヌス、ヒツポクラテス、エストラップのやうな名醫からでも健康者の折紙を附けられさうな、巖疊な男や美しい女又は青春の若者で、朝には親戚や遊び仲間乃至友人たちと一緒に食事をしてゐたのに、夕べにはもうあの世で先祖と食事を共にするやうになつたものが、いかに多いことです。

さはれ、長々とこの大疫病にかゝつらつてゐるのは、あまりに心を痛ましめる事柄であります。で、私も事件を悉く述べると云ふやうなことは止めて、端折るべき所は端折つて、適宜本題に入ることにませう。

このやうな有様で、今やわがフロレンス市には殆ど住民ともなかつたのですが、或る信用の置ける人から後日耳にしたところに據りますと、お互に友達か、縁者か、隣同志か、兎に角親しい間柄であつた七人の若い婦人たちが、或金曜日の朝、平常は誰一人訪ふ者もない新サンタ・マリア教會に落ち合つたことが御座いました。彼等は皆その頃

としては時宜に適した喪服を着けて、それ／＼禮拜に列席したのですね。一人として、二十八歳以上の者もゐなければ、又十八歳以下の者もゐませんでした。揃ひも揃つて、純潔で、美貌で、起居振舞もしとやかなら、蓮葉に流れぬい程度に快活でも御座いました。が、本名だけは明かしません。それには又それだけの理由があるのです。と云ふのは、彼等がお互に話したり傾聴したりした物語、そして、私がこの後皆さんにお話ししようとしてゐる物語の故に、彼等のうちの誰か、將來取つかしい思ひをすることは、私としても好ましくありませんし、(實際、前に擧げたやうな理由からして、彼等と同年配の者ばかりでなく、それ以上の中老者にも歡樂の自由を極度に許してゐた當時の風習が、一面に於ては人間の欲望を極度に局限してゐましたから、そんな思ひをすることも得て起りがちであつたのです。ね)同様に又稱讚して然るべき性行にも、非難の聲を浴せなければ已まないやうな、嫉妬深い連中に機會を與へて、こゝ等の貴婦人たちの榮譽に少しもけちを付けさせたくないからで御座います。

それと共に、めい／＼の貴婦人が話したことを紛れないやうに區別するために、多少各自の性質に似つかはしい名前を彼等に付けることにさせよう。そこで一番の年長者をバムビネアと名づけ、二番目をファイアマッタ、三番目をフ

イロメナ、四番目をエミリア、それから五番目をラウレットと呼び、第六をネイフイレ、そして、最後の婦人をエリザと呼ぶことにいたしました。全然理由がないとは云はれますまい。

處で、この一行は、前以て計畫してゐた譯ではないのですが、偶然教會の中の同じ場所に來合はして、お互に環を作つて坐つてゐました。やがて主の禱りを済まし、それから二三度溜息を吐いた後、この恐ろしい時期についてくさぐさの話を語り出したものです。で、暫くさうして話しをしてゐましたが、他の者がそれ／＼口を噤んだ時、バムビネアは次のやうに語り出しました。

「皆様、皆様も私同様にお開き及びでも御座いませうが、誰でも自分の權利を正しく行使するといふことは、決して恥づかしいことではないと存じます。處で、自然にして且先天的な各自の權利は何であるかと申しますと、全力を盡して自己の生命を培ひ、保ち、且護ることで御座います。これは一般に認められたことであつて、單に自分自身の生命を救ふために他人を死に致して、一向罪にならなかつたと云ふやうな場合も数多いので御座います。處で、各人が正當に生活して行かれるやうに平常から注意を怠らない筈の法律からして、既にかうした行爲を認めてゐるのですから、それに何人にも損失を懸けない以上、私どもの生命を

支へるためには、ありとある方法を採用することも私どもに、いや、何難にでも容されてゐるものと信じます。ところで、現在並びに過去數箇月間に於ける私どもの行動を観察したり、又は今朝からも私どもがどんなことをどんな風に話し合つて來たかを考へて見ますと、私どもはたゞもう銘々に自分の身ばかり心配してゐるのだといふことがしづみ感じられます。これはなにも私ばかりでない、皆様も御同感のことと存じます。尤も、それは別段不思議でも何でもありませんがね。併し私どもが皆婦人特有の細心な性情を具へてゐながら、しかもこの至極道理な萬人共通の不安に對して、それ相應の豫防策をも講じようとしなないのは、いかにも不思議ではありませんか。

「どうも、私どもはたゞ、何の位澤山の死骸がこゝへ運ばれて來て埋葬されるかといふことや、又は殆どいくらも生き残つてゐないこの寺の坊さんたちが、定めの特刻にお祈禱を上げてゐるか何うかといふことを實證しよう、若しくはなくてはならぬためばかりに、こゝに居残つてゐるやうで御座いますね。でなければ又、こゝで出會ふほどの人達に、この喪服によつて、私どもの不幸がいかに大きく、且いかに複雑であるかを示さうためばかりに、こゝに居残つてゐるやうで御座いますね。が、一たび此處から出ますと、私どもは必ず極か病人かが運ばれて行くのを見懸けま

す。でなければ、その昔犯した罪のために裁判所から洗罪を宣告されたやうな男が、今では司法官たちも大抵死んだり病氣になつたりしてゐることを承知してゐるので、恰もお上に對して眉でも突くやうに、市中を横行濶歩してゐるのに出會ひます。最後に、この市の賤民どもがベスト人夫の名稱の下に、到る處市中を徘徊して私どもの不幸の上塗りをしながら、しかも汚らしい歌を唄つて、私どもの不幸を嘲つてゐるのを見懸けます。なほ耳にするものとしては、誰某が死んだとか、誰某が死にかゝつてゐるとか云ふことの外には、何一つありません。その外には、若し泣くだけの氣力のある人達がまだ残つてゐるとしたら、聞えて來るものは恐らく悲しい號泣の聲に過ぎないでせう。最後にわが家へ歸つて見ましても、——皆さんが私と同じ運命を持つていらつしやるか、何うかは存じませんが、——大勢あつた家族も皆死に絶えてしまつて、顔を合はせるものは下女ばかりだと來ては、ほんたうに怖ろしくなりますよ。髪の毛が逆立つやうな氣がいたします。何處へ行きましても、又何處にゐましても、死んだ家族の者が、それも平常の容でなく、あの怖ろしい、變り果てた容子をして、——何故だか知りませんがね、——目の前へ出て來るのには、全く膽を冷しますよ。

「こんな次第ですから、私は此處でも、他處へ参りまして

も、又は自宅に居りましても、わが身を不幸と感じないではゐられません。況して血管にまだ血の氣があつて、何處へでも勝手に出掛けて行かれる程の者で、私ども以外にこの市に残つてゐる者はあり得ないと思はれるだけに、一層この感が深いので御座います。それに、苟もこの市に生き残つてゐる程の人達は、單獨にか又は仲間を組んでか、良家の婦女と下賤の女達との見界なく、欲望の起るまゝに、日々夜々誰とでも歡樂の限りを盡してゐると云ふやうな話も聞き及びました。なほさう云つたやうな世俗の人達ばかりでなく、僧院内の方々までが、他の連中に妨げないことなら、自分達にも亦許さるべきだといふ口實の下に、神の掟を破つて肉慾に耽り、放逸無慙に墮しながら、それに依つて死を免れようと考へてゐるので御座います。

「こんな状態だとしますれば、——實際又さうであることは明白で御座いますが、——一體、私どもは如何いたした宜しいので御座いませうか？ 何を望み、何を夢みてゐるので御座いませうか？ 何故私どもは、自分たちの健康を保護する上に、他の方々よりも躊躇ひがちで、愚圖々々してゐるので御座いませうか？ 私どもは一體他の方々よりも價値がないものと自認してゐるのでせうか。それとも、私どもの靈魂は、他の方々のそれよりも一層強く肉體に結び着けられてゐるので、自分たちの健康を脅やかすやうな何物

をも恐れる必要がないとでも考へてゐるのでせうか。私どもは考へ違ひをしてゐます、自らを欺いて居ります。若しさう云つたやうな考へ違ひをしてゐるとしますと、何と云ふ馬鹿げたことで御座いませう！ しかも末頼母しい青年男女で、かうした惨ましい疫病のために生命を奪はれる方方のいかに多いかを想ひ見る毎に、私どもの誤つた考へ方の實證を見せつけられるやうな氣がするでは御座いませうか。

「免れようと思へば、何とかして免れられないこともないこの不幸に、單なる怠慢や無頓着から取憑かれるといふのも愚な話ですから、そんな事のないやうにと思へば、——と云つて、皆さんが私同様の意見をもちかどうかは存じませんが、——これ迄多くの方々がなすつたやうに、又現在なすつていらつしやるやうに、この市を遁げ出すのが一番かと存じます。それにこゝにおいでは何誰にしても、別荘は澤山お有ちでせうから、そこへ一先づ落ち着いて、死を避けると同じやうに、他人の悪例も避けるやうにしながら、品位を保つて、出来るだけ面白可笑しく暮すのですよ。但し何事にも理性の限界を越えないやうにいたすのは云ふ迄もありませんがね。そこでは鳥の囀る聲を耳にし、緑の丘や平野、さては打ち騒ぐ海かと思はれるやうな、穀類の波打つ畑を目にし、さまざまの樹木を見ることが出来ませう。

たら好からうかと存じます。それから後は目下のやうな時節に手に入れられるやうな、あらゆる歡樂と享樂とに身を任せながら、今日は此處、明日は彼處と移り歩いて、幸ひに死の訪問を免れましたら、何日かこの疫病が終末を告げるのを見届けようでは御座いませんか。なほ一部の人達には、この市に踏み留つて不行跡を働くことが相應してゐると同じやうに、たとひ遁げ出すにしましても、相當の理由さへあれば、私どもは決して恥ぢ入るには及ばないので御座います。この際、特にこの事を力説して置きたいと存じます。」

婦人達は、バムビネアの述べた提案に賛意を表したばかりでなく、それに従ひたい希望を漏らして、それが實行方法を細部に互つて互に協議し始めました。尻を上げたらずぐにも出發しなければならぬやうに思つたので御座いませうよ。すると、中にも惻巧なフィロメナが言葉を挿みしました。

「皆様、バムビネア様の仰しやつたことは誠に結構では御座いますが、お見受け申す程、さう性急にお取りかゝりになるにも及びますまい。考へても御覽なさいまし、私どもは女の身で御座います。従つて女だけではどうも思慮分別の行き届かぬ勝ちなもので、殿方の力添へがないと一向實績の擧らぬものだといふこと位は何方でも子供ではなし

それから又空にしたところで、田舎の方が一層晴れんとして、たとひ人間に對して腹を立てていらつしやるにしましても、この市の城壁よりは幾層倍も愉快な、永遠の美しい妻を私どもに見せて下さることせうよ。

「それに空氣はずつと新鮮ですし、只今のところでは、日常必要な物資の貯へも、田舎の方がずつと豊富で御座います。しかも不愉快なことの數は遙かに少なう御座います。勿論、この市の人同様に、そこでは百姓達が死ぬことでせう。しかし、それがために受ける悪印象といふものは、大したことはありませんまい。何しろ人家が市中のやうに稠密ではありませんから。それに又、さう云ふ手段を取るにいたしましたが、私どもは決して人を捨て、行く譯では御座いませぬわ。寧ろ私どもの方が却つて捨てられたのだと申してもよいかと存じます。だつて、一族の者たちは、自分で死んで行つたり、又は死の市から遁げ出したりして、宛然赤の他人のやうに、私どもをこの大きな災厄の中へ置いてけぼりにしてしまつたのですものね。ですから、私のこの提案を採用したところで、何處からも批難は受けませんまい。が、若しこれに従はないとすれば、苦痛や悩み、或ひは何うかすると死の手に捕へられるやうなことにもなりませう。で、お宜しかつたら、めい／＼早速女中どもを喚び寄せまして、手周りの物を持つて來させることに致し

萬々御承知のことで御座いませう。總じて女といふものは、移り氣で、氣儘で、邪推深く、氣が小さく、お負けに慮病なものでございます。で、この理由だから推して見ましても、何方か私ども以外の方で宰領して下さる方でもない、この一行は思つたよりも早く解散して、世間の物笑ひになるやうなことがありはしまいかと、私はそれを心配するので御座いますの。ですから、事を始める前には、何でも用心に如くはないと存じますわ。」

すると、エリザが申しました。「實際、殿方は私ども女の頭腦ですわねえ。殿方の指圖が御座いませんと、私どもの計畫も成果を擧げることが難かしく御座いませうよ。ですが、さうした殿方は今何處にゐられることせう？ 御承知の通り、私どもの家族の者は大抵死に絶えました。まだ生きてゐる者も、私どもと同様この悪疫から免れようとして、あちらに一人、こちらに一人と云ふやうに、いろんな團體に加はつて遁げ出したまゝ、その居所さへ分り兼ねる始末で御座います。と申して、赤の他人を手頼るのは、どうも好ましくありません。だつて、私どもも幸福を求めて出掛ける以上、快樂と平安とを獲ようとして、却つて不快と恥辱とを買ふと云つたやうなことの無いやうにするだけの聰明さは持つてゐなければなりませんからねえ。」

あるうち、不意に三人の若い紳士が、その教會の中へ入つて來ました。その中の最年少者ですら、もう二十五歳以下ではありませんでした。そして、その紳士達の胸の裡には、當時の猥雑な世態も、友人縁者の喪失も、又彼等自身の生命に對する懸念も、尙且その愛戀の情を掻き消すことも冷却することも出来なかつたのです。第一の紳士をバムフイロと、第二をフィロストラートと、第三をデイオネオと呼び、三人が三人とも面白い氣性で、教養ある人達ばかりでした。彼等はかうした恐ろしい動搖の最中に意中の婦人達を見て、大いにその心を慰めようとしてゐたのですが、上に擧げた七人の中の三人が恰度それに當つてゐましたし、自餘の婦人達も皆この紳士達と血の繋がつてゐる者ばかりで御座いました。で、彼等が婦人達に眼を遣つた時、婦人達の方でも彼等に氣が附いたのでした。そこでバムビネアは微笑みながら云ひました。

「御覽なさいな、私どもが事を始めるに當つては、もう幸運が天降つて、かうした理解のある、善良な紳士方を授けて下さいました。皆さんの方に御不足さへなければ、あの方々は喜んで私どもの指導者とも忠僕ともなつて下さるでせうよ。」

それを聞くと、ネイフイロは羞づかしさに顔中眞赤にしてしまひました。と云ふのは、若い紳士の一人が彼女に氣

があることを好く知つてゐたからですね。で、かう云ひました。「バムビネア様、あなたの仰しやつたことを好く考へて見て下さいませ。成程、あのお三方の中の何方にしましても、たゞもう御立派な方だと申上げる外ありませんわ。で、あの方々のことなら、今度の事以上の大事をお委せしても、屹度巧く處理して下さるでせうし、私どもに限らず、もつと美しい、もつと立派な方々のお相手になられても、決して恥づかしくない殿方だと存じますの。でも、あの方方はこの中にいらつしやる二三のお方に戀をしてゐられます。で、あの方々と一緒に出掛けましたら、たとひあの方が悪いのでも又私どもが悪いのでもないにいたしましたも、世の批難と恥辱とを受けるやうなことに立ち到りはせぬかと、私はそれを心配するので御座いますよ。」

フィロメナはそれに答へました。「その御懸念は御無用に遊ばせ。私としましては、自分が身持ちを好くして、良心に恥ぢる所さへなければ、他人が何と申さうと一向平氣で御座います。神様と誠實とは、武器を取つて、私を守つて下さることです。若しあの方々が私どもと行を共にして下さるやうでしたら、バムビネアさまの仰しやつた通り、本當に私どもの計畫は幸運に恵まれてゐると云つて誇つても好く御座いますよ。」

他の淑女達はフィロメナの言葉を聞いて、ほつと胸を撫

で下ろしたばかりでなく、早く紳士達を招んで來て、こちらの計畫を告げた上、一行に加はつて貰ふやうに懇願して見たいものだといふ口調に希望しました。そのために、バムビネアはもう口敷を利かないで立ち上つて、紳士達の許へ近づいて行きました。その中の一人は彼女と親戚の間柄で御座いました。彼女はこちらを振り返つた青年達に、晴れやかな顔つきで挨拶をして、それから自分達の計畫を詳細に述べた上、どうか兄弟のやうな純な氣持ちで仲間になつて貰ひたいものだ、皆に代つて頼んで見ました。紳士達も最初の間は嚴談だとばかり思つてゐましたが、相手が本氣に云つてゐると知ると、さも嬉しさに、何時たりとも御用に立つつもりだと答へました。それからして、一同時を移さず、教會を出る前に、出發に關して必要な事項をいろ／＼と談合いたしました。

さて、それ／＼準備も整ひ、必要な物は最初に行かうと目指した土地へ前以て送り届けたので、いよ／＼その翌日即ち水曜日の明方から、婦人達は幾人かの侍女と共に、又三人の紳士達は三人の家來を連れて途に上りました。市から二哩足らずも來たかと思ふと、もう當座の住家と定めて置いた場所へ着いたので御座います。それは小さな丘の上にあつて、何方を向いても街道から少し入り込んだ所で、綠葉をたゞへた、見る目も美しい、いろ／＼な樹木に覆は

れてゐました。この丘の頂上に一つの館があつて、中央に美麗で廣潤な中庭を具へ、數ある廊下や廣間や部屋々々は、全體として見ても、又個々として見ても、際立つて美々しく、それに晴れやかな繪畫が懸つてゐて、いかにも氣持ちよく見受けられました。屋敷のまはりには、牧場だの、冷たい水の湧く噴泉のある廣々とした庭だの、それに美酒を貯へた甕だのがありました。尤も、この酒ばかりは節度のある温良な、淑女達よりも、したゝかな飲み黨に應はしいものとは思はれましたがね。一同入つて見ると、館の内部はさつぱりと掃除が出来てゐて、臥褥も設けられ、何處も彼處も季節の花で飾られた上、床には蘭が敷き詰めて御座いましたので、もうすつかり好い心持ちになつてしまひました。で、一行が到着して、まだ腰を卸すか卸さないに、一番快活で機智に富んだデイオネオが口を切りました。

「さて御婦人方、私どもは、私どもの決心と云ふよりは、皆様方の分別に従つて、こちらへ参りました。處で、皆さんは御銘々の悲しみを何う處置するつもりでいらつしやるか、それは私の知る限りでは御座いませぬがね、私としては、自分のさうした悲しみなど、實は今し方皆さんと御一緒に抜けて來ました、あの都門の向うへ綺麗さつぱりと打遣つて來ました。ですから、皆さんもお人柄に係らない範圍に於て、私と一緒に戯談を云つたり、笑つたり、唄つた

りして頂きたいもので御座いますね。でなければ、私にお暇を下さるか、どつちかに極めて頂きませう。さうなれば私も再び悲しみの後を追懸けて、荒れ果てた市へ舞ひ戻つて行くでせうからね。」

すると、バムビネアは、もう心配事などは何處かへ吹き飛ばしてしまつたかのやうに、相手に劣らず活き／＼した調子で答へました。「デイオネオ様、本當に仰しやる通りで御座いますわ。是非面白可笑しく暮しませうよ。だつて、私どもが避難して参りましたのも他の理由からではないのですものね。ですが、節度のないことは、何事も永續きのしないものですから、かうして立派な團體が出来上つて見ますと、最初私から持ち込んだ話だけに、一寸申上げたくなるんですよ。それはね、先づ皆さんが一致して、誰か主宰者をお選びになるのが必要かと存じますの。さうしまして、その主宰者には、命令者として一同絶対に服従すると共に、面白い催し事の宰領などは、一切その方にお任せするんですよ。それから、何方も一人残らずこの義務の重荷と同時に僣越の満足を味ひ、従つてその恩恵に浴しないこと云ふので、あれやこれやと嫉妬心を起すと云ふやうなことのないやうにするために、この名譽と重荷とは皆さんが一日代りに分擔されることにしては如何で御座いますか？で、最初の主宰者は一般投票に依つて決定するので御座い

ます。併し次回からは、晝間主宰権を有つてゐた人から愛せられてゐる方が、夕方頃代つてその位置に就くことに致しませう。そして、さう云ふ風で主権を握つた方は、その主権のつゞく間、思ひのまゝに私どもの生活の時間と場所と方針とを命令し決定して宜しいので御座います。」

一同は喝采してこの言葉を迎ふると共に、先づ彼女を推して第一日の女王にいたしました。フィロメナはいきなり一本の月桂樹の方へ駈けて行きました。それは、この枝が非常に尊いもので、従つてそれを頭に戴く人も非常な名譽に値ひするわけだといふことを兼々聞いてゐたからで御座います。そこで、彼女は數本の枝を折つて来て、それで立派な花冠をつくつて、バムビネアの頭に載せてやりました。それ以来、一同が生活を共にしてゐた間、これが何人に取つても主権の明白な表示となりました。

かうして新たに女王となつたバムビネアは、一同に沈黙を命じて、皆が何事かと思つて振り返つた時、三人の紳士の家來達と淑女達の四人の侍女とを前へ喚び寄せて、かう申しました。「私どもが面白い上にも更に面白いものをも求めながら、しかも世間の不評判を招かず、楽しい目を見たい見、同時に禮節を失はないで、私どもの好きなだけ永くこの團體を維持して行くためには、何う云ふ方法を取つたら宜しいか、先づその實例を一つお目に懸けたいと存じ

まして、第一番に、デイオネオ様の御家來バルメノを私の執事長に指名します。そして、この者には、雇人の全部と臺所と、地下室とに對する配膳と監督とを一任いたします。バムフィロ様の御家來シリスコは、バルメノの支配下に在つて、會計兼出納係といたします。テインダロは、御主人フィロストラート様のことは勿論、他の二人の殿方の御用をも辨じてお上げなさい。今云ふ通り、他の二人の御家來衆は、新しい義務のために、その方の御用が封じられることになりましたからね。それから私の許のミシアとフィロメナ様のリシスカとは、特に臺所の係りとして、バルメノの指圖の下に、丹念に料理を拵へるがよい。ラウレツタ様とフィアメツタ様とのお女中キメラとストラテイリアとは、私達婦人達の部屋の整理をして、それを清潔に保つて行くやうに心掛けて貰ひたい。そこでだがね、かうしてよく云ひ聞かせて置くからには、お前方も詰らないことで私達の機嫌を損じまいと思つたら、何處へ行かうが、何處から戻つて来ようが、どんな事を耳にしようと思つたら、何處と、好い話の外は決して外から持つて来ないやうに氣を附けるんですよ。」

一同の喝采の間に、バムビネアは簡單にこれ等の命令を傳へましたが、それが終るや否や、勢ひよく立ち上つて申しました。「此處には庭園や緑の滴るやうな牧場が御座い

ます、又楽しい廣場も少なくは御座いませぬ。ですから、何方も何卒御隨意に、愉快に御散歩を遊ばせ。そして、九時を打ちましたら、再び此處へお出でを願つて、涼しい中で食事を取りたいと存じます。」

かうして、新女王は元氣な連中を解放してくれましたので、若い紳士達は美しい淑女達と樂しげな談話を交はしながら、ゆる／＼と庭園の中を歩き廻つて、さまざまの花から花束を作つたり、細歌を唱つたりいたしました。その間に女王から許されてゐる時間も切れましたので、一同は再び館へ立ち戻つて来ました。見ると、バルメノはもうその職務に就いて甲斐々々しく立ち働いてゐました。一階の食堂には、幾つかの食卓が雪白のリンネルで被はれて、銀光燦爛たる盃がずつと列べられてゐる上に、えに似たの花で美しく飾られてゐました。手洗ひの水が女王の命令で配られると、今度は一同バルメノの指定した順序で席に就きました。山海の珍味が運ばれ、高價な美酒が卓上に振廻らされて、三人の召使どもは言葉少なに給仕をして廻りました。用意の行きとよいた、何一つ手落ちのない食事が人々を明るく氣持にすると共に、面白い諸譚や朗らかな氣持が食物の味を一段と美しいものにしました。

淑女達は無論のこと、紳士達も皆それに劣らず輪舞を心得てゐました。中にも二三の人達は踊りと唄とが殊更に上

手でした。で、女王は食卓が片附くと、すぐに樂器を取り寄せました。ダイオネオは女王の命のままに琵琶を手にし、フイアメツタは提琴を取り上げながら、互ひに調子好く舞踏の曲を弾き始めました。女王は召使どもを食事に遣つて置いて、他の婦人達や二人の紳士たちと一緒に、樂の音に合わせて、ゆるやかな拍子で舞踏を踊りました。舞踏の曲に次いで滑稽で愉快な唄が出ました。かう云ふ風に代る／＼演出して、一同自ら娛しんでゐるうちに、女王がもうそろそろ午睡の時分だと考へる時刻になりました。そこで一同解散することになりました。行つて見ると、紳士達の部屋は淑女達のそれとは離れてゐて、さつぱりした寢臺を具へ、食堂にも劣らぬほど花で飾られてゐました。婦人達の部屋も同様でした。そこで、銘々衣裳を脱いで、睡りに就きました。

午後の三時が打つと、間もなく女王は起き上つて、他の婦人や紳士達をも呼び起させました。日中睡眠を多く取ることは、女王の云ふ所では、甚だ健康に宜しくないからです。で、一同が打ち揃つた時、彼等は脊丈の高い生々した草が茂つて、日光も透らず、涼しさうな微風さへ通つてゐる一つの芝生を見附けました。彼等は女王の命に依つて、その上に輪を作つて坐りました。すると、女王が次のやうに云ひ出しました。――

「今はまだ日も高く、暑さは堪へられない程で、たゞ森の林から聞えて来る蟋蟀の音がこの胸苦しいやうな静寂を破るばかりで御座います。こんな時分に何處かへ出掛けようなどとするのは、眞個愚しい話で御座います。此處にかうしてゐるさへすれば、御覽の通り涼味たつぷりで、心持も宜しう御座いますものね。それに、葦、將茶も手近にありますから、思ふさまお娛しむことも出来ませう。ですが、娛樂といふ點で私の忠告をお納れ下さいませう。かうした遊戯は止めて頂きたいものと存じます。と申しますのは、何方かが蛇度相手方よりも不愉快になるもので御座いますものね。それよりはお話をしてこの暑い日中を過ぎさうちやありませんか。一人が話をすれば、それを聴いてゐる一同も楽しい思ひをすることが出来ますからね。それにお話をしますにしても、一巡りしない間に、恐らく濡れ沈めば、暑熱も退散することで御座いませう。さうなつてからお氣に召した處へ、何處へなりと御散歩にお出掛けになることも出来ますわ。若し私のこの提案が皆さんの御意に適ひましたら、早速それに取り懸ることにはいたしません。ですが、この點では私も皆さんの御意見通りにするつもりですから、私の提案がお氣に召さぬやうでしたら、夕方迄御隨意に思ふ事をなすつていただきます。」

淑女達は勿論、紳士達もこの提案には、一人残らず賛意

を表しました。「それでは」と、女王は申しました。「皆さんが御賛成のやうですから、この第一日には、まあ御銘々に思ひ／＼のお話をして頂くことにいたさせよう。」かう云つて、自分の右側に坐つてゐたバムフィロの方へ向いて、あなたから一つ皮切りにお話が願ひたいものだと思ひに申しました。バムフィロは命を受けるや否や、一同の傾聴の裡に、次のやうに語り始めました。

第一話

シャブレーは一人の信心深い僧侶を偽りの懺悔でたばかつて死んで行つた。その男が生前の悪業に拘らず、死後聖者の譽れを得て、遂に聖シャブレーとなるに到つた話。

皆さん、どんな事を私ども人間が企てるにしましても、それを始めるに當つて、萬物をお造りになつたお方の御名を唱へるといふのは正に然るべき事かと存じます。そこで、お話の瀬踏みを承りました私は、かの神祕靈妙なお攝理の一つで冒頭を飾りたいと存じます。思ふに、私どもは、かゝる攝理を知るに伴つて、いよ／＼かの常住不斷のお方に對する信仰の念を高められ、延いてはその御名を稱へた

くなるので御座いますからね。總じてこの地上のものは、本來無常迅速を免れませぬだけに、内外兩面とも苦惱煩勞に充ち満ちて、その上無数の危険に曝されてゐるので御座います。しかも私どもはその中に生き、そのものの一部になつてゐるので御座いますから、若し特別の恩寵によつて必要な力と配慮とを神より享けませいで、その危険に對抗することも、またそれを防ぐことも出来ないのは明白な事實で御座います。

とは申せ、この恩寵は、私どもの有する何等かの效績の故に、私どもの頭上に来るものなどと考へてはなりません。それは一に神のお慈悲に因るものであつて、嘗ては私どもと同様無常の身であつたが、その生前に神の御心を體して働いたがために、今では神と共に永遠の福祉に與つてゐる人々の祈念に任せて與へられるので御座います。かう云つたやうな、私どもの弱點や罪業を自己の體験から十分に味識してゐる人々を代辯者として、私どもは心の願ひを打ち明けるので御座います。直接最高の審判者に向つてそれを打ち明けると云ふやうなことは、到底私どもの爲し得ないところで御座いますからね。ですが、浮世の塵に覆はれた人間の眼は、祕やかな神の意志を覗ひ知ることがどうしても出来ませんので、やゝともすれば私どもは判断を誤つて、神の目通りへ出られぬやうな人物を私どもの代辯者

として神の御前へ聽めるやうなこともないとは云はれませぬ。が、それにも拘らず、凡てを知り給ふ神は、願ひ求める者の無智や代辯者の罪科などよりも、求める者の純な心意氣に耳を傾けたまうて、その所謂代辯者なるものが神を見る至福を享ける者であるかのやうにその祈願を許し給ふのです。この間の消息は只今申し上げるお話から見ても、至極明白で御座います。明白と申しましたが之も人間の推量に因る事は云ふ迄ありません。神の裁量の程は、私ども人間には何處迄も秘められたもので御座いますからな。

ムスタアット・フランチェシーといふものがあつて、それが富裕な評判の好い商人からして貴族になつたのは、皆さんも御承知のことと存じます。佛蘭西王の弟で、法王ボニファチエスの援助を受けてゐるカール・オーネランドが法王の召喚を受けた時にムスタアットも一緒にトスカナへ出掛けることになつたのです。そこで自分の關係事項は二三の引請人に委託して行かうと決心しました。と申しますのは、手廣く商賣をしてゐましたので、どの商人にも有り勝ちなやうに、随分といろんな事に引つ懸つてゐたからで御座います。で、大概の事はうまく目鼻が附いたのですが、たゞ二三のブルグンド人が滯らしてゐる債權を巧妙に取り立てるやうな男の物色には當惑しました。

それと申しますのも、ブルグンド人とさへ云へば、何奴

も此奴も根性の引ん曲つた、喧嘩好きで、可厭な奴ばかり揃つてゐるといふことは、百も承知してゐましたので、さう云ふ狡猾な奴等に對して見事太刀打ちの出来るやうな、抜目のない男が、どうしても頭に浮んで來なかつたからです。かうしてとつおいつ思ひ惱んでゐた時、彼はふと巴里の自分の家へよく遣つて來たチャペレルロ・フォン・ブライトといふ男のことを想ひ着きました。佛蘭西人どもはチャペレルロといふ名の意味が好く解らないので、佛蘭西語のシャポオ即ち花環といふ位の意味だらうと思つてゐました。處が、この男は身丈が低く、毎も小綺麗な服装をしてゐましたので、その小柄なところからして、シャポオではない、シャブレードと稱ばれるやうになりました。そして、到る處その名で通つてゐましたので、チャペレルロが本名だといふことを知つてゐるものは、極く僅かしかありませんでした。

も、無代で違法のものを仕上げる方が面白いと云ふのでした。偽證なども人から頼まれたり、又は自ら進んでも好く遣りました。それに、當時佛蘭西では、宣誓が非常に重んぜられて、誰も反證を擧げてそれを無効ならしめようなどとはしない時節でしたから、彼が喚び出されて、良心に従つて眞を誓ふやうな場合には、非合法的ながら、公事は毎も彼の勝ちになるので御座いました。

友人とか、縁者とか云つたやうな人達の間に不満や敵意を起させることは、取りわけ彼の好むところで、又大いに努力してそれに従事したものです。そして、不幸が大きくなればなる程、一人で喜んでゐました。殺人の幫助とか、又はその他の破廉恥な事件に携はるやうに強要された場合でも、決してそれを拒まないばかりか、寧ろ率先して遣る方で御座いました。自ら手を下して人を殺したり傷つけたりすることも屢々でした。些細なことを權に取つて、神並びに聖者を、彼一流の烈しい言葉で、身の毛も竦立つ程冒瀆するのです。教會などへは一向顔も見せません。そして、凡ての基督教的儀式を罵ることは、實に猛烈を極めてみました。それだけに又居酒屋とか、宵樓とかの遊びにかけては、すつかり手に入つたものでした。犬が棒切れにま

とひ附くやうに、大の女好きで御座いました。それでゐながら、男色にかけても、いかなる烏許の痴者にも優つて感

溜してゐました。恰度聖者が慈善を施した場合と同じやうに、平氣の平左で掠奪や窃盜をもしかねないのでした。時折は糊口にも窮する程、暴飲暴食をしました。賭博や詐欺はまるで稼業のやうにしてゐました。それにしても何のためかこんな贅々しい説明をしたものでせう？ 要するに、彼はこの世に生れて來た人間の中で第一等の破廉恥漢で御座いました。そして、もう永い間罪惡を犯して來ながら、どうにかかうにか無事であつたのも、偏にムスタアット氏の權力和名望との庇蔭に據るものと云はなければなりません。それがためには、私人も裁判所も、時折又は絶えず迷惑を蒙りながら、これ迄手を拱いて來たのですからな。

處で、ムスタアット氏が、その閱歷を詳細に知つてゐたところから、今回あの邪惡なブルグンド人と對抗させるために選んだ男といふのは、このチャペレルロその人に外ならぬのでした。で、早速彼を喚んで話し出しました。「ねえ、シャブレード君、君も知つてゐる通り、わしは今にも此處を出發せにやならんのだ。で、いろ／＼取引のある中に、ブルグンド人とも二三係り合ひがあるんだが、あんな二枚舌を平氣で使ふ連中から貸金を取り立てるには、どうも君に委託する外ないやうに思ふのだがね。君は今のところ仕事もなささうだし、この事件を引請けてくれる氣があるなら、君と裁判所との間を圓く治めて上げた上、君の回收してく

れたものの中から、君が満足するだけの額前を差上げることにしてもいふんだよ。」シャブレイ君は實際開散の身であつたし、目下物資があり餘つてゐる譯でもなかつた上、永い間杖と柱とも頼んで来た人が居なくなると云ふのだから、大して考へもせず、幾分必要にも迫られて、二つ返辭で引請けてしまひました。

それに附帯した協定を済せ、ムスチアツト氏の委任と國王の赦免状を受け取つた後で、ムスチアツト氏が巴里を立つと同時に、シャブレイは殆ど誰一人見知つてもゐないブルグンドの地を指して出發しました。そこで、最初の間は、彼の性質とは反對に、極めて親切に物憂しく委任を果し、貸金を取り立ててゐました。その野蠻なところは最後までしまつて置かうといふ腹でもあつたんでせうね。

處で、シャブレイの泊つた宿は、フローレンス生れの兄弟の家で、高利貸を商賣にしてゐました。しかし、ムスチアツト氏に對する好意から、随分鄭重に待遇してくれました。ところが、彼はこの家で病氣になつてしまつたのですね。そこで二人の兄弟は、すぐに名醫を迎へ、召使どもを附けて看病させ、凡そ治療上効果のありさうならあらゆる手段を盡してくれましたが、どうも助かる見込みが立ちませんでした。この變り者も寄る年波には勝たれず、それにあつた生活をして来ただけあつて、醫者の云ふ所に據ります

と、日に病状は悪化して行くので御座いました。そして、死の日が目前に迫つてゐると云つてもいふ位重態だといふことが、間もなく分つて参りました。それには、二人の兄弟もほと／＼當惑してしまひました。

そこで、この二人の兄弟は、或日、シャブレイが病んで寢てゐる部屋から餘り遠くない所で、互にぼそ／＼話を始めました。「あの男の始末はどうしたものだらうな？」と、一人がもう一人の男に申しました。「何にしても困つたことになつたものだ。今になつて、あの病人を自家から追ひ出せば、どうしたつて俺達の名前に係るし、また此方の身にしても餘り思慮がないと云ふものだ。だつて、世間の奴等は、俺達が最初あれを引き取つたことも、看病に手を盡してゐたことも承知してゐるやがるからな。で、今其奴が死に掛けたからと云つて、急に家から追ひ出すやうな、そんな理由はなげだと思ひやがるに相違ないよ。が、一方に於ては、彼奴は又まるで信心氣のない男だからな。それこそ懺悔もしなげりや、聖晚餐は勿論、最後の塗油式だつて受けようとはしないだらうよ。で、彼奴が死んだとして、どうせ懺悔もしない位だから、どこの教會だつて死骸を引き取つてくれやあしまい。さうなると、殺された犬同様、溝にでも抛り込むより仕舞かないね。よしんば又懺悔をするにした處で、彼奴の罪業と来たたら數限りもない上に、そ

んな事したとて、何の甲斐もない位ひどいものだよ。だつて、托鉢の坊さんにしたつて、牧師さんにしたつて、彼奴の罪業を赦してやらうなぞとは思ひもなさならなからうし、また思つたところで出来もしなからうからな。かうして赦免なしで死んで行つたんぢや、結局溝の中へ抛り込まれるに極つてゐる。さて、さうなつて見ると、因業な商賣をしてゐるお蔭に、たゞでさへ俺達のことを口汚く罵つて、俺達の物を掠めようとしてゐる土地の者のことだから、こんな時だとはかり公然と俺達に突つかうつて来て、「この伊太利人の犬め、教會でさへ受け附けてくれんぢやないか、近所にゐられては迷惑だ」なぞと云ひ出すだらうよ。それから家の中まで闖入して来て、家財道具を掻き拂つて行くばかりか、恐らく俺達の命に係るやうなことも仕出かし兼ねないね。いづれにしても、シャブレイに死なれちや好いことはないよ。」

シャブレイ君の寢てゐる所は、前申したやうに、二人が話してゐる部屋から遠くもありませんでしたし、それに大概の病人にありがちな、耳が聴くなつてゐましたので、自分の一身に關して話してゐられる巨細を聞き取つてしまひました。そこで、二人を傍へ喚んで申しました、「お前さん方は私のことであらう／＼思ひあぐんだり、又は私ゆゑに世間から侮辱されやしまいかと、妙に怖氣づいたりしてゐな

さるやうだが、それはまあ止めて買ひませうや。私の一身に關して話しておいでぢやつたことは残らず聞きました。で、若しお前さん方の假定してゐなさるやうなことが事實となつた日にや、そりやもうお前さん方の云ふ通りになるだらうとは、私も思つてますよ。だがね、私としては、さうはさせない積りですよ。私は一生の間随分と神様に御迷惑を懸けて来ましたから、今死なうといふ間際にもう一つ罪を造つたところで、別段物の數にも入るまいと思はれるのでさ。で、一つこの町でも一番と云はれるやうな名僧をこゝへ連れて来て買ひませう。連れて来て下さりや、後は私が一人で引請けますよ。そこはまあ拔目なく遣つて諸事區々納めた上、お前さん方にも可厭な思ひをさせないつもりだがね。」

かう云はれても、二人の兄弟は格別それに望みを馳いでゐる譯ではありませんでしたが、兎に角戒僧院へ出掛けた行つて、自分達の許で病褥に横はつてゐる一人の伊太利人の懺悔を聴いてやるために、何方か善智識のお出でが願ひたいと申し入れました。すると、選ばれたのが、日頃から清淨な、人の尊厳ともなるやうな生活を送つて、博識で道德堅固で、市民の間にも特に聖者の譽れ高い老僧で御座いました。二人はこの坊さんを病人の許へ連れて参りました。

坊さんはシャブレーの部屋へ入つて、病人の枕頭に腰を下ろすと、元氣を附けるやうに、さも親しげに口を開きました。そして、最近懺悔をしてから幾日位になるかと訊ねました。

シャブレーは生涯未だ嘗て懺悔などしたことのない男でしたが、かう答へたものです。「尊き神父様、少なくとも一週に一度は懺悔に參るのが、日頃から手前の習慣で御座いました。時には幾度となく參りましたが、それは約定に入れませんでもですね。ですが、病氣に罹つてからと云ふものは、懺悔もいたしませいで、もうざつと一週りの日數が経つてしまひました。何分にも病苦が普通大抵では御座いませんでね。」

「いや、さうですか」と坊さんは申しました。「それはなか／＼殊勝なことぢや。どうかこれからはさうあつて欲しいものぢやな。時に、あなたはさう度々懺悔をして來られたことぢやから、訊ねるにも、又返辭を聴くにも、大して手間は要りませうまいね。」

シャブレーは申しました。「まあ御神父様、さう仰しやつて下さいますな。成程手前もこれ迄幾度となく懺悔をして來ましたやうなもの、その都度、生れた日からその日に互つて想ひ出すことの出来る一切の罪を引つ括めてでなけりや、尚も懺悔する氣にはなれなかつたもので御座います。」

前は無だに母の胎内から飛び出して參つた時そのまゝの純潔な童貞で御座います。」

「それこそ神様の祝福が御座いませうぞ」と、坊さんは申しました。「いや、天晴れなことですわい。あんた方は、わたし達や、その他苟も宗則に縛られてゐるものとは違つて、遣らうと思へばその反對のことも、譯なく遣れる身ぢやからな。それだけに、あんたが童貞を保つて來られたのは、いよ／＼奇特と云ふものですわい。」

それから坊さんは、暴食によつて、神様の御意に逆らつたことはないかと訊いたものです。すると、シャブレーは長嘆息をして、勿論、再三あつた旨を答へました。と云ふのは、彼は凡て信心深い人達が年に一回守る四旬齋は勿論、少なくとも一週間の中三日は麵麩と水とで斷食する習慣にしてゐた。それで、殊に祈禱や巡禮をして昂奮した場合には、酒飲みが酒に打突かつたやうに、喜び勇んで、かぶく／＼水を飲んだものだ。時には又、百姓の女が野良に出る時作るやうな野菜サラダを欲しいと思つたこともある。その他、彼のやうに信心から斷食をする者がうまいと思つて然るべき程度以上に、凡ての食物がうまかつたことも何度となくあるからである。

「それはあんた」と、坊さんはそれを聞いて申しました。「人間が持つて生れた罪業で、大したものではありません。」

そんな次第ですから、御神父様、どうか未だ一度も懺悔したことのない者と思召して、一つ残らず詳細にお訊ね下さいませ。病氣ぢやからと云つて、少しも御容赦には及びませぬ。と申しますのは、こゝで手前の身を勤つて頂いたばかりに、折角救世主様があの尊い血潮を以てお贖ひ下さいました手前の靈魂の破滅を招くやうなことがあつては大變です。それから、そんな事をするよりは、いつその肉體を苦しめた方が優しだと思つてゐるからで御座いますよ。」

この言葉はすつかり聖者の氣に入つて、いかにも相手方の心の沈着を示してゐるやうに思はれました。そこで聖者はシャブレーのこの習性を稱讃してから、改めて女色に耽つたことはないかと訊ねました。

シャブレーは嘆息をして答へました。「神父様、その事ばかりは、どうも恥づかしくつて、貴方様にも打明けにくう御座います。どうやら自慢話と取られさうな氣がいたしましてな。」

高僧はそれに對して申しました。「何事も平氣で話をするんですな。眞實のことを述べてゐる以上、懺悔の時ぢやとて、また他の場合ぢやとて、決して罪にはならない筈ぢやからな。」

「それでは」と、シャブレーは答へました。「さう承つて安心いたしましたから、一つ思ひ切つて申し上げませう。手よ。そんな事で、當然以上に良心を苦しめるなどは感心しませんね。いかに信仰の篤い者でも、永い斷食の後では、誰だつて食慾が進むし、又えらい行をした行では、水も飲みたくなりますよ。」

「あゝ、御神父様」と、シャブレーは答へました。「貴方は氣休めにさう仰しやつて下さるので御座いませうが、それでは却つて迷惑に存じます。凡そ神様に仕へるには、何事も純潔な氣持ですべきであつて、そこに一點の淫いた考へを交へてはなりません。さうでなければ、罪になると云ふこと位は、手前もよく心得てゐるつもりですが、それはもう貴方様にも承知して頂いてゐることで御座いませうな。」

坊さんはすつかり喜んでしまひました。「いや、あんたがさう云ふお考へなのは、わしも大所満足に思ひますよ。この問題に關するあんたの几帳面な用心深い良心は、個個稱讃に値するものぢや。處で、あんたは貪慾の罪を犯したことはありませんか。欲しがつて然るべき以上の物を欲しがつたり、持つてゐてはならないものを持つてゐるやうなことはないかな。」

「尊い御神父様、手前がこんな高利貸の許に滞在してゐますので、そんなお考へ違ひをなすつたので御座います。そのお訊ねはあんまりで御座いますよ。この家の稼業とは

手前は何の関係もないもので御座います。實は、この家へ参つたのも、主人の良心に訴へて、この因縁な商賣を止め、貰はうと思つたからに外ならんでしてな。事實又、それがうまく成功したことで御座いませうよ。神罰の結果、こんな病氣にさへなりました。口幅つたいやうですが、手前も親爺からは相當の財産を承け嗣ぎました。が、親爺の死後、大抵施與に出してしまひました。それから自分の口を糊すためと、一つは又貧乏人を助けるために、些かな商賣を始めました。勿論、商賣を始めるからには、儲けを眼中に置かない譯ではありませんでした。併し儲けたものは、毎も貧乏人どもと平等に分けたもので御座います。即ち半分は自分の必要を充すために費やし、あとの半分は貧乏人どもに呉れてやりました。神様がそれを御照覽下すつたのか、手前の稼業は日増しに繁昌する一方で御座いましてな。」

「それも至極結構なことぢや」と、坊さんは申しました。「だが、あんたも時には腹を立てたことではせうな？」

「いやもう、幾度腹を立てたか分かりません。日となく夜となく、人間が惡業にばかり赴いてゐるのを見まして、又神の戒めを守らず、裁きを恐れざる有様を見まして、どうしてこれが腹を立てずにゐられませう？ それに若い者どもと來たら、滔々として虚榮に流れ、徒らに宣誓したり誓約は申しました、だが、これまでに人を罪に落とすために偽證をしたことはないかな。その外他人の謗口を叩いたとか、又は所有主の意志に反して、他人の財産で腹中を肥したと云ふやうなことはありませんかな。」

「あゝ、さうです、御神父様」と、シャブレーは申しました。「他八の謗口、そりやもう確かに遣りましたな。以前近所の者で、別に理由もないのに、絶えず女房を打擲する男が御座いました。手前はそのお上さんが氣の毒でたまりませんで——と申すのも、亭主は酔拂つて來ると、もう目も當てられぬ程醜いことをするんでしてな。一度などは、あんまりその遣り方が法外なので、手前も見ると見兼ねて女の身内の許で散々その男をこき下ろして遣りましたよ。」

「宜しい」と、坊さんは答へました。「では、もう一つ訊ねるが、お前さんは商人だと云ふことでしたな。それにつけ、商人の習慣として、何時か人を欺いたことはありませんか。」

したり、教習には足踏みさへしないで、酒屋にばかり入り廻るなど、まるで神の道を忘れて、浮世の道ばかり這うてゐる有様、それを目の前に見せつけられては、いつその事死んでくれようと思つたことも、日に十日では利きませんよ。」

それに對して、坊さんは答へました、「いや、それは見上げた憤慨といふものです。わしとしても、なにもそんな事のために懺悔を勧めてゐる譯ぢやありません。例へば、こんな事がありさうなものぢやがな、慍りの擲句、殺人をしたとか、喧嘩をしたとか、他人に悪口を吐いたとか——それはどんなものでせうな？」

「これは又驚き入りましたな、御神父様、貴方様は神様のお遣はし下さつたお方だと存じて居りましたのに、そのお言葉はどうしたことで御座いませう？ 今貴方様の仰せられたやうなことをしようと思ふやうな考へが少しでも手前にはありましたら、何で神様がこんな長生きをさせて下さいませう！ 手前がそれ程暢氣な考へ方をしているやうに想はれますか。そんな事は人殺しか迫刺きのすること御座います。手前はそやうな者を目にしますたびに、吃度から申して來ました、「さあ、あつちへ行つた、神様のお慈悲で性根を入れ代へるんだよ」と。」

「それはどうも、何處までも殊勝なことですな」と、坊さんの間にどうしてもその所有主に出會はないものですから、とう／＼私の手でそれを施與に出してしまひましたよ。」

「それは些細なことですな」と、坊さんは申しました。「それに又、お話のやうに處分されたのは、誠に當を得たことですわい。」

この高僧はなほ他にもいろ／＼と質問をいたしました。が、その都度シャブレーはこんな具合に答辯をしたものです。そこで坊さんは彼に罪障消滅を申し渡さうとしました。すると、シャブレーが不意にかう云ひ出したんでね。

「御神父様、まだ懺悔をいたしませんでしたが、實は内々心苦しく思つてゐる罪が一つあるんで御座いますよ。」

「どう云ふのかね、それは？」と坊さんは申しました。

「かう云ふことが記憶に残つて居ります」と、相手は答へました。「ある日曜の夕方でしたが、手前は下男に命じて部屋の掃除をいたさせました。かやうに手前は主の目に對する當然の敬意を忘却してゐたので御座います。」

そこで坊さんは申しました、「まあ、そんな事は別に大したことぢやありませんよ。」

「大したことでないなぞと仰しやるものではありません」と、シャブレーは言葉を返しました。「日曜こそ聖なる日と思はなくてはなりません。この日に、わが救世主は死より甦り給うたので御座いますからな。」

そこで坊さんは申しました、「何かまだその外に懺悔することがありますか。」

「ええ、神父様」と、シャブレーは答へました、「一度手前は教會の中でうっかり唾を吐いたことが御座います。」

すると、坊さんは微笑して申しました、「まあ、あなた、それは左程心に懸ける程のことでもありませんわい。わしども僧侶は始終教會の中で唾を吐いてゐますからな。」

「としますと、それは随分好くないことですか」と、シャブレー君は云つたものです。「この世の中で、一番神聖なものとして置かなければならない所はと云へば、つまりいと高き神に捧げ物をするお寺に外ならないでせうからね。」

振り摘んで申しますと、かう云つたやうな罪状をまだ後から／＼と懺悔したものです。それから今度は、ほつと溜息を漏らしながら、涙に咽び返りました。「一體この男は何時でも思ひのまゝに涙を出すことが出来たのですからね。」

「自體、どうしたと云ふのぢや？」と坊さんは訊ねました。「ああ、尊い神父様」と、シャブレーは申しました、「手前にはまだ一つ心にかゝる罪が御座います。これはまだ一度も懺悔したことが御座いません。それだけに、申し上げるのもお恥づかしう御座います。その事を考へただけでも、御覽の通り、手前はもう涙に咽ぶのですよ。この罪のお蔭で、手前にはもう神様のお慈悲が懸けられようとは思はれないのですからね。」

「馬鹿なことを云はつしやい」と、坊さんは申しました、「これ迄あらゆる人類に依つて犯された罪、又この後世界の存続する限り人類に依つて犯されるであらうところの罪、さう云ふ罪といふ罪がよし一人の人間に集められたとしても、その人間が、今あなたに見受けられるやうに、すつかり心が碎けて悔い改めさへすりや、懺悔のあり次第、その罪を宥して下さる程、神様のお慈悲と御憐愍とは廣大無邊なもので御座るぞ。ぢやに依つて、遅延せず、信仰をもつて、犯した罪を申し述べるがよい。」

それを聞いて、シャブレー君はなほも泣きじやつくりを吐きながら申しました。「ああ、御神父様、これは何分にも重い罪で御座いますので、手前に代つて貴方様がお祈り下さいませねば、神様がそれをお赦し下さらうとはどうしても信じられませんよ。」

坊さんは申しました、「たゞもう安心して話さない、屹度お前さんのために神のお慈悲にお頼り申して上げるからな。」

シャブレー君は相續らず泣きつゞけながら黙つてゐました。坊さんはいろ／＼と云つて、告白するやうに勵ましたものです。それでもシャブレーは、相手に構はず、なほ泣きつゞけてゐましたが、とう／＼深い溜息を吐くと共に、

かう云ひ出しました、「御神父様、貴方様が手前のために神のお赦しを願つてやると仰しやつて下さいますから、一つ思ひ切つて申し上げませう。お聞き下さい、手前がまだ幼少の折阿母に向つて悪態を吐いたことがあるので御座いますよ。」かう云ひ切るか切らないうちに、彼は又もやさめざめと泣き出したもので御座います。

「まああなた」と、坊さんは申しました、「あなたには、それがそんなに重い罪ぢやと思はれるのかいな。世間には、毎日神様を誹謗してゐるものもあるぢやないか。しかも神様は、そんな者でも、前非を悔いさへすれば、喜んでお赦しなさらうとしておいでぢや。それなのに、あなたはそれ位の罪過さへ赦されないものと思ひ込んで絶望してゐるのかい。さ、勇氣を出して、泣くのは止めた。よしんばあなたが主を十字架にかけた中の一人であつたとしても、現在のあなた位悔恨の情が著しかつたら、主は必ずお赦し下さるぢやらうよ。」

すると、シャブレー君が申しました、「これはまあ、御神父様、何と仰しやるので御座いますか。實際、手前は大外れた罪過を犯したもので御座います。九箇月の間手前を罵し、何回となく腕に抱きかゝへて育ててくれた産みの親を罵るなんて、何と云ふ恐ろしい罪で御座います。貴方様が手前に代つてお祈り下さいませねば、決してそれ

は赦されるものぢやないと存じますよ。」

で、坊さんもシャブレーが云ひたいことをすつかり云つてしまつたと氣が附いて、罪障消滅を云ひ渡しました。そして、相手の話をすつかり眞に受けてゐたので、シャブレーといふ男は世にも珍しい敬虔な信心深い男だと思ひ込んで、その確信の下に祝福を與へました。また誰が臨終の際にこんな話をするのを聞いて、それに疑ひを挟まうとするものがありませうか。で、萬事を終つてから、坊さんはこの男に申しました。「シャブレーさん、神のお助けに依つて、あなたもやがて恢復されるぢやらう。だが、萬一神がそのやうに昇天の準備の出来た、祝福されたあなたの魂をお召しになるやうなことがあつた場合には、あなたの肉體は直ぐさまわしの寺に埋葬しようと思ふが、それに異存はないかな。」

「どういたしましたして、懺悔も異存は御座いません」と、シャブレーは答へました、「と申しますよりも、貴方様のお寺以外の所へは埋葬されたくないので御座います。手前の代りに祈つてやるともお約束下さいましたし、それでなくとも、手前は以前から特別に貴方様のお宗派を尊敬してゐましたからね。で、お願ひで御座いますが、今朝程祭壇で聖別された基督の聖體を、お寺へお歸りになりましたら、直ぐお遣はし下さいませんか。勿論、その値打ちのある者では御

座いせんが、お許しを得て、聖體を戴いた上、神聖な最期の塗油式をも受けたう存じます。一生罪深い人間では御座いましたが、どうかして基督教徒として死んで行きたう御座いますので。」

すると、上人は尤もな言葉だ、自分も大變満足に思ふ、聖晚餐は早速とよけることにしようと思ひました。そして直ぐその通りに實行されました。

二人の兄弟は、若しかすると、シャブレイの奴、思はぬへまを仕出かしやしないかと、そればかり心配して、病人の寝てゐる部屋と次の部屋との界になつてゐる板壁の側に腰を卸してゐました。そして初めから終ひまで懺悔に耳を傾けてゐましたが、シャブレイの坊さんに云つてゐることは一々手に取るやうに聞えました。彼の懺悔を聞いてゐると一度ならず可笑しさが込み上げて来て、もう少しで噴き出してしまふところでした。そこで、二人はこそ／＼話を始めました。「まあ、何といふ人間だらうな、老年も、重病も、また眼前に迫つてゐる死や、おつ／＼けその法廷に立たなければならぬことになつてゐる、神様に對する恐怖さへ、あの男の無道な心根を踏んで、今迄とは違つた眞人間になつて死なうといふ氣を起させないとはねえ」ですが、シャブレイの亡骸がいよ／＼お寺へ埋葬されることになつたのを聞いては、二人とも他の事なんざどうでもいふと思

ひました。

その後間もなくシャブレイ君は聖晚餐を受け、次いで最後の塗油式を済ませましたが、その時は容態がひどく悪くなつて來ました。そして、例の巧妙な懺悔をした日の晩禱が終つてから間もなく永眠しました。

二人の兄弟は、死者の遺産の中から相當な葬式の準備をして、お寺へ死亡の通知を出しました。それで、習慣通り、坊さんにお通夜に來て貰つて、翌日は亡骸を運び出すやうに取計らひました。

懺悔を聴いてくれた、篤實な坊さんは、永眠の知らせに接すると、その寺の方丈と相談しました。それから一山總會の鐘を鳴らさせた上、參集の衆僧に向つて、懺悔に據ると、いかにシャブレイなるものが信心深い男であるかを説き聞かせました。更に、神はこの者に依つて定めて大きな奇蹟を行はれるだらうと思ふから、彼の亡骸は特に尊敬して鄭重に引取らなければならぬとも附得したものです。すると、方丈を始めとして僧侶一同輕率にもこの意見に賛成してしまつたのです。そして、夕刻や／＼晩なつてから、一同學つてシャブレイの遺骸のある家へ出掛けて行つて、この男のために尊嚴な大法會を執り行ひました。

翌朝、僧侶どもは、袈裟を着け、外套を纏ひ、手に／＼讚美歌集を持つて、十字架を先頭に立てながらやつて來て、

聖歌と共に遺骸を受け取りました。それからいと莊嚴にそれをお寺へ搬んだものです。殆ど全市の男女が葬列の後からつゞきました。で、この亡骸がお寺で卸されると、シャブレイの懺悔に立ち會つた例の高僧は、壇上に登つて、故人の信心深い生活、斷食、童貞、單純、無垢及び聖徳に關して驚異すべき事柄を語りました。

就中、シャブレイ君が自分の犯した最大の罪惡として涙ながらに懺悔したことどもを報告した上、神様はそれをお赦し下さるものであるといふことを信じさせるのにとんなに骨が折れたかといふことを力を籠めて語りました。それから、今度は批難の矢を衆衆に向けて申しました。「然るに皆さん、神に呪はれた人達よ、貴方は麥藥一本足に纏ひついたり云つては、天國にゐられる主基督や聖母並びに聖徒達を冒瀆して憚らないではありませんか。」なほその上にも彼はシャブレイの誠實や純潔について多くの言葉を費しました。要するに彼の話は會衆一同の信ずるところとなつて、同時に信心深い人達の魂をすつかり魅してしまひました。その結果、誰も彼も儀式の済むが早いか、押し合ひへし合ひ、死人の手や足に接吻しようとして祭壇に殺到しました。で、身に纏つてゐるものは千々に引つ裂かれてしまひました。衣の一片でも手にした者は自分の身の幸福を喜ぶといふ始末です。實際、坊さん達は終日その亡骸を

衆人の觀覽に供しなければなりません。銘々心ゆくまでそれを眺めようとして聞かなかつたものですからね。

その夜シャブレイは大理石の棺に入れられて、一つの禮拜堂に恭しく安置されました。そして、その翌日になるともう人々は亡骸にお詣りをして、それを齋き崇めると共に燈籠に火を點け始めましたが、その間には死者に誓ひを立てる者もあり、それから約束に基づいて蠟の像まで懸けると云ふやうな有様になつて來ました。かうした聖者だといふ評判と崇拜の念とは次第に嵩じて來て、何か身の危険に際會した場合、聖シャブレイ——皆がシャブレイをかう稱んだし、今でもさう稱んでゐます——以外の聖者には、誰も容易に助けを求めようとはしなくなりました。只今ではもう何人も、神が彼によつて多くの奇蹟をなし給うたことや今日でもこの聖者の代禱を熱心に求める者には、常に奇蹟を行ひ給ふことを信じて疑はないので御座います。

で、チアベレル君の一生とその死際及び聖徒に列せられた次第は、正に只今申し上げた通りで御座います。處で、若しかしたらこの男は實際神様のお目にも矢張り聖者と見えるかも知れないと、かう私には思はれるので御座います。と申しますのは、成程彼の一生は背徳見るに堪へないものでは御座いましたが、しかし臨終の際になつて、神も憐れに思召して天國に容れたまうた程、彼は烈しい後悔の念に

苛まれたのかも知れませんが、この點は吾々人間には明かに分つておられませんから、私は表面に現れたところから判断して、假りにこの男は天國よりも寧ろ惡魔の手に渡るのが至當だとして置きませう。さて、さういたしましたも、私達は神の恩寵のいかに廣大無邊であるかを明かに悟ることが出来るではありませんか。神は、私達が神の敵の一人を神の友だと思つて、神と私どもとの間の仲立ちに頼んだといたしましたし、私達の誤謬な問題をせず、たと私どもの信念の率直なところを憐れんで、恰も眞の聖者を選んで神の恩寵を祈つたと同じやうに、私どもの願ひに耳を傾けたまふので御座います。そこで私達は、一切の困難に當つて、常に身を神に任せ、願ふところ必ず許されざるなしとの信念に生きて行きたいものです。さうしますれば、今日のこの悲惨な状態の下にも、又神の御名の讚美を以て始めましたこの楽しい團樂に於いても、常に私達を健やかに守り給うて、愈々彼の御名を讃へ稱へしめられることと信じます。——バムフィロの話はこれで終りました。

第二話

猶太人アブラハムはジェアンノー・フォン・セヴィネの勤めによつて羅馬に行つたが、その僧侶社會の

邪惡を知つて、再び巴里に歸つて基督教徒となつた話。

バムフィロの話は、全體として淑女達の稱讚を博すると共に、その所々では随分人を笑はせました。が、それも人の噂聴裡に終局を告げたので、女王は隣席に坐つてゐたネイフイレに向つて、一同の團樂といふ最初の趣旨に従つて、何か新しい話を始めるやうに命じました。舞指に少なからぬ愛嬌がある上、容姿の美はしいネイフイレは、喜んで承諾の旨を答へ、次のやうな話をいたしました。——バムフィロさんは、神が私達を愛するの餘り、私達に責任のない誤りは少しも問題になさらないといふことをお話の中で説き明かして下さいました。そこで私も、同じやうに、神様の愛がその寛容を通していかに明かに表れるかといふ實例を擧げて見ようと存じます。一體、自分の言行によつて神の罰を立てるのが本職であるべき人達の誤謬に對して、神は常に寛容であらせられますわねえ。でも、かうした考へ方が私どもをして愈々固くその信仰を守らせてくれるなら、何より幸ひに存じます。

皆さん、昔巴里に、富裕で善良な、ジェアンノー・フォン・セヴィネと稱ふ紳商があつたさうで御座います。この人は至つて正直で、手洗く織物商賣をしてゐましたが、同じ商人仲間、これも極めて正直な、未だ後指一つ指された

このとないといふ、大金持ちの猶太人アブラハムと親交を つゞけて居りました。處で、ジェアンノーは、この友人の一點批の打ちどころのない經歷を見るにつけ、たゞ信仰の缺けてゐるばかりに、こんな廉直な、物の判つた善良な人間が來世では呪はれるのかと、それが慄ましくてなりませんでした。で、友達甲斐に、猶太教の謬見を捨て、何物にも勝つて眞理であるところの基督教に改宗するやうに懇請した上、この教への神聖と誠實とは、それが絶えず隆盛に赴くのを見ても明白であらうと申しました。すると、その猶太人は、猶太教以外のどんな教へも神聖で誠實なものとは思はれない、自分は猶太教に生れたのだから、またその信仰に死にたい、従つてどんな事があつてもこの教へから離れるやうなことはしないつもりだと答へました。ジェアンノーはそれにも懲りず、五六日經つてから又同じ問題に燃りを戻しました。そして、兎にも角にも、大抵の商人が心得てゐるだけの知識で、基督教が猶太教よりも優つてゐること、並びにその理由を説いて聞かせました。で、ジェアンノーに對する普通ならぬ友情が彼を動かしたのか、それとも聖靈がこの無智な男に云はせた、その言葉が彼を納得させたのか、兎も角も、アブラハムは猶太の律法には深い造詣を持つてゐたに拘らず、何うやらジェアンノーの話が氣に入つて來たらしいのです。とは云ふものゝ、自分の

信仰だけは頑固にもなほ捨てようとはしませんでした。

で、相手が頑強に固執してゐるのと同じやうに、ジェアンノーも、亦斷じて説法を思ひ留りませんでした。そこで、猶太人はとうとう相手の切なる願ひに動かされて申しました。「ジェアンノーさん、あなたがそんなに私を基督教徒にしたいと思つて下さるんなら、私も一つ御希望通りになつて見ませうよ。だが、その前に一度羅馬へ行つて、あなたの所謂地上に於ける神の代理者とかいふ人にも會つて、その人を始め、その同僚方、つまり大僧正と云つたやうな人達の生活とか行狀とかに接してからのことにしたいものだね。若しそれが成程と得心の行くものであつて、それだのあなたの言葉だのからして、あなたが矢張り云はつしやる通り、あなたの信仰が私のそれよりも優れてゐることを承認せずにゐられないやうだつたら、その時こそ本當に前言通り履行させようよ。だが、さうでなかつた場合には、私や矢張り今のまんまでゐようと思ふんだ。」

ジェアンノーはこの決心を聞くと、一方ならず當惑して、こんな獨語を申しました。「いや、友達を改宗させて、大いに骨折甲斐があると思つたら、これぢやどうも骨折り損になりさうだわい。羅馬の本山なぞへ行つて、あそこ坊主どものふしだらな生活でも見ようものなら、猶太教徒から基督教徒になるところか、よしんば既に洗禮を受けてゐる

たにしても、もう一度猶太教に復帰したくなるに違ひないからな。」

で、彼はアブラハムにかう云ひました、「あんた、羅馬へ旅行を思ひ立つなんて、何うしてそんな物要りな眞似をしようと云ふのかね。それに、あんたのやうに金があつちや、海路にしろ陸路にしろ、危ないことだ。あんたはこの土地で洗禮が受けられないとも思つてゐるんですかい。で、若し私の傳へた信仰に就いて、何かまだ疑問でもあるんなら、あんたの望み通りに心往くまで説明してくれる大學者や、物の判つた人といふものは、何處へ行つたつてこの土地以上にあるもんぢやありませんぜ。だから、この旅行は、私の見る處ぢや、徹頭徹尾餘計なことだね。ねえあなた、一體高僧だの高位高官の坊さん方と云つた處で、あんたがこれ迄この市で見懸けたのと別段變りはないのですよ。せいぜい法王の側近くにあるといふ位が取柄なんですか。だから、今度だけは、私の云ふことを聽いて貰ひたいものです。さうすれば、その手間や費用を又の時に轉用することも出来ようと云ふものだ。そして、その時には又私もあんたのお伴が出来るかと思ふんですがね。」

すると、猶太人は答へました、「ジエアンノーさん、そりや私だつてあんたの云ふ通りだとは思ひますがね、手短かに云ふと、もし今でもあんたがあんたの切なる望み通りに

なることを私に求めてゐられるとすりや、私は斷然旅行することにしますよ。でなけりや、決して洗禮などは受けませんね。」

相手の固い決心を見て、ジエアンノーは申しました、「では御機嫌よく行つてらっしゃい。」が、心の中では、一旦羅馬の僧院を見たら、アブラハムは未來永劫基督教徒にはなるまいと考へてゐました。と云つて、これ以上差し出口を利く筋合でもないもので、その儘にして置きました。

さて、猶太人は騎馬で、出来るだけ早く羅馬へと旅を急いだものです。で、目的地へ着くと、同宗門の連中から大歓迎を受けました。が、旅行の目的に就いては誰にも云はないで、非常な注意を拂つて、法王、大僧正達、それに次いで僧正達、法王宮の人々などの生活を仔細に観察し始めました。

彼は普通ならぬ炯眼の男でした。そして、自分で探ると共に他人からも聞いたところから推して直ぐ様かう云ふことを確かめました。彼等は擧つて淫蕩に耽り、女色ばかりでなく男色にも耽つてゐる、全く恥も外聞も忘れた有様で、それがために重大事件に於ても女郎や若衆の口が少なからぬ影響を及ぼしてゐると。その上、上下ともに食道樂で、大酒飲みで、酒亂で、宛然理性のない動物のやうに、性慾に次いでまづ胃袋の云ふ通りにならうといふ手合だとい

ふことが分りました。更に綿密な説案をつゞけた結果、彼等がいかに貪慾で、金錢に目がなく、人間の血、いや、基督教徒の血をも、供物や僧職と云つたやうな聖物をも、

その他ありとあらゆるものと賣買してゐるといふことまで知るやうになりました。で、彼の眼には、當時の巴里に於ける異服物その他如何なる商品の取引よりも、一層飽穢なものであり、一層多くの仲買人が活躍してゐるやうに思はれました。公然の賄賂がお執りなしと稱へられ、破廉恥極まる貪慾がお手當などと云はれてゐるのです。恰も神はかうした悪人どもの悪い企みを知りたまはず、況して上に擧げた言葉の眞意などは少しも覺り得ないで、人間並みに名目に眼が眩むものとても信じてゐるかのやうでした。

凡てかうした事柄、或ひはもつとさまざまなこと——それに就いてはお話しない方がいゝと思ひますが——などは、道徳堅固なこの猶太人を大層憤慨させました。で、この位見ておけば十分だと思つて、彼は巴里に歸る決心をしました。そして、その通りにしました。

ジエアンノーは、友人の歸郷を知るや、直ぐに彼を訪ねました。無論アブラハムが基督教徒になる望みはあるまいと、その方は全然絶望してゐたのです。兩人は心から再會を喜びました。で、二三日休息の時間を置いてから、ジエアンノーは彼に向つて、一體大管長、大僧正、それから

法王宮の人達に就いては、どういふ感想を有つてゐるのかと、訊いて見たもので御座います。

猶太人は直線答へました、「あの人達にはとんと感服出来ませんね。あれぢや、來世の救ひも覺束ないものですよ。と云ふのは、まあお聞きなさい、私の觀察が大して間違つてゐなけりや、どの坊さんを見ても、敬虔、信心、善行、模範的生活、又はそれに類したことは微塵もないやうでしたからね。それどころか、淫蕩、貪慾、暴飲暴食、それからそれに類した、又はそれに輪をかけたやうな悪業——若しそんなものがあるとすればです。ね——などが、彼等の間にいかに盛んに行はれてゐるかといふことばかり眼に着いて、私には、あの町が神の世界と云ふよりも、いつそ親黨の仕事場のやうに思はれましたよ。で、私の見る處ぢや、どうやら大管長を始めとして、その他の面々に至るまで皆その例に倣つて、自分達がその基柱となり、その支柱となるべき管の基督教を全然打ち壊して、それをこの世から根絶するために、あらゆる洞察と、あらゆる注意と努力とを傾倒してゐるやうに思はれましたね。處が、彼等の観ひ所が成功しないで、却つてあんたの基督教が日に増し弘まつて、榮え且つ輝いて行く所を見ると、かの聖靈があらゆる他の宗教を差し置いて特に基督教を神聖なもの眞實なものとして支持してゐるのだと信じない譯に行きませんよ。そ

こで前にはあんなから基督教徒になれと勧められても一向耳を藉さなかつたのだが、今度こそ上に擧げたやうな理由からして、私はどんな事があつても基督教徒になる決心を「隠さないといふことを公然あんなに明言して置きますよ。だから、どうか直ぐに私を教會へ連れて行つて、あんなの神聖な宗教の慣例に従つて洗禮を受けさせて下さい。」

ジェアンノーは全然反對の結末を豫想してゐただけに、今や雀躍せんばかりに喜びました。早速アブラハムを巴里の聖母教會へ連れて行つて、その寺院づきの僧侶に向つて、自分の友人に洗禮を授けて貰ひたいと申し入れました。彼等は、彼の願ひを聞くと、即座にその要求を容れて支度をしてくれました。ジェアンノーは名づけ親の役目を勤めて、相手にヨハネと云ふ名を與へました。その後、彼は友人を老練な牧師の手で基督教に仕込ませるやうにしました。アブラハムは隣り間にそれを習得して、敬虔で善良な、極めて行狀の正しい人物になりました。

第三話

猶太人メルヒセデツクが三つの指環の話をして、サラデインの設けた、極めて危険な陥穽から遁れた話。

ネイフイレが口を閉ぢた時、その話は一問の賞讃を博しました。つゞいて、女王の望むまゝに、フィロメナが話を始めました。

ネイフイレさんのお話を承はつて、私は何時か或る猶太人の身に降りかゝつた恐ろしい危険を想ひ起しました。さて、神様や私達の宗教の眞理などにつきましては、既に時宜に適したお話も御座いましたので、今度は少し調子を下げ、人間の運命や所作に就いて、何事かを申し上げても、別段不釣合でも御座いますまいから、一つお話しして見ませう。それをお聞きになれば、何か質問を懸けるやうな場合に、その返答にも、一段と意をお用になることと存じますよ。と申しますのも、皆様、多くの人々が、わが身の愚さから幸福な境涯を離れて、慘憺たる非運の底へ落ちて行くのに、惻怍な人達といふものは、その賢さのため恐ろしい危険からも免れて、常に無事安穩でゐられるから御座います。實際、無智が人を幸福から非運へ導くものであることは、幾多の實例が證據立ててゐます。それはこゝで一々お話しするまでもなく、日常私達の眼前に起るところで御座いますわ。で、反對の賢さが如何に身を助けるものであるかを、お約束に従つて、次の短い物語で皆様にお話しして見たいと存じます。

サラデインと申しますと、その人の勇敢は大したもので、

と思つてゐるか、一つ其方から直ぐ聞きたいものだね。何うぢや？」

この猶太人は眞個聰明な男で御座いましたので、サラデインがこんな問題を課したのは、たゞ自分の言葉尻を押へようとしてゐるんだなと感づきました。それに、上の三つの宗教の中で、どれを最も勝れたものにしようとも、結局同じことで、何うしたつてサラデインは自分の目的を達しないでは指かないだらうといふことを見て取りましたので、素早くその明敏な洞察力を集中して、何處にも差障りのない答へを見附けようといはしました。と、突然心に浮んだことがありましたので、彼はかう申しました。――

「陛下、陛下のお訊ねはまことに結構で、且意味深長なもので御座います。が、手前の意見を申上げるに先立つて、一寸したお話しをして置きたいと存じます。その話と申しますのは、何度も耳にいたしたやうに覚えてゐますが、昔物持ちで高位のお方があつたと思召せ、さて、その方は、いろ／＼持つて居りました優れた寶石の中でも、一つの立派で高價な指環を特に珍重して居りました。で、その値打ちと美しさに相應するやうに、家寶として永く子々孫々に傳へようと思ひましたので、自分の子供達の中、誰でも父の贈物としてこの指環を提示することの出来る者が父の相續人となると共に、一族の長者として他の者から尊敬せ

身は匹夫から出て、バビロンの帝王とまでなつたのです。が、サラセンの王侯や、基督教國の王侯と戦つて屢々勝利を博しましたものゝ、數度の戦争や多大の浪費のために、とう／＼國庫を空にしてしまひました。處が、或時新奇な不慮の事件のために、又もや巨額の金が必要になつて來ましたが、それだけの金額を、自分の思ふやうに早く、何處から徴發して、いか全然見當が付きませんでした。で、その時不圖想ひ出したのが、アレキサンドリアで高利貸をしてゐる、メルヒセデツクと云ふ金持ちの猶太人でした。この男は、サラデインの見る處では、彼の急場を救ふ位は何でもないだらうが、何分にも吝嗇で、先方から進んで用立ててくれないことは分り切つてゐました。サラデインも權力を用ゐるやうななどは更に思つてゐませんでした。が、必要は遠慮なく迫つて來ました。そして、何の道この猶太人の助力を藉らねばならぬとは、固く決めてゐたのです。そこで、何とか無理に押被せてしまふ口實はないものかと考へ込んだので御座います。

結局、その猶太人を招んで、打ち解けた待遇をして、自分の傍に席を取らせた上、かう申しました。「な、其方が聰明で、殊に宗教上の事柄にかけては深い意見を有つてゐるとは、わしもかね／＼聞き及んでゐるがね。一體猶太教、回々教、基督教と三つの律法の中で、どれが眞實のものだ

らるべきだといふ家憲を作りました。

「その指環の一番最初の受領者は、その子供に對して、同様な章定を作りました。そして、それに依つて、父の型通りに實行しました。簡単に申しますと、その指環は、多くの相續者の手から手へ渡つて行つたので御座います。そして、とうとう三人の子のある者の所有に歸しました。處が、その三人が三人とも揃つて顔立ちが好く、品行も良く、父親にはまことに柔順で御座いました。ですから、父親の方でも、三人が三人とも同様に心から可愛くつてなりません。處で、その青年達も指環に關する由來を知りまして、誰も彼もその最上の名譽に與りたいと思つたものから、もう老境に入った父親に強請んで、三人とも自分一人でその指環を貰ひ受けようといはしました。善良な父親は、三人ながら等分に可愛がつてゐましたので、その中の誰を選ばう術もありませんでした。そこで、どの子供にも指環を遣ると約束して皆を喜ばせる方法を考へました。結局、こつそりと腕利きの細工師に頼んで、最初の寸分違はぬ別の指環を二個造らせたので御座いますね。それが、註文主でさへ、どれが眞物やら鑑定が着き兼ねる位よく似てゐたのですよ。で、臨終の床に就くと、彼はこつそり子供達にその一つ／＼を與へました。父の死後子供達はめいめいその相續權と家長權とを主張しました。そして、相手

人として待遇したので御座います。

第四話

或僧が自分の犯したと同じ罪過が院主にもあるのを巧みに許して、それに依て自ら蒙らうとした罰を免れた話。

フィロメが話を終つて、口を嚙むが早いか、その隣席に坐つてゐたディオネオは、女王の命令も待たずに、話に取りかゝりました。と云ふのは、それ迄の順序から見ても、今度は自分の番に當るのが明白であつたから御座います。皆さん、私の考へ違ひでなければ、一同の目的は此處で代る／＼面白い話をして樂しまうと云ふにあるでせう。ですから、この目的に反しない限り、女王様も先刻申された通り、その最も面白いと思ふところを申上げるだけの自由は各人に許されてゐるだらうと存じます。さて、ジェアン・ノー・フォン・セグイネーの戒告がアブラハムを福祉に導いたお話、又メルヒセデックが機轉によつてその富をサラディンの眞から救つたお話は、既に承はりました。そこで、私がほんの手短かに、一人の僧がいかに巧みに重い罰から免れたかといふお話をいたしました。皆様、御批難を受けるやうなことはあるまいと存じます。

方の權利を否定しながら、その要求を裏づけるためにそれれ自分か貰つた指環を出して見せました。すると、どう見ても、あまりに似通つてゐて、どれが眞物かさつぱり分らなかつたので、とう／＼どの子供が父親の本當の相續者かといふ問題は決定を見ずに終りました。そして、今日でも依然としてさうなので御座います。

「そこで、陛下、父なる神が三民族に與へ給うた律法、即ち手前にお尋ねのありました三つの律法に就いても、同様の事が申されようかと存じます。三民族はめい／＼自分を神の相續者だと思ひ、自分こそ本當の律法や戒律を持つてゐて、それを遵奉してゐるのだと信じてゐるので御座います。ですが、どの民族が眞實のものを持つてゐるかといふことは、指環の場合同様、何ともまだ決定されないので御座います。」

サラディンも、折角相手を陥れるために拵へて置いた眞を巧く躲かされたと思つたので、端的に自分の要求を切り出さうと決心しました。それと共に、若し相手があれ程沈着に答辯をしなければならぬ、かうもして見ようといふ腹のあつたことまで打ち明けてしまひました。で、猶太人も相手が要求するだけのものを提供しました。その後サラディンは借金を全部返済したばかりでなく、さまざまなかづけ物をした上に、自分に咫尺する光榮と名譽とを與へて、終生友

此處から程遠くないルニデアナといふ片田舎に、その昔一つの僧院がありました。それは、今日目では見られない程、貴い神聖なものとして崇められたもので僧侶も澤山住んで居りました。大勢の中に一人の若い僧がゐましたが、その血の氣と青春の若々しさとは、お通夜をしても斷食をしても、一向衰へさうにありませんでした。處が、或日の午頃、他の僧達が眠つてゐる間に、ひつそりと静まり返つてゐる教會の周りをぶら／＼歩いてゐると、彼の視線がばつたり一人の美しい百姓娘の上に落ちたのです。恐らくその邊の作男の家の娘でせうが、畑へ野菜を採りに來てゐたのですよ。若い僧は一目その娘を見ると、詰らない考へがむら／＼と起つて來ました。で、娘に近づいて、何とか彼とか云ひ寄りながら、二言三言話をしてゐるうちに、とう／＼二人は情意投合といふ所まで潜き着きました。そして、人目に着かぬやうに、女を自分の僧房まで引つ張つて行きました。で、あまりの歡喜悅樂に身の程を忘れて、不注意にもその女と戯言を云ひ合つてゐる間に、院主が起床して、そつとこの若僧の部屋の前を通りかゝりました。そして、二人の私語を耳にしたのです。で、はつきりその聲を聞き分けようと思つて、こつそり僧房の扉に近寄つて見ると、その中に一人の婦人のゐることが手に取るやうに分るぢやありませんか。直様その扉を開かせようとも思

ひましたが、また考へを講して、自分の部屋へ立ち戻つたまゝ、若僧が出て来るのを待ち構へて居りました。

一方若僧は娘といちやついて有頂天になつてゐたやうなものゝ、不安は絶えず念頭を去らないのでした。そして、寢室の方から足音が聞えて来るやうな気がしたので、扉の小さい隙間に眼を當てて見ると、そこに紛れもない院主が突立つたまゝ、聴き耳を立ててゐるのですよ。自分がその………の院主の眼に入らなかつたらうとは、何うしたつて思はれません。それに、かうしたことがどんなに厳しい罰に値ひするかは、固より承知なので、彼も極度に當惑いたしました。が、娘には心配さうな顔色も見せないで、何うかして免れる手段はないものかと、慌しい中からとつおいつ考へたものです。すると、事實として、確かに思ひ通りに行きさうな奸策が浮んで來ました。

そこで、若僧はもう………たやうな振りをして、かう申しました。「どれ、お前を人目にかゝらないやうに出してやれるかどうか、一つそこらを偵察して来るから、わしが歸つて来るまで、その儘じつとしてゐるんだよ。」それから僧房の錠を卸して、その足で院主の部屋へ行きました。そして、澄した顔をして、どの僧でも外出の際は乾度するやうに、相手に鍵を渡しながら、「院主様、伐らして置きました薪は、今朝程みんなは搬ばれませんでしたから、森へ

行つて、残餘を持つて來たいと存じますが、如何で御座いますか？」と申しました。この若僧が自分に覗かれたことにはまだ氣が附かないのだと思ふと、院主はさうして遣つて來られたのが撥つたいやうな、同時に又面白いやうな氣もして、相手の云ふがまゝに許可を與へました。そして、鍵を受け取ると、此奴の失策を詳細に査べて遣らうと思ひました。

で、一人になると、彼は、大勢の僧達の面前で、あの罪人の部屋を明け放つて、一同にその罪状を見せて、彼奴を罰しても、後で彼れ此れ云はれないやうにして置いたものだらうか、それとも、その前に事の起因を女から聴き取つた方が好くはないかなどと、いろ／＼に思案を運らしました。それに、考へて見ると、相手は多分處女かも知れない。すれば、その當人に對しても、又その父親に對しても、衆僧の前にその女を曝すといふやうな恥辱を加へなければよかつたと、後になつて後悔するかも知れないといふことが不圖頭に浮んで來たのです。そこで、何んな女だか、まづ會つて見て、その上で思案を運らさうといふことに考へを落ち着かせました。で、極めて靜かにその僧房に近づいて、扉を開けて入るなり、びたりとその扉を閉めました。娘は院主が入つて來たのを見ると、殆ど氣絶せむばかりに動揺して、恥づかしさ怖ろしさに、おろ／＼泣き出しまし

た。が、流石のいかめしい坊さんも、一目この繰繰の好い若い娘を見ると、………

………「實際」と、彼は心の中に呟きました。「かうしてすつかりお歸立まで出來てゐるのに、何故箸を取つてはいけないのだらう？世の中に憤慨すべきことや不満に思ふことは、これを措いても、他にいくらでもある。見よ、この美しい娘が、誰にも知られないで、この僧院の中へ來てゐるではないか。そして、それをわしの意に従はせることも出來るんだとすりや、何故さうして悪いのか、わしにやあ分らないね。では、誰かに見附けられるとでも云ふのか。なに、そんな心配はない。それに、人の知らない罪といふものは手隙隙間要らず償はれるものだ。こんな機會は又とあるものぢやない。思ふに、神様のお遣はしになつた幸運をそれと覺るのも、これ又賢明と云ふものだよ。」

こんな事を考へてゐる間に、彼の心は一變しました。で、彼は娘の傍へ歩み寄つて、親しげに口を利きながら、もうその上は泣かないやうに、相手を宥めました。さうして二言三言話してゐるうちに、とう／＼眞向から思ひのたけを打明けました。娘の方でも、固より木でも石でもないのですから、直ちに院主の願ひをかなへて遣つたのですね。(以下原文九行略)

件の若僧は、森へ行くと詐つて、その寢室に潜り込んでゐましたが、院主が一人で彼の部屋へ這入つて行くのを見ると、自分の計畫の成功に信頼して、新たに勇氣を振ひ興しました。院主が扉を閉め切つた時には、もう些とも疑ひませんでした。そして、こつそり隠れ場所から匂ひ出して扉の隙間に身を寄せながら、室内に於ける院主の云つたり爲たりすることを悉く見て取つてしまひました。處で、院主は………再び娘一人を閉め込んで置いたまゝ、自分の部屋へ戻つて參りました。暫くすると、若僧の聲がしました。院主はつきり森から歸つて來たものと思ひ込んで、手厳しく訊問した上、相手を牢に打ち込んで、獲物はこちらで獨占して遣らうと考へたのです。そこで、相手を招び入れて、嚴しい顔で強意見をしながら、最後に投獄を宣告しました。すると、若僧は即座にかう答へたのですよ。「御院主様、私はこの神聖なベネディクト派に入りましたから未だ日も浅いので、その一々の特色はよく存じません。實際のところ、僧たる者は斷食や通夜と同様に………の行を修めなければならぬものだといふことは、未だ教へて頂いてゐませんでした。ですが、今回幸ひに御教示を賜はりましたので、この度の處だけお目こぼしに與りましたら、今後は誓つて過ちのないやうに心懸けまして、貴方様のお手本通りにいたす所存で御

座いますよ。」
院主は判りのいふ男でしたから、直ぐに相手がこの道にかけては自分より上手であるばかりか、自分のしたことを残らず目撃してゐたんだなと気が付きました。で、自分も同罪を犯したといふ意識のあるところから、院主も後目痛くなつて、當然自分も受けなければならぬ刑罰をその男だけに加へるわけには行きませんでした。そんな譯で、相手を救した上、お前の見たことは一切他言してはならぬぞと命じました。それから二人は注意してその娘を僧院から出してやりました。が、察するところ、その後もたび／＼その娘を招び返したことで御座いませうよ。

第五話

モンテフェラーの伯爵夫人が牝雞の御馳走と數語の警句で佛蘭西王の由なき懸幕を撃退した話。

デイオネオの話に耳を傾けてゐた淑女達は、初めの程は多少羞ぢらつて、ほんのりと慎ましやかな紅の色に頬を染めてゐましたが、次第に興が乗つて来ると、互に顔を見合せて、こつそり微笑を取り交しながら、辛うじて高らかな笑ひを懐へてゐました。で、話がお仕舞ひになると、彼女

達はからかひ、半分は批難と嘲笑とを浴せましたので、話手も淑女達を前にしてこんな話をしたことの非を感じたやうで御座いました。が、女王はその時デイオネオの傍の草の中に坐つてゐたファイアメッタを名指しながら、順を追つて續けるやうに命じました。

ファイアメッタは笑みを含みつゝ話し始めました。これ迄御座いましたやうな、迅速で且時宜に適した答辭の効果を思はせるお話は、私も大層面白く伺ひました。が、さうした理由だけでなく、自分より身分の高い婦人ばかりを愛しようとするのが、殿方の偉いところであるとするなら、それとは反對に、自分より身分の高い殿方に對する愛を強ひて抑へようとするのも、婦人として誠に嗜みの深い行爲と申して好からうと存じますから、丁度順番が私に廻つて来たのを幸ひ、不圖想ひ着いた事が御座いますので、何うして或貴族の奥方が、その言葉や行爲でさうした危険から身を護ると共に自分を陥れようとした殿方の氣持を一變させたかといふ實例を皆様の前に御披露して見たいと存じます。

モンテフェラー伯は、勇敢な騎士的典型人物で、また羅馬教會の旗手(知事又は奉行)で、全基督教國の遠征軍に加つて、海を越えて東洋に出征いたしました。或時、彼の勇猛振りが隻眼のフィリップ王の宮廷で噂に上りました。その時王は十字軍に加はるために、佛蘭西を立たうとしてゐた得た推量でした。が、何分にもたしなみの好い婦人でしたから、恭しく王様をお迎へしようと思つて、主人と共に出征してゐない重臣どもを召して、彼等と相談の上、必要な準備を一同に託しました。たゞ食卓の上の手配だけは自分の胸に疊んで置きました。で、その目的のために、大急ぎで領内の牝雞を集められるだけ集めさせました。そして、牝雞だけの料理を幾種類も王の食卓に並べるやうに料理番に命じました。

定めの日には王は臨幸されました。夫人は極めて嚴やかに且鄭重に王を請じ入れました。或騎士の躰辭からして、王のこの夫人に就いて抱いてゐた想像は非常なものでしたけれども、目のあたりに見た彼女は、それにも勝つて遙かに美しく、優しく、淑やかなもので御座いました。相手が王の期待以上に勝れたものであつただけに、夫人に對する王の情熱は、好感と嘆稱との間に、愈々その度を高めました。かうした偉大な王様を接待するに應はしい、美々しく飾り立てた部屋に暫く休息をした後、恰度食事の時間が来た時、王と伯爵夫人とは同じ食卓に、他の面々はそれ／＼階階に準じて別の食卓に就きました。

入れ代り立ち代り出る料理、美しい精選された酒、わけても、この美しい夫人の魅惑的な姿態が殊の外王の御意に適ひました。ですが、皿敷を重ねるに伴れて、どの料理

のですね。すると、一人の騎士は、凡そ天下にモンテフェラー伯爵夫妻程美しい夫婦はあるまい、伯爵が凡ての騎士中に徳望があるやうに、その夫人も亦あらゆる婦人に勝つて美しくもあれば貞淑でもあるからね、と申しました。

この言葉は王に深い感銘を與へました。それがために、未だ一度も伯爵夫人を見ないうちから、密かに戀の焰を燃やして、何うしてもゼノアから乗船して彼の地へ渡らうと決心しました。これはその港まで陸地を行く間には、伯爵夫人を訪問する好箇の口實も作られよう、場合によつては良人も留守のことだから、かねての望みが達せられないものでもないと云ふやうな腹があつたからです。で、彼は決心した通りに實行しました。供廻りの者どもは全部先發させて置いて、自分は五六人の貴族と一緒に途に就きました。

王は伯の領地が近くなると、一日前に、明日の正午晝餐の饗應に與りたいと伯爵夫人に傳へさせました。恰憫で、その上人並勝れて敏感であつた伯爵夫人は、それはまことに光榮に存じます、謹んで御歡迎申し上げますと返辭をいたしました。それにしても、權威並ぶものなき國王が良人の留守に自分を訪問したいと云ふのは何ういふ意味か知らずと靜かに考へて見ました。そして、この訪問の原因が恐らく自分の美貌の噂にあるだらうと氣附いたのは、眞個當を

もこの料理も、料理法こそちがへ、牝鶏の肉ばかりなのに
 気が附いて、王も多少奇異の感に打たれないわけには行き
 ませんでした。それに、この地方には、いろんな獣の棲ん
 であることはよく知つておりましたし、また訪問を豫告して
 置いたことでもあるから、夫人の方でも、そのために狩り
 をする位の隙間は十分あつた筈なんですがね。然し解きか
 ねた不審は顔にもあらはさないで、好い機会を捉へて、牝
 鶏に就いて訊ねて見ました。「失禮ですが」と、彼は朗かな
 顔をして相手に云ひました。「こちらでは、牡鶏は除けて、
 牝鶏ばかり解るのですかな。」この質問の眞意を知つた夫人
 は、神が願ひ通り彼女の胸中を披露する機会を與へてくれ
 たものと思つて、返辭を待つてゐる王の顔を何気なく見遣
 りながら、かう答へました。「いゝえ、そんな事は御座いま
 せん。ですが、この女は、假令風習や衣服は異つてゐまし
 ても女である點では他の國の女と變りは御座いませぬの。」
 この一言を聞くと、王も牝鶏の馳走やこの言葉の眞意を
 感づきました。それに、かうした婦人に冗々と口説きにか
 かつても無駄だし、と云つて權力を振り翳してかゝるわけ
 にも行かないと思つたので、自分の名譽のために、この悪
 く挑發された焰を掻き消してしまひました。最初燃やし立
 てたのが輕卒であつたと同じやうに、その消し方は實に賢
 明であつたと謂はねばなりません。で、夫人の返答が怖

ろしさに、もう暗示めいたことはすつかり止めにして、そ
 の上期待を抱かうともせず、無事に食事を終りました。そ
 れから御馳走に與かつた禮を云ひ、夫人からは旅の祝福を
 受けると、直ぐ様ゼノアに向つて出發して、この訪問の不
 純な動機を急激な離別で胡麻化してしまひました。

第六話

俗人が頓智でもつて僧侶の偽善を恥ぢ入らせた話。

伯爵夫人の貞淑と、その奇智が佛蘭西王を懲らしめた話
 は、一同の稱讃を博しました。次いで女王から稱まれるま
 まに、フィアメッタの傍に坐つてゐたエミリアが勢ひ込ん
 で語り出しました。「それでは、私も或俗人が頓智で以
 て貪慾な僧侶の油を搾つてやつたお話をいたしませう。」

あまり遠くもない頃、この私どもの町に、或フランス
 派の坊さんが異端邪教徒の恐ろしい審問官となつて來てゐ
 たことがありました。この男は、何うかして徳の高い、基
 督教のためには一身を捧げたもののやうに思はれようと努
 めてはゐりましたものゝ、その實、信仰の有無といふことと
 同じ位に相手の懐中工合にも、多大の注意を拂つてゐまし
 た。そんな風で懸命に物色してゐるうちに、或時、ゆくり

なくも一人の金持ちではあるが、少し注意が足りないと思
 つたやうな貴族に打つ突かりました。この人は別段神を蔑
 ろにしてゐたわけではありませんが、端的に申して見ます
 と、まあ酔拂つてゐたか、でなければ度はづれに陽氣にな
 つてゐたのでせう、友人仲間の會合に、不圖口をこらして、
 基督でも恐らく飲みたがられるやうな、上等の酒を持つて
 ゐると云ふやうなことを饒舌つたものですね。

處が、この事が竊かに審問官の耳に傳へられたから耐り
 ません、直ちに相手の巨額の財産と膨らんだ財囊とを考慮
 に入れて、理不盡にも、何うかすると生命まで取られさう
 な恐ろしい裁判に附したので御座います。勿論、その犯人
 の不信心を改めさせようといふのではなく、相手の金子で
 自分の財布を膨らませようといふ腹からすわ。で、その
 人を召喚して、自分の耳にしたことは眞實かどうかと訊ね
 て見ました。何にも知らないその人は、正にさう云つた覺
 えがあると答へた上、一通り事の起因を話しました。する
 と何よりも山吹色を崇拜してゐる信心深い審問官は申しま
 した。「では何か、お前は主イエス様を大酒家又は酒通に
 もしようと思ふのだな。それでは宛然基督様が酔漢か又は
 酔ひ痴れたお前達の飲み仲間の様ではないか。お前は何う
 やら卑下した様な口調でこの一件を事もなげに云ひ抜けよ
 うとしとるやうぢやが、お前の考へとる様に簡單には濟ま

されぬぞ。わしが法と良心の命ずる儘にちやんと手續を踏
 んだらお前は火刑に處せられるんだからさう思ふがよい。」
 なほもこれに類したやうな事を並べ立てながら、恐ろし
 い顔をして、宛然相手がかの靈魂の不滅を否定したエビク
 ールその人でもあるかのやうに、その氣の毒な男に詰め寄
 りました。で、間もなく審問官の思ひ通りに、被告は自分
 の身の上が心配になつて來ました。そして、忠實な召使と
 もの取り做して、この審問官の手に賄賂の黄金をしこたま
 渡した上、それに依つて相手のお慈悲に縋らうといひしま
 した。この鼻薬は、かの恐るべき貪慾病には、殊にお錢に
 手を觸れることを許されない僧侶の場合には、不思議な效
 能を持つてゐるもので御座います。尤も、ガレヌスでさへ
 その醫書の中の何處にもこの鼻薬のことは書いてゐません
 が、兎に角並々ならぬ效能のあるものでして、この場合に
 も事實その効果をあざやかに立證しました。即ちあの怖ろ
 しい火刑を懺悔の十字架にしてしまつたのですよ。この敬
 虔な審問官は、恰も十字軍の遠征にでも出掛けるやうに、
 その旗を美々しくするために、黒地に黄色く十字架を入れ
 て相手に與へました。その上に、相當の金子を受納した後
 も、なほ數日間被告を手許に留めて置いて、その間贖罪と
 して、毎朝彌撒を聴いた上、正午には彼の身邊に侍するこ
 とを日課とさせました。但しその他の時間は何をしよう

隨意たるべきことと云ふので御座いました。

で、この贖罪者は、命ぜられた通りに、几帳面に實行しました。處が、或朝の彌撒に大勢に交つて福音書を聞いてゐると、次のやうな言葉が唱はれてゐたのですね、「爾等そを百倍にして得、遂に永遠の生命に到らん」と。率直なこの男はその言葉をしつかり胸に疊んで置きました。そして、命ぜられた通り、正午に審問官の前へ出て見ると、相手は恰度食卓に坐つてゐました。すると、審問官は今朝の彌撒を聞いたかどうかと訊ねました。

「は、聴きました」と、彼は言下に答へました。「では聴いてゐて、何か疑ひの起つたこと、乃至質問をしたいやうなことはなかつたかね。」——「全くもちまして、聴きましたことに就いては毛頭疑ひなど挟みません、悉く完全な眞理だと信じ切つて居ります。ですが、一つ耳に附きましたことが御座います。それがために、貴方様を始め、他の方々がお氣の毒になつてまゐりました。又實際、貴方様が來世でどんな惨めな目にお遭ひなさることかと思ふと、今でもまだお氣の毒に思はれてならぬので御座います。」

それを聞いて、審問官は申しました、「ふむ、すると、一體何の條がわし達に對する憤慨を起させたのかね。」
「左様」と、彼は申しました。「それは福音書の中に、かうあつたので御座います、『爾等そを百倍にして得ん』と。」

を持ち出して、カーネ・デラ・スカラが急に吝嗇になつたのを巧く恥ぢ入らせた話。

女王を始めとして他の一同も、エミリアの諸誦味のある話には思はず笑ひを誘はれて、贖罪者の滑稽な思ひつきをやんやと褒めそやしました。で、一同が笑ひたいだけ笑つて、少し落ち着いてから、話の順番に當つてゐたフィロストラートが口を切りました。

皆さん、固定した動かないのを射當てるのも、固より稱讚に値ひすることで御座いませう。ですが、不意に突如として現れて來るものを直ちに打ち留め射撃者の手練は、正に奇蹟に類するものと云ふべきではありませんまいか。僧侶社會の罪惡に充ちた醜惡な生活は、誰でも容易に嘲笑批評の材料を見出し得る程、多くの點に於て俗惡の趣きを具へてゐます。成程、あの善良な男が、豚に呉れるか、又は道に棄てて然るべきやうなものを施物にして憚らない僧侶達の偽善的行爲を捕へて審問官を詰つたのは、誠に當を得たことではあります。その話から想ひ着いて、今こゝで申し上げようと思つて居ります今一人の男は、遙かに大いなる稱讚に値ひするものかと思はれるので御座います。即ちこの男は、以前には氣前の好かつたスカラ侯が急に打つて變つて吝嗇にならうとしたのを、滑稽な物語でもつ

「成程、どういふ事も書いてあるな」と、審問官は答へました。「だが何うしてそのために俺們が不問になつたのかね。」
「では、一つ申し上げませう」と、贖罪者は申しました。「こちらへ参りましてから、かうして見て居りますと、毎日貧民どもがまゐりまして、皆様が召上ることが出來ないで御親切にもお剩しになつた肉汁を一釜も二釜も買つて行きます。ですから、皆様が來世で百倍にしてお取りになれば、何うしたつてその肉汁の中で溺死なさるより外ないと思はれますよ。」

審問官の食卓を圍んでゐた連中は、どつと高らかに笑ひました。審問官も、それが僧侶達の偽善を皮肉つたものだと氣が附いて、すつかり面喰つてしまひました。で、最初の裁判がこんなひどい恥辱を齎したのでなかつたら、恐らく彼はこの善人に再度の裁判を課したことでせう。何故なら、その男は自分を始め仲間の僧侶の怠慢を罵つたことになるからで御座います。そこで審問官は怒氣を含んで、どうとも勝手にしろ、もうお前の顔を見るのも可厭だと嗚鳴りつけました。

第七話

ベルガミノがブリマツノとクリューニエーの院主との話

て恥ぢ入らせたのであります。その物語といふのは、勿論、他人のことを話してゐるのですが、それを聞けば、自然に話手自身と相手の侯爵とを指してゐるのだと分るやうに仕組まれてゐたのです。で、話の次第は次の通りです。

スカラ侯は、いろ／＼な點で幸運に恵まれた人で、赫々たるその名聲が全世界に轟き渡つてゐたばかりでなく、皇帝フリードリヒ第二世以來、伊太利に於ける最も人望あり、また最も氣前の好い王侯の一人であつたのですね。さて、この方が嘗てエロナで華美を盡した饗宴を張らうとしたことがあつて、既にいろんな方面から大勢の人々、殊にさまざまな盛當で宮廷の貴顯淑女方を娛ませようと思ふやうな連中が集まつて來てゐました。處が、何うした理由からか、突然その意圖を變更して、そこへ集まつて來た人達には幾らか包んで、それ／＼引取つて貰ふことにしました。その中に、たゞ一人、ベルガミノといふ男だけは、包み金もお暇も貰はないで、エロナに残つてゐました。この男の辯舌と來たら、それを聴いたことのない者には、到底想像も及ばない位、巧妙でまた爽快なものでした。で、彼はその間には又何とか風向きが直るだらうと心待ちに待つてゐたのですね。が、侯爵としましては、ベルガミノにかゝつちや、どんな贈物をしたつて、火の中へ投げ込むのも同然、みじめなものだといふことに氣が附いてゐましたので、一

言の言葉も懸けなければ、使者を遣らうともいたしませんでした。ベルガミノとしましては、その後数日経ちましたも、一向館に招ばれる氣配もなければ、自分の藝を所望されもしないのに、旅館の方では、自分ばかりでなく、召使や馬の勘定も嵩んで来るので、その方も氣が氣でありませんでした。と云つて、今こゝを立つてしまへば、愈々以て蛇蜂取らずだと思ふところから、矢つ張りぐづぐづと滯留して居りました。

彼はこの饗宴に隆とした身装で列席しようと思つて、他の諸侯から貰つた高價な美服を三着ばかり持参してゐましたが、宿の亭主に拂ひを請求された時、先づその一着を遣つてしまひ、その後更に逗留が長びいたので、もう一着出して相手を黙らせなければなりません。そこで彼は、その時既に嘸り始めた最後の一着が持ち耐へるだけは、兎に角様子を見てゐて、出發はそれからのことにしようと思ひました。處で、未だ三着目を喰つてしまはないうちに、或日のこと、侯爵が食卓に就いてゐた際、彼は愠ぎ込んだ顔をして御前に出ました。それを見ても、侯爵は別段ベルガミノから面白い話を聞かうとするでもなく、いつそ相手を厭がらせてやらうと云ふやうな了簡で、「ベルガミノ君、どこか悪いのかね」と申しました。「大分不機嫌のやうぢやが、何なら一つ話しでもして見てはどうだね？」

ベルガミノは一向考へるやうな様子もなく、直ちに次のやうな話を始めました。その話といふのは、前から考へて置いたかと思はれる程、彼の境遇によく當て嵌つてゐるので御座いました。

「閣下、閣下も御存じに相違ないと思ひますが、プリマツトといふ男は羅旬語に精通して、何人よりも勝れた詩作の才を有つて居りました。かうした才能のお蔭で、大層有名になりました。直接その本人を知つてゐる者は必ずしも多くなかつたにせよ、その名聲によつて、彼の何人であるかを知らないやうな人は先づないと申してもよい位で御座いました。或時、彼は巴里で大層逼迫した状態に陥りました。尤も、金持なんていふ者は、大概さうした才能の價値が分らないやうで御座いますから、あの男がさう云ふ目に逢つたのは、何もそれが始めてといふ譯ではありませんがね、處で、クリューニーの院主の噂が不圖彼の耳に入りました。何でもその院主はあらゆるお寺の大僧正方の中でも最も豊富な収入があつて、その點では法王に次ぐものだと云ふんです。殊にその院主の氣前のいゝことは實に驚くべきものがあつて始終饗宴を張るばかりか、恰度自分の居る所へ來合せた者なら、どんな者にも飲み食ひを拒むやうなことをしない、但し御馳走を請求するのは彼の食事中に限ると云ふことでした。

プリマツトは元來名士貴顯と近づきになることが殊の外好きでしたから、この話を聞くと、その管長の氣前の好さに親しく接して見ようと思ひ立ちました。そこで、現在院主のゐられる所は、巴里からどれ位の道程かを訊いて見たものです。すると、その答へには、院主は今別荘の一つにゐられるので、此處から約六哩ばかり離れてゐるといふことでした。で、朝早く出れば、食事時には着かれると思ひました。が、誰一人道連れがないので道筋を描いて貰ふことにしました。それでも運悪く道を間違へたり、又は直ぐに食べる物も手に入らないやうな所へ踏み込んだりしないとも限らないと心配して、そんな場合にも飢ゑないやうにと云ふので、麵麩を三箇携帯で出掛けることに決心しました。と云ふのは、水は彼も別段好きで飲むといふ方ではありませんでしたし、それに、そんなものは何處にでもあ

るだらうと思つたからです。

かうして彼は麵麩を身に附けて途に上つたやうなものの、途中も割合に抄取つて、食事時間の前にはもう院主の館に着きました。そこで彼は漬入つて行つて、ぐるりと廻はしなから、支度の出來た澤山の食卓や、料理場の大掛りな仕出しや、その他晝餐の用意がすつかり調へられてゐるのを見て、「成程、聞いた通り、物惜しみをせぬ御院主様だなあ」と、一人呟いたもので御座います。で、暫く四邊の

物に目を遣つてゐるうちに、院主の執事が手洗水を一同に廻はし始めました。食事時間が來たからです。それが済むと、各自食卓に就きました。その際、圖らずもプリマツトは、院主がこの食堂に這入つて來るには、どうしても通らなければならぬことになつてゐる扉口を眞正面にして坐るやうになりました。

處で、この院主の館に於きましては、管長が食卓に就かれる前には、麵麩にしろ、葡萄酒にしろ、またその他の飲食物にしろ、一切食膳に供へないことになつてゐました。そこで、食卓の用意が出來ると、執事長は、御命令次第何時でも食事は出來ますと、院主にお知らせしました。院主が食堂の扉を開けて、眞直に前を御覽になると、眼に着いた最初の男は、偶然、一面識もない、身装も恐ろしく汚いプリマツトだつたのです。院主はその男を一目見るや、急にさもししい氣になつて、それ迄とは打つて變つた考へを起しました。そして、「こんな奴と食卓を共にしなくちゃならぬのか」と獨語したもので御座います。で、そのまゝ踵を返して、居間に歸ると共に、背後の扉を閉めさせて、お附きの者に、誰かあの扉の正面に居る傍若無人な奴を知らないかと御下問になりました。お附きの者は一樣に知らない旨をお答へしました。一方プリマツトは相當長い道程を遣つて來たことではあるし、それに概して斷食に

は慣れてるませんでしたから、お腹が空いて耐らなかつたのです。ところが、院主は何時まで待っても再び顔を見せさうもありませんでしたので、彼は携帯の麵麩を一つ取り出して、いきなりぱくつき始めました。暫く経つてから、院主は人を遣つて、ブリマソーがもう出て行つたかどうかを見させました。

「どういたしまして、御院主様」と、召使は取つて返して復命しました。「それどころか、多分携帯して来たものでせうが、麵麩にむしやぶり着いてゐますよ。」

「自分の麵麩なら、勝手に食ふが、い」と、管長は申しました。「今日のわしの御馳走は喰べさせてやらないからね。」

どつちかと云へば、院主はブリマソーに自分の方から歸つて行つて貰ひたかつたのでした。と云ふのは、表立つて此方から歸つてくれと云ふのも禮儀でないと思つたからです。が、ブリマソーの方では、最初の麵麩を平けても未だ管長が出て来ないので、二番目のに取りかゝりました。それが又院主に報告されました。院主の方ちや、もうブリマソーが歸りさうなものだと、もう一度見に遣つたものですからね。ブリマソーは、それでもまだ院主が顔を出さないで、到頭三番目の麵麩に取りかゝりました。それが院主に報告された時、流石の彼も考へ出したのです。それ、から、かゝりました。

ソールは歸ることになりましたが、これ等の好意を大層喜んで、心から院主に謝意を表して、往きには歩いて行つたところを馬に乗つて巴里に戻つて来ました。

侯爵も聰明な方でしたから、これ以上の説明を俟つまでもなく、ベルガミノの意のあるところを察して、微笑しながら答へました。「ベルガミノ君、君がさうして君の窮状と、君の手續と、わしの吝嗇と、その上君の希望まで擧げたところは、實に鮮やかなものぢや。個個わしも今度のことの外に、君に對してこれ程吝嗇になつたことは嘗てなかつた。では一つ、君の教訓に基づいてしみつたれた根性を一掃することにしよう。」實際、侯爵はベルガミノの旅籠の拂ひをしてやつて立派な一揃ひの衣裳を贈つた上更に金子と馬迄與へて、逗留するも、歸るも相手の意に任せました。

第八話

ギリエルモ・ホルシニールが一場の訓話を以てエルミノ・グリマルデイの吝嗇を懲らした話。

ベルガミノの機智には聞く人皆讚辭を惜しみませんでした。處で、フィロストラートの隣に坐つてゐたラウレッタは、今度話をするのは自分だと思ひましたので、催促さ

「今日に限つて、わしは又どうして變な考へを起したのかな。何うしてかう吝嗇な氣持になつたり、焦々したりするんだらう？ 一體誰がこんな氣持にしたと云ふのだ？ 數年この方、わしは貴賤貧富、商人と詐欺師の別なく、欲しいと思ふ者には、誰にでも食事を與へて来たものぢや。時には、札つきの怠惰者がわしの食卓に坐つてゐるのを我慢して見てゐたこともあるが、何時だつて今日あの男を見かけた際に起つたやうな考へに捕はれたことはなかつたものぢや、實際、普通の人間一人のために、わしの胸にしみつたれた根性が起らうとは、何うしたつて思はれないからな。それに、あの男は一寸やくざ者にも見えるが、また何處となく一風變つた所があるやうぢやわい。何しろわしの心をこれ程冷酷にするだけの力があるのだからな。」

こんな獨語をしてゐる間に、相手が誰だか聞いて見たくなりなりました。で、聞かせて見ると、その男はかね／＼名聲を傳へ聞いたブリマソーその人で、院主の氣前の程を音に聞いて、親しくそれに接しようと思つて遣つて来たのだと知れたので、院主は大きに赤面したさうで御座います。で、見損ひした詫び心から、一入款待をしました。食事の後で、院主はブリマソーの功績に相應した立派な一揃ひの衣服を進呈しました。なほ若干の金子と騎馬とを贈つて、歸らうと逗留しようと、相手の自由に任せました。やがてブリマ

れるまでもなく、愛嬌たつぷりで話し始めました。――皆さま、只今のお話からして、私は今一人同じやうに貴顯方の御座興を助けるのを職業にしてゐる男が、或紳商の吝嗇を巧く懲らしめてやつたお話を申し上げて見ようと思ひ立ちました。この二つのお話はかなり似寄つた點も御座います。が、私の申し上げるものは、好ましい結末を告げるだけに、前に劣らず皆様に喜んで頂けると存じます。

大分前のこと、ゼノアにエルミノ・デイ・グリマルデイといふ紳商が御座いました。一般の風評によりますと、この人は莫大な不動産と現金とを有つて居りまして、その富は當時の伊太利に知られた金持連を遙かに凌駕してゐるといふことで御座いました。處で、その富がどの伊太利人のそれをも後へに勝若たらしめてゐると同様に、彼は又その吝嗇と、しみつたれとにかけても、世界に於ける最大の守銭奴乃至吝嗇漢をずば脱けて抜いてゐました。何しろこの人は、當然人を款待すべき場合にも財布の口を締めるばかりか、自分の服装なぞも、綸幅を飾るのが、ゼノア人の風習でありましたにも係らず、僅かの金を節約するために、必要以下で済ましてゐました。又飲食に於てもさうでした。こんな譯で、グリマルデイといふ姓は當然人の口から忘られてしまつて、守銭奴のエルミノ氏で通るやうになりました。

かうして一文でも握つたら離さないやうにしてゐるから、財産は殖えて行くばかりで御座いました。恰度その時に當つて、ギリエルモ・ボルシエールといふ、人物も雅びやかなら辯舌も爽かな一人の弄臣が、ゼノアに遣つて來ました。この人は、普通に見受けられるその階級の人達とは全然違つた所のある人で御座いました。と申しますのも、お恥づかしい話ですが、現在精神とか貴族とか稱ばれ、自分でもそのつもりでゐる手合の不行跡と來たら、呪つてもなほ飽き足りないやうな有様で、そこへ出入りする弄臣なども、宮廷で育つた人と云ふよりは、寧ろ下等な賤民どもの醜態裡に蠢いてゐる馬鹿と云つた方が適切な位で御座いますから。その昔は、精神の間に憎悪や争闘が生じた場合、極力平和を齎すやうに骨を折つたり、結婚、姻戚關係、友情などを取り持つたり、又は宮廷の人達を樂しませ、而も悪人の過失に從んで慈父のやうに厳しく叱責したりすると云ふのが、あの人達の本領でしたのに、今日では、却つて相互の間に憎悪の念を抱かせたり、不和の種を蒔いたり、猥りがましいことや下劣なことを口にしたたり、更に困つたことには、さうしたことを人前で實行して見せたり、それから眞實だらうが嘘だらうが、悪口や醜聞や忌むべきことをお互に蔭で觸れて廻つたり、進んでは根もないお追従を並べて、一向悪氣のない人達を下劣な悪事に引き摺り込む

へて頂けますまいか。さうすれば、それを描かせて、この廣間に懸けて置きたいと思ひますがね。」

ギリエルモは、この調子外れの言葉を聞いて、かう申しました。「誰も見たことのないやうなものと申しましたが、一寸思ひ浮びませんがね、まあ、云つて見れば、繪に描いた、變とか、又はそんなやうなものでも御座いませうかな。併しお望みとあれば、少なくとも、これ迄貴方のお宅にはなかつたと思はれるやうなものを申し上げて見ませう。」

「としますと、何で御座いますかな。どうぞ是非仰しやつて下さい」と、エルミノ氏は、次のやうな答へがあらうとは夢にも思はないで、かう返辭をいたしました。

すると、ギリエルモは際さず答へました、「一つ雅量をお描かせになるんですな。」

この言葉を聞くや、流石のエルミノ氏も大層恥ぢ入つて、それがために、在來とは殆ど手の裏を返したやうにその心持を一變しました。そして、かう答へたもので御座います。「成程、ギリエルモさん、是非それを畫かせませう。そして、貴方を始め、何方からもこの後は雅量を知らない男だなど云はれないやうに心懸かせませうよ。」實際、ギリエルモの言葉は目覺ましい効果がありました。エルミノはその日から物惜みをしない、氣持の好い紳士となると共に、當時のゼノアに住んでゐた何人よりも、進んで外國人や本國

のに、日もこれ足らないといふ有様なのです。

ですが、墮落した、品性も徳操もない今の王侯方からは、その中でも最も多くの醜態なことを云つたり爲たりする連中が、一番重寶がられて、最高の贈物を頂戴するんだから仕方が御座いませぬわねえ。眞個、現代の大きな、拭つても拭ひ切れない恥辱で御座いまして、道徳地を拂ひ、憐れむべき人類が罪惡に身を沈めてゐる明かな證據のやうに思はれます。世を愾く餘り、思はず横道へ外れましたが、これから元へ戻つてお話し申します。さて、先刻申し上げましたギリエルモは、ゼノアの貴族達から頻りに歓迎され、敬意を拂はれて、暫くこの町に滞在してゐましたが、不圖エルミノ氏の吝嗇やしみつた根性に就いていろ／＼な噂を聞き込んで、何時か一度この男を訪ねて遣らうといふやうな氣を起しました。エルミノ氏の方でも、ギリエルモ・ボルシエールの才能は評判でも傳へ聞いてゐましたし、それに吝嗇漢ではありましたが、多少の禮儀は心得てゐましたので、和らいだ顔色と宛重な言葉遣ひで相手に接しました。さまざまな談話を交してゐるうちに、彼はボルシエールとその場に居合せた二三のゼノア人とを立派な貴族の新館に案内して、残る限なくそれを見せた後で、「え、ギリエルモさん、貴方は大層見聞のお早い方のやうに承はつてゐますが、一つ誰も未だ嘗て見たことのないやうなものを教

人を款待するやうになりました。

第九話

柔弱なサイブラス王がガスコーニユ生れの一貴婦人の嘲罵によつて英主となつた話。

女王の命令を受けるものとしては、最早エリザ一人になつてゐましたので、彼女はそれを待たないで、さも親しげに話を始めました。

時に、皆様、いろ／＼他人から批難されたり罰せられたりしましても、何うしてもする氣になれなかつたことを、目的意識なしに云はれた、ふとした一言に動かされて實行するやうになつた例は、私どもの麗々耳にする所で御座います。ラウレッタ様のお話はその適切な一つの例で御座います。で、私もそれと似寄りのお話を簡単に致して見たいと存じます。と申しますのは、好いお話は幾ら聞いてもたぬになるもので御座いますから、誰がお話し致しましても、皆様は屹度耳を傾けて下さることと存じますからですわ。

私がお話ししますのはゴットフリード・フォン・ブイヨンの聖地恢復後のごことで、サイブラスの第一代の王様の時でした。さる貴婦人が基督のお墓にお詣りした順禮旅行の

歸途、サイブラス島に立ち寄つて、二三の無頼漢にひどい目に逢はされたことが御座いました。婦人はこの非行を腹に据ゑかねて、王様に直訴して出ようといはしました。が、知人の一人が云ふには、そんな事をして無駄だらう、何しろこゝの王様は日頃から氣の小さい、全く王者に値ひしないやうな方で、他人に加へられた凌辱を復讐してくれないのは勿論のこと、王自身の蒙つた無数の侮蔑を専法にも我慢してゐる位だから、誰でも腹の立つ場合には、この王様の悪口雑言を吐いて、それで憤懣の情を遣るやうにしてゐるのだとのことでした。

それを聞くと、婦人も復讐は断念しましたが、せめても腹癒せに、王の下劣な心根を嘲罵してやらうといふ氣になりました。で、泣く／＼王の前に出て、「陛下」と申しました。「私は自分の身に受けた災厄の復讐をお願ひに上がった譯では御座いません。それよりも、そんな賠償の代りに、お願ひで御座いますから、陛下の上に降りかゝる侮蔑を貴方は如何やうにして御勘忍遊ばしますか、それをお聞かせ下さいませ。さすれば、少し位の侮蔑は勘忍もなることかと存じます。今ではもう私はこの侮辱をすつかり貴方にお譲りしたい位に思つてゐるので御座います。陛下なら、いくらでも御辛抱遊ばされるで御座いますからね。」

それを聞くと、すつかり夢から醒めた様な心持になられました。そして、その婦人の蒙つた凌辱を徹底的に復讐してお遣りになつた上その後も王位の尊嚴を傷つけるやうな者共に對しては、きび／＼と裁断を下されるやうになりました。

第十話

ボログナのアルベルト先生が或婦人に戀をして、それがためにその婦人から侮辱されようとしたが、巧みに相手を遣り返した話。

エノザの話が済んだので、最後の義務は女王の雙肩にかゝつて來ました。彼女は落ち着いた口調で始めました。皆様、晴れた夜には星が空の飾りであり、春には花が緑の野のそれであるやうに、雅びやかな作法や晴れやかな談話にとりましては、優美な警句こそ錦上更に華を添へるものと申しても好いで御座います。總じて警句は簡潔なもので御座いますだけに、殿方よりは、却つて婦人に似つかはしいやうに存じます。と申しますのも、婦人方の冗長なお話といふものは、それが避け得られる場合には、殿方のそれよりも一層見苦しいものだからで御座いますわ。處が、今日では、私も女性並びに現代一般の大きな恥辱とい

しまして、この警句を理解する方、いや、理解するにしましても、それに返答し得るだけの婦人は殆どないと申して宜しう御座います。それと申しますのも、昔の女の靈と云はれた睿智を、今日の方々は悉く邊幅の粉飾に傾倒してゐる有様で、びら／＼したりボンヤ飾りを澤山取り附けた、派手な衣裳を身に纏つた婦人が、側の者を押し退けて歓迎もせらるれば、又大いに尊敬も拂はれるものだと思つてゐるのですから仕方が御座いませんわ。しかも、着せる而倒さへ厭はなければ、そんな裝飾は驢馬の方が自分よりも幾百倍も澤山着けさせることが出来ようし、又そんな事をした處で、驢馬一匹以上の尊敬に値ひしないものだといふことなどは、てんで考へても見ないのですものね。

こんな事を申しますのは、實は自分でも恥ぢ入つてゐるので御座います。だつて、世間様を悪しざまに申せば、同時に私自身をも批難してゐることになりますものね。處で、それ等の飾り立てた、いはゞ粉黛で描き上げたやうな婦人達といふものは、宛然彫像のやうに黙りこくつて、無感激で、偶々かけられた問に答へましても、いつそ沙汰を守り通してゐる方が優しだと思はれる位のもので御座います。それでゐながら、さう云ふ婦人は、他の女や殿方を相手に談話することの拙いのは、心の純潔な證據であるやうに考へまして、宛然女中や洗濯女乃至御飯炊き以外の何人とも

言葉を交へることの出来ないやうな人達だけ言渡たと云はれ得るかのやうに、自分の痴鈍を淑徳そのものと見做してゐるので御座います。若し、この人達の想像してゐるやうに、寡言といふことが自然の意志で御座いましたら、自然は彼等のたわいもないお饒舌を眞先に制限したことで御座います。勿論、談話の場合にも、他の事柄に於けると同様、時と場所と相手の人物とを眼中に置いて懸らねばなりません。男にしましては、又女にしましては、談話に言せて相手を當惑させて遣らうなぞと思つて、自分の力と相手のそれをよくも考量して見なかつたばかりに、相手に加へようとし、恥辱が自分の頭の上に返つて來るやうな破目に陥ることは、往々あることで御座いますからね。

そこで、皆様がそんな事のないやうにお氣を付け遊ばすことが出来るばかりでなく、世間の所謂「短い圖は女の持前」といふ諺が皆様の字引からなくなるために、今日の打ち留めとしまして、これから私のいたさうとするお話は、この點に於て皆様を賢くする一助にもならうかと存じます。さすれば、皆様は既にその氣高いお心持で他の方々に立ち勝つていらつしやると同様、その洗練された態度に於ても、彼等に一步を先んぜられることで御座います。まだ大して古い話ではありません、ボログナに優秀な殆ど全世界にその名を知られた醫者のアルベルト先生といふ

方が御座いました。多分今日もまだ存命であられるかと存じます。この方は心だてに超俗的なところが御座いまして七十歳に垂んとする高齡に及んで、身體には自然の温もりが殆ど失はれてゐたにも拘らず、或宴會の席上で、確かマルゲリタ・デ・ギソリエリとか稱ばれる一人の美しい未亡人を見て、胸の裡に入り込んで来る戀慕の情を拒むことが出来なかつたので御座いますね。で、すつかり御意に召してしまつて、宛然青年のやうに年老いた胸に情念の焰を燃やし始めました。そして、晝間のうちに、この美しい貴婦人の優にやさしい顔を見て置かないと、夜も碌々眠れない位に思ひ詰めたのですね。そんな露で、或時は馬で、又或時は徒歩で、ちよ／＼婦人の家の前へ遣つて来るのでした。一方、婦人の方では、何でかうしげ／＼とその方が遣つて来るのか、だん／＼その動機を知るやうになると、他の婦人達と一緒にやつて、あんな年齢であれ程經驗に富んだ方が人に思ひを寄せるなんて事があらうかと、時々嘲り笑ひ合ふのでした。この婦人達の考へでは、戀といふ優しい情念は、たゞ若い者の向う見ずな胸にだけ起つて、そこでのみ育ち得るものやうに思はれたので御座いませうね。處で、アルベルト先生は相變らずその婦人の門前を往きつ戻りつするのでした。或祭日のこと、その婦人は他の婦人達と一緒に戸口に出て居りました。すると、向うから遣つて

来るアルベルト先生の姿が目に入つたので、一つ先生を引留めて手厚くもてなした上、相手の戀を種に先生を調戲つて遣らうと相談しました。そして、その通りに實行しました。で、先生が来ると、皆起ち上がつて内へ請じ入れ、涼しい中庭に案内して、そこで美酒と干菓子とを御馳走しました。最後に、婦人達は丁寧な、用語の宜しきを得た言葉で、この婦人が多くの體儀正しい、惚れ／＼するやうな若殿原から想ひを懸けられてゐることは御承知であらうに、何うしてそんな女をお慕ひになるやうになつたのかと訊ねたもので御座います。すると、先生の方でも、これはてつきり、こんな巧いことを云つて自分を愚弄するつもりだなと氣が附いたので、一段と晴れやかな面持ちを裝ひながら申しました。「奥さん、私が戀をしたからと云つて、又その戀の相手に貴方のやうな美女を選んだからと云つて、物の判つた人なら別段不思議がりもいたしません。貴方にはそれだけの値打ちがあるからな。一體自然の法則からしますと、年配の者は戀愛を實行するに必要な氣力が御座いせんよ。ですが、又それだけに、好意とか、又は何ういふものが果して戀に値ひするかを判断する能刀とかいふものが缺けてゐるとは思はれません。いや、寧ろ年寄つた者こそ、見識が優つてゐるだけに、その點にかけては若い者よりも遙かに眼が利い

てゐようと云ふものです。處で、私がこの年齢をして、大勢の若殿原から思ひを寄せられてゐる貴方に懸想したのも、實は次のやうな希望に基づいてゐるんですよ。私も一度その席に列なつて存じてゐますが、婦人方は好くお入つに羽團扇豆や蕪を召し上げるやうで御座いますね。だが、蕪なんてえものは一向何にもならんものです。たゞその球根は副作用もなく口觸りの好いものですがね。處で、婦人方と来ると、全然お好みが逆で、球根のところを手で抑へて、葉の方を召し上げる。この葉といふやつが少しも値打のないところでした。と申すよりも、酷く味の悪いところですよ。そこで、奥さん、貴方は戀人をお選びになるのにも、それと同じやうな事をされるのではありますまいかね。さうだとすれば、貴方は屹度この私をお選び下さつて、他の方々はお断りになることと存じますよ。」

相手の貴婦人も仲間の連中も一寸顔を赧らめました。それから貴婦人はかう申しました。「先生、貴方は私どもの思ひ上がつたたくらみを物の見事に、しかも優しく打ち懲らして下さいました。先生のやうな、物の判つた紳士的なお方の愛を受けてこそ、女の本望だと思はれますわ。ですから、どうぞ私の名譽を損ぜぬ限りに於て、貴方のもの同様に、私をお慈しみ下さいませ。」

先生も従者も立ち上りました。そして、婦人に謝意を表

して、にこ／＼笑ひながら暇乞ひして歸つて行きました。この婦人は戀る相手に注意しなかつたために、勝てると思つて、負けたので御座います。皆様も同じやうな失敗をしまいとと思ひになるなら、何よりも御注意が肝要で御座いますよ。

淑女達を始め三人の紳士の話が済んだ時には、陽も既に西に傾いて、暑氣も大分退いてゐました。そこで女王はにこやかにかう申しました。――

「皆様、今日私の統制の下にされることは全部終りました。たゞ一つ新女王の推戴が残つてゐるだけで御座います。處で、その新女王は、御自分のお考へに基づいて、明日も御自分を始めとして私ども一同の生活を相當愉快にするやうに決定しなければなりません。未だ夜に入る迄には相當時間もあります。今からもう翌日が始まるものと考へて置いた方が得策のやうに思はれます。何方にしましても、準備の時間がなければ將來に向つて適切な處置を取ることが出来ないばかりでなく、女王様としては、明日の役に立ちさうな一切の手順をして置く必要があるからで御座います。そこで、一切の生命を司る神に對して畏れかしこみつゝ、明日の悦樂を進捗させるために、聰明なフィロメナ様にわが帝國を統べて頂きたいと思ひます。」

かう云ひながら、女王は立ち上つて、頭上から月桂冠を取つて、恭しくフィロメナの頭上に載せました。そして、最初にバムビネア、次いで自餘の淑女達、最後に紳士達が彼女に女王としての敬禮を捧げて、進んで大馬の勞を誓ひました。フィロメナは、自分が女王に推戴せられたのを見て、一寸顔を報らめました。が、内氣らしい所を見せまいとして、たつた今バムビネアの云つた言葉を考へ合せながら、元氣を恢復しました。そして、先づバムビネアが割り當てた凡ての役を裁可し、それから明朝と明夕、現在皆のゐるこの場所で行はるべきことを命じました。その後、次のやうな挨拶を述べました。

「さて皆様、私は、私の値打ちからといふやうな露合でなく、バムビネア様の御厚情によりまして、皆様の女王に指名されました。ですが、私は自分一人の主張で方針を立てて行かうとは思ひません、同時に皆様方のお考へを参考にしたいと存じます。そこで、何をやるかに就いて私の考へを、豫め皆様に聞いて頂いて、それから皆様のお氣に召すやうにいろ／＼直して頂きたいと思ひますので、簡単に私の意見を申し述べることにいたします。

「今日バムビネア様がお採りになつた方法に對する私の判断が間違つてゐないと思すれば、この方法は極めて面白い、推挙に値ひするものであることを證明しました。です

い結末に達したかといふことにして頂きたいと存じます。と申しますのは、開闢以來人間はさまざまの事件を通じて、常に幸運に導かれて來ました。そして、それは世の終りまで、決して變らない所で御座いませうからね。」

淑女達も紳士達も一樣にこの提案を稱讚して、それに従ふ旨を言明しました。たゞデオオオオだけは他の者が沈黙してから、かう云ひ出しました。

「皆さんも既に言明されたやうに、私も亦それに賛成するもので御座います。女王陛下よ、陛下のお指圖はまことにその當を得た推奨に値ひするもので御座います。なれど、私だけには、何卒この一點を特別の恩典としてお許し下さつて、私どもの團體が存続する間は、それをお続け下さいませうやうにお願ひいたします。他でもありませんが、私は只今公けにせられた命令によつて、私の意志に反しても與へられた題材に基づいて話しをするやうに強ひられたくないので御座います。どうか私だけには、あの命令に拘らず、題材の選擇を自由にさせて頂きたい。ですが、彼奴は生憎手許に話の貯へがないので、あんな恩典を強要してゐるのだなぞと思はれたくありませんから、お話の際には毎も最後にお廻し下さつて結構で御座います。」

女王は相手が快活で話し上手なことを承知してゐましたし、又こんな要求を出すのも、生面面目な調子に皆が飽き

から、その方法が幾度も繰り返された爲めとか、又はその他の理由からして退屈なものになつたのなら知らないこと、さもない限りは、少しもそれを變更しようとは思ひません。で、只今の相談が纏まりましたら、立ち上つて、暫くそこいらを散歩しようでは御座いませんか。そして、陽が沈みかけたら、何處か涼しい所で夕食を取ることにはいたしません。それから少し歌を唱ふとか、又は何か面白い遊びをした後で、寝ることにしたら宜しいかと存じます。朝は涼しいうちに起きて、めい／＼好むところに従つて楽しみを求めるところにしませう。ですが、適宜の時刻になつたら、今日同様、晝餐に歸つて來て、それから舞踏をして、午後の假睡を執つた後、今日の例に倣つてお話を續けませう。何しろこのお話は私達の娯樂と教訓との主要な部分を成すもので御座いますからね。

「その外に、私はかういふことも實行いたしたいと存じます。それは、バムビネア様の女王にお選ばれになつたのが遅過ぎたので、お出來にならなかつたのだと存じますが、話の題材を定つた範圍に制限して、豫めそれを通告して置いて、面白いお話に應はしい内容を考へるだけの時間を何方にも差上げたいと思ふので御座います。それで宜しかつたら、皆様のお話の内容は、主人公が何うして幾多の艱難と戦つた後、あらゆる豫想に反して、とう／＼目出た

飽きた時など、嘖き出すやうな話で一同を陽氣にしようといふ腹だらうと推量しましたので、自餘の會員の同意を得た上、望みの恩典を與へることにしました。で、女王が立ち上ると、一同その後からゆつくりした歩調で清冽な小河の方へ歩いて行きました。その水は丘の方から流れて來て、鬱蒼と樹木の茂つた谷間の方へ岩や綠草の間を落ちて行くので御座いました。こゝで彼等は、足や腕も露はに、水の中でびちや／＼やりながら、暫くは互ひにさまざまの戲談を聞かしてゐました。そして、食事時間が近づくと、館へ取つて返して、心ゆくばかり晚餐を取りました。

食後、女王は樂器を運ばせて、ラウレッタの先達で舞踏をするやうに、またエミリアはその舞踏に合はせて、デオオオオの伴奏で歌を唄ふやうに命じました。ラウレッタはその命令に従つて、舞踏の先達を勤めました。

一方エミリアもそれに伴つて胸に沁み渡るやうな聲で、次のやうな歌を唄ひ始めました。

われに美貌の誇りあれば、
夢にしも
仇し心に勝はれじ。
わが顔ばせを見るごとに、
心安きを覺ゆるよ。
昔の想ひ、末の戀、

など悦びを奪ふべき。
なべての人の魅惑にも、
わが目を惹く力なく、
胸に焔を煽るすべなし。

この歡喜にひたらんと、
憧れに燃え見詰むれば、
逃げやらで来るよ、かの幸は。
わらはの享くるこの甘美、
言葉も舌も及びなく、
なべての智恵も覺らねば、
同じ思ひをそゝることもなし。

見詰むることの繁ければ、
燃え立つ想ひ彌まざる。
思ひ定めて君一人、
君のものとしもわれを呼ばなむ、
かくて約束の幸は獲ざりしも、
大なる快樂、残るあり、
あゝ、かゝる憧れは、
人の世に未だ知られざり。

一同嬉々としてその舞踊歌を合唱しました。が、會員中の或者には、その歌の内容が何うやら意味深長に考へられるのでした。で、それが済んでからも、未だ二三他の舞踊を續けてゐるうちに、早くも短い夏の夜の一部が過ぎてしまひました。女王はもう第一日はこれでお仕舞ひにしようと思つて、炬火に火を點させ、銘々に明朝まで休むやうに命じました。一同は部屋に歸つて、命ぜられた川りにいたしました。

第二日

太陽はもう普く四邊に輝いて、新しい日が始まりました。鳥は緑の枝の上で樂しげに歌を唄ひながら、新しい日の始まりを告げ知らせました。すると一同は、寢床を離れ、庭に下りて、暫くは露の降りた芝生の上をゆつくりした足取りで、あちこち廻つて歩いたり、美しい花束を編んだりして娛しんでゐました。そして、今日も亦昨日と同じ事を繰り返しました——彼等は早くも涼しい處で午餐をした。め、それから少し舞踏をした後で、午休みに就いたのですね。午後の四時に起床しますと、女王の命ずるまゝに、緑の芝生の上を集つて、彼女を圍んで座に就きました。女王の美しい姿と優美な顔だちとは、月桂冠をつけたために、一段と勝れて見えました。彼女は一寸黙つてゐましたが、次いで全員を見渡しながら、昨日からの話を續けるやうにネイフイレに命じました。彼女はその提言を避けないで、はつきりした調子で話し始めました。——

第一話

皆さま、他人を、殊に立派な相手を嘲笑しようとして、却つてその嘲笑ばかりか、損害までも自分で引き請けるやうになつた例は、私どもの屢々見受ける處で御座います。さて、女王様の命令に従つて、今日の義務遂行の先陣を勤めますために、わたしは或同國人の身の上についた不幸と、その不幸が彼の期待以上に幸福と打つて變つたお話をその一例としていたしたいと存じます。

大して以前のことではありません、トレグイソに獨逸人でハインリヒといふ男が住んで居りました。この男は貧乏で御座いましたので、頼まれれば誰のためにも荷物を搬んで遣つて、金を貰つてゐました。それにも拘らず、この男は凡ての人から信心深い、一點批の打ち所のない人物だと思はれてゐました。そんな譯で、眞偽の程は分りませんが、トレグイソの人達の噂に據ると、彼が臨終の際には、その市の大教會の鐘といふ鐘が誰も引かないのに、一時に鳴り出したといふことで御座います。誰も彼もそれを奇蹟だと信じました。そこでハインリヒは聖者と稱はれるやう

マルテリノ跛者と詐つて、聖ハインリヒの四肢に觸れ、治癒したと云ふ。その詐欺發覺して、毆打された上、入牢を申し附けられ、絞殺されようとしたが、遂に虎口を脱する話。

になつて、全市の人達が潮のやうにその屍の置いてある家
に押し寄せ、宛然聖體でも運ぶやうに、それを寺院へ搬
込んだもので御座います。不具者、跛者、盲者、その他
んな病氣、どんな缺陷に備んでゐるにもせよ、あらゆる病
人が連れ込まれて、この死體に觸れて恢復しようとするの
で御座いました。

恰度このごた／＼騒ぎの最中に、私どもの同國人が三人
トレイヴに到着しました。その一人はステツキ、自餘
の二人はマルテリノに、マルケーゼと呼び、貴顯紳士の邸
宅を訪れて、百面相を御覽に入れたり、他人の物眞似をし
たりして見物を観しませるのを生業としてゐました。三人
共未だトレイヴには來たことがないのでした。それに、
市中が騒然としてゐるので、先づ驚きの眼を睜つたもので
御座います。その所因を聞いた時、彼等も親しくそれを目
撃したいと思ふやうになりました。で、荷物を宿屋に御し
た後で、マルケーゼがかう申しました。「どうかして其處へ
出掛けて、一目でいゝから聖者つてえものを見たいもんだ
な。だが、俺としちや、その中を潜つて行くとは思ひも
及ばんやうな氣がするね。聞けば、廣場にはぎつしり獨逸
人が集つてゐるさうだし、それに、騒擾を防止するために、
この町の市長が配置した武装した人達も立つてゐると云ふ
からな。その上、これも人聞きたが、お寺の中ももう誰一

に注がれ、「口々に道を明けてやれ、道を明けてやれ」と
叫びました。で、間もなく、彼等は聖ハインリヒの安置し
てある處へ着きました。すると、そこに立番をしてゐた二
三の貴族は、直ぐにマルテリノを受け取つて、快癒の恩恵
に與らせようと、彼を聖屍の上に匍はせて遣りました。何
うなることかと、見物人どもはたゞもう固唾を呑んで見
てました。マルテリノは、こんな事はよく心得たもので、暫
くした後でやつと指が元通りに快癒したやうに見せ掛けま
した。それから手を伸ばし、腕を伸ばし、最後に全身を元通
り眞直に伸ばしました。見てゐた民衆は大聲を上げて、聖
ハインリヒを讃め稱へました。その騒ぎと云つたら雷鳴が
あつても聞えなかつたらうと思はれる位で御座いました。
處が、悪い事は出來ないもので、マルテリノをよく識つ
てゐる一人のフロレンス人が直き傍に立つてゐたのです
ね。尤も、マルテリノが擔ぎ込まれた時には、顔が擡擡つ
てゐましたので、それとは氣が付きませんでした。が、元
通りになつた姿を見た時には、直ぐ様誰だといふことが分
つたので、心の中に笑ひながら、かう云つたもので御座い
ます。「何ていけづら／＼しい奴だらう！來る時の様子を
見ちや何人だつて眞實の不具者だと思ふからな。」
この言葉を二三のトレイヴの人達が聞き附けました。
そして、直様から聞き返しました。「何ですつて？ちや、

人入れない程ぎつしり詰つてゐると云ふことだ。」
マルテリノも同じやうにその光景が見たくて耐りませ
んでした。で、かう申しました。「そんな事は頓着するに當
らねえよ、俺にはちやんと死骸に近寄る策があるからね。」
「ちや、何うするんだね？」と、マルケーゼは訊ねました。
「よく聞きな」と、マルテリノは申しました。「俺が跛者の
眞似をするのさ。そして、俺一人ちや迎も歩けねえと云つ
たやうに、お前が一方を、ステツキが片一方を支へて呉
れるんだ。聖者様に治して貰ひてえので、そこへ連れて行
くやうに見せ掛けるんだよ。さうすりや、俺達の顔を見る
なり皆が道を開けて、通して呉れよう云ふものだ。」

マルケーゼもステツキもこの案に賛成しました。そこ
で彼等は早速宿屋を出て、三人とも歩脚な場所に出掛けま
した。そこでマルテリノは手、指、腕、脚、それに口、眼、
顔全體に至るまで、見るも凄まじい程擡擡せました。そ
れを見たら、どんな人でも、全身の姿えた不具者だと思は
ないものはなかつた位にしたのですね。

かうして不具者になつた男と、それを支へるマルケー
ゼとステツキの三人は信心深い顔つきをして、教會の方へ
進んで行きました。そして、道に立ち塞がつてゐる者には、
後生だから道を開けてくれるやうにと、下手から拜み倒し
ましたので、皆喜んで通して遣りました。大勢の眼は皆等

ありや不具ぢやなかつたんですか。」

「え、なかつたんです」と、そのフロレンス人は申
しました。「あいつは始終私ども同様まともな身體をしてゐ
るんですよ。ですが、御覽の通り、あいつは思ひのまゝに
姿を變へるといふ珍癪を心得てゐるんですね。」

トレイヴの人達も、これだけ聞けば、もうそれ以上耳
を藉す必要はありませんでした。力任せに押し寄せて、聲
高に叫び立てました。「その裏切者を捕へろ、神様と聖者を
蔑みした奴ぢや。不具でもない癖に不具の眞似をして、俺
達や聖者様を調戲ひに遣つて來た奴ぢや。」

口々にかう喚きながら、相手に掴みかゝつて、彼が寝て
ゐる場所から髪の毛を掴んで曳き摺り下しながら、着てゐ
る衣服を剥ぎ取つて、拳骨を固めて殴るやら、足を揚げて
蹴るやら、散々な目に逢はせました。荷もわれと思はむ程
の者は、一人残らずそれに手を藉したもので御座います。
マルテリノは悲鳴を上げて助けを呼びながら、全力を盡し
て身を禦ぎましたが、何うにもなりません。群集は
いよ／＼激しく打つてかゝるばかりで御座いました。

マルケーゼとステツキとは、事態容易ならずと見て取
つたものゝ、自分達の身の危険を想ふと、彼を助ける譯にも
行かないので、他の連中と一緒に、遣つつけろなぞ
と喚鳴つてゐました。が、その中から、どうにかして彼を

群集の手から引き離して遣りたいものだとの心の中にその方法を案じてみました。實際、その人達はマルケーゼが急に思ひ附いた逃げ道でもなかつたら、恐らくマルテリノを殺してしまつたこととせうよ。恰度こへ市廳からの警備隊が来てゐましたので、マルケーゼは、市當局の命によつて警備隊の頭を勤めてゐる人を素早く捜し當てて、かう嘆願しました。「何卒御援助を願ひます、あの拘捕が金貨で百グルデン程入つてゐる私の財布を拘りました。何卒御奴を捕へてお呉んなさい。そして金を取り返して下さいまし。」

それを聞くと、即座に十數名の警官が飛んで行きました。見ると、マルテリノは殆ど裸體になるまで引き裂かれてゐるのですね。警官達はやつとの思ひで群集の中へ割り込んで、打たれたり突きめされたりしてゐるマルテリノを群集の手から取り戻して來ました。そして、彼を市廳へ拘引しました。マルテリノから侮辱されたやうに思つてゐる連中も一緒に隨いて行きました。そして、相手が拘捕の際で捕つたのだと聞くと、ひどい目に逢はせてやるには他に、以上の理由も見附けられなかつたので、異口同音に、此奴は自分達の金も拘つたのだと云ひ出したもので御座います。

市廳の裁判官は、なか／＼手厳しい男で御座いましたので、この告訴を聞くと、直ぐ裸被告を前へ引き出して、そ

れに關する訊問を始めました。處か、マルテリノの答辯は頭から戲論ごかしで、入牢なぞ何とも思つてゐないやうに見受けられました。それには裁判官も立腹して、相手を吊繩に縛りつけました。そして、白状させた後で絞殺しよう云ふので、二三度その綱をしたゝが引張らせました。それから又地面へ下ろして、皆の者がお前を告訴してゐることは、眞實かどうかと訊くので御座いました。が、それを否定した處で、何にもならぬと思つたので、マルテリノは申しました。「裁判官殿、それでは正直に白状させよう。ですが、手前を告訴しました連中に、何時、何處で手前に金を拘られたか、一人々々陳述させて下さいませ。さすれば、手前もしたくないこと、一々申し上げるで御座いませう。」

「宜しい」と、裁判官は答へました。「それはわしも同意ぢや。」そこで三四人が喚び出されました。すると、一人は一週間前に、もう一人は六日前に、更にもう一人は四日前に又別の男はその當日財布を盗まれたと申し立てました。

マルテリノは、一々聞いてから申しました。「裁判官殿、それ御覽じませ、奴等は銘々心にもない嘘を吐いてゐるので御座います。手前の申すことが眞實なのは、これですっかりお分りになつたで御座いませう。だつて、手前は二三時間前までは此處にゐませんでしたし、又生涯のうちに、

この町を見て置きたいものだと思つてもゐませんでしたがね。手前はこちらへ着くが早いから、聖者の死骸を見ようと思つたばかりに、こんな不幸にぶつかつたので御座います。御覽になればお分りでも御座いませうが、その際、手前はこんな引き擡られて了ひました。事實その通りであることは、届の出してあるお役人でも、宿泊人名簿でも、旅館の亭主でも證明してくれることと存じます。で、以上申し上げたことを事實だとお認め下さいましたら、どうか悪漢どもの願ひを容れて拷問に掛けたり、死刑にしたりすることだけはお赦しを願ひたいもので御座います。」

マルテリノの一件がこんな風になつてゐる間に、マルケーゼとステツキーの二人は市廳の裁判官が彼に辛く當つて吊繩に懸けたといふ話を聞き込みました。で、大きに心配して、互ひにこんな事を云ひ合ひました。「こいつはどうもへまを遣つたものだね、これちや宛然鍋から救ひ出して、火の中へ抛り込んだやうなものだからな。」そこで、氣を揉み揉み戻つて來て、宿の亭主を探ね出して、一伍一什を相手に打ち明けました。亭主は笑ひながら、二人をサンドロ・アゴランテイと云ふ、當時トレヴィイソに住んでゐて、市長からも大層重じられてゐた人の許へ連れて行きました。そして、相手に順を追つて事の顛末を話してから、連れて來た男達と一緒に、マルテリノのことを宜しく頼みました。

それを聞くと、サンドロ氏も大笑ひしながら、市長の許へ出掛けて行つて、そちらへマルテリノを引き取るやうに話を纏めてくれました。で、市長の使者が行つて見ると、マルテリノは肌着一枚になつて、恐怖の餘りがた／＼慄へながら、裁判官の前に立つてゐました。と申すのは、裁判官は、相手の謝罪などに少しも耳を藉さないで、偶々フロレンス人に對して自分がひどく反感を持つてゐたところから、どうしても死刑に處してやらうと決めてゐたのですから、最初市長の手に引渡す事を頑強に拒絶しましたが、到頭意を枉げてさうしない譯には行きませんでした。

やがて、マルテリノは市長の前に出て、事の次第を逐一申立てた上、特別のお慈悲として、このまゝ歸國を許されたいと懇願いたしました。フロレンスに歸らぬうちは、何だかまだ首筋に繩を懸けられてゐるやうな氣がしたからです。市長はこの事變を一方ならず笑つた上、銘々に一着づゝの衣服を與へました。かうして、彼等はゆくりなくも大きな危険から救はれて、負傷一つせず再び故郷へ歸つて參りました。

第二一話

リナルド・フォン・アステイが野盜の掠奪に逢ひ、ギ

リエルモの城に連れて、或幕府の許に身を寄せ、損害を取戻して無事に家郷に戻るを得た話。

ネイフイレが物語つたマルテリノの運命に就いては、淑女も羽目を外して笑ひました。が、男子の中では、フィロストラートが一番大笑ひをしました。處で、彼はネイフイレの次に坐つてゐましたので、女王はすぐ彼女の後を受けて話しをするやうに命じました。フィロストラートは些とも躊躇はず、直ちに話を始めました。

淑女諸君、篤信と不幸と戀愛の三者が妙に絡まり合つたお話が恰度今私の胸に泛んで参りました。一つそれを話させて頂きます。このお話は、不安な戀の國を御旅行なさる方々には、何かのお役に立たうかと思はれるので御座います。何しろその國では、たとひ飛切上等の寢床が手に入つても、聖ジュリアンの主の祈り一つ眩かないやうな人間は、到底甘い眠りに就くことが出来ないといひますからね。フェララの國境伯アツツオの時代に、名をリナルド・フォシ・アステイと呼ぶ一人の商人が商賣上の用向きでポロニヤに遣つて参りましたが、やがてそれも片附いたので、再び家郷に向つて歸らうといはしました。で、ヴェローナに向つて馬を進めながら、まだフェララを通り越さないうちに、彼は一群の人達に出逢ひました。其奴等は一寸商人

一體私は古風な人間でひつそりと生活してゐますので、お祈りもさう澤山は持ち合せがなく、まあ必要なものだけで間に合はせて置くことと云つた處ですね。それでも、旅行に出てゐる間は、毎朝宿を出發する前に主の祈りとアヴェ・マリアとを聖ジュリアン様の阿父様と阿母様の靈魂のために缺かさずお祈りするやうにしてゐますわい。それから神様と聖ジュリアン様とに、今晚も好い旅宿を宛てがつて下さるやうに願ひ申します。私もこの年齢になるまでには、道中で随分と大きな災難に出喰はしたことも御座います。が、兎に角仕合せなことには何も無事にそこを切り抜けて、夜分は親切な人達の手許で雨露を凌がせて貰ひました。さういふ譯で、私はたゞもう聖ジュリアン様のお蔭でさうした神様のお恵みが私のやうなものにも授かるのだと固く信じて、一生懸命に前に云つたやうなお祈りを上げるので御座いますよ。で、私が一度でもそのお祈りを上げないことがあれば、その日は道中で酷い目に逢つた上、夜は夜で疎な宿屋も見附けられないだらうと信じてゐるのですね。」すると、前にリナルドに話し掛けた男は申しました。「ぢや、旦那は今朝もその主の祈りつてえ奴をお上げなすつた譯ですね？」

「勿論ですとも」と、リナルドは答へました。今一人の追刻は、これからどんな事になるかをちやんと

のやうに見えましたが、その實、切取強盜を渡世とする追刻共で御座いました。リナルドは不注意千萬にも自ら進んでこの男どもと話し始めたのですね。一方追刻どもは、相手が商人だと気が附くと、いくら金を身に着けてゐるに相違ないといふ見込みの下に、何かの機會があり次第その金を捲き上げてやらうと決心しました。この企畫のために、それから一寸でも相手に疑はれないやうにと云ふので、追刻どもは、相當な身分の人間でもあるやうに鹿爪らしい話ばかり持ちかけながら、出来るだけ親切で謙遜と思はれるやうに振舞ひました。それとも知らないリナルドは、ただ一人馬に乗つた従者を伴つてゐるだけで御座いましたので、かうして圖らずも好い道伴侶が出来たのをひどく喜んでゐたのですね。

すべての談話に有り勝ちのやうに、こゝでも馬を進めながらの話の中で、彼等が一つの話題から他の話題に移つてゐる間に、人間と神様との會話とでも云ふべき祈禱の話になつて來ました。すると、三人ゐた追刻の中の一人が、突然リナルドの方を向いて、かう申しました。「一體旦那は、かういふ旅行の途中では、どんなお祈りを常々なさいますかね。」

「實際の處」と、リナルドは答へました。「私はさういふ事柄にかけては極く單純な方で、格別經驗もないのですよ。心得てゐましたので、腹の中で申しました。「いや、まだそのお祈りとやらが必要だらうぜ、俺達の仕事に邪魔さへ入らなけりや、手前の今夜の宿はそれこそ疎なものぢやなからうからな。」それから更に聲に出して申しました。「手前はこれで随分所々方々を旅行して廻りました。そして、お祈りの功德を讀めたゞへてゐるのも幾度となく耳にしましたが、自分ぢや未だたゞの一度もお祈りをして見たことは御座いませぬ。それでも毎晩結構な旅館にありついてゐますよ。處で、今晚は、主のお祈りとやらをお上げになつた貴方と、何一つ祈つたことのないこの手前と、どつちが上等な旅館にありつけるかお分りになることでせうよ。勿論、手前は祈りこそしませんが、その代りに『汝既に破りたり』とか『未だ汚れず』とか、それから又『深き淵より』とかいふ文句を唱へますよ。これなんざあ、手前の婆あのお云ふ所では、どうも奇特な効驗があるさうでしてね。」かういふ風にして、彼等は馬を進めながらなほ四方山の話をつゞけてゐました。が、追刻どもはさうしてゐながらも、怪しからぬ企畫を實行する機會を、絶えず待ち構へてゐたので御座います。さて大分時刻も移つて、五人の人達がサン・ギリエルモを通り過ぎて、とある河を渡らうとした時、恰度その場所には人里からもずつと離れて、四邊は草木で被はれてゐる上に、日もとつぶり暮れてゐましたの

で、三人の追刺どもはいきなりリナルドに飛びかゝつて、有無を云はせず、何から何まで刺ぎ取つてしまひました。そして、馬からも引き摺り下されて、下着一枚になつたりナルドに向つて、追刺どもは申しました。「さあ、手前の有難い聖ジュリアン様が今晚はどんな好い宿屋を見附けて下さるか願つて見るがいゝ。俺達の聖人様はもうちやんと上等な旅館を用意してくれてゐらあ。」それから河を渡つて向うの方へ行つてしまひました。

一方リナルドの召使は主人が追刺に襲はれたのを見ると、卑怯にも主人を助けようとはせず、直ぐに馬首を向けかへて、追刺どもに捕へられないうちに、サン・ギリエルモ目がけて、一目散に逃げ出してしまひました。そこへ着いた時はもう夜も更けてゐましたので、この男は、他の事には一切顧着しないで、心靜かに宿を取りました。

身に纏ふものとは僅かに襦袢一枚、おまけに靴にまでされたリナルドは小止みもない吹雪の中で激しい寒気に襲はれながら、時刻もいよいよ夜になつて來ましたので、何うしていか分りませんでした。そして、齒の根も合はずがたゞ／＼顫へながら、せめて凍え死だけ免れて、この一夜を明かす避難所はないかと周囲を見廻したものの、その邊はつい近頃まで戦争があつて、何も彼も兵火にかゝつて燃えてしまつた後とて、そんな場所の見附からう筈があり

ません。寒さに身を驅られて、リナルドはサン・ギリエルモの城下の方へ一生懸命に駆け出しました。そこへ行きますれば、神様のみ恵みで、助けて貰へるものと考へたからです。彼の召使もそこへ逃げて行つたのか、それとも又何處か他の所へ行つてしまつたのか、彼には勿論解つてをりませんでした。しかも、彼が未だそこから約一哩手前まで行き着かないうちに、もう日はとつぷりと暮れて、やつと行き着いた時には、最早城門は固く閉ざれ、跳橋も高く吊り上げられてゐました。がつかりして、途方に暮れながら、リナルドはせめて吹雪を免れて身を横たへることの出来るやうな場所はないかと、泣き／＼捜し廻りました。幸ひ城壁の上から少し許り飛び出して建てられた一軒の家が眼に入りましたので、彼はすぐにその家の廂の下で夜明けを待たうと決心しました。そこには扉が取り附けてありましたが、生憎これも固く閉ざれてゐたのです。そこで彼はその闕の所で、そこら中から集めて來たやうな腐つた藁の上に身をを下ろしました。彼は聖ジュリアンに對してひどく不平を感じながら、平生の信心に對しても、こんな目に遭はせるとは甚だ聞えぬ仕打ちだと思ひました。

しかし聖ジュリアンはリナルドのことを決してお忘れになつた譯ではありません、矢つ張り彼のために上等の宿をお與へになつたのでした。と申すのは、恰度その城には、

國境伯のアツツォが生命に代へて愛してゐる妻敵もない美人の若い未亡人が住んでゐたのです。つまり彼女の希望に依つてそこに住はせて置いたのですね。處で、その未亡人は今リナルドが廂の下に身を置いた恰度その家に住んでゐました。そして、偶々その日は、國境伯が一夜を彼女の許に過されようといふ思召しで、この城へお出掛けになつた上、夕方には風呂の用意とそれから立派な晩餐の支度をして置くやうに、豫て命じて置かれたのでした。處で、萬端の用意が整つて、未亡人はたゞ伯爵の到着を待つばかりになつてゐました時、家來の一人が城門へ飛んで來て、何やら伯爵に報告を齎しました。その知らせのために、伯爵は直標馬を進めなければならなくなつたのですね。で、今日は自分が行くのを待つに及ばないと云ふ言傳をさせただけで、直ぐに馬を進めてその城下を去りました。未亡人は可なり御機嫌を悪くしましたが、他に仕方もないので、結局伯爵のために用意した風呂には自分が入つて、それから一人で晩餐を攝つて寢に就かうと決心いたしました。

そこで彼女はまづ風呂に入りました。處が、この風呂場はリナルドが城壁の外で身を寄せた扉の直ぐ傍にありましたので、まるで鶴の鳴のやうにがた／＼と齒を喰ひ合せながら、この男の泣いたり祈つたりしてゐる聲が、手に取るやうにこの未亡人の耳に聞えて來たのですね。そこで彼

女は一人の侍女を喚び寄せて申しました。「一寸戸外へ出て、誰が城壁の外の闕の處にゐるか、又何をしてゐるか見て來てお呉れ。」

侍女が戸外へ出て、雪明りに透かして見ると、リナルドが、前にお話したやうに、靴のまゝ襦袢一枚で、全身を顫はせながらそこに蹲つてゐるのですね。一體どうなすつたのですと訊ねられて、彼は言葉も出ない程ぶ／＼顫へながら、それでも出来るだけ簡単に、どうして、又何のためか此處まで遣つて來たかを語つて聞かせました。それからなほ附け加へて、若し出来ることなら凍えないやうに一夜の宿を貸して欲しいと、切に懇願したもので御座います。侍女はこの話を聞いて大層可哀さうに思つて、家に引き返すと未亡人にその旨を傳へました。未亡人も憐憫の心を起しました。そして、伯爵が忍んで來る時、屢々用ゐた扉の鍵が手許にあることを思ひ出すと、かう申しました。「早く行つて戸を開けてお上げ。さうでなくとも、私達だけぢや逆も喰べ切れない程澤山晩御飯も用意してあるし、その一人泊めて上げる位の部屋には事缺かないのだからね。」侍女は女主人の同情心にすつかり感服しながら、リナルドのために扉を開けて遣つて、彼を未亡人の許へ連れて參りました。

未亡人は相手が殆ど凍死に死にさうなのを見て申しまし

た。「未だこのお風呂は暖いやうだから、兎に角これにお入りなさい。」リナルドは二つ返辭でその中に飛び込みました。そして、湯に温まつたお蔭で、それ迄死んでゐたのが急に生き返つたやうに元氣づいて参りました。その間に未亡人の方では、亡夫が生前身に纏つた衣裳を調べて出させて置きました。で、彼はそれを身に着けると、まるで自分のために仕立てさせた着物のやうにしつくりと身體に合ふのでした。彼は未亡人から何を命ぜられることかと心待ちに待ちながら、神様と聖ジュリアンとに向つて、自分が心配してゐたやうな恐ろしい一夜を免れて、こんな上等な宿にありつたことを感謝いたしました。

しばらく休んでゐた未亡人は、燠爐に火を薄山おこさせておいた廣間へ遣つて来て、あの男はどうしてゐるかお訊ねました。

「奥様」と、侍女は答へました、「あの方は只今すつかりお召物を召されました。お綺麗な方で御座います。それに大層物固くて、教養もおありになるやうで御座います。」

「ぢや、行つて」と、未亡人は申しました、「こゝへお招ひしてお出で。こちらへ入らしつて火におあたりなさいませと、かう申し上げるんだよ。それに、未だ晩の御飯も召し上つてらつしやらないだらうから、その用意もして上げてお呉れ。」

リナルドはその廣間に這入つて来て未亡人を見た時、相手が相當な地位のある婦人であることに氣が附いたので、恭しく挨拶しながら、精一杯丁寧に、自分に示された厚意を感謝しました。が、未亡人の方でも、彼の外貌と言葉とから侍女の噂の當つてゐるのを見て取りましたので、親しげに請じ入れながら、ずつと側近く来て火にあたるやうに勧めた上、彼がこゝへ遣つて来るやうになつた不慮の出来事について訊ねました。

そこでリナルドは相手に事の次第をすつかり話して聞かれました。處で、彼女はリナルドの召使がこの城下へ逃げて来たことを聞いてゐましたので、相手の云ふことを悉く信じない譯には参りませんでした。そして、その召使に就いて知つてゐたことを話して聞かせた上、明朝になれば譯もなくその男を再び見附けることが出来るでせうと申しました。

その間に食事の用意も出来たので、二人は手を洗つて、リナルドは未亡人の命ずるまゝに彼女と同じ卓に就きました。彼は上背も高く、體格もよく釣合がとれて、綺麗な人好きのする顔つきをしてゐました。それに物腰も上品で愛嬌がある上、年配もまづ盛りと云つて好い頃でした。

處で、こちらの未亡人は今晚は伯爵が泊りにお出でになるといふので、そよりに男戀しい思ひに燃えてゐたところと

て、折々眼をリナルドの上に据ゑながら云ひ知れぬ悦びに胸を轟かしてゐましたが、とう／＼本氣にこの男を手に入れようと思ふやうになりました。で、彼女は食事が終つた後、侍女を傍へに招んで、殿様は今晩わたしをお欺しになつたから、わたしの方でも運命の與へてくれたこの機會を利用して當然ぢやないかと相談を持ちかけました。侍女は女主人の欲望の烈しさを見て取つて、極力それに従ふやうに勧めました。そこで未亡人はリナルドが坐つてゐる燠爐の傍へ戻つて来て、情を含んだ眼に相手を見遣りながら申しました。

「まあリナルドさん、何うしてそんなに考へ込んでいらつしやるの？ あの掠奪された馬だの二三枚の着物だのは、二度と取り返しのつかないものでせうかね。そんな物はおう諦めて、もつと元氣をお出しになつては何う？ そして、御自分の家にいらつしやる積りでゐて下さいませ。私は未だ申し上げたいことが澤山御座いますわ。貴方が只今お召しになつていらつしやる着物は、私の亡夫の物で御座います。ですから、私には貴方がまるであの人のやうな氣が致しましてね。(以下原文四行省略)

リナルドもこの道にかけては決して初心ぢやなかつたので、こんな言葉を聞いたり、未亡人の眼が輝いてゐるのを見たりすると、兩腕を開いて、相手の前に歩み寄りながら、

かう申しました。「奥様、あなたが私を助け出して下さつた時の體たらくを考へて見ると、これから先の私の生命は皆あなたに負うてゐるのです。(以下原文六行省略)

もうその上は何の言葉も要りませんでした。(以下原文七行省略)

翌朝、夜が未だ明け切らぬうちに、未亡人の發意で、二人は寢床から起き上りました。そして、この出来事を誰にも氣附かれないやうにと云ふので、彼女は男に餘り上等でない着物を着せ、ポケットに一杯金を詰め込んでやつて、何處までも秘密を守るやうに頼んだ上、例の召使を捜し出すにはどの道を行つたらいいかを教へて、昨夜この家に入つて来る時に通つたあの小さい戸口から出して遣りました。夜がすつかり明け放れて、城門も開かれた時分に、リナルドはさも遠路をして来たやうな振りをしながら、城下に入り込んで、例の召使を捜し出しました。そこで鞍袋の中に残つてゐた衣類を身に着けて、召使の馬に乗らうとしてゐた時、前夜彼を掠奪した三人の追縛どもが又何か他の犯罪のために捕へられて、恰度その城下へ引つ張られて来るといふ、いはゞ奇蹟めいた事件が起つたので御座います。で、リナルドはこの追縛どもの自由によつて馬も着物もお金もすつかり取り返すことが出来ました。失くしたものと云へば、ほんの二三本の査下留めだけで、そんなものは追

御どもにしても何うなつたものやら分らなかつたので御座いませう。神様と聖ジュリアンに満腔の感謝を捧げつゝ、リナルドは馬に跨がつて、無事息災に自分の家に歸りました。處で、三人の強盜はその翌日空中で宙ぶらりんの藝當を演じてしまひました。

第三話

三人の若者財産を蕩盡して貧窮に陥る。その甥絶望して家郷に歸る道すがら一人の僧と出逢ひ、それが英國の王女であることを知つて、この女と婚を結んで、伯父達の損失を回復して再び物持ちにする話。

リナルド・フォン・アステイの話に、淑女達はたゞもう感嘆して聞き惚れました。彼女達はリナルドの篤信を讚美すると共に、彼が大きな厄に陥つた時圖らずも救助の手を垂れさせ給うた神と、聖ジュリアンとに感謝したので御座います。それなればこそ、彼女達は、たとひ大きな聲では云ひ得なかつたにもせよ、兎に角神の御手に依つて家の中に送り込まれた幸福を巧みに利用することを心得てゐたこの未亡人を、決して愚者であるとは見做さなかつたので御座います。で、この未亡人に與へられた楽しい一晚につい

て、いろ／＼と話し合つたり笑つたりしてゐる間に、フィロストラートの隣に座を占めてゐたバムビネアは、今迄も實際さうであつたやうに、今度は自分の順番であらうと豫想して、どんな話をしたのかと、さまざまに思ひを廻らしてゐましたが、女王の命令が下ると共に、遲疑するところなく、さも楽しさうに、次の様に語り始めました。――

一體運命の變轉極りない出来事に就きましては、多く語れば語る程、考へ深い人にとつては、益々それに就いて云ふべきことが多くなるもので御座います。この事は、私どもが愚かにも「自分のもの」と名づけてゐる總ての對象も、實は運命の手に横たはつてゐるものであつて、従つて運命の神の祕やかな考へ一つで、しかも私どもがその原理を推知することの出来ないやうな方法で、絶えず一人の手から又他の一人の手に移されて行くものであることを認めてゐる程の人なら、誰しも疑はない所で御座いませう。で、このことは到る處で、毎日のやうに、感銘の深い事實として起つてゐる上に、これ迄二三の方のお話でも證明されてゐるやうなもの、女王様の御希望に據れば、今日はかうした題目に就いて話すことになつてゐますので、私は更に蛇足を添へて見たいと存じます。尤も、蛇足必ずしも不必要とは限りません。いや、場合によつては多少の御喝采を博し得るかとも思はれます。

昔フロレンスの町に名をテマルドと呼ぶ一人の貴族が

ありました。その人は、ある人々の云ふ處ではラムベルテイ家の一門でしたが、他の人々の説ではアゴランテイ家に屬してゐたとも云はれます。尤も、この後の説は、その人の息子さん達が後々になつて遺つてゐた家業、取りも直さずアゴランテイ家の昔ながらに變らない家業から推測されたものに外ならないのであります。けれども、彼がいづれの家に屬してゐようと、私には關係のないことで御座います。たゞ私は彼がその時代の最も富裕な人の一人であつたといふことと、彼が長男をラムベルト、次男をテマルド、三男をアゴランテと呼んだ三人の息子を持つてゐたといふことだけを申上げておきます。大金持ちのテマルド老人が亡くなつて、その全動産不動産が正しい相続人として三人の息子に遺されたのは、長男のラムベルトが未だ十八歳にもならない頃のことでしたが、それでも三人の兄弟はそれ／＼綺麗な、又立派な若者になつてをりました。さて此の三人は、素晴らしい財産を手にしてからといふもの、たゞもう爲たい三昧に耽つて、お金を湯水のやうに使ひ始めました。澤山の召使を置いたり、選り抜きの馬、犬、さては鷹などを飼つて見たり、毎日のやうに公開の大酒宴を催したり、無暗と人に贈物を撒き散らしたり、又は武術の試合を開いて見たりしました。一口に申し上げれば、貴族らしいとい

ふよりも、寧ろ若氣の無分別から、何でも想ひ着いたことを遣つて退けるといふ風でした。

かう云つた彼等の生活は長くは続きませんでした。間もなく親から受け嗣いだ財産も段々に減り始め、今迄通りの浪費を續けて行くためには、到底僅かばかりの収入では間には合ひませんので、財産の一部を賣るとか入質するとかしないではゐられなくなりました。さういふ譯で、この人達は今日はこれを、明日又あれをといふやうに次第に産を失つて行きながら、殆ど何一つ残らなくなるまで一向無頓着で御座いました。さて、それ迄は富に昏んでゐたこの人達の眼も、貧困に接して始めて開かれたので御座います。ある日長男のラムベルトは二人の弟を呼び寄せて、亡くなつた父やその後を嗣いだ彼等三人が以前にはどんなに華々しい生活をして来たか、それから又どんなにその富が増して行つたかと云ふやうな返らぬ話をしました。その後で、自分達のふしだらな浪費のために陥つた貧困に就いて事細かに話して聞かせ自分達の窮乏が世間一般に知れ渡らないやうに、もう僅かしか残つてゐない持物を賣り放して、一緒に外國へ旅立たうと、出来るだけ強い調子で説き諭しました。そして又、その通りに實行しました。誰一人にも別離も告げないで、フロレンスを秘かに出立して、一氣に英國に渡つてしまひました。彼等は倫敦で一軒の小さな家を借り

て、爪に火を點すやうにしながら、法外な利子で金を貸し出したもので御座います。幸ひと運命がこの人達に與したもので御座いませうか、數年の間に彼等は大きい金高を溜め込むやうになりました。そこで時折り彼等の中の誰かが生れ故郷のフロレンスに歸つて先の財産の大部分を買ひ戻したばかりか、更に買ひ足すといふ勢ひで、三人とも故郷でそれ／＼妻を迎へました。が、彼等はなほ倫敦で高利貸をつゞけてゐましたので、萬事の切盛をさせるためにアレサンドロといふ彼等の甥を倫敦に出張させました。

彼等三人はそれ／＼フロレンスに居を構へて曩に浪費の結果陥つた窮状をも忘れ、しかも今では妻子の事も多少は顧慮しなければならぬ身であるにも係らず、再び以前にも優して贅澤を始めました。宛然あらゆる商人達が飽く迄彼等を信用して、彼等の云ふなり次第に、幾許でもお金を貸して呉れるものと思ひ込んでゐるやうでもあつたのです。一方甥のアレサンドロは數年來英國で、その土地の貴族達を相手に邸宅その他の収入を抵當にして貸しつけて甘い利を占めてをりましたので、それから送つてよこすお金で、初めの二三年の間はどうやらこの人達の亂暴な生活向を支へて行くことが出来ました。

處で、三人の兄弟がさう云つたやうに浪費の生活を續けながら、お金に困る時はいつも英國からの送金を宛てに借

金をしてゐる間に、英國では全く想ひ懸けない大事件、取りも直さず國王父子の間の戦争が始まりました。そのため全英國の人民までも、一方は父の國王に、他の一方は王子に味方して、國中が二つに別れるといふ騒ぎになつたので御座います。なほこの戦争のためには、アレサンドロも抵當に取つて置いた貴族の土地をすつかり失つてしまつた上に、宛てにしてゐたその他の収入も甚だ怪しくなつて來たので御座います。けれども、人民達はこの國王父子間の平和をそれこそ一日千秋の思ひで待ち望んでゐました、アレサンドロにしましても、平和にさへなれば元も子も返つて來るに違ひなかつたのですから、英國を離れようとは致しませんでした。一方、フロレンス住ひの三人の兄弟もそんな事位で放埒を止めようとはせず、日に優し殖えて行くのは借金ばかりで御座いました。而も、宛てにしてゐた希望は何年経つてもものになりませんでしたので、三人の兄弟はすつかり信用を失くしたばかりでなく、貸したお金を取り戻さうといふ債權者のために捕へられた上、その財産が借金を償ふに足りなかつた處から、残りの債務のために入牢しなければならませんでした。そして、細君どもを始め小さな子供達まで、或ひは村々に、或ひは此處彼處と彷徨ひながら、氣の毒な風體で、しがたない生計を求めました。しかも前途には窮乏と悲慘とより外に何の期待も懸け

られなかつたのです。

さうしてゐる間にも、アレサンドロは英國に在つて、何年も何年もの間無益に平和を待ち望んでをりました。が、何時まで経つても、そんな曙光も見えなければ、この上ぐづぐづしてゐるのは不必要なばかりか生命にも係はるやうに思はれ出したので、とう／＼伊太利へ歸ることにして、たゞ一人旅路に就いたので御座います。

處が、恰度アレサンドロと同時に、一人の眞白な僧衣を纏つたブリュツセルの坊さんが、澤山の僧侶に伴はれ、駝馬を曳いた多數の従者どもを先頭に立たせて、何れかへ旅立ちすることになりました。この一團には、國王の親戚に當る古い門地の二人の貴族が隨いてゐまして、幸ひアレサンドロも以前からこの二人を知つてゐましたので、行を共にすることを願ひましたが、先方でも喜んで承知して呉れました。で、馬を進めて参ります路すがら、彼はその人達に向つて、禮を失はぬやうに、一體こんなに澤山の従者を伴れて先に行かれる坊さん達は何人なのか、また何處へ行かれるのかと訊ねて見ました。

すると、その貴族の一人が次の様に答へました。「一番先頭にあるのは私達の従弟です。あの男は最近英國のある大寺院の住職に選ばれたのですがね、何分さういふ榮職に就くには御法規の定めより年が若いので、吾々はかうして羅

馬へ行つて、法王様によくお願ひして、年齢の不足はお見逃しの上、その寺の住職に就かせて頂かうといふのですよ。ですが、この事は未だ秘密になつてゐますから、その積りでゐて下さい。」

道々この若い僧は、よく諸侯の旅行の場合に見られるやうに、ある時は従者どもの先頭に、又ある時はその後殿に位置を占めて乗つて行かれました。さういふ譯で、この僧はある時偶然自分の近くにゐたアレサンドロにお目を留められたので御座います。

アレサンドロは體つきも立派で人好きのする顔をしてゐた上に、舉止も優雅で、話上手といふ點では決して人後に落ちませんでした。實際、この僧は一目見るなりそれ迄には覺えのなかつた程ひどくこの青年が好きになつてしまつたので御座います。そこで僧はアレサンドロを自分の手許に呼び寄せて、彼の姓名と職業や、何處から來て何處へ行かなぞといふことを親しげに訊ねて見ました。アレサンドロはそれに答へて腹藏なく今の境涯を打ち明けた上、甚だ不束な者ではあるが、以後はお目懸けられたいと申し上げました。若い僧はこの條理整然たる答辭を聞いて、立派な教養のありさうな様子を仔細に見遣りながら、相手は卑しい職業に拘らず身分のある人物だらうなぞと、心の中で考へましたので、彼に對する好感はいよ／＼募るばかりで

御座いました。で、相手の不幸な出来事に深く同情して、親切に慰めた上、決して力を落さないやうにと言葉を添へました。善良な人間でさへあれば、一旦は落目になつても、再び神様のお手で以前の地位に、いや、以前にも優した境遇に置かれるものだからとも申されました。なほ自分の旅はトスカナが目的で、相手も同じ方向へ行くのだから、これからは道伴侶になつて貰ひたいと申されました。アレサンドロは若い僧のかうした親切な言葉を大層有難く思ひまして、御用にさへ立つなら、どんな事でも厭ひませんと断言したものでした。

若い僧は、それ以來妙な氣持に心を亂されながら、旅をつゞけてゐました。そして、二三日経つと、一行はとある餘り上等な旅宿もないやうな村に到着しました。が、例の僧はどうしてもこの村に泊りたいと云ひ出したので、アレサンドロは以前から知り合ひの旅宿に案内いたしました。そして、僧のために、この家では一番便利に出来てゐる部屋を用意するやうに斡旋しました。處で、アレサンドロはさうでなくともこの僧の執事と云つたやうな役を勤めてゐましたので、他の従者のためにも、以前から知り合ひのその附近の家々に一泊の宿を頼んで見るなど、出来る限りの世話をいたしたもので御座います。

さて、この僧も夕飯を終へ、夜も更けて、一同寢續まつ

てしまひましたので、アレサンドロは宿の主人に向つて、自分は何處で寝たら好からうかと訊ねて見ました。

「さあ、そいつは困りましたね」と、宿屋の主人はそれに答へました。「御覽の通り家中一杯で、家の奴等はベンチの上にも寝なければ寝る所のない始末でさあ。ですが、あの坊さんの泊つてゐる部屋にはまだ麥函が三つ四つ轉がつてゐるから、まあそこへでも案内して、その上に寢床をこしらへるんだね。それで好かつたら、今晚の處はそれで我慢して貰ひたいものですな。」

アレサンドロはそれに答へました。「戯談云つちやいけない、どうしてそんな所へ行かれるものかね。それに、あのお住持様の臥んでいらつしやる部屋はお隨伴の坊さん達さへ一人も入れない位狭いんぢやないか。それも、あの帳が未だ降されない前に、そんな麥函があると知つたら、そこで二三人の坊さんに臥んで貰つて、今坊さん達の寢てゐる部屋に私が寢るんだつたがねえ。」

それに對して主人は又申しました。「いや、全くかうなつては仕方がありませんわい。ですが、貴方さへ御承知なら、あそこにやそれこそ飛切上等のベットが出来ますぜ。もうお住持様もお臥みになつて、帳も降りてゐますよ。私がそおつと蒲團を持つて行つて上げますから、まあ彼處でお寢つて下さいませ。」

別に若い僧の迷惑になることでもなささうなのを見て、アレサンドロもそれを承知しました。そして、出来るだけこつそりと横になりました。

處が、例の若い僧は未だ寢てゐた譯ではありませんでした。それ處か、初めて覺えた胸の思ひに夢中になつてゐたので御座います。そして、アレサンドロとこの家の主人とが話し合つたことを残らず聞いて、何處で後者が横になつたかといふこともちやんと知つてゐました。で、内心その事を飛び立つやうに嬉しく思ひながら、かう獨語を申しました。「神様は私の思ひを適へて下さつたと云ふものだ。この機を外してしまへば、長い間又とこんな好い機會はあるものぢやない。」そこでこの絶好の機會を利用しようと思ひ、家中が寢續まつた様子を見るや、直ぐに低い聲でアレサンドロを呼びながら、どうかこゝへ来て一緒に寢てくれと申しました。

アレサンドロも最初はお断り致しましたが、強つて云はれるまゝに着物を脱いで横になりました。(此間約五行省略) 一方僧はアレサンドロの態度からか、それとも自分の推察からか、すぐに相手の疑惑を感じて、それ迄身に纏つてゐた下着を矢庭に跳ね退けた上、アレキサンドロの手を持ち添へて自分の胸の上に載せながらかう申しました。「アレサンドロ様、變なお疑ひはおよし遊ばせ。今まで隠

してゐましたが、これを御覽遊ばせ。(二行省略) それは象牙の塔のやうに何人の手も觸れたことのないもので御座いました。で、それと知つて、そこに横たはつてゐるものは男でなく、若い女であることを知るや、彼もそれ以上の要請を待つまでもなく、(以下原文二行省略) その時、相手は次のやうな言葉で彼を留めました。

「側へ寄る前に私の申し上げることをお聞き下さいませ。もうお分りになつた通り、わたしは女で、男では御座いません。實は縁談の口を見附けて頂くために、法王様の許へ参らうといふ考へで、處女として國を出て参りました。處が、二三日前に初めて貴方様をお見かけ申した時から、貴方様には幸福でせうが、わたしにとつては恐らく不仕合せにも、どんな女もこれ以上激しく男を愛したことがあらうとは思はれないほど、貴方様に對して強い愛を抱くやうになつたので御座います。そこでわたしも貴方様一人を自分の良人と思ひ定めました。で、若し妻に取つて不足と思召すやうでしたら、どうかわたしを一人置いて、直ぐにも御自分のベットへお引き取り下さいませ。」

アレサンドロはこの少女の何人であるかは知りませんが、彼女が、彼女の一行から考へても、富裕な上流階級の出であることは分つてゐましたし、それに相手の美しいことは自分の眼で見つて知つてゐるところで御座いました。で、何

の遅延する所なく、彼女さへよければ、自分の方は願つたり叶つたりである旨を返答しました。すると、彼女はベツトの中に立ち上つて、男の指に一つの指環を嵌めてやつて、そこに懸つてゐた基督の畫像の前で婚約を誓ふやうに命じました。それから(此間原文二行省略)夜が明け放れた時二人はこれから先のお互ひの態度などをよく話し合つた後、アレサンドロは起き上つて、その部屋へ入つて来た時と同じやうに、どこで一夜を明かしたかを感じかねないやうに、こつそりその部屋を脱け出しました。そこで例の僧はすつかり満足して、一行と共に再び旅路に就きました。そして、幾日もく／＼かゝつて、一行は終に羅馬に到着しました。

さて、二三日休息した後、例の僧は二人の貴族とそれからアレサンドロを伴れて羅馬法王に謁見して、恭しく挨拶を済ませた後、次の様に語りはじめました。

「法王殿下、間違ひのない正しい生活を送らうと思ひます者が、それに背く恐れのあるやうな凡百の機会を一生懸命に避けて行かなければならないのは、誰よりも殿下が一番好く御存じでいらつしやいませう。で、私もどうかさう云ふやうにいたしたいと思つてゐますので、飽く迄その訓則に背くまいと存じまして、御覽のとほりの服装で、英國の國王なる父の宮廷から連れて参りました。そして、その際父の財費の一部を携へて参つたので御座います。父は私が

未だこんなに若う御座いますのに、それはく／＼お年寄りのスコットランドの王様と婚姻させようとしてゐるので御座います。けれども、私は、法王殿下のお口添へで身の振り方を定めようと、造々此方に遣つて参りました。私としては、何もスコットランドの國王陛下の御老年が厭で、かうして逃げて参つた譯では御座いせんので、若し私がその方と結婚いたしますれば、年の若い私の不束からどうかすると神様の掟に背いて、わが王室の榮譽を傷けるやうなことを仕出來しはせぬかと、たゞく／＼それを恐れたので御座います。

「で、かういふ目的で羅馬への旅を續けてをります間に、人皆の必要としますものを熟知し給ふ天の神様が、思ふにお慈悲の御心からでも御座いませうか、神様の意志によつて未來の夫たるべき人間を私の眼の前に連れて来て下さいました。それは、私の側に立つてゐる」と、彼女はアレサンドロを指して申しました。「この若い方で御座います。この方の門地は王族のそれより低いとは申せ、その上品な作法と廉潔な態度とはどんな貴婦人の良人としても恥づかしくなからうと存じます。それで私はこの方を選びました、この方を良人と思ひ定めました。たとひ父や世間が何と申しませうとも、この方より他の方は相手にしない覺悟で御座います。さういふ次第で、この度旅に出ました根本の理

由も實際にはなくなつてしまひましたやうなもの、それにも拘らず、私がこの旅行を果さうと思ひましたのは、一つにはこの羅馬の市に御座いますいろ／＼な聖地を巡拜して、法王殿下御自身の拜謁を得たいのと、一つには又アレサンドロと私とが神様の面前で結びました婚姻を殿下御自身並びにその他の方々にも知つて頂きたいからで御座います。で、何卒、神様の思召しでもあれば、同時に又私自身の意志でもあるこの結婚に、殿下が満腔の御同情を寄せられた上、――殿下を地上の代理者とし給ふ天の神の御賛同の確かな保證として、私どもに殿下の祝福をお與へ下さいますことを、切にお願ひいたす次第で御座います。それさへ賜はりますれば、今後は二人とも神様と殿下との御榮光のために一生を捧げつゝ、何時かは安らかに死んで行くことも出來ませうから。」

アレサンドロは自分の妻が英國國王の王女であるを知つてすつかり面喰つてしまひました。が、心の中では、非常なしかも窶かな喜びに充たされました。處で、二人の貴族はそれ以上に驚かされました。そして、非常に立腹しました。もし法王の面前でなかつたら、アレサンドロ目がけて、いや、王女にさへ打つてかゝつたらうと思はれる位で御座いました。一方に於ては、法王殿下も王女、服装と、その決心とに驚かされたものゝ、最早過ぎ去つてしまつたこ

とは致し方もないと思ひましたので、彼女の希望を許してやらうと決心いたしました。なほ二人の貴族の不機嫌に氣が附きましたので、何を措いても先づ二人を宥めて、王女とアレサンドロとに對して機嫌を直すやうに取做してやつた上、これから先爲なければならぬことを取り極めたので御座います。

で、愈々法王お取り極めのその日になりますと、法王廳の全内閣員を始めとして、法王の特別な招待に依つてこの素晴らしい饗宴に列席した多くの貴族の面前で、法王は、満座の讚嘆を買ふ程立派に、而も優美に装ひを凝らした王女と、それから今は誰が見ても高利貸なぞをしてゐたとは思はれないばかりか、まるで何處かの王子のやうに立派な服装をしたアレサンドロとを前へ招びました。實際、先の二人の貴族でさへ、今はアレサンドロに多大の敬意を表はした程で御座いました。そこで法王は更に嚴かに結婚の誓約を宣言させました。そして、盛大な婚儀を取り行つた後、祝福の辭で以て、この新郎新婦の門出を祝つてやりました。

羅馬からの歸りの旅にはフロレンスを通ることにしよらうと、アレサンドロが云ひ出して、王女もそれに同意しました。そのフロレンスには、二人の結婚の噂がもう傳はつてをりました。彼等が最高の名譽を以て市民から迎へられ

たのは勿論のこと、王女は債權者にお金を返して、三人の伯父達を牢から出してやつた上、その妻子達を以前の邸宅へ歸らせるやうに取計らひました。かうして彼等二人は、誰からも好く思はれつゝ、伯父のアゴランテを伴つてフロレンスを立ち去りました。巴里へ着いた時には彼等は佛蘭西王から非常な禮遇を以て歓迎されました。その巴里から、前に述べた二人の貴族は一足先に英國に歸りまして、英國王がその王女を不憫に思召して、アレサンドロ夫妻を喜んで迎へるやうに説得することが出来ました。英國王は間もなく婿のアレサンドロを士爵に取り立て、その名譽を表彰すると共に、コロンナール伯といふ爵位さへ與へました。處で、このコロンナール伯は、先にお話し申し上げました英國王父子の不和を調停するやうに骨折つて、巧妙に取り廻つた結果、遂にそれに成功しました。それがために國內の福祉は著しく増大せられて、アレサンドロは國民の愛と聲望とを一身に蒐めるやうになりました。一方アゴランテも兄弟達の英國内に於ける債權を完全に回收した上、今は伯爵に出世したアレサンドロから士爵の位までも貰つて、錦を飾りつゝフロレンスに歸つて参りました。

その後アレサンドロ伯は王女と共に光榮と福祉とに充ちた月日を送りました。何でも噂に據りますと、彼一流の機敏と勇敢と、それに加ふるに父王の助力とが相寄つて、遂

にスコットランドを征服すると共に、その王位に就いたとか申すことで御座います。

第四話

ランドルフオ・ルフオロは貧窮して海賊となつたが、ジェノア人に捕へられ、次いで難船の憂目に逢ひ、寶石函に身を託して、辛くもコルフの海岸に漂着した上、貧しい女の許に身を寄せ終に財を携へて郷里に歸つた話。

バムビネアの隣に坐つてゐたラウレッタは、前の話が素敵な結末を告げるや、催告も待たないで、直ちに次のやうな話を始めました。

皆様、只今拜聴したバムビネア様のお話の中でアレサンドロの身に起つたやうに、人生のどん底から國王の位にまで泛び上ると云ふやうな場合程、運命の神の力の力強く窺はれるものは他にないやうに私には思はれるので御座います。さて、これからは一定の課題に従つてお話しすることになつてゐますので、私どもはその範圍内にとどまる必要が御座います。さう云ふ譯からして、不幸な點では前よりも甚しう御座いますが、その代りに結末も亦それ程華々し

くないと云ふやうなお話を申し上げても、さして恥ぢとするには及びますまい。勿論、華やかな結末ばかり眼中に置いていらつしやる方には、あまり面白くないかも知れませんが、前にも申し上げましたやうに、お話を更へる譯には參らないのですから、幾重にも御容赦を願つて置く外はないので御座います。

レジオからガエタにかけての海岸地方は伊太利でも最も景色の佳い所とされてゐますが、そのザレルモから程遠からぬあたりに、小山の多い岬が海に突き出して、大海を見晴らすやうになつてゐるので御座います。所の者はそれをアマルフイの濱と稱んでゐます。で、その海岸には小さな都市が澤山御座いまして、花園だの噴泉だのも到る處に御座います。又、他の所と違ひまして、商賈で産をつつた人達 澤山ゐるので御座います。その小さな都邑の一つにラヴェロといふのが御座いますが、その町は今日でもなかなか有福な方が多いやうで御座います。しかも、その昔ランドルフオ・ルフオロといふそれは、大層なお金持が住んでゐました。處で、このルフオロといふ人は、自分の持つてゐる財産だけでは満足しないで、それを二倍にもしようとして、たゞその全財産を失つたばかりではなく、それと一緒に自分の生命までも失はうとしました。つまりこの人も世の常の商人のすなるやうに、投機を張

つて一隻の表晴らしく大きな船を買ひ入れた上、手一杯に仕入れた貨物を積み込んで、サイプラス島へ向つて出帆しました。處が、自分の持つて来たのと同様の品物を積み込んだ船が數隻その島に来てゐましたので、無理にも持つて来た貨物を賣らうとしたら、それこそ二東三文の投げ賣りする外に仕方がありませんでした。そのために彼はもう少しで自殺しようとしてしまつた。實際、彼は一瞬の間金持から貧乏人に成り下つた不幸をひどく苦に病んで、いつそのこと一思ひに死んでしまふか、それとも泥棒に商賈代へをして今の損失を取り戻すか、どつちかにしようと思ひました。金持ちだつた彼は自分の零落を故郷の者に見せたくなかつたのですね。

そこで彼はその大船に買ひ手が附いたのを幸ひに、それを叩き賣つてしまひ、それに貨物を賣り放つたお金も合せて、船脚の速い小型の船を買ひ込んで、この船を海賊船に仕立てるために必要な武装を施しました。そして、愈々他人の財産、殊に土耳其人のそれを掠奪しにかゝりました。處が、この稼業では、地道な商賈よりも、ずつとこの男に運が向いて参りました。さうして土耳其人の船を掠奪しながら、一年も経過してゐるうちに、彼は商人であつた頃の損失を取り戻したばかりではなく、以前の財産に數倍するものを手に入れました。が、最初の不幸に懲り／＼してゐ

ましたので、二度とそんな憂目に逢ひたくなければ、どうしてもそれ迄に手に入れたもので満足して、これ以上懇張つてはならないと思ふだけの分別は着いてゐました。

そこで彼はそれ迄溜めた財寶を握つて故郷に歸らうと決心しました。それにもう商賣には懲りてゐましたから、手にした金を他の方面に投じて見ようなどとは思はないで、それ迄海賊稼業に使用してゐた船に乗つて、眞直に家路に就いたのでした。處が、アルヒベルに着いた時、あの晩急にシロツコと稱ばれる東南の熱風が烈しく吹いて参りました。その風は彼の進路を妨げたばかりか、あまりに波の高いつとところから、流石のランドルフオも小型の船ではこの大海を乗り切ることが出来ないで、小さな島嶼のある灣内に連れて、天候の回復を待たなければなりませんでした。

その後間もなく、コンスタンチノーブルからの歸航中、同じ暴風の難に遭つた大きなジェノアの荷物船が命からくすその入江に逃げ込んで参りました。この二隻の船の所有者どもは、例の小型の船を見て、それが誰の船であるか確めると、かねてランドルフオの富を噂に聞いてゐただけに、貪慾と掠奪の天性を發揮して、その船を我物にしようと決心したのですね。そこで彼等はまづランドルフオの船が逃げないやうに路を塞いで置いて、それから乗組員の中の幾人かを上陸させ、それに毎その他の武器を持たせて、ラン

ドルフオの船の乗組員がこちらの射撃を恐れて、陸に逃げ上るのを妨げるに都合の好い場所に待ち伏せさせました。それからその荷物船を端で引張らせたり、又は潮の流れを利用して来たりして、彼等はランドルフオの船の直ぐ近くまで寄つて来ました。そして、ほんの僅かな時間で、苦もなくその船を取り押へてしまひました。しかも味方には一人の怪我人も出さなければ、その船に乗つてゐた漕手の奴隷どもからも何等の抵抗をも受けなかつたのです。で、ランドルフオを自分達の船に移してから、その船に積んでゐたものを悉く掠奪した上、それを洗滌させてしまひました。一方ランドルフオにはその所有品の中から僅に短衣一枚しか残してやりませんでした。

次の日になると風向きも變りましたので、この二艘の船も西方に向つて全一日の間幸福に船路をつゞけることが出来ました。處が、夕方頃から俄に暴風が起つて、海が浪立ち、二隻の船はお互ひに離れ々々になつてしまひました。そして、不幸なランドルフオの乗つてゐた方の船は、この風のためにケファアロニア島の沙岸に非常な勢ひで叩きつけられ、宛然壁に投げつけられたガラス瓶か何かのやうに、滅茶苦茶に壊れてしまひました。いろ／＼な種類の貨物箱だの板切れだのが早くも海一面に漂つてゐました。かゝる難船の場合の常として、船員の中でも水泳の心得のある者

は闇の中を盲目に足掻き廻りながら、何でも身邊に流れて来るものを掴まうといたしました。わが不幸なランドルフオも昨日までは屢々死を冀ひ、乞食になつて歸郷する位なら、いつそ死んでしまひたいとまで思つてゐましたものゝ、今や目前に迫る「死」を見ては、矢張り動願しない譯に参りませんでした。そして、他の人同様手に觸れた木片に獅噛みついて、ほんの今少時溺死しないでさへゐたら、多分神様が手を藉してお助け下さるだらうと心細い希望を抱いたもので御座います。で、その板切れに身を託したまふ、波と風とに一晩中彼方へ遣られ此方へ遣られしながらも、どうにかかうにか生命だけは保つてその夜を明かしました。

やつと夜が明け放れた時、ランドルフオは四方を見廻しましたが、茫々たる水と漠々たる空との外には、たつた一つの木箱が目に入つただけで御座いました。その木箱は何度も彼の方へ近づいて来ては、今にも衝突つて怪我をさせられさうになるので、ひやく／＼しながら、彼はその度毎に、もう餘に力ありませんでしたが、兎に角ありたけの力を出して、手で向うへ押し遣つたもので御座います。處が、そんな事にはお構ひなしに、突然旋風が空中に起りまして、海上に降つて参つた上、例の木箱に烈しく吹き當てました。すると、その木箱がランドルフオの跨つてゐた板子に

衝突りまして、ためにランドルフオは板子諸共しばらくは海の底深く沈んでしまひました。あまりの恐ろしさに新しい力を生じた彼は、再び海面に浮び上つて来て、見ると、今迄の板子は最早泳ぎつけさうもない位遠くへ漂ひ去つてゐるのですね。そこで彼は手近にあつた件の木箱に泳ぎ着いて、その蓋の上に胸を當てがたまふ、両手でもつて出来るだけ箱の重心を保つやうにしてゐました。かういふ状態で、波のまに／＼彼方此方と漂ひながら、何處で手に入る術もありませんから食ふ物とてなく、たゞ水だけはいやといふ程飲まされて、西も東も知る由もなく、海より外に見るものもなく、一日一夜を過ごしました。

神様の挿理か風の吹き廻しか、兎に角その次の日にランドルフオは海綿のやうに水膨れになつて、それでも溺れる者が何でも構はず掴むやうに、木箱の縁に固く獅噛み着いたまふ、コルフアイ島の沿岸に漂着しました。幸ひなことは、そこに一人の貧しい女が皿小鉢を砂と鹽水とで洗つたり磨いたりしてゐました。最初彼が岸近く漂つて来るのを見た時には、彼女はそれを人間だと見分けることが出来なかつたので、ぎよつとしながら、聲を揚げて逃げ出してしまひました。ランドルフオの方でも、最早口を利くだけの氣力もなければ、眼もよくは見えませんでしたので、この女に向つて救助を求めることが出来なかつたのです。が、

潮の加減で木箱はだん／＼岸の方へ打ち寄せられるし、女の方でも木箱であることが分りました。注意して見てみると、まづ最初にその木箱にしつかりと獅噛みついてゐるランドルフオの兩腕に氣が附いて、それからその顔も見えて参りましたので、漸く事の真相が推量されました。その哀れな有様は彼女の同情を惹いたのですね。で、好い工合に、その時幾分かの風を見せた海の中へ二三歩這入つて、木箱諸共ランドルフオの頭髪の手を掴んで岸まで引き揚げました。彼女はやつとの思ひで男の手をその木箱から引き離しました。そして、傍にゐた自分の娘の頭の上にそれを載せて自分は宛然小さな子供でも連れて行くやうにその男を背負つて村へ歸つて参りました。そこで先づ彼を風呂に入れまして、一旦失はれた身體の温もりと、體力の一部が回復して来るまで、湯でその體軀を洗つたり擦つたりしてやりました。それから時を見計らつて、お湯から上げまして、少し許りの好い葡萄酒と麵麴のやうなものを與へて元氣を附けさせました。そんな風にして、彼が再び體力を回復して意識を取り戻すまでと云ふものは、數日の間力に及ぶ限りの看護をいたしました。

で、もう好い時機だと思ひましたので、この善良な女は、相手の命の親とも云ふべき例の木箱を渡して、今後の身の振り方を自分で附けるやうに申しました。處か、ランドルフ

オの方では、そんな木箱のことは一つも覚えてゐませんでした。女が木箱を持ち出して來た時には、兎に角それを受け取りました。そして、大した價のあるものとも思はれないが、それでも二三日の露命を繋ぐには足りるだらうと考へたのですね。けれども、その箱が非常に軽いものだと知ると、彼はこの果敢ない希望をも棄ててしまはうといたしました。が、ある日この女房のゐない間に、一體、中には何が入つてゐるだらうと、その蓋をこぢ開けて見ました。すると、その中にはばらの寶石や、指環その他に欲めたのやが澤山しまはれてゐたのですね。幸ひ彼は寶石類の値踏みも多少は心得てゐたので、直ぐにその値段を算用することが出来ました。そこで彼は、再び欣喜雀躍しまして、神様がなほ自分をすつかり見放してしまはれなかつたことを深く感謝いたしました。が、これ迄はんの僅かの間に二度まで運命の神に小つ苛く遣つ附けられてゐたので、三度目を慮つて、これ等の寶石類を無事に故郷へ持ち歸られるやうに、特に注意して仕事にかゝりました。とうとうしまひに彼はこの寶玉類を悉皆襤褸で好い工合に包んで、さてその家の女主人に向つて、箱はもう要らないから取つて置いて貰ひたい、その代りにどうか袋を一つ頂かれませんかと申し出たもので御座います。善良な女は喜んでそれに應じました。そこで、彼は出來

るだけ丁寧なこれ迄親切にして貰つた禮を述べて、彼女に訣別を告げた上、短艇に乗り込んで、例の袋を肩にしたまま、プリンデイズに向つて出發しました。そこから彼は海岸に沿つて徒歩でトラニまで遣つて参りました。その土地には自分と同郷のもので、呉服屋を開いてゐる二三の人が御座いましたので、彼は此の人達に、例の木箱の事だけは取り除けにして、今迄出逢つた危難をすつかり話して聞かせました。それを聞くと、彼等は親切にも着物を呉れた上、馬まで貸して、目的地のラヴェロまで安全に着かれるやうに、案内者の世話までして呉れました。

ラヴェロへ着いて、彼は始めて安堵しました。彼はこゝまで自分を守つて下さつた神に深い感謝を捧げながら、例の袋を開きました。そして、前にしたよりもつと精細にその中味の値踏みをして見た結果、頃合ひに、いや、極めて安價にそれを賣り放しても、なほ出發當時に比して、二倍の富を有するだけの寶石を持つてゐることが分かりました。で、好い機會を見て、それを手放しまして、先に自分を海の中から拾ひ上げて呉れたかの善良な女にも、その親切に對する感謝の徴として、相當な金額をコルフアイ島に送つてやりました。それから又トラニで自分に着衣を惠んで呉れた同郷の人達にも、同じやうにお禮をいたしました。そして、その餘は自分の手許に残して置いて、それから

もう商賣などには手を出さないで、そのお金で至極安樂に一生を送りました。

第五話

ベルジアのアンドレウツチオ、馬を購はうとしてナポリに來て、一夜の間に三度まで死地に陥りながら、而もその都度生命を完うしたばかりでなく、そのため一個の紅玉を手に入れて、無事に故郷へ戻つた話。

さてお話の順番が廻つて來たファイアマッタは次の様に語り始めました。只今のお話の中でランドルフオが手に入れた寶石のことから、私も或お話を想ひ着きました。ラウレツタさんのお話が何年も何年もかゝつた事柄であるのに、これから申上げるとお話は只一夜のうちに起つた事件であるといふ相違はありますが、しかも前のそれに劣らない程多くの危難を含んだもので御座います。

昔ベルジアに名をアンドレウツチオ・デイ・ピエトロと呼ぶ一人の若い博勞が住んでゐました。ある時彼はナポリに好い馬市が立つといふ話を聞きまして、黄金五百枚を懐中して、未だ他國に旅行したことのない身でありながら多くの商人達と一緒にその市に向つて出發致しました。ある日

曜日の夜の引明けに彼はナポリに到着しました。そして、宿の主人の教へてくれた指圖に従つて、翌日になると早速市場に参りました。彼は其處でいろ／＼な馬を見て、随分気に入つたのもありましたので、値を着けるには着けましたが、つい商談が纏まりませんでした。さうしてゐる間にも自分が本當に馬を買ふつもりだといふことを見せようとして、不注意でもあれば、一つには又實際経験もなかつたからでせうが、市場にうよ／＼してゐる人達の目の前で、何遍となくお金の一杯入つてゐる財布を出して見せたものですね。で、さういふ風に値切つたり、財布を見せびらかしたりしてゐる間に、僅かのお金で人に身を委せる、而も非常に美しい、シシリ生れの若い女が、彼の氣の附かないうちに通りかゝつて、その財布に眼を着けました。そして、「あゝ、あのお金が私のものだつたら、どんなに好いだらうな」と、獨語を云つたまゝ行き過ぎました。

この若い女は矢張りシシリ生れの一人の老婆を伴つてゐましたが、老婆はアンドレウツチオを見ると、主人をそのままにして置いて、彼の方に駆け寄りながら懐かしさうに抱き着きました。女はこれを見て、何とも云はずに、少し離れた處に立つて、老婆とこの博勞との會談が終るのを待つてをりました。アンドレウツチオが老婆の方へ眼を遣ると、豫て知り合ひの婆さんなので、これも嬉しさうに挨拶

を致しました。老婆は後刻彼の宿へ訪ねて行くからと約束して、ほんの一寸話をしただけで別れました。で、アンドレウツチオも引き續き馬を値切つて見ましたが、とう／＼その朝は取引になりませんでした。

シシリ生れの若い女は、最初にこの博勞の財布を見、次に召使の老婆が彼と知り合ひであるのを知つて、何とかしてこの男からあの財布を、少なくともその一部分だけでも捲き上げてやる方法はないものかと心を碎きました。そして、その目的で老婆に、あの人は一體何といふ名前で、何のためにナポリにやつて来たのか、又どうしてお前はあの人を知つてゐるのかなどと、何氣ない體に訊ねて見ました。すると、老婆はアンドレウツチオのことなら何から何まで知つてゐて、彼自身の口からでも聞くやうに、いと詳細に話してくれました。と申しますのも、この老婆は、最初はシシリで、後にはベルジアで、アンドレウツチオの父親の許に長い間奉公してゐたからで御座います。なほ彼の宿屋だのナポリに來た用向きだのに就いても、問はれるまゝに話して聞かせました。

かうしてアンドレウツチオに就いては親兄弟から一族の名前までも知りましたので、このシシリ生れの若い女は、その知識を基にして自分の目的を達するため非常に巧妙な手段を案出しました。そこで彼女は家に歸るや、老婆がそ

の目アンドレウツチオを訪ねることの出来ないやうに、全一日かゝるやうな仕事を命じました。それから、かういふ用件を巧く遣つてのけるやうに平生から仕込んである小婢を、夕方近い頃、アンドレウツチオの泊つてゐる宿屋に遣はしました。小婢はうまい工合にアンドレウツチオがたゞ一人宿屋の戸口に立つてゐる處へ來合はせて、彼の在否をその當人に訊ねました。自分がそれだと答へられると、彼女は相手を傍へ引張つて行つて、次の様に申しました。「旦那様、若し御都合がお宜しかつたら、この市の一人の貴婦人がお目にかゝつてお話ししたいと云つてらつしやるんで御座いますかね。」

アンドレウツチオは一寸この女の言葉を考へて見ましたが、元來彼は自分のことをなかく好男子だと自惚れてゐましたのでこれはつきりその貴婦人が自分に惚れたのに相違ないと、まるでナポリには他に美男子がないかのやうな考へを起しました。そこで、直ぐに承諾の旨を答へた上、たゞ何處で、何時その貴婦人に會ふのかと訊ねました。「旦那様」と、小婢はそれに答へました。「お宜しかつたらどうぞ直ぐに入らして下さいます。奥様はもうお家でお待ち兼ねでいらつしやいますから。」

そこでアンドレウツチオは自分の泊つてゐる宿屋の主人にも断らないで、直ぐにかう答へました。「ちや、案内して

おくれ、隨いて行くからね。」

かういふ風にして小婢は、「暗き洞穴」と稱ばれる、その名を聞いただけでも風儀の程が想像されるやうな街にある彼女の家にアンドレウツチオを引張つて参りました。アンドレウツチオの方ではそんな事は勿論知つてゐよう筈が御座いせんから、怪しい家とは思はなかつた。たゞ愛すべき貴婦人に會ひに行くのだとばかり思ひ込みました。小婢の後にくつついて何氣なく家の中に入らうとしました。その前から小婢が「奥様、アンドレウツチオ様をお連れしました。」と大きな聲で喚ばりましたので、例の女は、彼が階段を上らうとした時、恰度戸口へ迎ひに出て参りました。彼女は年齒も未だ若く、顔も綺麗で、體つきもすらりとしてゐました上に、極めて上品に着飾つて居りました。アンドレウツチオが近づいて参りました時彼女は三段も上から兩腕を擴げて彼を出迎へながら、いきなり相手に抱き着いてしまひました。そして、可愛さ餘つて口も利けないといふやうな振りをしながら、しばらくはこの状態をつゞけて居りました。それから彼女は泣いて男の額に接吻しながら、感情の上ずつた聲で申しました。「おゝ、アンドレウツチオさん、よく來て呉れましたね。」

アンドレウツチオもこの劇しい愛撫には奇異の感に打たれて、すつかり面喰ひながら、「奥さん、あなたの御知遇を

得て眞に光榮に存じます」と、やつとこれだけ申しました。が、彼女は男の手を取つて廣間に案内した上、そこから更に何一つ口も利かないで、薔薇やオレンヂやその他いろいろな香氣の高い花で費えを厭はず敷らせてある自分の部屋へ連れ込みました。見ると、その室の中には、一つの寢臺が置いてあつて、その上から立派な帷幄が吊してあるのですね。それからこの土地の風習として澤山の着物が衣箱に懸けてあるばかりか、室中一杯に高價な美しい什器が並べて御座いました。それを見たアンドレウツチオが、何にも知らぬ初心者だけに、相手を身分の高い婦人であるやうに思ひ詰めたのは無理もない次第で御座いませう。

で、二人が寢臺の裾の方にある櫃の上に腰を下ろした時、彼女は次のやうに語り始めました。「アンドレウツチオさん、貴方は屹度わたしが貴方をお迎へした時の素振りと涙とを不審に思召したことでせうね。だつて、貴方はわたしを御存じないばかりか、多分わたしの身については何一つお聞きになつたこともありません。せうから。ですが、このわたしが他でもない貴方の姉妹に當るとお聞きになつたら、尙更吃驚なさることと思ひますわ。わたしははつきり申しますがね、神様のお引き合せで、かうして生きてゐる間に阿兄様にお目にかゝることが出来た以上、それにつけても皆様のお目にかゝることが出来たらどんなにか

嬉しいでせうねえ。わたしはもう落ち着いてこの世を去ることが出来るでせうよ。いゝえ何時でも氣の向いた時に死ぬことも出来ますわ。かうは申しますものゝ、多分貴方は未だ何にも御存じでありますまいから、何も彼も私から申し上げることにせませう。私達の阿父様のピエトロはお聞き及びでも御座いませうが、長い間パレルモに住んでゐられました。そして、あの通り眞心のある方ではあるし、それに如何にも人好きのする人でしたから、知つてゐる人には誰からも愛されてゐましたし、また現に愛されてゐます。けれども、それ程あの方を愛してゐた人達の中でも、殊にわたしの母が一番あの方を愛したのでした。母は貴族の生れで、その當時は恰度夫を亡くしてゐたのでした。さうして、自分の父や兄弟達が怒るのも意とせず、又自分の身分も顧みないで、あの方と親しくした結果、御覽の通りこのわたしといふ者がこの世の日の目を見るやうになつてしまつたので御座います。處が、已むを得ない事情から、あの方はパレルモの地を去つて、故郷のベルジャに歸られましたが、未だほんの子供であつたわたしとわたしの母とを後に残して行つた切り、わたしの知つてゐる範圍では、それ以來たゞの一度もわたしのためにも、又母のためにも心を悩まして下さつたことはなかつたので御座います。若しもあの方がわたしの父でなかつたら、わたしはその仕打ち

を本氣になつて憤慨したことで御座いませう。えゝ、娘としてのわたしに對する父の愛を論外に置きましたも、母に對するあの方の忘恩を想ふと、どうしてもさうせずにはゐられませんからねえ。實際母は忠實な愛の一念からして、自らと共に、その持てる凡てのものを父の手に委ねてゐたので御座いました。

「けれども、今更こんな事を申した所で何になりませう？ 一體過談と申しますものは、殊にそれが昔起つたことだとしますれば、それを改善するよりも批難する方がずつと易しう御座いますからね。兎に角、さう云つたやうな次第で、父はわたしを未だ子供の時に見捨てました。が、御覽の通り、わたしも段々成長して参りましたので、母はジェルジエソテイ市の或貴族にわたしを嫁づけられました。良人はわたしと母とに對する厚意から、わざ／＼パレルモに引移つて参りました。しかし良人はゲルフ黨で御座いましたので、王様のカルロ陛下と密かに相結んでゐました。處が、それがまだ成果を見ないうちに、フレデリク王の耳に入りましたので、わたしは恰度シリ島第一の貴婦人になりかけてゐた處では御座いましたが、その地を遁れなくてはならなくなつてしまひました。そこで私達は咄嗟の間に集めた僅か許りのものを持つて、——と申しますのは、當時私達の所有してゐたものと比べますと、全く僅か許りのも

ので御座いましたからね、——兎に角地位も住宅も打捨つたまゝ、この地へ避難して参つたので御座います。處が、この地に参りますと、前に申上げましたカルロ陛下は私達の志を厚く感謝なさいますして、陛下のために私達が失つた財産の一部を賠償なさるおつもりで御座いませう、澤山の土地や家屋などを御下賜になりました。加之、その後も絶えずわたしの夫、即ち貴方の弟に對して大分の収入をお圖り下さつてゐるので御座います。いづれそれは貴方の御覽に入れる折りも御座いませう。で、そんな譯で、わたしは目下この地に参つてゐるのですが、此處で可愛しい阿兄様のお目にかゝることが出来たのは、貴方のお蔭といふよりも神様のお蔭で御座います。かう云つて、この女は再び相手を抱擁したり、涙を流しながらさも懐かしげに、その額に接吻したり致しました。

アンドレウツチオは、この美しい女が筋道正しく、何のこたはりもなく、一言の淀みもなければ、一度の舌の纏れもなしに、すら／＼述べ立てる作り話を聞き、更に自分の父が實際パレルモに住んでゐたことを思ひ浮べ、尙自分の經驗に照らして、惚れ易い青年の心境を考量して見た上、最後に感動の涙や、抱擁や、姉妹としての清らかな接吻などを受けて見ると、彼としては女の言葉に全幅の信を措かずにはゐられませんでした。で、彼女がその話を終るや、

直ぐに彼は申しました。「奥様、貴方は、私の父が、どんな理由がそこにあつたにもせよ、兎に角貴方についても又貴方の阿母様についても何一つ話したことがなかつたといふこと、或ひは話し位したかも知れませんが、少なくとも私はそのことを少しも耳にしなかつたといふこと、従つて貴方のことについては、貴方といふ方が全然この世においてならなかつたと同様に、少しも存じませんでしたといふことをお考へ下さいませなら、只今のお話を聞いて、私がどんなに吃驚いたしましたも極めて自然なことだと思召して下さることと存じます。」

「ですが、私はこれ迄一人ぼつちであつたし、それに貴方のことなどは夢にも期待してゐなかつただけに、貴方のやうな姉妹のあることは、愈々以て嬉しい次第で御座います。實際、貴方などはどんな貴族の同胞としても恥づかしくない方ですから、卑しい商人の私に取つてどんなに可愛しい姉妹であるかは口に出して申上げる事も出来ない位です。時に一つお伺ひしたいのですが、どうして貴方は私がこのナポリに来てゐることを御存じになつたのですか。」
それに對して、彼女は次、襟に答へました。「それは平常わたしの家に入入りしてゐる可哀さうなお婆さんから聞いたんです。何でもそのお婆さんは私達の阿父様の家に、パレルモでも又ベルジアでも、長い間御奉公してゐたとか

申すことで御座います。若しわたしが見知らぬ家に突然貴方をお訪ねするよりも、かうしてわたしの家に來て頂く方が穩當だと考へませんでしたら、もつと早くお目に懸つてゐたで御座いませうよ。」かう云つて置いて、彼女は非常に詳しく彼のあらゆる親族のことを一人々々名を擧げて訊ねました。それに對して、アンドレウツチオは一々詳しい話をして聞かせました。そして、そのために彼はよく／＼相手を信用するやうになりました。實際、それは信用しなかつた方が彼に取つては身の爲めになつたのでせうに。

かう云つたやうな話をつゞけてゐる間も、暑氣は相變らず激しう御座いましたので、彼女は希臘産の葡萄酒とビスケットとを持つて來させてアンドレウツチオに飲ませました。そのうちに食事の時間になりましたので、アンドレウツチオは宿に歸らうと致しました。が、この偽物の姉妹はどうしてもそれを承知しません。そして、大變氣を悪くしたやうな振りをしながら、彼に抱き着いて申しました。「まあ、よく分りました。貴方はわたしのことなんか何とも思つていらつしやらないのだわね。よう御座いますか、貴方は自分の姉妹の許にいらつしやるのですよ。しかもその姉妹には今日まで未だ一通もお逢ひになつたこともなかつたのです。そして、その妹の家に來ていらつしやるのです。本來なら、到着と同時にその家に泊るべきぢやありません

か。それなのに、もう歸つて、宿屋の御座を召し上らうと仰しやいますのね。残念なことに、良人は只今家に居りませんけれど、兎に角女として出來るだけの事をしてお婆應をしたと思つてゐますのにねえ。」

かう云はれては、アンドレウツチオも返す言葉がありませんでした。「いゝえ、私だつて貴方を親身の姉妹と思つて愛してはゐますよ。ですが、私が宿屋に歸らなかつたら、伴侶の者は今晚中私の食事を待つてゐるでせうし、そのために氣を悪くするかも知れませんか。」

「何です、そんなことを！」と、彼女はそれに答へました。「わたしの家だつて、今晚はお歸りにならないと宿屋に云はせる位の人間はゐるぢやありませんか。それよりも、お伴侶の方にこちらへ來て頂くやうに仰しやつて下さつた方が、わたしに對してもどの位親切だか分らないし、貴方にして、元々それ位の義務は皆さんに對してあらうぢやありませんか。そして、食後、さうしたかつたら皆様と御一緒にお歸りになればいゝでせう。」

アンドレウツチオは、今晚の所は仲間と會食などしたくない。で、相手がどうしてもさうしたいと云ふのなら、自分のことは思ひ通りにしてくれるがよいと返辭をいたしました。そこで、彼女はアンドレウツチオの宿屋に人を遣つて、今晚の食事には彼を待たなくてもよいと言傳をさせたやう

な體裁をつくりました。なほいろ／＼な話をした後で、彼等は食卓に就きました。贅澤な御馳走で皿數なども深山御座いました。

かねて謀んで置いたこととて、食事は深更に及びました。遂にそれも終つて、アンドレウツチオが宿屋に歸らうとしますと女はどうしてもそれには賛成し兼ねると云ひ出しました。このナポリは、少なくとも土地不案内の人にとつては、決して夜分歩いてはならない所であるし、それに先刻使を遣つて、食事は歸らないとも云はせてあるのだから、乾度夜分もお歸りにならないものとしてゐるに相違ないと云ふのですね。彼はこの言葉を信じた上に、相手を姉妹だと思ひ込んでゐましたので、一緒にゐることが嬉しく思はれて、そのまゝ泊ることに致しました。女の方では、食事の後もなほ引き續いて話し込みました。これも亦一つの手なのですね。そして、夜の大部分が経つた頃になつて始めて、何でも御用があつたらこれに仰しやつて下さいと、一人の少女を部屋に残して置いて、自分は他の下女達と共に他の部屋に退きました。

夜更けになつてもなかく／＼お着う御座いましたので、アンドレウツチオは一人になると直ぐに上衣を脱いで、ずぼん迄取つて、それを疊んで枕の下に入れました。が、その時用便を催して參りましたので、かの少女に便所は何處に

あるかと訊ねました。すると、少女はその部屋の一角の扉を指して、「あそこをお入りになつて下さい」と申しました。アンドレウツチオは何気なくそこへ入つて、一枚の板に足を載せました。處がその板は一方の端が外してありましたので、彼はそれと一緒に穴の中へ落ちてしまひました。が、これも神様の御恵みで御座いませう、随分深い所へ落ちて行つたけれども、その中に一杯になつてゐた汚物を浴びた位で、身には少しの怪我もいたしませんでした。

只今申上げたことや、更にこれから申上げることがよく了解して頂くために、その場所の構造を一通りお話しして置くことにいたしませう。それは狭い路地の中で、二軒の並び合つた家と家との間に、二本の梁を渡し、その上に二三枚の板を打ち付けて、そこに躑躅む場所が設へてあつたので御座います。アンドレウツチオが一緒に落ちたのも、この板の一枚でありました。で、飛んだ事になつたものだと狼狽へながらも、彼は深い路地の底から少女を喚び立てましたが、少女はアンドレウツチオが下に落ちた物音を聞くよ、直ぐに主人の許へ駆け着けて、この出来事を報告しました。その女は直ぐにアンドレウツチオの着物が部屋に残してあるかどうかと見に遣つて参りました。見ると、その着物を始めとして、馬鹿用心にも、彼がいつも身に着けて持ち廻つてゐた財布まで、ちやんとそこに御座いました。か

うして彼女は目的を達しました。それ迄、パレルモ生れの身で、ベルジア生れのアンドレウツチオの姉妹を装ひながら、いろ／＼艮をかけたのも、この目的のために外ならなかつたのですから、かうなつてはもうそんな者は何うなつても構ひません、彼が落ちて行つた時に開け放して置いた扉を急いでびしやりと閉め切つてしまひました。

アンドレウツチオはかうしてゐる間も、少女の返辭がないので、いよ／＼聲を高めて喚び通しに喚んでゐました。が、何の甲斐もありませんでした。そこで彼はいろ／＼考へて見た結果、これは自分が欺されたのかなど、今になつてやつと氣が付きました。彼は路地と大通りとの境目を成してゐる小さな壁を攀ぢ登りました。そして、まだ好く記憶えてゐたその家の戸口に廻つて、長い間その扉を叩いたり、揺振つたり、大聲に喚んだりしてゐましたが、矢つ張り何の甲斐もありませんでした。そこで彼は今更のやうにわが身の不幸を明かに見て取つて、おい／＼泣きながら申しました。「あゝ、情ないことになつた！一寸した間に、姉妹一人と五百枚の黄金とを失くしてしまつたよ。」こんな調子で愚痴を云ひながら、彼は又もや戸口を敲いたり喚んだりし始めました。あんまりその騒ぎが甚しいので、近隣の人達が皆目を覺まして、とう／＼遣り切れないで寢床から起き上つた位で御座いました。そのうちに女の家の下女が窓

の處へ遣つて参りまして、睡さうな風を装ひながら、さも蔑したやうな調子で、「戸を叩くのは誰なの？」と訊ねました。

「私を知らないのか」と、アンドレウツチオは申しました。「私は奥さんの兄弟のアンドレウツチオだよ。」

が、女中はそれに答へました。「お前さん酔つ拂つてゐるんだか、もうお歸りよ。明日の朝早く又お出で。一體何處のアンドレウツチオのことを云つてゐるのか、また何を愚圖愚圖饒舌つてゐるのか、私にはさつぱり解らないよ。まあ溫和しく歸つて、どうぞ私達を寝かしておくれ。」

「何だ」と、アンドレウツチオは云ひました。「俺の云ふことが解らないつて？ シシリ人と來たら親類でもさうなんかな。それなら仕方もないが、せめて二階に脱いである俺の着物だけでも返して呉れ。さうすれば溫和しく歸つてやるからな。」

すると、女中は面と向つて嘲るやうに申しました。「まあ、お前さんは寢惚けてゐるんだね。」かう云つたかと思ふと、身を隠して、窓をばたりと締めてしまひました。

そこでアンドレウツチオもいよ／＼欺されたといふことが解りましたので、怒りに燃え狂ひながら、これはもう溫和しく懸け合つてゐても駄目だから、腕づくでも取り返してやらうと決心しました。そのために、今度は大きな石を

取り上げて、今迄よりはずつと激しく、どん／＼扉を叩き始めました。さうなると、それ迄にもう目を覺まして床から起き上つてゐた近所の人々は、これは何處かの無頼漢が好い加減な云ひが／＼りを付けて女達を苦しめてゐるのだらうと思ひましたので、無暗に腹を立てながら、方々の窓や戸口から首を出して、例へば路次の中の犬が總が／＼りで見知らぬ犬に吠えつきでもするやうに喚き立てました。「こんな夜半に我鳴り立て、女ばかりの家を騒がすなんて怪しからんぢやないか。さあ、もう行つた／＼。後生だから寢かしてくれよ。用があるのなら、明日又來たらい／＼ぢやないか、夜半の騒ぎは御免蒙りたいものだね。」

勿論、アンドレウツチオはそれ迄見も聞きもしませんでしたが、かねてこの女のために男を取り持つ役をしてゐた無頼漢が御座いまして、恰度その家に泊り込んでゐました。が、近所の騒ぎの尻馬に乗つたのか、大膽にも窓から首を出して、力のある、粗暴な、さも腹を立てたやうな聲を立てて、「そこにゐるのは誰だ？」と喚鳴りつけました。

アンドレウツチオがその聲を聞いて上の方に眼を遣ると暗くてよくは分りませんでした。それでもどうも唯事ではないといふことが容易に呑み込めました。その男は見ただけでも恐ろしくなるやうな、眞黒な鬚を生してゐたのです。そして、それ迄よく眠つてゐたが、今寢床から飛び出

して来たとても云ふやうに、大欠伸をしながら両手で眼を擦つて見せました。アンドレウツチオは内心びく／＼しながら、かう答へました。「私はこの家に住んでゐられる貴婦人の兄弟ですよ。」

處が、この男はアンドレウツチオの言葉がまだ終るか終らないに、前よりもつと恐ろしい聲で嘔鳴りつけました。「もう客数はならねえ、降りて行つて打ちのめしてやるぞ、酔拂ひの豚野郎め、お蔭でおち／＼寝てられねえぢやねえか、指一本動かねえ位叩きのめしてやるから、さう思へ。」から嘔鳴ると共に、彼は身を翻して窓を閉めました。それを見た近所の人達は、平常からこの男の遣り口を知つてゐましたので、親切にもアンドレウツチオに申しました。「後生だからもう歸つて下さい。ぐづ／＼してゐると、本當に殺されてしまひますぞ、お歸りになるに越したことはありませんよ。」

アンドレウツチオはまづその男の恐ろしい聲と顔つきで脅かされ、次に彼に對する同情からかう云つて呉れるらしい人々の勧めに一層心を動かされました。そこで萬解の恨みを呑みながら、又失つた金の事を考へては身も世もあらぬ程落膽しながら、かねて泊つてゐた宿屋の方へとぼとぼと歸つて参りました。が、身から發する悪臭に堪へかねて、兎に角海に行つて船を洗はうと、ルガ・カタラー

せました。すると、二人は、この男が何處でこんな目に逢つたのかを直ぐに推量して、互ひに相を見合せながら、「そりやもう確かにあのスカラボイ・ホ・ブツタフオーコの家に違ひねえよ」と申しました。その後で、一人がアンドレウツチオに向つてかう申しました。「お前は金を失くしたやうなもの、妙な所へ落つちて二度と家の中に入つて行かれなかつたなあ、そりやお前、神様の有難い思召しと云ふもんだぜ。若しお前がその罪に落ちなかつたとすりや、屹度首をかくれてゐるだらうよ。さうなつた日にや、金ばかりか命まで玉なしだ。今更泣いたつて始まらねえや。盗られた金は諦めなよ、天のお星様と同様取返されつこねえんだからね。だが、この事を誰かに話したと彼奴等が知つて見ねえ、お前の命も危ねえもんだぜ。」それから二人は又しばらくの間お互ひに話しをしてゐましたが、再び彼の方を向いてかう申しました。「おい、若僧、聞いて見ると、お前も全く氣の毒だ。處で、物は相談だがね、これから俺達が遣らうとしてゐる仕事を助けて呉れりやあ、お前が先刻失くした金よりかずつとでけえ所をお前に振り當ててもいゝと思つてゐるんだが、どうだ、遣つて見るかね。」アンドレウツチオも自暴自棄になつてゐた處とて、何でも遣らせて貰ひませうと答へました。

ナと稱ばれる通に遣入りました。そして、山の手から海岸近く下つて参りますと、二人の男が手に角燈を下げて、彼の方にやつて来るのが目に着きました。これは捕吏か、それではなければ何か又悪事をたくらんでゐる連中かも知れないと思ひましたので、直ぐ側にあつた空家の中に身を隠しました。すると、この二人の男も、まるでこの空家を目指して遣つて来たのであるやうに、同じ家にすぐ後から入つて参りました。そこで、一人の男は今まで肩に擔いでゐたいろ／＼な鐵製の道具を床の上を下ろして、今一人の男と共にその道具を檢査しながら、いろ／＼とその道具のことを話し始めました。かうして話しをしてゐる間に、一人の男が急にかう云ひ出しました。「おい、一體何うしたと云ふのかね！ こいつあ、おそろしく臭いぞ。どうもたゞの臭ひぢやねえね。」

さう云ひながら、その男は今まで床の上に置いてあつた角燈を少しばかり上の方に持ち上げて見ました。すると、哀れなアンドレウツチオの姿が目に入つたのです。二人は非常に驚いてかう叫びました。「一體そこにあるのは誰だ？」アンドレウツチオは黙つて居りました。そこで二人は彼の顔に角燈を突き付けて一體何うしてそんなに汚れてゐるのか、又そんな處で何をしてゐるのかと訊ねました。アンドレウツチオは、今までの出来事を獲らず話して聞か

處で、恰度その日に、最近昇天したこのナボリの大僧正ファイリツボ・ミメトロの亡骸が高價な寶石で飾られ、指は黄金五百枚以上の價値のあるルビイの指環を嵌めたまゝ、ナボリの本山に葬られたので御座います。二人の男はこの亡骸を掠奪しようとしてゐましたので、今その計畫をアンドレウツチオにも話して聞かせました。アンドレウツチオの方でも理性に耳を聳すよりは、たゞ慾得に眼が眩んで、彼等と行を共にしました。さて本山に向つて急いで参ります間に、アンドレウツチオの身體から發散する臭氣に氣持をわるくした一人がかう申しました。「何處かで一寸身體を洗つて、もうそんな厭な臭ひのしないやうにするわけにや行かないものかね。」すると、もう一人がそれに答へました。「うむ、井戸なら直ぐそこにあるよ。車も釣瓶も附いてゐるから、彼處へ行つて洗はせることにしようよ。」處が、井戸端に来て見ると、繩はありました。釣瓶は取り除けて御座いました。そこで彼等は、仕方がありませんから、彼をその繩に纏り着けて、井戸の中に吊り下げてやることにしました。その中で彼は自分で身體を洗つて、それが出来たら件の繩を捲振る。さうすれば、それを合圖に彼を引き上げて遣らうといふので御座います。彼等は早速その通り實行しました。處が、二人が彼を井戸の中に下げてやつたかやらないうちに、偶

ちに死體掠奪の盜賊として絞首臺に上らなければならぬから御座います。

かうしてまだ悲しい想ひに沈んで居りますうちに、彼は不圖この教會堂の中を多くの人達が往つたり來たりしながら、何やら話し合つてゐる物音を耳にしました。そして、更に驚くべきことには、この人達も彼とその仲間達同様の目的で遣つて來たらしいので御座います。が、石棺の蓋を振ち開けて、その蓋の下に突支棒をした時、彼等は例に依つて誰が入るかに就いて口論を始めましたが、何人も入らうとはしませんでした。長い間云ひ争つた揚句、とうとう一人の坊主がかう申しました。「貴様達は一體何を恐がつてゐるのだ？ 相手が喰ひつきでもすると思ふのかい。死人が誰に喰ひつくものか。それぢや俺が這入るぞ。」かう云ひながら、彼は石棺の縁で胸を支へるやうにしながら、身體を伸ばして、頭を外へ向け、足の方から這り込まうと致しました。それを見たアンドレウツチオは、立ち上つて、相手を引き摺り込まうともするやうに、坊主の兩足を捕まへました。捕まへられたと思ふか思はないに、坊主は「きやつ！」と聲を上げながら、一足飛びに飛び出してしまひました。この有様を見た他の人達も一緒になつて驚いたのは申すまでも御座いませぬ、宛然百千の魔物が自分達を追ひ懸けて來るとでも思つたやうに、足を空に逃げ出してしまひまし

た。それと知るや、アンドレウツチオは夢かとばかり喜びに溢れつゝ、開け放しにして置かれた石棺の中から這ひ出して、直ぐに元來た道から教會を脱け出しました。

とかうする間に、夜は全く明け放れました。アンドレウツチオは手に例の指環を飲めたまふ、海岸まで出て參りました。そして、そこから自分の旅宿に歸ることが出来ました。宿屋では、彼が一晩中歸りませんでしたので、伴侶の者を始め、宿の主人まで大層心配してゐました。彼は昨夜來の出來事を話して聞かせました、それから宿の主人の忠言に基づいて、一刻も早くこのナポリを離れる方が得策だといふことになりました。そこで彼は大急ぎで支度をして、ペルジアに向つて歸途に着きました。かういふ譯で、彼は始めの目論見通りに馬は買はないで、一個の指環に投資したことになつたので御座います。

第六話

マドンナ・ベリトトラ二兒を奪ひ去られ、自身は二頭の仔鹿と共に或島に逃れ、後に人の見出す所となつてルニジアナに到る。その地では子息の一人が國主に仕へて、その娘と通じ、事露れて投獄せられてゐた。その時に當つてシシリの住民は國王カルロに反旗を翻

した。ために彼女はその子息と再會した上、子息は國主の娘と婚を結ぶ。同時に他の子息も現れて、二人とも再び貴族に列せられた話。

淑女達と若い紳士達とは、フィアマッタに依つて語られたアンドレウツチオの冒險の話聞いて、大笑ひに笑ひました。その話が終るのを待つて、エミリアは女王の命令の下に、次のやうに話し始めました。――

運命の有爲轉變はまことに苛酷で堪へ難いもので御座います。従つて運命に關する話を伺ひましては、些とばかりその微笑みを見ると、兎角に陥り勝ちな美睡からも目醒めないではゐられないので御座います。ですから、私は幸福な方も不幸な方も同じやうにさうした話を聞いて、前者は身を戒める範となし、後者は身の慰めとすべきものだと考へてゐるので御座います。そこで、これ迄ももう皆様がいろいろ驚歎に値ひするお話をなさいました後では御座います。もう一つ次のやうなお話をさせて頂きたいと存じますが、それは實に涙ぐましいお話であるばかりではなく、又實際にあつたことで御座います。そのお話の中へ出て來る女主人公の惱みは結局幸福な終結を告げて居りますやうなものゝ、それが後日の幸福で償はれたとは思はれ兼ねる位大きく且持續的なものであつたので御座います。

皆様も御承知の通り、フリードリヒ二世がお亡くなりになつてから、マンフレッド陛下がシシリ島の王位に即かれました。その王の下に、ナポリの貴族で名をアリゲット・カペーチエといふ人が名望ある地位に就いてゐました。その方の奥方はベリトトラ・カラツチオラと申しまして、ナポリの名門の出で御座いました。さてこのアリゲットがマンフレッド陛下からシシリ全島の統治を委任されてゐる間に陛下がベネヴェンドの役で國王カルロに破られ、遂に戦死して、そのために王國全體が新王カルロ陛下に靡いてしまつたといふやうな噂が彼の耳に傳はりました。かうなるとアリゲットはシシリ島民の忠節には信を措く事が出来なくなりましたし、それに君の仇とも云ふべき人に仕へる氣もありませんでしたので、直ぐに逃走の準備をいたしました。處が、シシリ島民は早くもこの計畫を嗅ぎつけて、速かに手を廻して彼を始め故マンフレッド陛下の味方や臣下の多數の人々を囚へた上、これを新王カルロ陛下に引き渡しましたので、新王は苦もなくこの島を領有することが出来たので御座います。

事變が餘り急だつたので、ベリトトラ夫人も良人のアリゲットが何うなつたか分りませんでした。兎に角これ迄の騒動を見て絶えず恐怖におびえてゐた上に、愚圖々々してゐては何をされるか分らないと考へましたので財産全部

を打ち遣つたまま、漸く八歳になつたばかりの子息ギウスフレデイの手を引いて、當時妊娠の身を小舟に乗つて、リパリの方面へ遁れしました。其處で男の子を産み落し、その子をスカツチアトと名づけました。それから乳母を雇ひ入れまして、再び親族のゐるナポリに戻らうと、皆と一緒いっしょに小さな船に乗つて出帆しました。が、運の悪い時には悪いもので、このナポリに向つた船も途中で暴風雨に遭つて、ポンツオの島まで押し流されました。船人達はその島のある小さな入江へ逃げ込んで、そこで天候の恢復を待たうといたしました。處で、ベリトラ夫人も他の船客と同じやうに上陸しまして、餘り人氣のない離れた場所を探して、たゞ一人そこに身を投げ出したまま、良人アリゲットの身の上を思ふさま泣きました。これを毎日繰り返してゐましたが、或日いつものやうに、水夫や他の船客にも知らせないで、一人陸に上つて愁ひに沈んでゐる間に、海賊船が襲つて参りまして、何の抵抗もなしに彼等を捕へたまま、連れて行つてしまひました。

さてベリトラ夫人が日課のやうにしてゐた悲歎を済ませて、毎ものやうに、早く子供の顔でも見ようと思つて、海岸指して急いで歸つて参りますと、どうでせう、誰の姿も見えないではありませんか。最初は彼女もたゞ不思議に思ひましたが、すぐに思ひ當ることがありましたので、沖

の方に眼を遣ると、果せる哉、餘り遠くない海の上を一隻のガレー型の船に捕へられて曳かれ行く自分達の小舟が見えたので御座いますね。かうして彼女には、今や良人ばかりではなく、二人の子供迄も奪はれて、たゞ一人この離れ小島に、しかも失はれた三人の中の一人にでも再び逢はれるといふ希望もなしに、見捨てられ、取り残されてしまつたといふことが、はつきりしすぎる程はつきりと解りました。で、彼女は聲高く良人や子供達の名を喚びながら、その儘氣を失つて海岸に倒れました。

が、再び正氣に返つて、又しても泣いたり嘆いたりしてゐるうちに、そろ／＼體力が回復してまゐりました。そこで彼女は再び子供達の名前を口走りながら、島中の洞穴を一つ／＼探して廻りました。が、しまひには自分ながらこんな事しても何の役にも立たないといふことを覺りました。そのうちに日が暮れてまゐりますと、彼女は自分でもよく分らないながら、未だ何事かに希望を繋ぎつゝ、自分のことが今更のやうに氣になり出しました。で、海岸を去つて、毎も涙を流すことにしてゐた洞穴に一夜の宿を求めました。

不安と限りない涙のうちに一夜を明かして、彼女が翌朝眼を覺ましたのは、もう日が出てから三時間も経つた後のことで御座いました。彼女は昨夜から何も喰へませんでした。17、終にはこの島で一生を送らうと決心するまでになりました。

かうしてこの貴婦人は宛然野に育つ獸のやうな生活を幾月も／＼送つてゐました。處が、ある日のこと、嘗て彼女自身もそこから上陸した同じ入江に、これも矢張り荒天のために一隻のビザの小舟が避難して参りまして、幾日もそこに碇泊してゐました。この船には國境伯のクラド・マレスピニといふ貴族が貞節で信心深い妻と一緒に乗り込んでゐました。この人達はアプリーエンの聖殿巡拜の旅を終へて、今しも故郷へ向け、歸途に着いた處で御座いました。

ある日この國境伯は氣を紛らすために、奥方と數人の召使や犬などを連れて、この島の奥の方へ散歩を致しました。すると、クラド伯の犬が、ベリトラ夫人の立つてゐる場所から餘り遠くない處で、二疋の仔鹿を追ひ懸けました。それは例の仔鹿の大きくなつたもので、草を喰べにそこらを出歩いてゐたので御座います。二疋の鹿は犬に追はれて、ベリトラ夫人のゐる洞穴の中に遁げて参りました。彼女は仔鹿が追はれて来たのを見ると、身を起して、杖を取り上げながら、犬を追ひ拂ひました。見ると、すぐその後からクラド伯爵夫妻が犬の後を追つて遣つて参りました。そして、顔が陽に焼けて褐色になつてゐる上に、體も瘦せ衰へ、もぢや／＼と髪の毛を振り亂したベリトラ夫人

たので、その邊に生えてゐる草を喰べて兎に角飢ゑを満す必要に迫られました。この悔れな食事を終へてから、彼女は又し、も涙を流してこれから先のことを思ひ悩んでゐました。處が、さういふ思ひに耽つてゐる間に、不圖自分のすぐ傍を一疋の鹿が洞穴へ這入つて行つたが、暫くすると又外へ出て来て、森の中に走つて行くのが目に留まりました。それを見たベリトラ夫人は、好奇心を惹かれるまゝに、立ち上つて、鹿の出て来た洞穴の中へ這入つて見ました。すると、そこには同じ日に生れたかと思はれるやうな二疋の小さな仔鹿がゐるので御座います。彼女はこの小さい動物が可愛くて耐りませんでした。そこで、最近のお産の結果まだ乳が残つてゐたのを幸ひに、その仔鹿をやさしく抱き上げて自分の乳房を含ませてやりました。勿論、仔鹿の方では彼女の厚意を無にする譯は御座いません、恰度母鹿の乳を吸ふのと同じやうに、彼女の胸から乳を吸ひました。そして、それからもうベリトラ夫人と母鹿との間に、何の區別も認めなくなつてしまひました。かうなると、彼女の方でも、その貴い身柄を忘れて、恰もこの荒涼たる絶海の孤島で自分の仲間を見附けたやうな氣持になりました。彼女は草を喰ひ、水を飲んで、時々良人や子供のこと、乃至自分の過去の生活を想ひ出して泣くことも御座いましたが、段々に母親の鹿とも仔鹿同様仲好くなりま

を見て、非常に驚きました。けれども、驚いたと云へば、ベリトラ夫人の方が一層彼等の出現に驚いたので御座います。クラドー伯は相手の求めに應じて犬を喚び戻しました。その後で、幾度も懇願した揚句、漸く夫人が何といふ名前前で、そこで何ういふ生活を送つてゐるのかを彼女の口から聞くことが出来ました。夫人が自分の出遭つた運命や現在の状態を悉く話した上、自分の固い決心の程を告げた時には、伯爵も同情の涙に暮れました。と申すのは、彼もアリゲット・カペーチエをよく知つてゐたからで御座います。そこで伯爵は言葉を盡して夫人のさうした惨めな決心を諷させようと致しました。そして、彼女に自分の故郷へ歸るか、さもなければ神様か恩寵深い好運を與へて下さるまで、遠慮なく自分の家に滞在して貰ひたい、さうすれば、自分の家で妹のやうに大切に彼女の世話をするからと申出しました。けれども、ベリトラ夫人は何うしてもこの申出を受け容れませんので、伯爵は自分の妻を彼女の許に残して置いて、食物を届けさせたり、着物もぼろ／＼になつてゐるので、自分の衣類に着代へさせたり、百方手を盡して一緒に来るやうに相手の心を動かすことを一任しました。伯爵夫人はベリトラ夫人と二人だけになりますと、相手の哀れな身の上を思ひ遣つて、長い間泣いてゐました。それから召使ひの者に自分の着物や食物などを船から持つ

て來させた上、言葉を盡して、やつと着物を着代へたり、食物を攝つたりするやうに、相手を納得させました。そして、最後に、相手がかうして自分の知つてゐる所へは何處へも行かうとしないので、彼等と一緒にルニジアナへ行くことだけを承知して貰ひました。けれども、ベリトラ夫人は次の條件を持ち出すことを忘れませんでした。それは二頭の仔鹿と、さうして話しをしてゐる間に戻つて來た親鹿とを連れて行つてもいいかといふことで御座いました。實際、彼女はこの親鹿をも見てゐた夫人の眼を腫らせる程可愛がつてゐました。で、その間に天氣もすつかり回復しましたので、ベリトラ夫人はクラドー伯爵夫妻と共に直ちに船に乗り込みました。その際彼女が三足の鹿を伴れて参つたことは申す迄も御座いますまい。この鹿のために、ベリトラ夫人は船の中でカヅリウオラと呼ばれることになりました。他の人達は勿論彼女の本名を誰一人知らなかつたからで御座います。恰度風の具合も至極順調で御座いましたので、一行は速かにマグラ河の河口に到着して、そこからは陸路を取つてクラドー伯爵の居城に遣つて参りました。其處でベリトラ夫人は未亡人らしい喪服を身に纏つて、クラドー伯爵夫人のお相手役として、上品に、つましやかに、又從順に日を送りながら、例の鹿を可愛がつて、その面倒を見て遣つてゐました。

お話し變つて、かのボンツオの島ではベリトラ夫人の船を掠めた海賊どもは、夫人一人をその島に置き去りにして來たとは氣も附かず、殘餘の者を引き連れてゼノアまで航海をつづけました。そして、その地で分捕品を船の持主どもの間に分ちましたが、その結果かのベリトラ夫人の乳母は二兒と共に、他のいろ／＼な品物と一緒にグアスパリオ・ドリアといふ男の手に歸りました。この男は乳母と子供達とを自分の家へ送つて遣つて、行く／＼は下等な雑用をさせるやうに子供達を仕込むことにしました。乳母は主人ベリトラ夫人と生別したばかりでなく、今やその二兒と共に沈淪した重ね／＼の非運に、長い間涙に掻き暮れました。が、徒らに泣いてゐた處で何うにもなるものではない、結局自分は下婢であり、二人の子供は下僕である、そして、何時迄もさうであるを見て取りましたので、先づ氣を落ち着けて、篤と考へた末、目下のやうな状態では、もし本名が知れでもすれば、二兒に取つては恐らく一層不利なことになるだらうと氣が附きました。そればかりでは御座いませぬ、何時かは自分達の運命はもう一度變轉して、再び元の地位を取り戻すことも出來ようといふ希望を決して捨てませんでした。で、彼女はさうした理由からして、その秋が來るまでは、何人にも自分達の身分を明すまいと固い決心をいたしました。

その後乳母は、他人からその事を訊ねられる毎に、二人とも自分の子供であると答へました。そして、兄の方をトウスフレデイといふ本名でなく、プロツイダのジアンノットと呼ぶことに致しました。弟の方は洗禮名を呼んでも差支へあるまいと思つて、そのまゝにして置きました。その上彼女はギウスフレデイの得心の行くやうに何故彼が假の名で呼ばれるかといふこと、若し本名が知れたらどんな危険が身に起るかも知れないといふことを懇ろに説いて聞かせました。しかもそれも一遍では満足しないで、何遍となく同じ事を繰り返して、子供の頭に染み込ませました。幸ひこの子もなか／＼賢い子で御座いましたので、用心深い乳母の指圖は嚴重に守られました。かうして二人の子供は、汚い着物を着せられ、汚い靴を當てがはれて、乳母と一緒に、何年も何年もグアスパリオ氏の家で暮してゐるうちに、だん／＼下等な仕事にも慣れて來ました。その間に長男のジアンノットは早くも十六歳になりましたが、召使には應はしくないやうな高貴な心意氣を具へてゐましたので、賤しい下僕の境涯を厭ふこゝろから、グアスパリオ家の奉公を止めて、アレキサンドリアに向ふ一隻のガレリー型の船に乗り込みました。かうして彼はいろ／＼な土地に赴いて見ましたものゝ、それに依つて益するところは更に御座いませぬでした。彼がグアスパリオ氏の許を

去つてからも、三四年の月日が経過しました。そして彼はこの間に一人の立派な堂々たる男になりました。彼は又、それ迄は死んだものとはかり思つてゐた自分の父が、未だ生きて、カルロ王の監視の下に獄屋に繋がれてゐることを知りました。彼は自分の運命に失望しながら、宛のない浮草の旅をつづけて、到頭ルニジアナに遣つて参りました。そして、偶然にもかのクラドー・マレスピニ伯爵の許に奉公することになりました。彼は生れつき器用で態度も上品で御座いましたので、こゝでも主人の信用を博することが出来ました。處で、彼の母親は前にもお話し申し上げたやうに、クラドーの伯爵夫人と一緒に暮らしてゐましたので、二度や三度はお互に顔を合せることもありましたが、彼の方でも、又母親の方でも些つともそれとは気が付きませんでした。その間に流れて行つた歳月が、二人の最後に別れた時分とは、それ程迄に彼等の外貌を更へてしまつたので御座いますね。

かうしてジアンノットがクラドー伯の家に仕へてゐる間にスピーナといふ名前のこの家の令嬢が良人ニコロ・ファン・グリニーノの死に逢つて、未亡人となつて生家に歸つて参りました。彼女は非常に美しく、それに年齒も未だやつと十六を越したばかりで御座いました。そのうちに彼女はジアンノットに心を奪かれるやうになりましたが、男の方でも

亦同じ思ひに誘はれて、二人とも激しい戀に陥りました。かうなればもうお互ひにその意を通じ合はないで長く留まつてゐるものでは御座いけません。そして、二人の親しい交渉は幸ひ人目にも附かないで幾月かを経過しました。が、そのために二人は、かういふ事には極めて必要な管の注意や用心をつひ意り勝ちになつてしまひました。で、或日のこと、他の人達が美しい林の中を散歩してゐるうちに、若い未亡人はジアンノットと一緒に皆から遠く離れて行きました。そして、二人とも一行よりはづつと先へ出た積りになつて、立木に囲まれた場所を選んで、草花の亂れ咲いた上で戀の至樂を楽しみました。かうして可成り長い間休息してゐましたけれども、二人とも悅樂に耽つてゐたために、極めて短いもののやうに思はれました。そこでとうとう最初はスピーナの母親に、次には父のクラドー伯爵に見附けられてしまひました。

クラドー伯爵は、この有様を見ると、ひどく立腹しまして、一言も物を云はないで、三人の召使に命じて、この二人の罪人を捕へさせ、繩を掛けて、或城寨に連れて行かせました。彼は憤怒と不快との餘り彼等二人に業晒した死刑を科してやらうと考へました。スピーナの母親も娘の不行跡にはひどく腹を立ててゐましたので、この残酷な處刑も決して不當であるとは思ひませんでした。それでも良人

の口裏から察して、彼が兩人に對して爲ようと考へてゐることを黙つて見てゐることは出来ませんでした。そこで彼女は怒れる良人の後を追ひ懸けながら、どうかこの歳になつて、一旦の怒りのためにわが子を手に懸けたり、殊に自分の召使の血で自分の手を汚すやうな眞似はしないで貰ひたい、それよりは何か他の方法で鬱憤を晴らすやうに考へてはどうか、例へば二人を牢屋に繋いで置いて、苦校と流竄との裡にその罪過を泣かしめるといふやうにしてはどうかと願ひました。

かう云ふやうに、いろ／＼と敬虔な夫人から擧げ口説かれて、とう／＼伯爵もこの二人を殺してしまはうといふ考へだけは止めて、二人をそれぞれ別な牢に入れ、嚴重に見張つた上、いづれ又命令を下すまでは、少量の食物と多くの不便を興へて置くやうに命じました。若い二人が牢屋の中で盡きぬ涙に暮れながら、心にもない長期の禁慾を忍びつゝ、どんな生活を送つたかは、貴方方にも御想像のつくことと存じます。

さてジアンノットとスピーナの二人が、伯爵クラドーから何の憐れみも懸けられないで、かうした悲しい月日を送るやうになつてから、早くも一年の月日が経ちました。その頃、アラゴンのペーテル王がプロチダのヨハン卿と心を合せ、シシリの島民を煽動して、その島をカルロ王の手から

奪つてしまひました。これを見たクラドー伯は、かねてギベリン黨の熱心な一味でしたので、お祭騒ぎをしてその成功を祝しました。そんな譯で、獄舎に繋かれてゐたジアンノットも、自分を見張つて見た獄卒の一人から、この事件に就いていくらか聞き知ることが出来ました。それを聞いた時、彼は天を仰いで浩歎しながら、かう申しました。「ああ神様、私はこの事變を待ち望めばこそ、もう十四年も世界中を彷徨ひ歩きました。そして、今やつとその事が成つたと思へば、自分は牢獄に繋がれて、一生こゝから出られる望みもないとは、何と云ふ情ないことで御座いませう。」

「何だと」と、その獄卒は申しました。「王様方のなさゝ事がお前にどんな關係があるのだ？ お前はシシリ島に何の用があつたのだ？」

ジアンノットはそれに答へて申しました。「あゝ、父上があの地で占めてゐられた地位を考へただけでも、俺は胸が張り裂けるやうな氣がする。俺があそこから脱走した時には、まだほんの小さな子供だったが、それでも、マンフレッド王陛下の御治世に、父上がシシリ全島を支配されてゐた様子は隨げながら覚えてゐるよ。」

「ぢや、お前の阿父さんは何といふ名前なんだ？」と獄卒は訊ねました。

「俺の阿父さんか」彼は申しました。「さうだ、今更それを

匿して置く必要もあるまい。それが知れたらどんな事になるだらうかと、そんな事はばかり心配して来たものだが、父上の名を打明けなくつたつて、もうかうなつてしまつたんだからな。父上はアリゲット・カペーチエといふお名前だつた、いや、さういふお名前なんだ、まだ御存命かも知れないからな。従つて俺もジアノットなぞと云ふんぢやない、ギウスフレデイと云ふのが本當の名なんだ。だから、若し俺が此處を出てシシリへ行くことが出来さへすりや、その土地で最高の地位を相續することも出来ようと云ふんだ。こりやあもう間違ひのない處なんだよ。」

獄卒はもうこれ以上相手の言葉に耳を傾けようとはしませんでした。そして、早速この男の云つたことを漏れなく主人の耳に入れました。伯爵はこれを聞いて、獄卒の前では何氣ない振りをしてゐましたが、直ぐにペリトラ夫人の許へ遣つて参りまして、彼女とアリゲットの間にギウスフレデイといふ子供があつたかと物知らかに訊ねました。ペリトラ夫人は泣きながら、それは自分どもの長男で、若し今でも生きてゐることなら、凡そ二十二歳位になつてゐる筈だと答へました。

伯爵はそれを聞いて、今迄獄舎に繋いで置いた男こそ正しくそれであらうと推察しました。そして、若し娘を妻としてこの青年に呉れてやれば大きな慈善の行爲であると共

ても御承知の通りだ。なほ君の目下の境遇や地位に就いては、この際わしの方からは何にも云はないことにしよう。で、若し君さへその氣なら、君の甚だ芳しからぬ情婦であつた娘スビーナを、更めて君の正式の妻として貰ひたいと思つてゐるのだがね。そして、その上はわしの息子同様に氣の向くまゝに、何時までもこの邸にゐて貰つても宜しい。」

長い間の牢獄生活がジアノットの肉體を衰れさせてゐたことは申すまでも御座いませぬが、生れながらに彼の血の中を流れてゐる貴い意氣はそれがために少しも害はれては居りませんでした。同じやうに、彼のスビーナに對する戀情も依然として熱烈なもので御座いました。で、クラドー伯の申出されたことは、彼にとつて全く願つたり叶つたりであつた上に、彼の生死は一にこの伯爵の掌中に握られてゐたのであるが、なほ彼は自分の貴い矜持の手前云はねばならぬことは決して遠慮いたしませんでした。

「伯爵」と彼は答へました、「私は自分の名譽心や金錢慾、乃至その他の如何なる理由からしても、貴方の御生命は云ふまでもなく、御一族のそれを危くするやうな不實實な眞似は決していたしませんでした。成程、私はお嬢さんを愛しました。今でも愛してゐますし、これから先も永久に愛してゐるでせう。だつて、私はお嬢さんを愛するに足る方と信じてゐるのですからね。で、私が大多数の人の考へて

に、自分や娘の汚名を洗ひ去ることが出来ようといふ考へが頭に泛んで参りました。そこで伯爵は密かにジアノットを自分の許へ喚び寄せて今迄の經歷を詳しく問ひ糺しました。そして、それによつて、この男が正しくアリゲット・カペーチエの子息ギウスフレデイに相違ないといふ、色々な確證を得ましたので、伯爵は彼に向つてかう申しました。「ジアノット、君はわしの娘とあゝいふ事をしてくれて、どんなに大きな恥辱をわしに與へたかといふことは、自分でもよく解つてゐるだらう。本来なら、わしから目を懸けて貰つてゐた君としては、わしやわしの一家の名譽を保持し、助長するやうにしてくれてこそ、召使の分を全うするものと云はれるのだからね。大概の者なら、君がわしにしたやうな侮辱を加へて御覽、恐らく君を疾うに殺してしまつてゐるだらうよ。けれども、それも不憫に思つてわしはしなかつた。處が、今君の話をして見ると、君も名譽ある父母の子のやうだから、君さへ好ければ、今迄のやうな苦役を止めさせ、入牢の不名譽から君を救ひ出して、十分な方法の下に、君やわしの名譽を再び取り返したいと思つてゐるのだがね。處で、君はスビーナに對して、二人の立場としてはあまり芳しくないが、兎に角烈しい戀をした。あの娘は君も知つての通り寡婦だ。それに、あの子には相當多額で確かな財産も附いてゐるし、あの子の氣質、両親などに就い

る通りにお嬢さんに對して非禮を働いたといひましたし、も、それはたゞ青年にあり勝ちな罪を犯したまでで、従つて、さうした罪を洩却しようとしたら、併せて青春を抹殺する外に途がないとも存ぜられます。ですが、若しも老人連が自分達にも一度は若い時があつたのだといふことを想ひ起してくれるなら、そして、他人の過失にも自分達のそのの尺度を當てがつて見ると共に、その逆の場合をも考へて見てくれるなら、その罪を決して貴方が口にせられる程重大なものではないといふことが認められるでせうよ。なほ私のしたことに就いて申して見ませうなら、私は決して貴方の敵としてとなく、味方としてあんな事をしてしまつたのです。で、只今お申し出で下さいましたことも、私の常々願つてゐたこと御座いまして、若し貴方がそれを私にお許しになると信ずることが出来たら、疾うの昔に私の方からお願ひに出たことで御座いませう。ですが、そんな希望も殆んどありませんでしただけに、それを伺つていよ／＼有難く感ずる次第で御座います。けれども、若し貴方が只今のお言葉から私の信じてゐるやうなお心持になつて被坐つしやらないのでしたなら、どうか空しい希望を私の胸に植ゑ附けるやうなことはなさらないで、私を元の牢獄に歸らせたと上、お氣に召すまで多くの苦役をお與へになつて下さいませ。私はスビーナを愛してゐ

る限り、彼女のために貴方をも愛します。貴方が何をなさ
らうとも、何處までも貴方を尊敬してゐることで御座いま
せう。」

クラドー伯はこの言葉を聞いて驚歎しました。そして、
それこそ偉大な精神と灼熱した熱心の表示に外ならないと
思ふと、いよ／＼この若者が好きになりました。で、思は
ず相手を抱擁して接吻を與へました。そこで彼は少しの猶
豫もなく娘のスビーナを窃かに喚んで來させました。彼女
も牢獄にあつた一年の間に、身體も瘦せ、顔色も蒼醒めて、
ジアネット同様すつかり變つてしまひましたので、殆どそ
の人だとは思はれない位でした。二人はそれからクラドー
伯爵の前で、心からなる一致を以て、私どもの風習通りに
婚約を結びました。二三日の間伯爵はこの出來事を何人に
も知らせないで、その間に二人の必要なものや欲しいと云
ふものをすつかり調へて遣りました。

で、凡ての用意も整つて、今はもう二人の母親達にこの
喜びを分つても好い時だと思ひましたので、彼は自分の妻
とカヴリウオラの二人を自分の許へ喚び寄せ、さて後者に
向つて申しました。「奥さん、貴方の御長男を私の娘の婿と
して、此處へお連れしたとすれば、貴方は何と仰しやいま
せうね？」

それに對して、カヴリウオラはかう申しました。「假りに

今迄の御恩以上の御恩に與るといふやうなことが御座いま
すものなら、自分の身以上に愛してゐるものを貴方の手か
ら受け取ることにいたしますので、從來にも優して感謝しな
ければならないと云ふより外に、何を申しませう？ で、
只今仰しやいましたやうに、若しも貴方があの息子をさう
いふ風にして私に返して下さいませなら、貴方はまるで長
い間私の失つてゐた希望を心の中に甦らせて下さるやうな
もので御座います。」かう云ひ終つて、彼女はさめ／＼と涙
に暮れながら歎つてしまひました。

そこで伯爵は自分の妻にから訊ねました。「處で、さうい
ふ風にして、お前のために娘の婿を見附けて上げたとした
ら、お前はどう思ふね？」

「え、と、夫人はそれに答へました。「その婿の家柄が娘
と同じやうに貴族であれば勿論、たとひ何んな賤しいもの
で御座いませうとも、貴方のお氣に召した者でさへあれば、
私は結構で御座います。」

「宜しい」と、クラドー伯は申しました。「それでは二三日
うちに、貴方方にさういふ喜びを見せることにしませう。」
で、とかうする間に、若い二人も昔の面影を恢復して來
ましたので、クラドー伯は彼等に立派な衣裳を着せたと、ギ
ウスフレデイに向つてかう訊ねました。「こゝで君の阿母
さんに逢はれたら、君もさぞ嬉しいだらうね？」

ギウスフレデイはそれに答へました。「あれ程悲しい目に
逢ひながら、母が今なほ存命であるようとは、私にはどうも
信ぜられせんよ。ですが、萬々一にもそんな事がありま
したら、私に取つてはもう何よりの喜びで御座いませう。
と申しますのは、主として母の力を頼んでこそ、シシリに
於ける私の地位と威望とを手に入れることも出來ようかと
思はれるからで御座います。」

そこで伯爵は、奥方とペリトーラ夫人とを喚び寄せまし
た。二人はこの新郎新婦を見て心から嬉しく思ひましたも
のゝ、何うしてから突然に伯爵の心が和らいで、娘のスビ
ーナをジアノットと配はすやうになつたのか、どうも合點
が行きませんでした。その間も、ペリトーラ夫人は、先頃
からの伯爵の言葉の節々を思ひ起して、じつと新郎ジアノ
ットの顔を詰めました。すると、これが不思議な母子の
情とでも申しませうか、どこともなく少年時代の子息の顔
つきが眼に映つて來ましたので、この青年こそ長男のギウ
スフレデイに相違ないと思ひました。で、彼女はそれ以
上の説明を待たないで、矢庭に兩腕をひろげて子息の頸筋
に拘きつきました。そして、あまりの嬉しさ懐かしさに、
一言も口を利くことが出來ないで、たゞもうぐつたりと死
んだ者のやうになつて子息の胸に凭つかゝりました。ギウ
スフレデイの方でも、この夫人なら前にもこの城の中で

幾度か見懸けながら、些ともそれとは知らないでゐただけ
に、少なからず面喰ひました。が、今や彼女から受け嗣い
だ血が湧き立つて、曩の自分の不注意をもどかしく思ひな
がら、涙を流して彼女を兩腕に掻き抱きつゝ、優しく接吻
いたしました。一時氣を失つたペリトーラ夫人も、伯爵夫
人やスビーナ姫の手厚い介抱に、やがて正氣に返ると、又
しても自分の子息を抱き緊めて、さめ／＼と涙を流したり、
母らしい愛の籠つた優しい言葉を懸けたりしながら、もう
何遍となく相手を接吻しました。彼も亦何彼につけて始終
彼女に對する子としての尊敬を失ひませんでした。

かうして彼等が何遍となく情愛に溢れながらも慎ましや
かに相擁して、周圍に立つてゐた人々もその涙含ましい光
景を一緒になつて喜んだ後、二人は互ひにそれ迄のことを
語り合ひました。伯爵の方では、この新しく結ばれた婚約
について、既に二三の知友に報告してその賛同を得ると共
に、今や目の覺めるやうな大饗宴を開かうと着々その準備
をさせてゐましたので、ギウスフレデイは彼に向つて次の
やうに申しました。「伯爵、貴方は私にいろ／＼な恩寵を
お授け下さいましたばかりか、私の母まで長い間お世話を
して下さいました。それに甘え、申すわけでは御座いませ
んが、この上の御親切には、どうか私の弟を喚び寄せて、
(弟は、この間も申し上げましたやうに、私と同時に海上で

グアスバリオ・ドリア氏の手に捕へられて、今ではその召使となつてゐるので御座いますからね。私と母とを喜ばせると共に、私の結婚式の饗宴に列ならせて頂くわけには参りません。それからもう一つお願ひが御座います。他でもありませんが、誰かをシリ島へお遣はしになつて、その地の現状を精密に調査の上、私の父のアリゲットが死んでしまつたかどうか、もし存命であるなら、どんな境遇に置かれてゐるかを調べて、その詳細な報告をして呉れるやうにお取計らひが願ひたいので御座います。」

ギウスフレデイのこの態度は、更に伯爵の氣に入りました。そこで彼は早速四五人の確かな家來どもを選んで、ゼノアとシリとに向はせました。

ゼノアに派遣された方の男は、クラドー伯の使者と名告つて、グアスバリオ氏に面會を求めた上、スカツチアトとその乳母とを引渡すやうに熱心に頼みました。そして、その際、クラドー伯がそれ迄ギウスフレデイ母子のためにされたことを順序よく話して聞かせました。グアスバリオ氏は使者の言葉に吃驚しながら、それに答へました。「畏承りました、伯爵の思召しに適ふやうに、萬事取り計らひませう。確かに私は只今お尋ねの子供をその母親と稱する女と一緒に、十四年以前から宅に引き取つて居ります。私は喜んでその二人を伯爵にお贈りいたしませう。ですが、どう

ぞ伯爵に、私がかう申したとお傳へ下さい。あのジアンツト、お話しの様子では、今はギウスフレデイとか名乗つてゐるらしい御座いますが、あの男の云ふことなぞ今後とも餘り御信用なさらない方が宜しい御座いませうとね。と申しますのは、あの男は、恐らくクラドー伯爵が御想像になつてゐるよりは、ずっと擦れつからしになつてゐるでせうからな。」

かう云つて、彼はこの使者を款待させて置いて、自分はひそかに例の乳母を喚び寄せた上、仔細に事の成行を訊ねて見ました。乳母はシリ島の叛亂や、アリゲットがまだ生きてゐるといふことなどを聞きましたので、今まで抱いてゐた戒心をかりりと捨てながら、主人に向つて、それ迄の事情からかうした手段を採るに到つた理由まで残らず打明けました。

乳母の話はクラドー伯の使者が驚いた處と全く一致してゐましたので、流石のグアスバリオ氏も幾分この話を信用し始めました。そこで彼は、本來狡猾な男であつただけに、この事件をあらゆる方面から調べて見ました。そして、調べれば調べる程、その話が眞實であるといふ新しい證據が出て来るばかりで御座いましたので、今迄その子を召使として虐待して來た自分の仕打ちを非常に恥ぢて、何とかしてそれを償ひたいと考へたのと、一つには又その父親のア

リゲットが再び占むるに到つた高い地位のことも考へに入れた結果、彼は自分の十一歳になる美しい女の兒に澤山の持参金を付けて、スカツチアトに妻として呉れてやりました。そこで彼は先づこの結婚を立派に祝つた上、この新郎新婦とクラドー伯爵家の使者と例の乳母とを引き連れて、十分に武装したガレー型の船に乗り込んで、レリチに向つて出帆いたしました。彼は其處でクラドー伯爵から非常な歓迎を受け、一行と共にその近所にある、祝宴の用意萬端整つた伯爵の居城に案内せられました。

子息のスカツチアトを再び見た時の母の喜びがどんなに大きかつたか、相見た二人の兄弟の喜びが又どんなに大きかつたか、どんなに二人の兄弟がこの忠實な乳母を歡んで迎へたか、どんなに喜んで一同がグアスバリオ氏とその娘と共に挨拶したか、又このグアスバリオ氏が右の母子にどんな挨拶をしたか、最後にこれ等の人々がクラドー伯爵夫妻、その子供達、及びその友人達と一緒になつてどんなに喜んでかは、述も言葉では申し盡されません。で、皆様が、その想像力でもつて、私の話しの足らぬところを補つて下さいますやうにお願ひして置く次第で御座います。

しかもこの喜びを一層完全なものとするために、好いものを惜しみなくお與へになる神様は、恰度この時アリゲット・カペーチエの生活と幸福な境遇についてのよい報告が

そこへ到着するやうに計らつてやらうと思召したので御座います。と申しますのは、その饗宴の際招かれた紳士淑女が食卓に就いて未だ第一の皿を喰へ終らないうちに、シリに派遣された使者が歸つて参りまして、いろ／＼な報告をしました中に、わけても次のやうな吉報を齎したからで御座います。即ちシリ島民は、佛蘭西に對する叛亂が勃發すると、嗚り狂ひながらアリゲットの繫がれてゐる牢獄へ駆けつけて、番兵を皆殺しにした上、彼を救ひ出した。アリゲットはカルロ王の不倶戴天の敵で御座いますので、仰いで指導者に押し立てた上、彼の指揮の下に佛蘭西人を驅逐し且殺戮した。この事變の結果としてペーテル王は彼に非常な恩寵を加へられ、彼の財産や地位を悉く元々通りにされました。そのために彼は今ではシリに於ける最も重要な人物になつてゐると云ふので御座います。なほ使者はそれに付け加へて、アリゲットは使者の自分をも手を盡して款待しました。そして、彼は牢獄に投ぜられて以來少しもその消息を聞かなかつた妻子の事を聞き、非常に喜んで、二三の貴族を船に乗り込ませて、自分のすぐ後からこの地に遣はした上、妻子を引き取らうとしてゐるとも告げました。

この使者は一同の歡聲に依つて迎へられ、人々は喜んでその報告を聞きました。そこでクラドー伯爵は、二三人の友人と共に、ペリトラ夫人とギウスフレデイのために、

この地に派遣せられた貴族の一行を急いで出迎へました。そして、心から一行を歓迎して、直ちに饗宴の場へ案内しました。饗宴はまだ半分も済んではいませんでした。この使者を迎へたベリトラ夫人とギウスフレデイ、並びに同席の人々の満足は、他に較べるものもない位で御座いました。が、一行の人々は饗宴の席に就く前に、アリゲットの名に於て、クラドー伯爵夫妻がベリトラ夫人とその子息とに示された厚意に對して出来る限りの感謝の意を表明した上、アリゲットの力に及ぶことなら、どんな事でも致しますから、御遠慮なく仰せつけられたいと申出ました。それから一行は更にグアスバリオ氏に向つて、彼がスカツチアトのために盡してくれた厚意は、此處に来るまでは彼等もそれを知らなかつたから失禮したやうなもの、アリゲットがそれを聞いたなら、これ以上でないまでも、確かに同じ程度に感謝されるに相違なからうと申しました。

以上の事を云ひ終つた後、一行の人々は始めて二組の新郎新婦と共に喜びの食卓に就きました。クラドー伯が自分の婿や一族友人のために張つたこの饗宴は、その後も幾日となくつゞきました。で、とうとうこの大饗宴も終つた時、ベリトラ夫人やギウスフレデイを始めとして、その他の連中も今こそ出發すべき頃合ひだと存じたので、クラドー伯夫妻やグアスバリオ氏に涙で見送られながら、スピ

トナ姫と一緒に、アリゲットが自分達のために派遣して呉れた船に乗り込んで、多年住み馴れた土地に別れを告げました。幸ひ風の都合も至極よろしかつたので、短時日の間に一行はシリ島に着くことが出来ました。パレルモの市では、一行の男女とも、それこそ筆紙に盡し難い程の大きな歡喜を以てアリゲットに迎へられました。その地に於て、彼等はなほ長い間幸福に、しかも自分達の享けた恩澤を贈に銘しながら、神の恵みの裡に暮したといふことで御座います。

第七話

パビイロンの皇帝一人の娘をアルガルビアの王にその妃として送る。王女は途中でさまざまの災難に逢ひ、諸方を轉々して、四年の間に九人の男の掌中に陥つたが、結局父王の許に歸ることを得て、更めて處女としてアルガルビアに赴き、當初の目的通りその王と結婚する話。

若しエミリヤの話した物語がもう少し長くつゞいたら、聴手の婦人達はベリトラ夫人の不幸に同情して涙を誘はれずにはゐられなかつたでせう。が、その話も終りました

ので、女王の思召でバムフィロがその後を續けることになりました。彼は従順に且いそ／＼と次のやうに話し始めました。――

淑女諸君、何が私どもの幸ひになり何が不幸になるかは、決して判つたものでは御座いません。と申しますのは、大抵の人はお金さへあれば心配なしに、安穩に暮して行かれるやうに思つて、何とかして金持ちになりたいと夢中になつて神様に願を懸けるばかりか、そのためにはどんな苦勞も危険も厭ひませんが、然しいよ／＼この願ひが達せられて見るとその財産ゆゑに、金持ちになる前には、自分達の生命を護つて呉れ、自分達を愛してゐて呉れた人々の手で殺されるやうなこともなるんですからね。さうかと思ふと、又他の人々は、自分達の生れた卑賤の階級から身を起して、數へ切れない程多くの苦闘を経、時としては自分の兄弟や友人の血を流してまで道を拓きつゝ、これさへ達すれば無限の幸福が得られるものと妄信してゐた王位の高きに達したのはよいが、身邊に迫る無数の恐怖や心勞はともかくとして、王者になれば黄金の盃から毒を飲まされるのだといふことを、自己の死に於て承認しなければならぬやうなことも御座います。又肉體の力とか美とかいふものを、恰度他の人達が寶石や装身具などを欲しがると同じやうに、夢中になつて欲しがつて、さういふものが死と

か或ひは非常な悲しみとかを齎すまでは、自分達の望みの不合理なことに気が附かないでゐるやうな人々の數も、これでなか／＼擲なくないやうですわね。

處で、人間の願望を一々考察するのが目的でも御座いませんから、私は概括してかう斷言したいと思ひます。即ち人間といふものは、どれだけ慎重な用意を以てしても、あらゆる願望の中から運命の打撃を蒙らないやうなものを一つでも選び取ることは不可能であると。従つて、世に處して過ちなからむことを欲すれば、私どもは常に、何が私どもに必要であるかをお見透しの上、それを私どもにお與へる有難くお享けして、それを放さないやうにしてゐることが肝要であらうと存じます。この點に於て、男は多く自分達の欲望のために道を誤りがちなものですが、淑女達よ、貴女方も亦美しき上にも美しからうとして、自然が與へて呉れた魅力だけでは満足せず、變挺な技巧まで用ゐてその美を増さうとされるといふその一點に於て、やはり罪を犯しがちなものだと云はねばなりません。で、この御婦人方の欲望を抑へるために、私はあるサラセンの女が姿の美しかつたばかりに非常な不幸に逢つたばかりか、約四年の間に九度まで結婚の式を擧げなければならなかつたといふお話を致しませう。

昔バビロンの帝王に名をベミニダブと呼ばれる方がありましたが、一生の間何事も思ひ通りになつたといふ、誠に仕合せな方で御座いました。王は多くの子女をお持ちになつてゐましたが、中でも王女のアラテイエル姫といふ方は、一目でも見た者は皆口を揃へて、この方こそ今の世の女といふ女の中で一番美しい少女であらうと云はないものはない位、世にも稀れた美人で御座いました。處が、亞刺比亞の大軍がこのバビロン王を襲うて来た時、アルガルビアの王の非常な援助のお蔭で花々しい勝利を得ましたので、王もアルガルビアの王の懇望がたく、この姫を王妃としてお遣はしになる約束をしなければなりません。そこで王は姫君を、華やかな男女の供廻りのものや多くの高價な美しい什器と共に、一隻の堅固に武装された船に乗せて、神の保護を祈りつゝ、許婚の王の國へ旅立たせました。天氣模様も好しと見込みをつけた水夫どもは、順風に帆を張つて、アレキサンドリアの港を出帆しましたが、幾日かの間はまことに幸運な航海をつよげました。さうしてゐるうちにサルディニアの島も過ぎ、いよいよ目的地のアルガルビアも近くなつたと思はれる頃、或日激しい逆風が起つて参りました。その勢ひが猛烈で、姫君を乗せたこの船も、船員諸共、幾度かもう駄目だと諦めた程で御座いました。

けれども、この船の船員達は航海にかけては非常な手練家であつた上に、あらゆる秘術を盡して努力しましたので、荒れ狂ふ海と戦ひつゝ、兎に角二日間は無事なまま得ました。處が、三日目の暮れ方になつても、暴風は罷むどころか、却つて益々吹き募るばかりで、今は船員達にも自分達がどの邊に居るのか解らなくなつてしまひました。何しろ空は一面の黒雲に閉ざされて、まるで闇夜のやうに眞暗でしたから、航海術に依らうにも、観測術に頼らうにも、てんでその見當が附かなかつたのです。恰度その時に當つて、マジョルカ島の附近で、船が難破しはじめたのに氣が付きました。最早どうにも救助の見込みがないといふこんな場合に臨んでは、人間はたゞ一身の安危のみを思つて他人を顧みないものでして船主どもは早くも海の中に下ろしたボートに飛び移りました。壊れかゝつた船よりは、まだ小舟の方が頼りになると思つたのでせうね。處で、先に乗つた人達は手にくナイフを持つて、後から来るものを拒まうとしましたが、それでも狂氣のやうに押し合ひ合ひしながら、後からくくといひて乗り込もうとしました。が、彼等は一途に死から遁れようとして却つてその死を早めたに過ぎませんでした。と云ふのは、こんな暴風の日にボートがそんなに澤山の人を乗せ切れるものぢやありませんので、見る／＼うちに沈んでしまつて、乗つてゐた人達は一

人残らず敢なき最期を遂げたからですよ。

船の上には、姫君と侍女達の外に、今は一人も残つてゐませんでした。しかもその人達は、暴風の怒號と自分達の恐怖のために呆然自失して、死んだものゝやうに／＼と轉がつてゐるばかりでした。船はもうすつかり壊れて、海水で一杯になつてゐましたけれども、激しい風に驅られて、矢を射るやうな勢ひでマジョルカ島の海岸に打ち付けられました。その打ち付ける勢ひが激しかつた爲めに、船はほんの半丁程岸から離れた砂の中へ喰ひ込んで、終宵激浪に洗はれながら微動だもしなかつたので御座います。で、とうとう朗らかな朝が明けて、暴風も幾分をさまつた時、一旦は死にさうに思つた若い姫君も、漸く頭を擡げて、弱々しい聲音に、侍女どもの名を一人々々喚んで見ました。が、いくら喚んでも無駄でした。侍女どもは、姫君の聲が聞えるには、餘りに遠い所へ行つてしまつてゐたのです。姫君はいくら喚んでも答へる者もなければ、誰一人遣つて来ないのを知ると、ぎよつとして、急に怖ろしくなつて来ました。で、根限りの力を出して、兎に角起き上つて見ると、自分の侍女達や他の女どもは皆船底に／＼横たはつてゐるのですね。名前を喚んでも返辭がないので、今度は一入々々身體を揺り動かして見ました。が、大部分は船殼や恐怖のために疾うに息が絶えてしまつて、極く少數

の者だけが僅に片息を保つてゐたのです。この有様に、彼女は／＼と怖ろしくなつて参りました。が、一人ぼつちになつた上に、一體何處にあるのか、それさへ見當が付きませんでしたので、兎に角まだ息のある者を身動きをするまで揺す振つて見ました。が、折角息を吹き返した女どもも、船員を始め男の人達がどうなつてしまつたのか知る由もなく、それにこの船も海岸に打ち上げられて、水で一杯になつてゐるのを見ては、たゞもう一緒に集まつて、泣くより外に何う仕度もありませんでした。早くも正午から三時間も経ちましたが、その間援助を求めようにも、海岸にもその邊りにも人つ子一人姿を見せませんでした。恰度その時に、名をベリコーネ・フォン・ヴィザルゴと呼ばれる一人の貴族が、自分の所領からの歸途、多くの家來どもを従へて、馬に乗つて、偶然にもその海岸を通りかゝりました。彼はこの船を見るや、直ちに何事が起つたかを推察しましたので、召使の一人に、出来るだけ早く難破船に赴いて、どういふ事情になつてゐるか見届けて来てと命じました。いろ／＼な困難も御座いましたが、兎に角この召使は主人の命令を果すことが出来ました。船に来て見ると、一人の若い貴婦人が、僅に生き残つた侍女達と共に、前に突き出した船首の下でぶる／＼顛へながら隠れてゐるのです。女どもはこの男を見ると、直ぐに泣きながら助

けを求めましたが、互ひに言葉の通じないことが解ると、今度は手眞似で自分達の不幸を説明しようとした。召使の男は出来るだけ仔細に萬事を看取りました。そして、主人のペリコーネに自分の見て来たことを話して聞かせました。そこでペリコーネは直ちに従者どもに命じて、女達を船から助け下ろさせ、船中にあつた高價な品々で手の届くものは悉く陸上に運ばせた上、一同を引き連れて城に戻つて参りました。其處で遭難者達は休息と食物とに依つて元氣を回復することが出来ました。處で、城主のペリコーネはその高價な什器からして、自分が助け出した貴婦人は、玆々ならぬ高貴の生れに相違ないと思ひましたが、他の女達がその女一人に拂つてゐる尊敬からも、この女だけは別だなど見込みを附けました。

なほ又ペリコーネには、その女が今こそ遭難のために顔色も蒼醒め、姿も驚れてはゐるが、世にも稀れた美しい容姿を具へてゐるやうに思はれました。そこで彼は、若しも彼女が未婚の女であつたら、自分の妻にしよう、又若し自分の妻になることが出来ないと思ふなら、せめて懇懇を通じようと、即座に心の中で決めました。

ペリコーネといふ男はいかにも強さうな容貌と嚴整な體格とを持つた男でした。で、四五日の間丁寧にこの貴婦人の世話をさせてゐる間に、彼女はすっかり元々通りの元氣

を恢復しました。さうなると、彼女は自分が推測してゐたよりもずつと美しい女に見えて來ました。その美しさにいよいよ情念を煽られて、彼は互ひに意志を通じ合ふことの出来ない、低悟しさに頼着せず、いろ／＼愛撫したり親切を盡したりしながら、何うかして相手を自分の意に従はせようと骨を折つて見ました。が、あらゆる試みも一向利き目が御座いませんでした。

相手が男の親切を拒めば拒む程、ペリコーネの煩惱は増すばかりでした。姫もそれを覺ると共に、幾日か滞在してゐる間に、人々の習慣からして、彼等が基督教徒であることも看破しましたので、どうせその間には、相手の切なる望みに、よしんば力づくでも従はせられることであらうし、又かうした事情の下にあつては、たとひ言葉が通じるとしても、自分の身分を知られることは、何にもならないと氣が附きました。そこで彼女は勇氣を奮つて、飽く迄自分の不幸な運命に對抗しようと思ひました。そして、三人だけ生き残つた侍女どもに向つて、さうすることに依つて確かに救はれるといふ見込みの附かない限りは、決して自分達の身分を明かしてはならないと申し附けました。なほ姫は彼女達に、固く貞操を守ることが命じた上、自分も定められた良人の外には、何人にも肌身を許さない覺悟だと斷言しました。侍女どもは彼女の決心を稱讃して、飽

くまでその命令を遵守することを約束しました。

一方ペリコーネは、この美しい女に日毎に近寄れば近寄る程、あらゆる心づくしが跳ねつけられ、ば跳ねつけられる程、益々煩惱の焰を燃やしました。で、いよいよ自分の好意が徒勞に終るのを知つた時、彼はとう／＼一つの狡猾な手段と技巧とを用ひて見て、萬止むを得ない場合には暴力に訴へても思ひを晴さうと決心しました。處で、彼はこの姫が宗教上の戒めからそれ迄酒の味を知らなかつたが、飲んで見て大分お氣に入つたらしいのを一二度見懸けたので、戀の女神の召使である酒の力を借りて、相手を手に入れようと思ひ立ちました。この目的のために、彼は恰も姫のつれない態度に氣が附かないやうな振りをして、或日盛大な晩餐の用意をさせました。この宴には、姫も勿論出席しました。食卓は何から何まで結構づくめでした。一方ペリコーネは、姫君の給仕を承はる侍僕に、多種多様な酒を混ぜて差上げるやうに命じて置きました。侍僕はこの命令を見事に果しました。さういふ奸計があらうとは夢にも知らない姫君は、つひお酒の味のうまさに誘惑されて、適度以上に召し上りました。だん／＼酔ひが廻つて來るにつれて、彼女はそれ迄の不幸をすっかり忘れ果てたやうに、好い心持になつて参りました。で、二三の少女達がマジョルカ島の振りで踊るのを見ると、自分もそれにつよいいてア

レキサンドリヤ風の舞ひを始めました。

その様子を見て、ペリコーネは今にも自分の望みが遂げられさうに思ひました。そして、後から／＼とつゞけざまに御馳走や飲物を出させながら、夜半まで酒宴を引延ばすやうに致しました。とう／＼酒宴も果て、客人達はこの家を辭して歸つて行きました。そして、ペリコーネは姫と二人だけでその部屋に這入りました。今は姫も酒に酔ひしれて、姫御前の憤ましさを忘れながら、男のゐる前も厭はず、まるで侍女の前でするやうに、平氣で着物を脱いで、寢床の上に身を横たへました。(以下十一行餘省略)

しかも、國王の姫君がかうして一城の主の思ひ者になり下つただけでは、未だ運命の女神を満足させるに足りなかつたものと見えて、姫とペリコーネとの歡樂も或る他の恐ろしい情熱に依つて破られてしまひました。即ち、ペリコーネには一人の弟がありまして、その名をマラトと云ひ、當年とつて二十五歳、まるで薔薇の花のやうに美男で御座いました。處で、この男は、アラテイエル姫を一目見て、ぞつこん惚れ込んだばかりでなく、姫の素振りからして、彼自身も相手の氣に入つてゐるものだと思ひ込んでしまひました。かうなると、彼には自分の戀路の邪魔するものは、たとひ姫を捕まへてゐる兄の嚴重な監視に過ぎないと思はれませんでした。その結果として、彼は一つの怪しから

ぬ計敷を立てました、そして、それにつゞいて、直ちに卑劣な行動が行はれたのです。

恰度その時に當つて、この市の港に、二人の若いゼノア人の所有に係はる一隻の船が碇泊してゐました。その船は荷物を満載して、この二人の指揮の下にローマニア州のキアレンツアへ向けて出帆することになつてゐましたので、既に帆を張つて、風向きさへ好ければ直ぐにも出帆の出来るやうに、すつかり準備が出来てゐました。で、マラトリーはこの船の人達と談合の結果、その晩姫と一緒にその船に乗せて貰ふやうに話しを纏めました。

かういふやうに手筈を極めた後、夜が更けかゝつて参りますと、かねて手段は十分に考へ抜いてありましたので、マラトリーは自分の宿望を遂げるために援助を頼んで置いた二二三の仲間と共に、そつとペリコーネの館に忍び込んで、邸内のいろんな場所に別れて、豫め打ち合せて置いた地點にめい／＼その身を隠しました。

夜が半分更けて参りました時、マラトリーはペリコーネがこの姫と一緒に寝てゐる部屋の窓を開けて仲間を誘ひ入れました。かうして彼等は寝入つてゐるペリコーネをその場に殺してしまひました。姫が眼を覺して泣き出さうとすると思つて立てると殺してしまふと嚇しつけながら、ペリコーネの持つてゐた貴重品の大部分と一緒に、姫を人知れず海

岸まで急いで運んで参りました。其處でマラトリーと姫とは件の船に乗り込むし、仲間の者どもはその儘家に歸つてしまひました。船員は又船員で、順風に帆を張つて、直ちに港を出帆しました。姫も始めの間は重ね／＼の不幸に身も世もあらぬ程泣き悲しんでゐました。が、マラトリーも、神から賜はつた偃月刀を手にして、相手を慰めることにぬかりはありませんでしたので、彼女もだん／＼男に優しくなつて、間もなくペリコーネのことは忘れてしまひました。そのうちに姫もすつかり自分の境遇に安んずるやうになりました。が、それ迄の不幸でまだ満足しない運命は、更に新しい彼女の不幸を紡ぎはじめました。若い二人の船主達は、姫の目の覺めるやうな姿と、何とも云はれない上品な態度とに、すつかり惚れ込んでしまひました。で、萬事を忘れて、姫に仕へ、姫に好意を示すことばかり熱中しました。勿論、マラトリーにはその本心を覺られないやうにしてゐたのです。が、間もなく二人の間でお互ひに相手の思慕に気が付きましたので、彼等はそれについて秘密に話し合つた上、自分達の戀の對象を、恰も戀がさうしたことに耐へるかの如く、まるで一箇の商品又は獲物か何ぞのやうに共同で手に入れることに決めました。が、マラトリーもそこは嫉妬深く二人の者に警戒して、彼等の目論見を妨げましたので、ある日特に船が速く走つてゐる間に、二人

は謀し合せて、船尾に立つて、そんな悪企みがあらうとも知らずに、海を見入つてゐたマラトリーの背後から、いきなり飛びかゝつて、海の中へ投げ込んでしまひました。

さうして置いて、彼等はそのまま一哩以上も海路を帆走しつゞけました。それでゐて、何人もマラトリーが海に投げ込まれたことに氣の附く者はなかつたのです。が、姫はとう／＼それと知つて、又しても悲嘆の涙に暮れようと思つた。それを見ると、二人の男はそこへ駆け寄つて、甘つたるい言葉の大げさな約束だったので、相手に言葉が通じないのも構はず、しつ／＼く相手を慰めようといひました。尤も、姫としては、良人を失つたことよりも自分自身の不幸が悲しかつたのです。で、長い間、何度となく繰り返して慰められてゐるうちに、彼女の心も幾分か鎮まつて来たやうに思ひましたので、二人の男は自分達の中の誰がまづこの女を手に入れるかといふ相談を雙方で始めました。處が、かうなつて来ると、二人とも自分が第一番にならうとします。何の一致點も見出せませんでした。で、とうとう二人は激しい口論を始めて、互ひに唖り立つた結果、二人とも短刀を引き抜いて、狂犬のやうに跳りかゝりながら、他の船員どもが二人を引き別けることも何うすることも出来ない程、激しく突き合ひました。その結果、一人はその場で斃れてしまひましたし、もう一人の男も生命

こそ取り留めましたが、身體中到處に重傷を負ひました。姫はこの有様を見て非常に悲しみました。と申すのは、彼女は一人の相談相手もなしに、たゞ一人この船の上に取り残されたばかりではなく、二人の船主の一族友人達の激怒が自分の上へ降りかゝつて来るだらうと、それを心配したからです。けれども、重傷を負つた一方の船主の懇願と、間もなく目的地のキアレンツアに到着するといふことが、この危険から姫を救ひました。

やがてそこに到着して、姫が重傷者と共にその家に連れて來られますと、忽ち彼女の美しさに對しての風評が町中に擴がつて、恰度その當時キアレンツアに滞在されてゐられたモレアの公爵の耳にまで達しました。そこで公爵は彼女を見ようといふ心を起しましたが、一目彼女を見て、噂に傳へられたよりも、一際勝れて妍やかなのを知ると、もう他の事は何一つ手に附かない程、夢中になつて、彼女に惚れ込んでしまひました。そして、彼女がキアレンツアに遣つて來た次第を聞き込んだ時には、これならばその女を手に入れる望みがないでもないと思へました。實際又、負傷した船主の縁者どもは、公爵が想ひを懸けられたことを耳にすると、それならと云ふので、まだ相手が何うして手に入れたものかなぞと思案してゐる間に、一も二もなく姫を公爵に献上してしまひました。

若い公爵の喜びは非常なものでした。いや、公爵ばかりでなく、姫もそれに依つて大きな危険から救はれたやうに信じて、今度の成り行きを好ましく思ひました。公爵は、容姿の美以外に、なほこの姫を床しく見せてゐる氣高い起居振舞から推して、よしその身の上に就いて他に何の報告にも羨しないにもせよ、必ず高貴の家の出に相違ないと考へました。そんな處から、姫に對する彼の愛はいよ／＼その熱度を高めて、あらゆる點で彼女を單なる思ひ者としてでなく、正妻として尊敬するに到りました。さういふ取扱を受けましたので、姫の方でも、これ迄の不運と今の快適な境遇とを比較して、新に勇氣を生ずるやうになりました。で、再び以前のやうに快活になるに伴れて、彼女の魅力も亦新しい力に對つて來ました。かうなると、全ローマニアは彼女の美の噂で持ち切るといふ有様でした。

その噂を聞いて、雅典の大公も一度その女に逢つて見たものだといふ心を起しました。この方は年も若く、男振りが好く、殊に愛想のいゝ方で、ローマニアの公爵とは親族の間柄である上に大の親友でも御座いました。そこで大公は、今迄もさう云ふことは度々あつたのですから、従弟の公爵を訪問するといふ口實の下に選り抜きの従者どもを引き連れ、華々しくキアレンツアに遣つて參りました。その地で彼は特に大歓迎を受けました。二三日経つてから、

大公は話題をかの美しい姫君のことに持つて行つて、一體姫はほんたうに世間の噂通り美しいのかと公爵に訊ねました。

公爵はそれに答へました。「そりや世間が噂してゐるよりはずつと美しいね。だが、かう云つただけでは、貴方も眞實に出来ないだらうから、まあ實物を見て御覽なさい。」すると、大公は公爵を促して、それでは早速その女を拜見したいものだと思ひました。そこで二人は打ち揃うて、姫の部屋へ遣つて參りました。姫は二人を愛想よく、しかも鄭重に迎へました。そして、二人の男の間に坐らせられました。二人は姫と言葉を交したとは思ひましたが、姫には未だこの國の言葉が殆ど、といふよりは全く解りませんでしたので、どうもそれを味はふわけには參りませんでした。で、二人はたゞ不思議なものでも見るやうに、まじまじと相手に見入るばかりで御座いました。殊に大公の方は、これが人間だとは殆ど信じかねる位であつたので、特に驚嘆の眼を凝つたのでした。さうしながらも、彼はたゞ見てゐるさへすれば欲望を満足させることが出来るやうに思つて、平氣で見えてゐましたので、同時に戀愛の毒酒を眼から飲んで、烈しい情炎を燃え立たせながら、いよ／＼欲望の縛めに十重二十重と纏まれてしまひました。やがて彼は公爵と共にその部屋を辭して出ました。そして、暇が出来

ると、一人で思ひ耽りながら、あんな美人を占有して羨み得る公爵は、何といふ幸福な男であらうと思はないではゐられませんでした。

いろ／＼な考へが大公の胸の中に浮んで來ました。が、最後に情炎が正義に打ち勝ちました。そこで彼は、後ほどうならうとも、公爵から幸福を奪ひ取つて、自分が代つてそれを樂しまうと決心いたしました。なほこの計畫の實行は速きを要すると思ひましたので、理性や正義の聲に耳を閉いで、たゞもう僞善と奸計ばかりを夢中になつて工夫しました。そこで彼は、或日のこと、卑怯にも主人の公爵に信用されてゐるチウリアチといふ召使を抱き込んだ結果、自分の馬と荷物とを何時でも出發の出来るやうに窺かに用意させました。その夜チウリアチは大公ともう一人の仲間のためにそおつと公爵の室を開けてやりました。二人とも武裝してゐました。公爵は、非常な暑さのために、姫が眠つてゐる間、海から吹いて來る微風に涼まうとして、そちらに向つた窓際で、すつかり裸になつたまゝ、横になつて居られました。

豫てその仲間の者と手筈を謀し合はせて置いた大公は、その室の中をこつそり窓の所まで忍んで行つて、公爵が未だこちらに氣の附かないうちに、深く脇腹に短刀の一突きをくれました。その切尖が他の側に突き抜けた位でした。

それから彼は死體を引擱んで、開いてゐる窓の外へ放り出してしまひました。その館は海に向つて高い處に建てられてありました。そして、公爵が休んでゐた窓のすぐ下には、暴風のために打ち壊されて、今は滅多に人の訪ふこともないやうな二三軒の家が立つてゐました。それですから、大公が豫想して置いた通りに、公爵の死體が落ち、來た時に、誰一人それに氣の附いた者はありませんでした。大公に隨いて來た男は、これらの事を見済ますや直ぐにチウリアチの傍へ近づいて、相手に親しさを示すやうな振りをしながら、その首に細引をかけ、聲一つ立てることも出来ないうやうに固く縛つて置いて、大公の來るのを待ちました。

それから二人でチウリアチを縊り殺して、たつた今公爵を振り出したばかりの窓から、その死體を抛り出しました。凡てこれ等のことをしてしまつて、姫にも又その他の何人にも氣附かれなかつたことを確めた後、大公は手に燈火を持つたまゝ、寢床に近寄つて行きました。そして、まだすや／＼と眠つてゐる姫の被け蒲團をそつと持ち上げて見ました。………全裸………、彼女の姿はどこに一つ批點の打ち所のない程美しいものと思はれました。で、若し衣を纏つた彼女が彼の氣に入つたとすれば、……になつた彼女はすつかり彼を有頂天にしてしまひました。(以下六行省略)そして、喚び寄せた二三の家來どもに命じて、

物音一つ立てないやうに、先に自分が這入つて来た秘密の戸口から、こつそりと姫を連れ出させました。姫は戸外で馬に乗せられました。そこで一行は非常に急いで、しかも途中出来るだけ静かに、雅典を指して歸つて行きました。が、大公は既に妻帯してゐましたので、今はこれ迄よりもずつと沈み切つてゐる姫を雅典まで連れて歸るわけには参りませんでした。そこで彼女を都から程遠からぬ、海の近くの美しい別邸に匿まつて置いて、それこそ痒い處へ手が届くやうな行き届いた世話をさせました。

一方公爵の家來どもは、その兇行の行はれた翌日、主人のお眼ざめを盡過ぎまで待つてゐました。が、何時まで待つても公爵が起きて来られぬので、とう／＼引手がかゝつてゐるだけの戸を押し明けて這入つて行きました。しかも室の中には誰一人居りませんでしたので、彼等は無造作に、公爵はあの美しい姫君と一緒に、二三日お楽しみみの旅行にでもこつそり旅立たれたのだらうと推量して、別に心配もいたしませんでした。

こんな漠然たる當推量の下に、家來達は手を束ねて待つてをりました。處が、その翌日一人の白痴が例の公爵とテウリアチとの死體のあるあばら屋に偶然這入つて行つて、後者の死體を首の細引を持つて引つ張り出して來ました。この死體の主の何人であるかが分ると、そこに集まつて來

た人々は非常に驚いて、いろ／＼白痴を宥めすかした上、死體を引き出して來た元の場所へ又候引張つて行かせました。すると、そこに公爵の死體が横たはつてゐたのです。市中は大きい悲しみに打たれて、直様鄭重な埋葬の式を執り行ひました。その後家來達はこの重大な犯罪をやつてのけた犯人の探索に取りかゝりましたが、かねて滞在してゐた雅典の大公の妾が見えず、秘かに旅立つてしまつたのに氣が附いて、これは的切り彼が公爵を殺害して、姫を奪つて行つたものに相違なからうと、事實その通りの推定を下しました。

この嫌疑からも急を要するやうに思はれましたので、兎も角も故公爵の弟の一人に代つてその位を襲はせた上、一族を始め家來の者どもは復讐をするやうに熱誠を籠めて進言いたしました。新公爵は自餘の人達の意見がいろ／＼な方面から見て確實なものと思はれましたので、遂に各地方に於ける自分の友人、親族及び家臣どもの來援を求めて、瞬く間に有力で而も武備の整つた堂々たる大軍を編成した上これを統率して雅典の大公と戦ふために進軍しました。大公の側でもそれを聞くと、直ぐに全力を擧げて防戦の準備を整へました。そして、多くの貴族が彼の援助に馳せ参じました。中にもコンスタンティノープルの皇帝は、王子コンスタンティン殿下と王甥マヌエルの下に、無数の而も優

れた軍旅をこの大公の許に遣はされました。大公はその二人を有難く迎へました。殊に大公妃はコンスタンティン殿下の妹君でしたので、その喜びは一入で御座いました。さうしてゐる間にも、追々戦ひの日は迫つて参りました。ある日のこと、大公妃は機を見て、兄のコンスタンティン王子と従弟のマヌエルとを自分の許に喚び寄せた上、涙と共にこれ迄の内情と戦の原因とを話して聞かせながら、自分の考へでは、大公は何處かにその女を匿して置いて、自分に侮辱を與へてゐるのだと怒訴いたしました。そして、嫉妬にわれを忘れながらも、二人に向つて、良人大公の名譽を回復すると共に、自分の受けた屈辱の匡正されるやうに力を盡して呉れと依頼しました。二人の若者は既にこの件を知つてゐましたので、改めて大公妃に質問などしないで、極力彼女の心を宥めようと思ひました。そして、その依頼に就いては頼母しい約束を與へました。なほ例の美人の匿まつてある場處を教はつた後、二人は大公妃の室を退出しました。處で、彼等はもうそれ迄に何度となく姫の美しさを噂に聞いてゐましたので、是非ともその女を見たいものだといふ心を起して、大公に向つて、姫を見せてくれるやうに懇願しました。

自分に姫を見せたばかりに、ローマニアの公爵がどんな目に逢つたかといふことも忘れて、大公は二人に彼女を見

せようと約束しました。そして、姫を住まはせてある別邸の見事な庭に、結構な晝餐の宴を調へさせまして、その翌日彼は極く少數の知己と一緒に、二人を連れてその宴に臨みました。食事の際、彼女と共に食卓に就いた時には、流石のコンスタンティン殿下も、つく／＼驚嘆の眼を瞠つて相手を眺め遣りながら、未だこんな美しい女は一度も見たことがないと承認せずにはゐられませんでした。そればかりか、大公に限らず何人にしても、こんな美しい女を所有するためなら、裏切りその他の卑劣な行爲に出るのも無理はないと心の中で怒しても遣りました。かうして何遍となくその女を眺めてゐるうちに、見れば見る程美しくなつて行くやうに思はれましたので、とう／＼彼は曩に大公がなつたのと同じやうな氣持になつて参りました。彼はすつかり姫に心を奪はれて別邸を立ち出でました。最早戦争のことなど考へないで、たゞ何うしてこの女を大公の手から奪ひ取つてやらうかと、そればかり思ひ耽りました。が、彼はこの思ひを他人の前には巧みに押し包んでゐました。で、彼がかういふ思ひに身を焦してゐる間に、公爵の軍勢もおひ／＼大公の領地近く迫つて來ましたので、いよく出陣しなければならなくなつて参りました。そこで、大公、コンスタンティン殿下を始め、自餘の諸侯は、かねての協定に従つて雅典を出發して、敵の進軍を阻止するために國

境指して急ぎました。そして、その國境に幾日かの間滞留して居りました。が、コンスタンティン殿下はその間も姫のことばかり考へつゞけて、今なら大公が姫の側にゐられないから、比較的容易にその目的を達することも出来ようと思ひました。そこで彼は雅典に立ち歸る機会をつくるために、わざと病氣を装ひながら、先づ従弟のマヌエルに自分の役を譲つて置いて、大公からその許可を得ました。さて雅典の妹の許に還つて参りましてから二三日して、彼は、妹の考へでは、大公が見知らぬ女に對する情熱からして彼女に加へた侮辱に話題を向けながら、彼女さへその氣ならば、例の女をその隠れ家から浚つて、何處か他所へ連れて行つた上、彼女の心の重荷を除いて上げること、さして困難ではないと申しました。

かういふ兄の申し出でを、まさかその女に對する愛から出たものだと氣が付きませんから、自分のためを思つてのことだとばかり信じて、大公妃はすつかりこの提案に同意しました。たゞ彼女がそれに同意したといふことを大公に知られないやうに事を運んで貰ひたいと云ふので御座いました。コンスタンティン殿下は、それはもう大丈夫だと請合ひましたので、大公妃も、それではどうぞ好いやうに取り計らつてくれと贅同の意を明かにしました。そこでコンスタンティン殿下は、密かに、一隻の小艇に

武装を施して、豫めよく云ひ合めた家來どもをその船に乗り組ませた上、かの姫君の匿まはれてゐる別邸の近くに差し向けました。さうして置いて、殿下自身は澤山の家來を引き具して、彼女の館にやつて参りました。彼は其處で彼女の召使並びに彼女自身に依つて懇切に待遇されました。姫は殿下の望みに任せて自分の召使と殿下の家臣とに守られながら、彼と共に庭園に出ました。そこで彼は大公の傳言を告げるやうな振りをしながら、一人だけ姫を海に通じてゐる木戸の方へ連れて行きました。その木戸は殿下の家來によつて前から開かれてゐたのです。で、謀し合はせて置いた合圖を見ると、忽ちそこへ例の小舟が現はれました。姫は直ぐに捕へられて、船の中へ搬んで行かれました。そこで殿下は姫の召使どもの方へ向き直りながら、「生命が惜しげりや、騒いだり聲を立てたりしてはならぬぞ」と申しました。「俺は大公から戀人を奪ふのが目的ではない、たゞ汚辱を除き、且は今幸運が姫に捧げてゐる美しさを樂しまうとするためなんだ。」

誰一人としてこの言葉に答へようとする者もありませんでした。そこで殿下は家來と共に小舟に乗り込んで、まだ泣き悲しんでゐる姫の傍に坐りました。そして、櫂を取つて、舟を岸から突き離させました。船員は櫂で漕ぐといふよりは、寧ろ翼で風を拂つやうに見えました。で、次の日

の曉方にはもうアエジナの港に到着しました。その港で船員達は休息のために上陸しましたが、殿下は一人後に残つて姫の魅力を楽しんでゐられました。かうなると、姫はただもうわが身の不幸な美しさを泣くばかりで御座いました。やがて船員達も船に戻つて、數日の後にはキオスの港に到着しました。

殿下は父王の怒りと、彼の手から姫を奪はうとする偶然の誘惑とを恐れてゐましたので、この港に留まれば安全だと思ふところから、しばらく其處に滞在することに致しました。幾日かの間は姫も自分の不幸を泣き悲しんでゐましたが、日の経つにつれて、だん／＼殿下の慰めの言葉に耳を傾けて、間もなく運命が彼女に齎したものを享け楽しむやうになりました。

かういふ風に事件が進展してゐる間、當時の土耳其王で、殿下の父皇帝とは間斷なく戦を交へてゐたオスベツク王が偶然スミルナの地方に遣つて来て、コンスタンティン殿下が何等の武備も具へず、キオスで一人の掠奪して来た美女と共に淫樂の生活を送つてゐることを耳にしました。で、一夜二三隻の武装した船を仕立てて、自ら軍勢を指揮してその地に侵入しながら、希臘側のものが敵の來襲も知らずに高枕である寢込みを襲つて、難なくその多數を生捕りにしました。物音に目を醒して武器を取つて立ち向つた連中

は皆殺されてしまひました。港の家は焼き拂はれた上、戦利品や捕虜は船に運び込まれて、スミルナに引き連れて來られました。そこへ着いた時、まだ年も若く體力も強健であつたオスベツク王は、戦利品の檢閲の際例の美しい姫を見て、それがコンスタンティンと寢室を共にしてゐた女だといふことを知りまして、非常にその美貌を喜んで、早速彼女を自分の王妃に立て、華々しい結婚式を擧げて、それから幾箇月かの間は姫と共に好い心持ちで戀の歡樂に耽つてゐました。

この事變に先立つて、コンスタンティン殿下の父皇帝はカツパドキアの王バザヌスと商議して、バザヌス王の軍勢が一方からオスベツクを襲つてゐる間に、他の一方から皇帝の軍が攻めかゝらうと致しました。しかも、バザヌスの側から持ち出した或要求が皇帝に取つて都合の悪いものであつたので、この協定はなほ成立を見ないでゐました。處が、皇帝は皇子コンスタンティンの遭難を聞きまして、非常に憂ひ悲しんだ結果、直ちにカツパドキア王の要求を容れて、自分自らもオスベツク王攻撃の準備を整へた上、他方から土耳其古王を襲撃せむことを極力バザヌス王に迫りました。一方土耳其古王オスベツクはこの報告を耳にしますと、二方から大軍に挟み撃たれるやうなことになるにやうに、直ぐに自分の軍隊を集めて、カツパドキア王の軍勢に向つ

て進撃しました。同時に彼は自分の王妃を、最も信用のおかげで家来の監督の下に、スミルナに残して置きました。間もなく王とカツパドキアの王との間に激戦が開始されて、土耳其軍は全滅の憂目に逢ひ、王御自身も亂軍の間に討死されました。勝利を獲たバザヌス王が大膽にもスミルナに向つて進軍すると共に、沿道の民は皆彼に従順を誓ひました。

この間にアンテイオクス——オスベック王が寵姫を託した家來は、かういふ名前でした——は年甲斐もなく、信頼された主君に負へる忠誠の念も忘れて、たゞもう王妃の美しさに心を奪はれながら、只管思ひを焦すやうになりました。處で、この男はアレキサンドリアの言葉にも通じてゐましたので、そのかしづきは王妃に取つても少なからぬ慰藉となりました。何しろこれ迄二三年の間といふもの、彼女はまるで豐饒者と同じやうに、自分の云ふことは誰にも通ぜず、誰の云ふことも自分には解らないといふやうな生活を送つて来たのですからね。そこで彼も戀故惻巧に立ち廻りながら、ほんの僅かの日数のうちに姫から多大の信頼を博したばかりか、二人とも現在武器を取つて戰場にある主人のことも忘れ、遂には友人としての親しみがいとし可愛いの戀愛に變つて、互ひに枕を交して樂しむやうになりました。處が、その間にオスベック王が敗れて死んだこと、バザヌス王が進軍の途中あらゆるものを掠奪してゐる

ことなどが聞えてまゐりましたので、二人はその襲來をおめおめ待つてゐるよりは、いつそのこと故オスベック王の財寶を大部分身に付けて、秘かにロドウスの方へ遁れ去らうと相談を決めました。

二人がロドウスの地に来てまだ間もないこと、アンテイオクスが大病に罹りました。その時サイブラス島の商人がアンテイオクスの家に参りました。この商人はアンテイオクスと非常に仲がよく、常々親しい交際を續けて居りました。處で、アンテイオクスは、自分の命が既に旦夕の間に迫つてゐることを覺りましたので、その財産と愛してゐる女とをこの友人の手に委ねて行かうと決心しました。で、死期の近づいた時、彼は枕頭にこの二人を喚んで、かう申しました。「私も今度ばかりはもう助かりさうもない。さう思ふと本當に悲しい。だつて、今ほど生きてゐたいと思つたことはこれ迄にもないのだからね。然しこの世で誰よりも愛してゐた二人の腕に抱かれて死んで行くんだと思へば、同時に又有難いことだとも思つてゐるよ。といふのは、一つは友人の君の手であるし、もう一つは、初めて知つてからといふもの、自分の命以上に愛して来たこの女の手なのだ。この女が私の死後、誰一人授け人もなければ相談相手もなしに、知らない土地に取り残されるかと思へば、私はそれが氣懸りで耐らない。だが、ねえ君、自分の

てゐる友人の君がかうして私を訪ねて来てくれず、従つてこれ迄君が私のためにして呉れたと同じやうに、この女のためにも心配して呉れるといふことが分らなかつたら、それこそ一層氣懸りで死ぬにも死なれないだらうよ。だから私は君に後生一生のお願ひがあるのだがね、若し私が本當に死んでしまつたら、どうか私の財産も、それからこの女も君の手に引き取つて下さい。そして、それを、冥土で私が安心するだらうと思はれるやうな工合に、どうか一つ處理して下さい。それから女房や、お前にもよく頼んで置くがね、私が死んでからも、どうぞ私のことは忘れないでお呉れよ。さうすれば、私もあの世に行つてから、嘗てこの世に生れた女といふ女の中の一番美しい女に愛されたと云ふので、それを自慢にすることも出来るからね。で、若し君方二人が以上二つのことを誓つてくれるなら、私も安心して釋やかに眼を瞑ることが出来るだらうよ。」

商人も姫もこの言葉を聞いて泣きました。そして、相手が云ふだけ云つてしまつた時、元氣を出すやうに勵ましながら、若しものことがあつたら、何でもそちらの望み通りにするからと言葉を番へました。間もなく彼は息を引き取りました。そして、二人の手で鄭重に埋葬されました。

二三日後つと、このサイブラス島の商人もロドウスに於ける商用を片付けて、恰度その港に碇泊してゐたカタロニ

アの船で、サイブラスに旅立たうと思ひました。しかし彼はまづその美しい姫君に、自分は今故郷に歸らうとしてゐるが、彼女はどうかする決心なのかと訊ねました。姫は御迷惑でさへなければ、アンテイオクスに對する好意上妹として萬事引廻して頂けるものなら、喜んでお伴がして参りたいと答へました。商人は相手の存意に一切異議のない旨を答へました。そして、いはれなき侮辱を蒙ることのないやうにと云ふので、サイブラス迄の航海中は彼女を自分の妻だと云つて置きました。船の上では、後部の小房を當てがはれましたが、あまり嘘を云つたやうに思はれてもならぬと云ふので、二人とも一つの小さな寢臺の上で臥せることにしました。かうなると、出立の際には、二人とも夢にも思はなかつたことが持ち上らずにはゐないのですね。……

に幸運に恵まれないで、大分もう高齢に達して、氣性優もれてゐるに拘らず、まだ少しも富をなすに到らないのでした。この人が、ある日のこと、例の商人が商用のためにアルメニアの方へ旅行してゐる間に、姫の住まつてゐる家の前を通りかゝつて、恰度好い鹽梅に窓の所に立つてゐた姫を見掛けました。あまりの美しさに、アンティゴニスには思はずそれに心を惹かれて、更に注意して見直しますと、この女なら以前何處か見たことがあるやうに思はれて來ました。が、何處で見たのだから、彼にはどうしても思ひ出せませんでした。處で、それ迄はまるで運命の女神の手鞠のやうになつてゐた姫にも、今やその不運のおしまひになる時が近づいて來たのです。彼女はアンティゴニスの顔を一目見ますと、嘗てこの男がアレキサンドリアで自分の父に仕へて相當な地位になつてゐたことを、直ぐに思ひ出したので御座います。

それですから姫は、例の商人の不在である今こそ、このアンティゴニスの助力に依つて、もう一度自分の王族としての地位を取り返すことが出來やしないかといふ希望を、その場で心に抱いたのです。で、彼女はさう思ひ着くや否や、この男を自分の手許に招び寄せました、そして、相手が遣入つて參りますと、彼女はおづ／＼しながら、貴方は若しやアンティゴニス・フォン・アマゴスタと仰し

やる方では御座いませぬかと訊ねました。アンティゴニスはその相違ない旨を答へて、次のやうに付け加へました。「私も貴女様を存じ上げてゐるやうに思ひますが、何處でお目にかゝりましたのやら、それがどうしても出て來ないので御座います。ですから、御迷惑でさへありませんでしたら、どうかお名前をお聞かせになつて頂きたいもので御座います。」

姫は相手が本當にアンティゴニスであると知りますと、聲を擧げて、相手に兩腕を投げかけたまゝ、しばらく泣き沈んでゐましたが、やがて呆氣に取られた男に、自分をアレキサンドリアで見た覚えはないかと聞き返しました。アンティゴニスはかう聞かれるや、直ぐに彼女が海で溺死したものと信ぜられてゐる皇帝の王女アライエル姫であることを覺つて、急にそれ相當の敬意を拂はうと致しました。けれども、彼女はそれを留めて、暫く一緒に腰を下ろして呉れと申しました。アンティゴニスは云はれるまゝに腰を下ろして、十分に敬意を表しながら、全埃及の人達が彼女は幾年も前に海に溺れて死んだものとはかり思ひ込んでゐるのに、一體何うして、何時、又何處からバツファなどに遣つて來たのかと訊ねました。

姫はそれに答へました。「今迄送つて來たやうな心にもない生活をする位なら、いつそさうなつてゐた方がどんな

に好かつたでせうね。父上がお聞きになつても、屹度同じやうに申されることで御座いませうよ。」

そこでアンティゴニスは申しました。「姫君、そのやうにお氣を落されずな。氣を落すのは、いよく他に道がなくなつてからでも遅くは御座いせんからね。で、お宜しかつたら、どうぞ私に姫君の御不幸や、これ迄どんな目にお逢ひ遊ばしましたか、それをお聞かせになつて下さいまし。何事によらず、さうした経過を取りまして、結局神のお助けに依つて満足な結果に立ち到ることも、随分と御座いますこととせうからな。」

「アンティゴニス」と、姫はそれに答へました。「お前を見た時には、私はまるで父上にお目にかゝつたやうな氣がしましたのよ。で、匿して置かうと思へば匿しておほせたかも知れないが、お前に打ち明けたと云ふのも、實は父上に對する可愛しさ懷しさのさせた業なんだわ。他の誰よりも先に、第一番にお前を見掛けて、それが誰だと分つた時の嬉しさと云つたら、もう／＼世の中にこんなためしがあらうとは思はれないの。ですから私は、いろ／＼不幸に出逢つた間始終氣を付けて隠して置いたことを、父上に打ち明ける積りで、一つお前に聞いて貰ひませう。で、若しもこれから私の話すことを聞いた後に、未だ私を元の通りの地位に返すやうな手段があると思つたら、どうぞそれを遣つて

見て下さい。けれども、もう手の下しやうがないと思ひだつたら、どうかお前が私に逢つたことや、私の身の上を聞いたといふことを、決して他人には云はないやうにして下さい。」

かう云つたやうな前置きをした後で、彼女はマジョルカ島の海岸に漂着した日から、今かうやつて話しをしてゐる際迄の出來事を、涙ながらに残らず語つて聞かせました。アンティゴニスも、その話しを聞いて、同情の念から涙を流さずにはゐられませんでした。それからしばらく考へてゐた後、かう云ひ出しました。「姫君、さうしてさ／＼な不幸にお逢ひになつた間にも、貴女様が一度も御自分の名前も地位もお明かしにはならなかつたと云ふからには、何とか致しまして、父君が以前に僞して貴女様をお愛しになるばかりか、アルガルビアの王様も貴女様を王妃にお迎へ遊ばすやうに骨を折つて見ませうよ。」

何うしてそんなことが出來ようかといふ姫の問ひに對して、彼は自分の計畫を順序よく説明して聞かせました。そして、他の障害が起らないうちにと云ふので、直ぐ様アマゴスタを指して歸つて行きました。そこで彼は國王の前へ伺候して、「陛下よ、若し陛下のお氣に召しますならば、陛下御自身も大いなる名譽を得られると共に、もと／＼陛下に微力を致して貧乏になりました私に莫大な利得をお授

け下さることが出来るので御座います」と申し上げました。すると、陛下はどんなことだとお訊ねになりましたので、彼は次のやうに答へました。

「ずつと以前瀕死になつたと傳へられてゐる皇帝の若い美しい姫君が、今、パツファまでお出でになつていらつしやいます。姫君は御自分の貞操を守るために、長い間幾多の艱難辛苦に堪へて來られました。その結果、今では父君の許へお歸りにならうにもなれない程、窮乏の状態に陥つてゐられるので御座います。で、若し陛下の御心に適ひますれば、私が姫を守護して、父君の手許に送り届けたいと存じます。さすれば陛下には大きなお手柄になるで御座います。私も亦たんまり御恩賞にありつけることで御座いませうし、それに皇帝も、これ程の好意を盡されたら、長く忘れるわけには行かないだらうと思はれますよ。」

王は王者に應はしい考へから、直ぐにこの意見をお容れになりました。そして、堂々たる使節を遣はして姫をアマゴスタに迎へ取つた上、王妃と共に禮を盡して款待されました。王と王妃とがそれ迄の運命について質問をかけた時、姫は豫てアンティゴノスから教へられた通りに答へて置きました。

二三日の後王は姫の請ひを容れて、アンティゴノスの指揮の下に、男女から成る堂々たる選り抜き供揃ひを仕

立てて、姫をその父王の許に送り返されました。姫君の御到着に際して、その歡びが如何ばかり大きなものであつたかは、事新らしく述べるまでもありません。アンティゴノスを始めとして使節の一行も非常に喜んで迎へられました。姫君がまだ旅の疲れを幾分忘れたか忘れないに、父の王は彼女を前へ喚んで、何うして彼女が無事に生き存へてゐたか、何處でそんなに長い間暮してゐたか、又どうして父に自分のことを知らせて寄越さなかつたのかなどと、立てつゞけに聞かうとせられました。それに對して、姫はアンティゴノスの入れ智恵をかねてよく呑み込んでゐましたので、次のやうにお話しをいたしました。

「父上様、私が父上様の許を旅立ちましたから凡そ二十日目位で御座いましたでせうか、恐ろしい暴風が起りまして、私の船は摧けてしまひました。そして、夜分の間にアダモルタとかいふ土地の西海岸に打ち上げられました。船に乗つて居りました人達が何うなつてしまつたことやら、私には一向解りません。たゞその翌日になつて、私が一旦死んだ者が甦つたやうな氣持でゐますと、その間にこの打ち上げられた船に氣づいて、それを掠奪するために四方八方から集まつて來た土地の住民どもの手で二人の侍女と一緒に陸に運び上げられたことだけは覺えてゐます。そして、若い男どもは私達三人をめい／＼別の方面へ連れて行きま

した。この二人の侍女がどうなつたか、その後一向便りも御座いません。私はいろ／＼と反抗しましたけれども、二人の男は泣いてゐる私の髪を掴んで曳き摺つて行きました。處が、この男達が國道を横切つて、今や繁つた森の中へ私を曳き摺り込ました時、好い鹽梅に、四人の騎士が同じ道を造つて參りました。二人の掠奪者は四人の姿を見ますと、急に私を放り出して逃げて行つてしまひました。四人の騎士は、お見掛け申した處、なか／＼お立派な落ち着いた方々のやうに思はれましたが、二人の男が逃げて行くのを見ると、直ぐに私の傍へ近づいて參りまして、いろいろな事をお訊ねになりました。私もいろ／＼お話ししたにはしましたが、先方様も私の申すことが解らず、私にもその方々の仰しやる事が通じないので御座います。そこでその方々は長い間相談をして居られましたが、結局私をその馬の一つに乗せて、その國の宗法によつて建てられた尼僧院へ連れて行かれました。そこで四人の騎士方がどんな話をなさいましたか、それは一向存じませんが、兎に角私は非常な好意で以つて迎へられた上、それからも始終一方ならぬ尊敬を拂はれてゐました。そして、私は澤山の尼僧達と一緒に、その國の女達から深く信心されてゐる、深い谷の中の聖なる三日月標を熱心に禮拜するやうになりました。かうしてしばらくその修道院に足を駐めて居ります間

に、私にもいくらかその國の言葉が解つて參りました。すると、皆様は、私が何ういふ者で、何處から來たのだと、根氣にお尋ねになるのですね。けれども、自分が今何ういふ所へ來てゐるかをよく考へて見ますと、私が眞實のことを申しましたら、その方々の信仰の敵として容易に排斥されるだらうと、それを心配しましたので、私はサイブラスの貴族の娘で、クリート島にゐる許婚の良人の許へ參る航海中、暴風のために押し流されて、離船の憂き目に出逢つたのだと申して置きました。

「その時分は、私もそれ以上の憂き目を見るのが惧ろしさに、その國の風習をいろ／＼と眞似しなければなりません。處が、ある時人々から院主と崇められてゐる一人の尼僧が、故郷サイブラスに歸りたくはないかと、私に問はれました。私は勿論歸りたいのは山々であるとお答へしました。けれども、私の一身に關する御懸念から、サイブラス島に向つて旅立つ方々にも、なか／＼私のことをお頼みにならうとはなさいませんでした。處が、恰度今から二箇月程前に、二人の眞面目な紳士、しかもその中のお一人は院主様の御親類だといふ方が、それ／＼奥様をお連れになつて、佛蘭西からその土地へお出でになりました。處で、このお二人は、猶太人達に殺されて後、そこに葬られて、人々から神と崇められてゐる人の墓所にお詣りをなさるた

めに、ジェルサレムへ旅行されるといふことで御座いましたので、院主様はその人達に私をお託しになつて、サイプラスの父親の許に送り届けてくれるやうに御依頼になりました。その人達が私を旅の道伴侶として親切にして下さつたことだの、車様方と同じやうに、鄭重に待遇して下さいつたことだのは、一々申し上げるのも冗々しい程で御座います。ともあれ私達は船に乗つて、幾日かの後にバツファに到着しました。さてバツファに着くは着きましても、素より知る人とても御座いせんから、院主様のお頼みに依つて私を父の許に送り届けるつもりでいらつしやる例の紳士方に、何と申して宜しいやら私には皆目分りませんでした。けれども、神様が私を憐れと思し召したので御座いませうね、私どもがバツファの港に上陸しましたその瞬間に、海岸指してアンテイゴリヌスが遣つたので御座います。直ぐに私は彼に向つて喚びながら、その紳士方や奥さん達に分らないやうに、私達の國語で、どうか私の父のやうな風をして自分を引取つてくれと頼みました。彼は直ぐに私の心を汲み取つて、私の無事を大層喜んでくれました上、大した事は出来ませんでした。兎に角彼の力の及ぶ限り、その旅の道伴侶の方々を饗應して呉れました。それから彼は私をサイプラスの王の許に連れて行きました。王様は私を大層鄭重にもてなして下さいました上、かうして父上の

許へ送り届けて下さいました。眞偽、その御親切は言葉に申し上げ切れない程で御座います、なほ私の話し足りない處がありましたら、どうぞアンテイゴリヌスにお聞きになつて下さいませ。あの男には、繰り返し／＼これ迄の事を話して参りましたから。」

そこでアンテイゴリヌスは皇帝の方へ向つて、かう申しました。「陛下、姫君が只今仰しやつたことは、これ迄手前が度々姫君からも、又姫君をサイプラスまで一緒にお連れ申した紳士方の口からも伺つたところと全く同一で御座います。けれども、たつた一つ姫君はお云ひ残しになりました。尤も、それも姫君が御自分で仰しやるには應はしくないからであらうと存ぜられます。つまり姫君がその尼院で尼僧達と一緒に送りになつた生活や、姫君の高徳やしとやかな振舞に就いて、例の一緒に旅をして来た紳士やその夫人方が私に話してくれましたこと、並びにその方々が姫君を私に返して、今はもう彼女とも別れなければならぬと云ふので、どんなに心から泣いたり嘆いたりしてくれたいかといふことで御座いますよ。若し私がこれ等の點に就いてその方々から承はつたことを一々繰り返してみましたら、今日は愚か、今晚中かゝつても語り盡せるものでは御座いせん。で、たゞ一言申し添へて置きたいのは、あの人達の報告とその後私自身の観察した處から推して申しますと、

あらゆる國王の中で、陛下は最も美しく、最も操正しく、又最も優れた姫君をお持ちになつたものとして、いくら御自慢なされましても然るべきだと云ふことで御座います。」

凡てこれ等の事を聞いて、皇帝は筆紙に盡し難い程お喜びになりました。そして、自分の娘のために力を盡して呉れた人々、殊に彼女をかうした王者の待遇で自分の許へ送り返して呉れたサイプラス島の國王に、それ相當の感謝の意を表することが出来るやうに恵みを垂れたまへと云ふので、幾度となく神に祈りを捧げられました。で、二三日の後、彼はアンテイゴリヌスに非常に高價な贈物を與へた上、サイプラスに歸ることを許されました。そして、その國王に對しては、特使を立て、親書を以て、自分の娘に與へられた好意に對して、出来るだけ鄭重に感謝の意を表されました。

かうした一切の用件を済ませてから、皇帝は最初の計畫を實現して、王女アラティエル姫をアルガルビアの王に配せたいと思ひました。で、彼は最初からの願末を手紙に認めて先方に知らせた上、もし姿があるなら、そちらから迎ひを寄越して貰ひたいと云つて遣りました。アルガルビアの王はこの報告を見て非常に喜びました。そして、華しく姫を迎へ取つた上、夢中になつて姫の手を取りました。そして、前後八人も男の手にかゝつて、恐らくは……

……もおぼえのある女を無垢の處女と思ひ込んで、喜んで合巻をいたしました。かうして彼女は、王妃として幸福に一生を送りました。ですから今日でも「新月と接吻を受けた唇とは直ぐに又明るくも新らしくもなる」といふ譬へが残つてゐるので御座います。

第八話

アントワーブの伯爵冤罪を蒙つて祖國追放の憂目に逢ひ、二子をそれ／＼英國の地に殘して去る。後効かに愛蘭土を連れて、二子ともそれ／＼幸福な境遇にあるを知る。それより厩舎の番人として、佛蘭西王の軍旅に従ふ。その後冤罪晴れて、目出たく昔日の地位を回復した話。

美しいアラティエル姫の遭遇した、いろ／＼な運命を耳にして、貴婦人達は屢々吐息をつきました。けれども、その吐息の原因の何であるかは、誰か知らんやです。と申しますのは、同情のためにと云ふよりも、寧ろその數へ切れない程度々の結婚を羨ましがつて吐息をついた人もないとは云はれないからで御座いますわい。が、今はそんな詮索は止めにして置きませう。さて、女王はバムフイロの最

後の言葉からその話が終局を告げたことを知りまして、これ迄の順序に従つて、今度はエリザが斬らしい話をつよけるやうに命じました。エリザも疾うからその心算でゐましたので、喜んで、次のやうに話を始めました。――

私どもは今日、めい／＼が一本の槍では足りなくつて十本乃至それ以上の槍を苦もなく使ひ折つてしまふやうな、それ程廣大な戦場に立つてゐるので御座います。それ程數限りもない、思ひも設けぬ困難を運命は私どもに提供してくれるのですわね。そこで私もそんなに澤山の悲惨な運命の中から、一つだけ取り出してお話し申し上げたいと存じます。

羅馬帝國の實權が佛蘭西人の手から獨逸人の手に歸してからは、この兩國の間に大きな敵意が生じて、絶えず激しい戦争がつきましました。そこで或時佛蘭西王父子は、一つには自國の保護のために、又一つには敵國征服のために、國を擧げて、徵募に應ぜられる限りの親族知己の援助の下に、大軍を組織して戰場へ向はせました。いよ／＼軍隊と共に出征するに先立ち、王父子は、國家に指導者のなくなることを慮りまして、門地も高く、明察人に勝れてゐる上に、彼等の見る所では、特に信實で、忠誠で、友情に篤いアントワープのダアルテル伯爵を擡でて佛國の攝政官に命じました。と云ふのは、この伯爵も勿論兵法に明るい人

ではありましたが、戦地で働くよりも華やかな宮廷生活に一層適切な人物だと、王父子に見込まれたからですね。そこで伯爵は自分に委任されたこの大役を賢明に且用心深く處理して行きました。そして、事毎に王妃と太子妃の二人に相談を持ち掛けました。二人の方ではすつかり伯爵の手腕力量に信頼し切つてゐましたものゝ、伯爵としては、何處までも自分の主人であり支配者であるものとして、二人を崇めてゐたので御座います。

ダアルテル伯爵はまづ美男と稱んでもいゝやうな方で、年齢は四十前後で、どんな貴族にも劣らない程舉止が典雅である上に、他人を逸らさぬ話上手でも御座いました。彼は又當代切つての優れた美しい騎士で、特にその華やかな水際立つた衣裳に人目を惹いてしめるものがありました。彼の妻は疾うに亡くなつて、後には幼い男の子と女の子の二人が残つてゐるばかりで御座いました。處で、國王父子の出征中、ダアルテルが王妃と太子妃の宮廷に屢々出入して、國政變遷に關して二人と相談をしてゐる間に、太子妃は何時しか伯に眼を着けて、その風采や舉止をいとしいものに見遣りながら、内々道ならぬ思ひに胸を焦がしました。それに、彼女は自分が年も若く顔も美しい上、相手に妻のないことも知つてゐましたので、思ひを遂げるのは造作もないやうに思つて、それを邪魔するものはこちらの差

恥心の外にないと、一人で自惚れた結果、一思ひにそれを押破つて、相手に心のたけを打ち明けようと決心しました。

この目論見から彼女は、ある日自分一人である折に、こんな時だと思ひまして、國事外の事で彼と話しをしたいからと云ふので、使者を伯爵の許に立てました。伯爵の方では、太子妃にさうした心があらうなぞとは、それこそ夢にも思つてゐませんでしたので、仰せに従つて、直ぐに遣つて参りました。そして、妃殿下から命ぜられるまゝに、一人きりで彼女のゐる部屋に入つて、相手と並んで安樂椅子に腰を掛けながら、何のためにお召しになりましたかと訊ねました。が、一向返辭が御座いませんでした。とう／＼彼女は胸の想ひに堪へかねて、恥づかしさに顔を赧らめながらも、ぶる／＼顫へて聲を吃らせつゝ、次のやうに云ひ出しました。――

「ダアルテル様、貴方のやうな、物の判つたお方には、殿方ばかりでなく女の心の弱さ脆さも十分お解りになつてゐることと存じます。勿論、心の弱さと申ししても、いろいろな根據からして、人様によつてそれ／＼程度を異にしてゐることは申すまでもありませんがね。で、この人間の弱點を考慮しましたら、公平な裁判官は、同一の罪でも人が違へば、決して同じ刑罰を課するやうなことはしないで御座いませうよ。例へば、こゝに額に汗してその日／＼の

口を糊して行かなければならぬやうな貧乏な男乃至女があつて、それが戀に捕はれてその誘惑に陥つたとしましたら、體にそれは、富と暇との裡に生活して、自分の欲しいと思ふものは何一つ手に入らないことを知らない婦人が同じ罪を犯した場合よりも、一層多く批難されて然るべきだといふことを誰が否定いたしましたせう？ そんな人はまあ、何處にもないやうに思はれますわ。ですから、上に述べたやうな境遇に相當する女が、戀に目が昏んで、たとひ身分を忘れるやうなことがあつたとしましても、その境遇はこの女を辯疏する上に大いに力あるべき管だと、私には思はれるので御座います。況してやこの女が、それ以外に、特に分別のある立派な戀人を選んだとしますれば、それこそこの女には何事も許されなくてはなるまいと思はれますわ。處で、私の場合はその両方に相當してゐるばかりでなく、他にも私を戀に引き入れるやうな澤山の原因が御座いますすわね――例へば、私の若さとか、良人の不在とか云つたやうな。これ等のことは凡て貴方の眼に私の燃えるやうな思ひを辯解してくれるでせう。で、物の判つた方なら何方にでも通じるやうに、貴方にもこの一念が通ずるものなら、お願ひですから、何とか助言を與へて、私の力になつて下さいませ。

「で、私は良人の不在の間、肉の欲望と戀の力とに抵抗す

ることが出来なかつたことを白状します。二つながら、優しい女は云ふまでもなく、強い男の方でさへ、そのためには屢々征服されましたし、又現に征服されてもゐる程、力強いものなのですからね。ですから、現に私の住んでゐるやうな、贅澤な有閑の生活にあつては、戀の欲求に耳を藉して、愛の炎を燃え上らせる程、自分が弱かつたといふことも白状します。この弱點を世間に知られでもしたら、それこそ不體裁なものだとは、私も存じてゐますけれども、（尤も、それが知れずに隠されてゐる間は、別段そんな心配をするには當らないでせうがね）兎に角、相手の選擇に當つて適當な洞察力を失はないで、どちらかと云へば、それを豊富に使つて、貴方といふ、私のやうな貴婦人の愛に値ひした方を取ることの出来るやうにしてくれた愛の神様は、あれでなか／＼お恵み深くいらつしやいますわね。私の眼が眩んでゐるんでなけりや、貴方はこの佛蘭西の國中でも、一番美男で、一番可愛らしい、一番上品な、又一番物の判つた騎士でいらつしやいますわ。それに貴方は奥様なしでいらつしやいますわね——恰度私が今良人なしであるやうに。で、私は貴方に對して、この心に持つてゐる熱烈な愛にかけてお願ひしますから、どうぞ貴方の愛を私から斥けて下さいますな。そして、私の若さに同情を寄せて下さいませ。實際、それは貴方のお蔭で火にかけた氷のやう

にすつかり落ちてしまつたのですものね。」かう云つてしまつてからも、まだ云ひ足りないやうに思つて、何やらそれに附け加へようと思つてしまつたが、せぐり来る涙に、もう一言も口が利けなくなつて、頭を下げたまゝ、感情に壓倒されて、わつと泣き出しながら、伯爵の胸に倒れかゝつてしまひました。伯爵はそれに反して、心から正義の士であつただけに、かゝる愚かな戀を叱りつけながら、もう少して自分の頭に獅噛みつきさうな太子妃を背後へ突き退けました。そして、神聖な誓ひを立てて、それが自分であらうが他人であらうが、我が君の名譽に係るかうした行爲を容して置く位なら、いつその身を八つ裂きにされた方が優しだと斷言しました。

この返答を聞くや、太子妃のそれ迄の戀は俄かに暴れ狂ふ憎惡に變つてしまひました。「まあ、分らない騎士だこ」と——と彼女は叫びました。「あんな事を云ひ出したからと云つて、私はこんなにお前さんから侮辱されなければならぬの？ よろしい、お前さんが私を殺さうとするなら、その代りに私は蛇度お前さんを殺してしまふか、さもなければこの國にゐられないやうにして上げるから、さう思ふがいゝ。」かう云ひながら、彼女は髪に手を遣つて、自分ですつかり掻き掻き掻き亂しました。それから着てゐる衣を引つ裂いて、胸まで露き出しにしながら、出来るだけ

大きな聲を擧げて嘯鳴りました。「助けて、助けて、アントワーブの伯爵が私を手込めにしよう……！」

伯爵はこの有様を見て、宮廷の人々の嫉みの前には、最早良心の潔白も自分の身を護るに足りないことを恐れしました。と云ふのは、それ等の人達は彼の冤罪よりも太子妃の腹黒い言葉に蛇度より多くの信を置くに相違ないでせうからね。そこで彼は立ち上るなり、遽て、その室を逃れながら、宮廷を出て自分の第に走せ戻つて參りました。そして思案する間もなく、いきなり二人の子供を馬に乗せ、自分も馬に跨つて、カレリーを指して急ぎました。

一方宮廷では、太子妃の叫び聲を聞いて、多くの人々がその場へ駆けつけました。彼等は、先に申し上げたやうな妃殿下の有様を見て、彼女に依つて與へられた叫び聲の原因をその儘信じたばかりでなく、日頃の伯爵の禮儀正しさや優雅な舉止も、たゞこの非望を遂げるために長い間實行された奸手段に過ぎないとまで、附け足して云ひ振らしたもので御座います。そこで大勢の者どもは嗚り狂ひながら、伯爵を捕へようとして、その邸に押し寄せました。が、その時はもう彼の姿は見えませんでしたので、直ぐさま邸の掠奪破壊に取りかゝつて、影も形もなくなるまでその手を弛めませんでした。處で、この噂は、巴里全市に傳へられた時と同じやうに、ひどく針小棒大されて、やがて出征中

の國王父子の軍隊にも傳へられました。二人がかうした犯行に對して赫怒されたのは云ふまでもありません、伯爵を始めその子孫を永世國外追放に處せられました。そして、誰でもあれ、この伯爵一家の者を生きながらでも殺してでも捕へて來た者には、莫大な恩賞を與へらるべしと聲明されました。

伯爵は身の潔白にも拘らず、逃亡した爲めに、他所目には却つて犯行の責めを負ふやうなことになつたのを残念に思ひました。と云つて、そこにまご／＼してゐられませんかから、二人の子供を伴つて急ぐ間に、他人にも見咎められないで、無事カレリーに到着しました。そこから船で英國に渡つて、貧しい服装に身を削しながら、倫敦指して道を辿りました。處で、まだこの都に足を踏み入れないうちに、彼は二人の子供に向つて詳しい指圖をした中にも、特に次の二つの點を強調しました。第一には、運命の絲に操られて、罪なくして陥つたこの窮乏には、二人とも我慢して堪へ忍ぶ外ないといふこと、次には、命惜しいと思つたら、出来るだけ用心して、何人にも自分の生國や家の名を明かしてはならないといふことで御座いました。男の子は名前をルードウイヒと云つて九歳位、女の子はダイオランテと云つて凡そ七歳位で御座いました。二人ともその年齢に應じてそれ／＼父の訓戒をよく聞き分けました。が、一層容

易にこの目的を達するために、父親は子供達の名前を更へて置く必要を感じまして、兄をピエロ、妹をジャネットと名付けました。

で、三人ながらみすぼらしい服装をして、倫敦へ遣つて参りました。そして、佛蘭西の乞食がするやうに、施與を求めてその邊をぐる／＼廻り始めました。ある朝のこと、三人が毎ものやうに施物を受けようとして、或教會堂を訪ねて参りました時、英國王に仕へる將軍の一人に嫁いでゐる貴婦人がこの伯爵と二人の子供とを見掛けました。貴婦人は彼に、お前は何處から来たのか、二人の子供はお前の子供かなどと訊ねました。彼はそれに對して、自分はピカルデイの者であるが、無頼漢の長男が犯した罪のために、二人の幼児を伴れて故郷を逃げ出さなければならなくなつたので、勿論二人とも自分の子であると答へました。この貴婦人は大層同情心の深い人でした。彼女は二人の子供達を見遣りながら如何にも可愛らしく、馴れもよささうで、それに人見知りをしないのが大層気に入つたらしく、伯爵に向つてかう申しました。「失禮ですが、若しお宜しかつたら、この娘さんを私にお預け下さいませんか。あんまり可愛いので、お世話をいたして見たいと存じますの。年頃にもなつたら、折を見て相應な家に嫁づけるやうに致しますせう。」

この申し出では、伯爵にとつては願つてもないことでした。で、彼は言下に承諾の旨を答へて、涙ながらにその子を貴婦人の手に渡しました。そして、萬事の世話を頼みました。

さてかういふ風に娘を情深い他人の手に預けて、半分荷を下ろした伯爵は、最早倫敦に留まつてゐる必要はないと考へましたので、乞食をしながら英國本土を通り抜けて、息子のピエロと共に、馴れない徒歩の旅にいくその艱難辛苦を嘗めつゝ、とう／＼ウエールスの地に到着しました。ウエールスには將軍が住んでゐまして、大きな邸宅を構へ、澤山の召使を使つてゐました。伯爵の父子は屢々その庭へ廻つて、食を乞うたことがありました。處で、この將軍に一人の男の子が御座いました。その子は、他の貴族の子供達と一緒に、どこの子供もするやうに駆けつこや跳びつこなどの遊戯をいたしてをりました。この仲間にピエロも立ち交つて、皆のする遊戯なら何でも、何人にも劣らず、時には何人よりも優つて上手に遣つてのけました。將軍は二度この遊戯を御覧になりましたが、ピエロの態度に心を惹かれて、一體何處の子だとお訊ねになりました。すると、誰かが、時々物を貰ひに来る貧しい男の伴であると答へました。そこで將軍は子供の父親に對して、その子を引き取る交渉をさせました。父親は、日頃そのことばかり神に念

じてゐた位ですから、その子に別れるのを悲しくは思ひませんでしたものゝ、喜んでそれに應じました。

かうして二人の子の身の振り方も附きましたので、伯爵も最早英國にとどまる必要もないところから、どうかして愛蘭土へ行つて見たいものだと思ひました。やがてそこへ着いた時、彼はスタンフォードの近くの田舎で或伯爵の許に奉公して、下僕や馬丁どものする雑役に従ひました。そして、長い間そこで多くの艱難と非常な勞役に堪へつゝ、誰にも知られずに留まつてゐました。

一方、今ではジャンネットと稱ばれてゐるヴィオランテは、倫敦の貴婦人の許で、おひ／＼美しく成長しました。彼女はこの貴婦人とその良人との寵愛を受けたばかりでなく、その家のあらゆる人々、いや、彼女を知る程の者なら、誰からも並々ならず可愛がられてゐました。何しろ彼女の態度や品の好さが最高の優待、最大の稱讃に値ひすることゝ認めないものは、誰一人としてなかつたので御座いますからね。そんな譯でかの貴婦人は、尤も、ジャンネットの素性に就いては、その父から耳にしたことの外には何一つ知りませんでしたので、早くもその娘の身分だと思はれるものに相應した良縁を求めようとしてゐました。が、人間の業績を公平な眼で見透していらつしやる神様は、彼女の門地と、彼女がいかに罪なくして他人の罪のために憫み苦しん

でゐるかといふことを考慮して、貴婦人の思惑とは丸で違つた方面へそれを導いて行かれました。と申すのは、ジャンネットの身に起つた一切の事は、彼女をして賤しい男の手に陥らしめなれたための神の恵みに外ならないとしか、私どもには思はれないからで御座います。

ジャンネットを引き取つた貴婦人には、良人との間にたゞ一人の男の子が御座いました。両親ともこの子を又なきものに鍾愛してゐました。それも單にこの子が自分達の子であるからと云ふばかりでなく、この子の美德と眞價のためでもあつたのです。と申すのは、この子は行儀もよく、勇敢で、姿も美しく、心組も至つて高尚で、どの點から見ても、他の者よりは一段と立ち勝つてゐたからで御座います。なほ彼はジャンネットよりも六歳程年長で御座いました。處で、ジャンネットの美貌と典雅さがこの青年に深い印象を與へた結果、彼は彼女に激しい愛を感じて、日夜その姿が眼先にもちつくと云ふやうな状態に陥つてしまひました。しかも、彼はジャンネットを生れの賤しい女だと信じ切つてゐましたので、両親に向つてこの女を妻にしてくれと強請むだけの勇氣を缺いたばかりでなく、自分がこんな女に心を牽かれたと世間に知れたら、どんな批難を受けるだらうと、それが怖ろしさに、極力その思ひを秘し隠すやうにしてゐました。

けれども、さういふ努力は、彼の胸の中を打明けた場合よりも、遙かに多くその情熱を煽り立てずには置けません。とうとう激しい情熱に堪へ切れないうで、彼は重い病氣に罹りました。治癒のために、澤山の醫者が招かれました。彼等は懸命になつてその症候を診察しました。しかもその眞の原因は一向誰にも解らないのです。で、しまひには醫者といふ醫者が皆この病人に匙を投げてしまひました。醫者からその宣告を聞いた時の兩親の悲歎は、これに勝る嘆きは又と世にあるまいと思はれる位でした。何遍となく彼等は出来る限りの優しい言葉で、この惱みの原因を打明けてくれるやうにわが子に懇願しました。しかも息子はたゞ大儀さうに溜息を吐くばかりで、時には、身體中がどうも力のないやうな氣がすると云ふ位のもので御座いました。

處が、ある日のこと、年こそ未だ若う御座いましたが、醫術にかけては、なか／＼造詣の深い一人の醫者が、病人の傍に坐つて、そつとその腕を持つてゐました。恰度それは心得のある醫者が脈を探る場所なんです。すると、そこへ、この日頃母親への心盡しから懇切に病人の世話をしてゐたジャネットが、何やら病人の用を足すために、その室へ入つて参りました。一方息子の方では、この女の姿が眼にとまると、一語も口も利かなければ、顔の筋一つ動かさずはしませんでしたけれども、心臓の中で戀の焰が急に激

しく燃え始めましたので、脈搏も前よりは強く打ち出したのです。醫者は直ぐさまそれに氣が附いて、これはと心の中で驚きましたが、とれだけこの脈搏の強さが續くかと、それを見るために、じつと黙つてゐました。

處が、ジャネットがその室から出て行くか行かないに、脈は忽ち元の平靜に還るではありませんか。そこで醫者も病氣の眞因を嗅ぎつけたやうに思ひましたので、暫くしてから未だ病人の手を握つたまふ、何かジャネットに訊きたいことがあると云ふので、もう一度彼女をそこへ喚んで貰ひました。彼女は云はれるまゝにその室へ入つて参りました。すると、その姿が見えるか見えないに、青年の脈搏は増して、再びその室から出て行くと、直ぐに又平静に還るのですね。かうなると、醫者も自分の推量が中つてゐたといふ確信が着きましたので、立ち上つて病人の兩親を別室に招び入れました。そして、次のやうに申しました。「御令息の健康は醫者の關する處ではありません、寧ろジャネットさんの掌中にあるのです。御令息がジャネットさんに焦れていらつしやることに就いては、確かな證據があるの御座います。尤も、私の見ました處では、ジャネットさんは未だ少しもそれに氣附いてゐられないやうですがね。さういふ譯ですから、御令息の命を大切だと思し召すなら、何うなすつたらよいかは、私から申し上げるまでも御座い

ますまい。」

この報告を聞いて、兩親は大層喜びました。かうなれば、どうにも他に仕方がないと思はれるものを直ちに實行するといふこと、即ちジャネットを息子の妻にするといふことは、いかにも忍びがたいことでは御座いましたが、少なくともその病氣を癒してやる見込みだけは着いたと云ふものですからね。そこで二人は、醫者の歸つた後、病人の枕頭に遣つて参りました。そして、母親から申しました。「ねえ、私はまさかお前が心の望みを私に隠しておくれたとは思ひませんでしたよ。殊に、それが遂げられないと云ふので、そんなにまで瘦せ衰へながら、矢張りさうしておいでだとは夢にも思ひませんでしたねえ。私はお前のためには出来ることならどんな事でもして上げます。そりやもう自身のためにすると同じやうにね。たとひそれがこちらの身分に不釣り合ひの事でも構はないんだよ。だから、今後ともほんたうにそれは安心していらつしやい。お前は私に對して胸を打割つてはくれなかつたけれど、神様がお前に憐愍を懸けて、お前の病氣が致命的なものにならないやうにと云ふので、その病氣の原因を私に知らせ下さつたのだよ。原因の起りと云ふのは、或娘さんに對する思ひ餘つた戀に外ならないのでせう。その娘さんの名は、まあ、今の處は云はないで置きますがね。處で、何故お前はそれを私に

打明けてくれなかつたのです？ そんな事はお前の年頃では随分有り勝ちな事ぢやありませんか。この年になつて、お前がまだ戀をしないであらう、却つて私はお前を變な人だと思つたかも知れせんわ。だから、今後は決して私の前に遠慮をすることはありませんから、自分のしたいと思ふことは何でも思ひ切つて私に云つて下さい。それ程恥づかしがりなかつたら、こんな病氣を惹き起した氣兼ねや憂鬱の方を恥づかしがたらいいのです。どうぞ元氣を出して、私に云ひさへすれば、どんな事でも叶へて貰へるものだと思つてゐて下さい。自分の命よりも大切なお前を満足させて上げるためなら、私はもう何だつてせずには置けませんからね。さあそんな羞恥や心配はさらりと止めて、私が果してお前の戀を叶へて上げることが出来るかどうか云つて御覽な。それで、もし私がお前の望みを遂げさせて上げるのに熱心でなかつたら、それこそ子を持つた母親といふ母親の一番無慈悲な、一番酷たらしい母親だと思つておくれでもいゝんですよ。」

青年は母親のかうした言葉を聞いて、最初は自分の秘密が明らかにされた事を羞恥して、顔を赧らめてゐましたが、自分の願ひが許されるためには、母親の力を藉りるより外に得策のないことをよく／＼考へて見て、われとわが羞恥の心を抑へつけながら、かう申しました。「阿母様、私

がこれ迄自分の戀を貴方に隠してゐた譯は、他でもありません、大概の人といふものは、年を取りますと、自分も一度は若かつたといふことなどは、決してもう思ひ返して見ようと思ひ返さないものだといふことに氣が附いてゐたからで御座います。けれども、貴方はこの點に大變理解を持つてゐて下さいますので、私ももう決して包み隠しは致しません。事實、御推察の通りで御座います。そればかりか、誰をそんなに思つてるかといふことも序に云つてしまひませう。但し貴方の只今お約束になつたことは、飽く迄骨を折つて下さるといふ條件の下にです。だつて、それでこそ、始めて私を元の健康に返して下さることも出来ようといふものですからね。」

母親は、一旦駄目だと諦めたわが子の命が何うやら又取り返されさうなのを見て、その嬉しさに、どうか遠慮なくお前の心を打明けてお呉れ、さうすれば直ぐにもその思ひの叶ふやうに骨を折るからと、きつぱり申しました。

そこで青年はかう申しました。「阿母様、私が御覽の通りの状態になりましたのは、あのジャネットの並ならぬ美しさ、模範的な態度と、私としては、相手の同情を買ふことは勿論、自分の戀を傳へることは出来なかつたことと、それでゐて、何人にも自分の思ひを話すことさへ敢てしなかつた、私の生れつきの羞恥心などのさせた業で御座いま

す。で、もしお約束になつたことがどんな理由からでも思ふやうに行かないやうでしたら、私の命ももう長いことはないものと思つて下さい。」

夫人も、今徒らにわが子を批難しても仕方がない、それよりは元氣を付けてやるべき時だと思つてゐましたので、微笑を浮かべながらそれに答へました。「ぢや、お前はそれでこんな病氣になる程苦しんでおいでだつたんだね？ まあ、そんな事なら、元氣を出して、一日も早く健康になつて下さいな。健康にさへなりや、萬事はわたしが呑み込んでますからね。」

青年はもう何事も自分の思ひ通りになりさうなので、間もなく明かに恢復の兆候を見せて參りました。この幸福な結果を無上に喜びながらも、母親は何うして息子との約束を果したものと考へました。この目的のために、ある日ジャネットを自分の許に喚び寄せて、親しい間の戯談のやうな振りをしながら、相手に戀人があるかどうかを訊ねて見ました。ジャネットは思ひもかけぬ質問に顔を眞顔にしながら答へました。「奥様、私のやうな家を追はれて、他人様に御奉公を申し上げてゐる哀れな女にとりましては、色戀などと申すことは決して應はしいものでは御座いませぬ。」

そこで夫人は又申しました。「お前に未だ戀人がないの

なら、一人拵へて上げようではないか。お前も屹度喜んで、自分の美しう生れたことをしみじみ有難く思ふやうな相手なんだよ。だつて、お前のやうに綺麗な娘さんが、戀人一人もなしでゐるといふことは、それこそ許されないことですからね。」

「奥様」と、ジャネットはそれに答へました。「貴方は私を父の窮乏の中から救ひ出して、實の娘同様にお育て下さいました。ですから貴方のせりと仰しやることなら、何んな事でもいたすのが私の道で御座います。けれども、この事ばかりは、どうしても貴方の御意に従ひ兼ねますし、又それが間違つたことでもなからうと存じます。でも、若し貴方が私のために良人をお世話下さいますのでしたら、私はその方を愛して他の男には見向きもしないつもりで御座います。だつて、私は貞節といふもの以外には何の遺産もない身で御座いますから。ですから、私は懸命にそれを守つて一生の間良人に手願つてゐたいと存じます。」

この言葉は、夫人にはよし心の中では、賢明な女として、いよ／＼この娘を尊敬せずにはゐられないものがあつたにせよ、わが子に與へた約束を果すために立てた計畫に取つては、甚だ都合の好くないものに思はれました。そこで彼女は申しました。「それでは、ジャネット、假に私どもの國王陛下、そら、お前が美しい少女であると同じやうに、

先方様も立派なお若い方だわね、その方がお前に思ひを懸けて云ひ寄られても、お前は矢つ張り情ない御返辭をする心算なのかい。」

相手は直ぐにから答へました。「それはもう王様のことで御座いますから、私に對して權力をお用ゐになることは出来るでせうが、私の意志を相手では女の道に適つたこと以外のものを私から手に入れることはお出来にならないでせうよ。」

かうなると、夫人にも、この少女の心意氣がどんなものであるかがよく解りました。そこで彼女は話しを打ち切つて、一つ實地にこの少女を試して見ようと思ひ立ちました。そのために、彼女は次のやうな意味のことを息子に申しました。つまり病氣が癒り次第、彼と彼女とを一つ部屋へ入れて置くやうにするから、彼は自分の望みを遂げるために何うにでも自分で遣つて見るがよい。と云ふのは、自分の子のために嬶婆のやうな甘言を並べて、わが家の奉公人に歎願するのは、夫人としてどうも忍び難いことだからと云ふので御座いました。

青年はこの申し出でを聞いて、少なからず不満に思ひました。そして、忽ち前にも優して容態が悪くなつて參りました。母親はこの様子を見て、ジャネットにすつかり自分の考へを打ち明けた上、どうかわが子の思ひを晴らさせて

遣つてくれと頼みましたが、少女はいよく以てその意を讀さうとはしませんでした。そこで夫人はこれ迄の事をすつかり良人に話しました。そして、兩人とも、随分辛いことでは御座いましたが、釣り合はぬ妻と一緒に生きてゐてくれた方が、まだしも妻なしで死なれるよりは優しだと思ひましたので、とうとうジャネットを息子の妻とすることに決心しました。そして、なほいろ／＼と談合を重ねた上、その通りに實行いたしました。ジャネットは非常にそれを喜んで、神が自分を忘れなかつたことを心の底から感謝いたしました。けれども、自分の身分については、たゞ單にピカルデイ人の娘であるといふ外には何事も打ち明けませんでした。青年の病氣は立ち所に癒えました。そして、誰よりも喜んでこの結婚を祝しながら、戀が與へてくれる歡喜を思ひのまゝに享樂しました。

話變つて、ウエールスの地で英國王配下の將軍に引き取られてゐたピエロは、成長するに伴れて、いよく主人の寵愛を受けると共に、容姿端麗、全英國に於ても、他に比ぶ者のない程勇ましい若者になりました。實際、演武又は試合の場に出ても、劍を執つては、土地生え拔きの青年の中に一人として彼に及ぶ者はありませんでした。そこで彼は人々からピカルデイ人ピエロと稱はれて、勇名天下に普ねしといふ有様で御座いました。處で、神は彼の妹のこと

を忘れなかつたと同じやうに、又彼の身の上をも考へておいでであつたといふことが間もなく明かになりました。恰度その頃ウエールスの地方に烈しい疫病が流行しました。住民の殆ど半數がその病に斃れたばかりか、後に残つた人々も大部分は遠い田舎へ逃げて行きましたので、その地方は全く荒廢に歸してしまつたやうに見えました。この疫病のためにピエロの主人である將軍も、その夫人も、又その長男を始めとして多くの兄弟、從兄弟、親族なども悉く死に絶えてしまつて、後には恰度年頃になつたばかりの娘とピエロの外に、二三人の召使が残つてゐるばかりで御座いました。で、この疫病が幾分鎮まつて參りました時、この若い姫君は、生き残つた隣人どもの勧めに従つて、一同を安心させるために、勇敢で有爲な青年ピエロを良人とすることに極めました。かうして彼は、遺産として彼女の手に歸した總てのものの主人になりました。それから間もなく英國の王も將軍の死を耳にして、かね／＼有爲の材だと聞いてゐたピカルデイ人ピエロを故將軍の跡目として、その位と役儀とを襲はせました。

アントワープの伯爵の二人の罪なき子供達のその後の成り行きは、以上手短かに申し上げた通りで御座います。

さてかの伯爵が遠く巴里を亡命して以來、早くも十八年の歳月が経過しました。彼はこの長い間多くの辛苦と慘

澹たる生活を経て、今ははや老年の域に達しましたので、出来ることなら子供達のその後の様子を探るために、愛蘭土を離れようといふ氣になりました。彼はその間に自分の妻がすつかり變つてしまつたことを知つてゐました。それに長い間の肉體的勞働の結果、昔、樂に暮してゐた時分よりは、ずつと身體も巖疊になつてゐたのです。そこで彼は長い間奉公してゐた主人の家を、貧しげな服装をしたまゝ脱け出して、海を渡つて英國本土に遣つて參りました。で、まづ第一にピエロに別れた土地に來て見ますと、わが子は堂々たる紳士になり、而も皇帝親任の將軍にまで出世して、その上姿形も立派なら、身體も健康であることを知りました。それには彼もすつかり安心しましたものゝ、なほ妹のジャネットの様子を知るまでは、父子の對面をしようとは思ひませんでした。

で、彼はその目的のために再び出發しましたが、倫敦へ着くまでは、途中一度の休息もしようとはいたしませんでした。その地で彼は、曩に娘を託した貴婦人のことを入念に訊いて見ました。すると、ジャネットも今ではその貴婦人の息子の嫁になつてゐることが分つたのです。これを知つた彼の喜びは非常なものでした。子供達は無事に生きて、而も幸福な地位にさへゐるので、今迄の自分の苦勞は何でもないやうに思はれて來ました。

もう一度娘の顔を見たいといふ一心から、彼は毎日その家の近所を乞食して廻りました。處が、ある日のこと、ジエームス・ラミエンス——といふのが娘の夫の名前でした——が彼を見て、可哀さうに思つて、下男に命じてこの老人を自分の家に喚び込んで、食事を與へさせました。下男は命ぜられた通りに致しました。處で、ジャネットとジエームスとの間には既に幾人かの子供がありました。尤も、一番上の子供が未だやつと八つになつたばかりで、どれも皆世にも稀れな程可愛らしく、お行儀の好い子供ばかりで御座いました。この子供達は、件の伯爵が食事をしてゐるのを見ますと、忽ち老人の周圍に集まつて、いろ／＼機嫌を取りはじめました。その様子は、まるで或る隠れた力に牽かれて、この老人が自分達のお祖父様であることを知つたかのやうに思はれました。

伯爵には一目でこの子供達が自分の孫であることが分りました。彼は子供達を抱き上げて、いろ／＼可愛がりました。ですから子供達は、家庭教師がいくら喚んでも、一向老人の傍を離れようとはしませんでした。母親のジャネットはこれを聞きつけて、隣の部屋から伯爵のゐる室へ入つて參りました。そして、子供達に家庭教師の云ふことを聞かないと管で打たれますよと強く窘めました。すると、子供達は泣き出して、先生よりもつと自分達を可愛がつて

くれるこのお爺さんと一緒にゐたいのだと申しましたので、これには伯爵もジャネットも思はず心から笑はない譯には行きませんでした。

その間に伯爵は椅子から立ち上りました。それも、親子の挨拶をするためではなく、たゞ臆しい男が上流の婦人に挨拶するやうに、恭しく敬意を表するためでした。しかも、彼は娘の様子を見て心中に云ふに云はれぬ喜びを感じてゐました。が、ジャネットはその時も、又それから後も、この老人が父親であることに気が付きませんでした。それ程父親の様子は以前に較べて變つてゐたのです。と申しますのも、今はもうすつかり年を取つて、白髪で、鬚だらけで、瘦せこけてゐる上に、日に焼けて、昔日のアントワーブ伯爵の面影がないどころか、全く見ず知らずの人のやうに見えたからで御座います。ジャネットも、子供達がこの老人の傍を離れたがらないばかりか、あちらへ行くやうに命じてもしやうものなら、すぐに泣き出しさうな様子に見えましたので、家庭教師に、どうかもう少しの間子供達をこのまゝにして置いてくれと申しました。

かういふ風にして子供達が伯爵の傍で遊んでゐる間に、偶然ジェームスの父親が歸つて参りました。家庭教師からこの有様を耳にしました。彼は素よりジャネットを嫌つて居りましたので、家庭教師にかう申しました。「では、乞食

の傍で遊ばせて置くさ。よかつたら連れて行くがよい。矢張り素性といふものは争はれないものだね。ありや皆母方の血を享けた子供共食だよ。だから、乞食の傍にゐたがつたからつて、些とも不思議はないやね。」

伯爵はこの言葉を聞いて、何とも云はれぬ苦々しい思ひをしました。けれども、彼がかういふ侮辱を受けたのは、なにもこれが始めてといふわけでも御座いせんから、ただ肩を揺振つただけで、じつと押し怏へてしまひました。が、ジェームスは父親とは反對に、老人に向つて、若しこの家で奉公しようといふ氣があるなら、喜んで使つて上げるからと云はせました。これも別に深い理由があつたからではない、たゞ子供達が餘りよくこの老人に懐いてゐたので、無理に引き離して可愛い子供達が泣くのを見たくなかつたからに過ぎないので御座います。伯爵は、それは願つたり叶つたりであるが、これ迄自分のして来たことと云へば、たゞ馬の世話だけで、他には何も出来ないから、それさへ承知して頂けるならと答へました。そこで彼は一頭の馬を渡されました。で、その馬の世話をしてしまひますと、彼は子供達を對手に戯談を云つたり、一緒に遊んだりして日を送りました。

さても運命の女神がこの伯爵父子の身の上を、これ迄お話し申し上げたやうな具合に據つてゐる間に、佛蘭西の國

王は、何度も獨逸と平和條約を結んだり開戦したりして来た後、とう／＼崩御されました。そして、皇太子が王位に即かれました。この新しい國王の妃こそその昔伯爵を國外追放の憂目に遭はせた原因の女で御座います。處が、獨逸とその最後の平和條約も破れて、若い國王は憤激を新たにしながら戰端を開きました。そこで英國王も佛蘭西王の新しい従弟として、それを助けるために、ウエールズの將軍ピエロと今一人の將軍の息子ジェームス・ラミエスとの指揮の下に、大勢の援軍を差し送りしました。さて忠良な下男、即ちかの伯爵はジェームスの従者の一人となつて、何人にも素性を見出されることなく、共に出征いたしました。

そして、曠の番人として長い年月の間陣地で生活しましたが、生れつきの才智と經驗とのお蔭で、こゝでも忠言や行爲でもつて、自分の地位には應はしからぬ程の勳功を立てました。

處が、この戦争の最中に佛蘭西王の妃は病に罹つて重態に陥りました。そして、自分でも死期が近づいたことを感じて、それ迄自分が犯して来たいろ／＼な罪過を非常に後悔しました。そして、當時敬虔と親切とで評判の高かつたルアンの大僧正を招いて、すつかり懺悔をされました。彼女は大僧正に向つて、他のいろ／＼な悪い事と一緒に、アントワーブの伯爵に對して犯したあの罪深い業をも話しま

した。しかもこれを大僧正に懺悔しただけでは満足しないで、宮中の主立つた人々の面前で今一度その事件の顛末を繰り返した上、若しも未だ伯爵自身が生きてゐるならあの伯爵を、又若し亡くなつてしまつたのならその後嗣を昔の地位に復すやうに國王陛下に取り做してくれと懇願いたしました。この告白をした後、間もなく王妃は亡くなつて、嚴かな葬儀が営まれました。

國王は王妃の告白を聞かされた時、かゝる立派な人間に加へた自分の不法な處置を先づ第一に後悔して、幾度となく吐息を吐かれました。それから彼は出征軍の陣中は勿論國內到る處に、アントワーブの伯爵若しくはその子供の一人の所在を知らせて来た者には、莫大な賞金を與へる。何となれば國王は故王妃の告白に依つて、曩に彼が國外放逐の刑を課せられた重罪に對して、伯爵は全くその責なきものであることを知つたからである。而して國王は今や伯爵を昔日の名譽と地位とに復せしむるばかりでなく、それ以上の榮譽を彼に與へる意圖であると云ふやうな意味の布告を出させました。

この布告を概舎番の伯爵も亦耳にしました。そして、事實その通りであることを確めた時、彼は直ちにジェームスの許に行つて、その場にピエロ將軍を招び密せるやうに請ひました。他でもないが、自分は佛國王の求めてゐるもの

の所在を知らせたいからだと言ふのです。で、この三人が一堂に會しました時、最早自分の素性を打明けようと思ひまして、伯爵はピエロに申しました。「ピエロ、此處にゐられるジェームスは持参金なしでお前の妹を嫁にしたのだ。が、今度お前の妹に持参金を附けるために、わしはお前の所在を知らせた者に王が約束してゐるあの莫大な賞金をこのジェームスに貰つて頂きたいのだ。そこでジェームスには、お前をアントワーブの伯爵の息子として、又自分の妻のダイオフンテをお前の妹として、それからこのわしをお前達の父即ちアントワーブの伯爵として上奏して貰ひたいのだがね。」

この言葉を聞きながら、ピエロはじつと相手の顔を見詰めてゐましたが、突然父だといふことが分りましたので、その脚下に身を投げて、相手を抱いて泣き／＼申しました。「阿父さま、こんな嬉しいことは御座いませぬ。」が、一方ジェームスは伯爵の言葉を聞いてピエロの態度を見ると、たゞもう吃驚するやら嬉しいやらで、最初の程は自分でも何うしていゝのかさつぱり分りませんでした。然も彼は直ちに伯爵の言葉を信じました。そして、今迄たゞの既の番人だと思つて掛けてゐた自分の苛酷な言葉を恥ぢ入りながら、泣き／＼その脚下に身を投じて、これ迄の過失に對する宥恕を切に乞ひました。伯爵は喜んでその乞ひを容れ、

相手に立ち上るやうに申しました。

三人は涙を流しながら、同時に多大の喜悅に溢れて、互ひに自分の運命を語り合ひました。それからピエロとジェームスとは新しい衣服と着代へるやうに伯爵に勧めました。が、伯爵は何と云つてもそれを諾かないで、ジェームス自ら一應賞金の件を確めた後、彼をこの召使の服のまま國王の前へ連れて行つてくれるやうに云ひ張りました。つまりさういふ風にして國王に一層恥づかしい思ひをさせてやらうと云ふのです。そこでジェームスは伯爵父子より一足先に國王の前に伺候して、曩に布告された通りの賞金を賜はるならば、アントワーブの伯爵とその子供とを此處へ連れて來ようとして約束しました。國王は直ぐに、誰にでも與へることにしてある賞金を持つて來させました。その金額の莫大なのは流石のジェームスも驚愕の眼を睨りました。國王は、若し今の約束に従つて本當に伯爵父子の所在を教へてくれるなら、この賞金を受け取つてくれと申しました。そこでジェームスは後ろを向いて、召使の伯爵とピエロとを御前に進ませながら、かう申しました。「陛下、ここにその父と息子とが居ります。娘の方は、只今では私の妻で御座いまして、こゝには參つて居りませんが、それも神様のお蔭を蒙つて、近くお目に懸けることが出来ようかと存じます。」

王はこの言葉を聞いて、伯爵の方を見遣りました。伯爵の様子ももうすつかり變り果てて、更に昔日の面影はありませんでしたけれども、暫く見詰めてゐる間に、王にもそれと分りました。で、彼は跪いてゐた伯爵を立ち上らせた上、目には殆ど涙を流へんばかりにして、彼に接吻し彼を抱き締めました。王は又ピエロをも懇ろに歓迎して、伯爵にはその地位を飾るに應はしいやうな服装、従者、馬匹、什器の類を豊富に下し置かれるやうに命ぜられました。この命令は直ちに實行されました。それから王は同様にジェームスの名譽をも表彰すると共に、事こゝに到るまでの話を彼の口から聞き取りました。さてジェームスがこの報知を齎らしたために受けた褒賞を家來の者に持ち去らせよう

といたしました時、伯爵は彼に申しました。「それは國王陛下の賜物と思つてお受けするが、いゝ。そして、貴方の父上にかう傳へることを忘れないで下さい。即ち私の孫でもあればあの方にも孫に當る貴方の子供達は、母方の血筋から云つても決して乞食の子供ではないのだと。」

ジェームスはその國王の贈物を受けて、自分の母と妻とを巴里に喚び寄せました。ピエロの妻もその地に喚び寄せられ、一同の者は喜んで伯爵と妃隊を共にいたしました。國王は又伯爵に舊の財産を悉く返却した上、以前よりも更に大きな榮譽を與へられました。その後各自お暇を頂いて

それ／＼家郷に歸つて行きましたが、伯爵は死に到るまで巴里で、昔よりもずつと榮譽ある生活を送りました。

第九話

ゼノアのベルナポーはアムプロギウオロの奸策に陥つて、財産を失ひ、罪なき妻を殺すことを命ず。妻は良人の許を遁れ、男装して土耳其帝に仕ふ。その後例の詐欺師を發見して、良人ベルナポーをアレキサンドリアへ招く。詐欺師は罰せられ、彼女は再び女の姿に戻つて、良人と共に莫大な富を携へてゼノアに立ち戻る話。

エリザがその悲しい物語で、自己の務めを十分に果した時、華奢な姿と優美で人懐こい顔つきとで、特に人目を惹いてゐた女王フィロメナは、少時考へてゐた後、かう口を切りました。「私どもはディオネオ様とのお約束を守らなければなりませんわね、まだお話をしないのはディオネオ様と私とだけで御座いますから、私が先にお話をさせて頂くことに致しまして、ディオネオ様には、御自身で望みにもなりましたやうに、今日のお話の殿を勤めて頂くことに致しませう。」この前置に續いて、次のやうに話を始めま

した。——
 諺に「人を誑はば穴二つ」と申しますが、果してこの諺が眞實であるかどうかは、實際の世の中がその通りになるのを見て、始めて納得の行くことで御座いませう。そこで私は本日の課題から離れることなしに、實際世の中でもその諺通りになるものだといふ事を實例によつて皆様にお話し申し上げたいと存じます。なほ私のお話を聞いて頂きませうれば、いかにも詐欺師といふものは氣を附けなければならぬものだといふことがお分りになることで御座いませうから、まあ、御清聴を煩はしても後悔なさることはありませんまい。

昔巴里のとある旅館に、伊太利の大商人達が大勢落ち合つたことが御座いました。その人達は、それ／＼の地位に應じて、各自いろ／＼な商用のために、その土地に来てゐたので御座います。或晩のこと、この人達は愉快な晩餐を終へた後、思ひ／＼にいろ／＼な話をははじめました。話題はそれからそれへと移つて、到頭しまひには、この人達がそれ／＼家郷に残して来た細君達のこと落ちて行きました。そこで一人の男が笑ひを含みながら申しました。「私の妻が何をしてゐるか、そんな事は勿論分りません。たゞ分つてゐるのは、若し私の趣味に合ふやうな若い女が不意に手に入りさへしたら、私は今の女房に對する愛なんぞそつ

ち退けにして、もうその女に夢中になつてしまふだらうと云ふこと位なものですよ。」

それに應じて又一人の男がかう申しました。「そりやもう、私も御同様だ、と云ふのは、私が今時分妻は何かしら娛しみを求めてゐるだらうと想像すれば、妻の方でもそんな想像をしてゐる。いや、私の方でそんな想像をしないで、妻は乾度そんな事を考へてゐますよ。だから、こりやお互に帳尻を合はせた方がいゝやうですね。驢馬が森の中で嘶けば、すぐにそれに反響するものがあるとも云ひますからな。」

第三番目の男の意見もこれと同様でした。で、一口に云へば、家に残して来た細君達がこの暇を甘く利用しないであるやうなことは、まああるまいといふことに、皆の意見が一致したやうで御座いました。

處が、ゼノア生れのベルナボイ・ロメリノといふ男は、ただ一人これに反對の意見を吐いて、自分は神の恵みによつて、苟も婦人に應はしいやうな徳は悉く、いや、その上騎士や小姓に應はしいやうな徳をも殆ど全部身に備へた、全伊太利にも珍らしいやうな妻を持つてゐると廣言しました。彼は又それにつゞいて、何しろ妻は姿も美しい上に年も若い、肉體から云つても敏捷で強壯で、女とする仕事と云へば、絹糸細工と云つたやうなものを始め、何一つとし

て、何處の誰にも劣らない程よく心得てゐないものはない。いや、そればかりではない、あの女が主人の食卓に侍する腕前と來たら、小姓とか給仕とか、いや、どんな名のつく男でも到底妻には及びもつかない。と云ふのは、あの女は何につけてもよく修業してゐて、萬事に氣が附く上に、物の分りも好い方だからと申しました。到頭しまひには、妻はそんちよそらの騎士達よりも遙かに上手に馬にも乗るし鷹も使ふ、その上普通の商人達よりはずつと好く讀み書き勘定も出来るのだとまで自慢を致しました。

かうしていろ／＼と譽め立てた揚句、先の話題に戻つて、彼は自分の妻以上に行狀の正しい貞節な女は決して他には見られるものでないと、誓ひを立て、言明しました。従つて、假令十年乃至一生涯家を離れてゐようとも、あの女に限つて仇し男とさうした浮名を立てるやうなことは斷じてないと固く信じてゐる旨を附け加へました。

處で、この一座の商人の中に、ピアチエンザのアムプロギウオロといふ若い男が交つてゐましたが、この男はベルナボイが最後に自分の細君に與へた讚辭を耳にして、馬鹿に大きな聲で笑ひ出しながら、相手を嘲るやうな調子で、「では、皇帝が貴方にだけそんな特權を授けられたのですね？」と訊ねました。ベルナボイはこれを聞いて少しく腹を立てながら、「かういふ恩惠を自分に與へてくれたのは

皇帝ではない、それ以上に力のある神だ」と答へました。

そこでアムプロギウオロはかう申しました。「ベルナボイさん、貴方が御自分の云つたことは眞實だと思つていらつしやるのを疑ひはしませんよ。けれども、私には、貴方は世態人情といふものを念頭に置いていらつしやらないやうな氣がするのです。と云ふのは、それを念頭に置いてゐられたら、今のやうな事柄に就いては今少し斷言を差し控へさせるに違ひないやうなものを多分に看取せられない程、それ程目先の見えない貴方だとも、私には思はれませんからね。私どもがかうして自分達の家内に就いていろ／＼呑氣なことを話したからと云つて、何も私どもが貴方の奥さんより出來の悪い、乃至種類の違つた女房を持つてゐると云ふ考へからではありません、たゞ私どもは人間の性情を貴方よりもつと好く知つてゐるから、あゝいふ風に云つたんでさあね。まあ、それを分つて頂くために、もう少しこの問題に就いて貴方とお話したいと思ひますよ。」

「常々私は、男こそ所謂萬物の靈長であつて、女はやつとそれに亞ぐ位のものだと云ふやうに聞いて居ります。そして又事實經驗が吾々に、この一般の意見が眞實であり、男性は女性に比してより完全なものであるといふことを教へてくれます。處で、いよ／＼男性がより、大きな完全性を有つてゐるとすれば、男性は又より多くの確實性と不變性を

有つてゐなければならぬ筈ですよ。と云ふのは、女は何につけても兎角變り易いものですからね。さて男がより大いなる堅實性を有つてゐるに拘らず、先方から持ち懸けて来るやうな女は勿論のこと、なほ自分の氣に入るやうな女を捜し求める心をどうしても抑制することが出来ないものとするならば、而も又かういふ事が決して月に一度やそこいらではなく、毎日のやうに起る事柄であるとすれば、すね、生れつき變り易く出来てゐる女性が海山千年の男に見込まれた場合、その男の用ゐる歎願、追従、贈物、更に又數へ切れない程ないろ／＼の手腕に對抗して行くことが出来る、どうして思はれますか。貴方は女にそれが出来る、本當に信じてゐられるのですか。假令貴方が何と斷言なさうとも、私は貴方がそれを本氣で信じてゐられるとは思へませんよ。貴方だつて自分の奥さんが女であり、従つて他の女同様、肉と骨とから出来てゐることはお認めでせうからな。さうだとすれば、奥さんも世間並の欲求は感じなさらうし、自然の要求に反抗する力も世間一般の女と同じ程度にしか持つてゐられない譯ですぞ。これで貴方にも、いかに貴方の奥さんが貞操な女であつても、世間の女のすることをすることも知れないといふことはお分りなつたでせう。まあ貴方のやうに、あり得べきことをさう頑強に否定したり、その反對なことを主張したりするの

は宜しくありませんや。」
それを聞いて、ベルナボイは相手に答へました。「私は一個の商人で、哲學者ではありません。ですから、たゞの商人としてお答へする外ありませんよ。處で、申して置きますが、貴方の仰しやつたやうな状態に陥るものは、全然羞恥の觀念といふものを有たない馬鹿者に過ぎないといふことが、私にはよく分りました。理性的な女になりますと、自分の名譽を重んじますから、その點では、ふしだらな良心しか有ち合せない男達よりも、ずつと鞏固なものです。そして、まあ、私の家内などはさういふ女で御座いますよ。」
「成程ねえ」と、アムプロギウオロは申しました。「もし仇し事をする良に、悪事の證據として、その女の額に角が生えるやうでしたら、本當にそんな事をするものは滅多にありませんまいよ。處が、一向そんな角なんぞは生えませんがね。で、女が慥巧でさへあれば、何の跡も残さずに巧くやつてのけますわい。醜聞とか不名譽とか申しますのも、つまりは事が暴露した時に始めて起ることです。ですから女達は、秘密にやれるだけの事はやつてのけるので、やらないのは馬鹿であるからに過ぎないのです。さう云ふ譯ですから、純潔な女などといふものは、誰からも袖を引かれたことがないか、又誰かに思ひを寄せても撥ねつけられた女に限るんだと云ふことを、こゝで御承認になつてもいい

でせう。一體私は、自然の根據、又はその他のいろ／＼な根據からして、かういふ問題は今お話ししたやうなものであることを確かに知つてゐるんですがね、それでも若し私がこれ迄に多くの女を試して見たのでなかつたら、こんな確信を持つて斷言はしないでせうよ。それですから、私は貴方にかう申し上げます。若し私が貴方のその抜群に貞潔な奥さんのお近づきでしたら、短時間のうちに貴方の奥さんを、これ迄多くの女を陥れたと同じ所へ陥れてお目に懸けますよ。」

ベルナボイもそれに腹を立てて申しました。「かうやつてお互ひに言葉の争ひを續けてゐたのでは切りがありません。貴方が何か仰しやれば、私も黙つてはゐない。そして、結局、何の結論にも達しないでせう。處で、貴方はすべての女は非常に靡き易いもので、貴方の成功も従つて大きなものであると考へていらつしやるやうだから、私はそこで妻の貞節をお目に懸けるために、若し私の妻がさういふ風にして幾分でも貴方の意に従ふやうに、貴方の手であれを口説き落すことが出来ましたら、この首を切つて差し上げることにして置ませう、けれども、若し貴方がそれに成功しなかつたら、一千グルデンだけ頂戴することに致しませう。」

相手のアムプロギウオロも前から大分熱してゐたところ

とて、すぐにかう答へました。「ベルナボイさん、私がこの賭に勝つて、貴方の首を頂いた處で、どうにも仕様がありません。ですが、若し貴方に私が先刻申し上げたやうなことを試して見たいといふ思召があるなら、私の出す一千グルデンに對して五千グルデンを賭けることにして下さい。こりや首に較べれば廉いものでさあね。さうなれば、私はゼノアに向つて出發しますよ。貴方は期限のことは何も仰しやいませんでしたが、この巴里を出發した日から勘定して三箇月以内に、屹度貴方の奥様を思ひのまゝにして御覽に入れますよ。そして、その證據として、特に奥さんが大切にされてゐられるものを持参した上、なほ貴方が最早事の眞實を疑ふことの出来ないやうに、仔細に前後の事情をお話しすることにさせよう。然しそれに就いては、只これだけお約束をして置いて頂きたいと思ひますよ。他でもありませんが、私がさうやつてゐる間は、貴方は決してゼノアに歸らないことと、もう一つこの事に就いては、何に據らず手紙などは決して出さないといふことですね。」

ベルナボイは確かに承知の旨を答へました。そして、一座の商人達もそんな事から生じ得べきさま／＼な惡結果を憂へて、極力それを止めさせようと盡力しましたが、二人は最早昂奮してゐるので、そんな事には耳を藉しません。とう／＼一座の人達の好意に反いて、仰々しい自署の證文

を取り交はしながら、後日に備へることにしました。

この契約が結ばれた後、アムプロゴウオロは出来るだけ早くゼノアに旅立ちました。一方ベルナボーは巴里に留まつてゐました。處で、アムプロゴウオロはゼノアに着いてから二三日経つか経たないに、早くも用心をしい／＼窃かに女の住つてゐる町の名やら、その性行やらを探り出しました。すると、眞個ベルナボーが自慢した通りで、いや、それ以上の節婦であることが分りましたので、流石の彼も自分の企てが少し早まつてゐたことを認めないではゐられませんでしたが、兎に角彼は、日頃その家に入り出して、ベルナボーの夫人には至極氣に入られてゐる一人の貴しい女と近づきになりました。處で、この女もその上奉公をつづける氣もありませんでしたので、彼はこの女に賄賂を使つて説きつけた上、自分の目的に副ふやうに具合よく拵へ上げた一つの箱の中に身を忍ばせて、その箱をベルナボーの家に、而も夫人の寢室の中に運び込ませました。そして、その貴しい女に、一寸田舎へ行つて来るから、二三日の間件の箱を保管して貰ひたいと、心にもない嘘を吐かせました。

で、件の箱は寢室に取り残されたまゝ、夜になつて來ました。アムプロゴウオロはもう夫人が寢入つた頃と見極めをつけて、發條を押して、そつと箱の中から這ひ出しまし

した。が、夫人は少しもそれに氣が附かなかつたので御座います。

三日目になりますと、例の貴しい女は、かねて謀し合せた通りに、件の箱を引取るために遣つて参りました。そして、元の家へ運んで行きました。すると、アムプロゴウオロはいきなり箱の中から飛び出して、約束通りの報酬をその女に呉れた上、盗んだ品々を持つて、定められた期限よりもずつと前に巴里へ戻つて参りました。こゝで彼は、例の論争や賭けの契約に立ち會つた商人たちを呼び集めた上、ベルナボーの面前で、お互ひに約束した賭けには自分が勝つた、そして、必ず遣つて見せると自慢したことは立派に遣つてのけたと宣言いたしました。その證據にはと云ふので、彼はまづ夫人の寢室の様子やらその部屋を飾つた繪畫やらのことを仔細に話して聞かせ、その後で持ち歸つた品を出して見せて、この品々は夫人から贈られたものと主張いたしました。

ベルナボーはこれを聞いて、寢室の様子は實際相手の云ふ通りであるし、又この品々も確かに妻の持ち物に相違ないことを承認しました。然しながらアムプロゴウオロが自分の家の召使の一人をでも手馴づけて、部屋の様子を知ることゝ容易に出来ようし、又同様にこれ等の品物を手に入れることも出来るだらうと申しました。ですから、もう少

た。部屋の中にはラムプが一つ點いてゐました。そこで彼

はその部屋の構造や、その部屋を飾つた繪畫や、その外室内でも目に着くやうな物を精密に觀察して、一々記憶の中に刻みつけました。それから夫人の寢室に近づいて見ると、夫人も傍に寝てゐる小さな女の子も何にも知らずに好く寢入つてゐました。で、そつと被てゐる夜着を刺いで見ましたが、成程裸にした彼女は衣服を纏うてゐると同じやうに美しく見えました。が、この女の亭主に突きつけてやるやうな證據物件としては、たゞ左の胸にある五六本の金色の薄毛の生えた黒子より外に何にもありませんでした。それを見届けるや否や、目のあたりの美しい肉體を見ては、命に懸けても、この女の傍に臥せりたいといふ欲望がむら／＼と起つて來たにも拘らず、それを押し殺して、再びそつと夜具を上から被けて置きました。何しろさう云ふことにかけては並外れて嚴格で、なか／＼諾と云はない女だと聞いてゐましたので、まあ／＼そんな危険は冒さないがよからうと考へたのです。で、そんな風に勝手な眞似をしながら、その夜の大部分を部屋の中で過ごした揚句、戸棚から財布だの、晴着だの、それから二三の指環、腰帶だのを取り出して、それ等の物を自分の箱の中に隠した上、又もや自分もその中へ入り込んで、すつかり元の通りに蓋をして置きました。同様のことを彼はその次ぎの晩も繰り返しま

し他の物がなければ、これだけでは自分が負けたとは思はれないと云ひ張りました。

そこでアムプロゴウオロは申しました。「いや、この邊の處で満足した方が貴方のためでせうぜ。尤も、強つてこれ以上云へと仰しやるんなら申し上げますがね。貴方の奥さんのジネヴラ夫人には、左の胸に六本の黄金色の毛の生えた小さな黒子が御座いませう。」

ベルナボーはこれを聞いた時、ぐざと短刀で心臓を刺し貫かれたやうな思ひをしました。そして、一語も口は利きませんでしたが、彼の顔色の突然眞蒼に變つたことはアムプロゴウオロの言ひ分の眞實を證明したやうなものでした。が、ほんの一寸間を置いただけで、彼はかう云ひました。「御列席の皆様、アムプロゴウオロさんの申されたことは眞實です。ですから、この賭けには、あの方が勝たれました。で、何時でも御都合のいゝ時に、その金をお持ちになつて宜しう御座います。」

で、その翌日ベルナボーは本當に約束の金をすつかりアムプロゴウオロに支拂ひました。そして、自分の妻に對する内心の憤念に燃えながら、巴里を後に、ゼノアを指して急ぎました。ゼノアの市近くに参りました時、彼はすぐに市へ入らうとはしないで、其處から二十哩離れた處にある自分の別荘に滞在して、特に信任してゐる一人の下僕に二

匹の馬と手紙とを持たせて、自分の妻の許へ使ひに出しました。その手紙には、自分は此處まで歸つて来たから、直ぐにこの召使と一緒に迎ひに来て貰ひたいと書いてあつたので御座います。けれども、彼はその召使に、妻と一緒に家を出て、恰度手頃だと思はれるやうな場所へ来たなら、容赦なく彼女を殺して、それから此處まで戻つて来て貰ひたいと、内々命令を下して置いたのでした。

召使の男がゼノアに着いて、手紙や言傳ことづつてを夫人に傳へますと、彼女は心から喜んで彼を迎へました。そして、翌朝になりますと、召使と一緒に馬に乗つて、例の別荘に向つて道を急ぎました。四方山の話の交はしながら、馬を進めてゐる間に、二人の者はやがて森と岩壁に囲まれた淋しい谷間にさしかゝりました。それを見ると、召使は此處こそ主人の命令を確實に遂行することの出来る適當な場所だと思ひましたので、短刀を引き抜いて、しつかり夫人の腕を抑へながら、「奥様、覺悟をなすつて下さい。貴方にや此處で死んで頂かなければならない。最早遁れぬ運命で御座いますよ」と申しました。

夫人はその短刀を眼にして、召使の言葉を聞いた時、膽を潰しながら叫びました。「後生だから助けておくれ！まあ、手を下す前に、どんな答があつてお前に殺されるのか、一言云つておくれでないか。」

「奥様」と、召使は答へました。「私に何をせられたと云ふのではない。と云つて、どんな譯で旦那様の怨みをお買ひになつたのか、それも知りませんよ。私はたゞこの道筋で貴方を容赦なく殺してしまへと旦那様から吩咐めづけられてゐるばかりです。で、若しその通りしなかつたら、旦那様は私を絞首臺しゅけだいに上のぼせてやると仰しやるのですよ。御承知の通り、私は旦那様から大恩を受けた身ですから、あの方の吩咐めづに背くことは私にや出来ないで御座います。神様も照覽てんらんあれ、私も貴方様をお慥しんぞうはしく思つてゐます。ですが、私としては他にどうも致し方がないのですよ。」

そこで夫人は、涙ながらに答へました。「あ、後生だから、どうぞ助けておくれ！罪もない私を殺して他人故人殺しの罪を犯すやうなことは止めて下さい。私が良人からこんな罰を受けるやうな悪事を只の一つでも犯してはならないといふことは、何も彼も御承知になつていらつしやる神様が證人です。けれどもまあ、そんな事は何うでも宜しい。それよりも、お前さへその氣になつておくれなら、一度で神様にも、旦那様にも、又私のためにも盡しておくれのことが出来ますよ。さあ、この場で私の着物を取つて、その代りにお前の外套と上衣とだけを私に下さい。そして、その着物を持つて旦那様の許へ歸つて、私を殺して来たとお云ひなさい。私は知らぬ他國へ行つて、お前も旦那様も、

この土地では私の噂など少しも耳にしないやうにします。それはもうお前に助けて貰つた命に賭けて誓つて置きますよ。」

召使は素より夫人を殺したくはなかつたのですから、忽ちその言葉に動かされました。そこで彼は夫人の着衣を受け取つて、自分の古びた上衣と外套とを相手に與へた上、彼女が身に着けてゐた少し許りのお金はそのまま持たせて置いて、一刻も早くこの土地を離れるやうに豫めよく願つた後、彼女一人を谷間に残して立ち去りました。それから主人の許へ歸つて、確かに命令を果したばかりでなく、夫人の死體が多くの狼に襲はれる所まで見届けて来たたと報告しました。

それから少時して、ベルナポーは再びゼノアに歸つて来ました。處が、ゼノアでは早くも彼のしたことが噂に傳へられて、彼の所業は一般に批難びなんの的となりました。

一方、例の夫人はたゞ一人後に取り残されて、遣る瀬のない思ひに暮れてゐましたが、夕闇の迫つて来るまゝに惨めな姿で近くの百姓小屋に辿り着きました。其處で彼女は老婆さんから針と糸とを借りて、彼のジャケツを自分の身に合ふやうに仕立て直しました。それから自分の下着でズボンを拵とへた上、頭髮を短く切つて、一見水夫のやうになりました。そして、その姿で海の方へ遣つて参りました。

彼女は其處で偶然一人の西班牙の貴族に出逢ひました。この人は名をエンカラルヒと呼ばれて、泉の新鮮な水を求めるために、アルバといふ土地で、程遠からぬ海上に碇泊してゐる自分の持船から上陸したので御座います。で、彼女はこの人と話をはじめましたが、名もファイナル生れのシクラーノと改めて、その船に給仕として乗り込むことになりました。その貴族は彼女にそれ迄着てゐたよりも少しは優やさした着物を與へました。が、新しい召使は非常によく彼に仕へましたので、この上もなく主人のお氣に入るやうになりました。

その後間もなく、この西班牙人は荷物を積んでアレキサンドリアに向けて出帆しました。處で、その船には幾羽かの珍しい鷹を載せてゐましたが、これは皇帝への贈物に致しました。そんな譯で、皇帝は彼を二度食事しじに招きました。處が、いつもシクラーノがお供に附いて行きましたので、皇帝はこの召使の優美な態度に心を牽かれ、餘程それがお氣に入つたものと見えて、到頭シクラーノを貰ひ受けたいと西班牙人に申し出でました。西班牙の貴族も大分それには弱りましたが、何を云ふにも相手が相手ですから断るわけには参りませんでした。シクラーノは間もなくその上品な振舞でもつて、曩むかしにカタロニア人の氣に入つたと同じやうに、王の寵愛を一身に集めました。

かうして月日の経つうちに、毎年定まつた時期にアッコンの地で開かれる一種の歳の市のやうなもののために、澤山の基督教徒や回教徒の商人が集まつて来ることになりました。この市の立つたばに、皇帝は、アッコンが自分の支配に属してゐる處から、多くの役人の外に、これ等の商人とその商品の安全を期するために、一人の顯官と多数の武装した兵士どもをその地へ派遣する例になつてゐました。處で、今恰度その時期になりましたので、既にこの土地の言葉に熟達したシクラーノをこの役に任命しようと思つて、實際その通りに實行しました。で、シクラーノはアッコンの市及び商人やその商品の保護をするために皇帝によつて派遣された守備隊の司令官に任命されました。彼は自分の職務を忠實に盡して、そのために注意深くあちこちを歩き廻つてゐますと、シシリイ、ピザ、ゼノア、ヴェニス、その他伊太利の諸方から出て来た大勢の商人達に出逢ひますので、流石に故郷懐かしく、これ等の人々といろ／＼親しい話を交はしました。

處が、或時次のやうな事件が持ち上りました。彼はほんの一寸立ち寄つて見たヴェニス人の店舗で、多くの裝飾品の中に、不圖一つの財布と一本の腰帶に眼を着けました。驚いたことには、それが何う見ても自分のものに相違ないので、彼はその驚きを色にも見せず、素知らぬ顔

して、一體この品物は誰のものか、そして又賣物かどうかと訊ねて見ました。一口に云ひますと、ピアチエンザのアムプロギウオロは或ヴェニス人の船に乗り込んで、多くの商品を抱へてこの市に遣つて来てゐたので御座います。彼は司令官がその品は誰のものかと訊ねるのを聞きますと、一歩前へ出て、微笑を含みながら申しました。「閣下、この品は私の持ち物で、賣物ではございません。けれども、それが閣下のお氣に召しましたら、喜んで閣下に差し上げませう。」シクラーノはこの男が微笑してゐるのを見て、相手が自分の正體を見破つたのではないかと、もうそろ／＼恐ろしくなりました。が、一生懸命に顔色を抑へて、かう申しました。「お前は今笑つたな。定めし俺のやうな軍人がこんな女の持ち物のことを訊ねたから、それで笑つたのだらう？」

「閣下」と、アムプロギウオロは答へました。「私が笑ひましたのは決してそんな譯では御座いません。私はたゞこの品物を手に入れた時のことを思ひ出して、一寸笑つたばかりで御座います。」

そこでシクラーノは申しました。「宜しい。では、若し若しくなかつたら、その來歴を聞かせて貰ひたいものだ。」

「閣下」と、相手はそれに答へました。「御覽になつてゐる品物は、なほ二三の品と一緒に、ベルナボー・ロメリノと申す者の妻、ジネヴラ夫人と云ふゼノアの或婦人から手に

入れましたもので、實は私とその女と關係致しまして、戀の記念に取つてくれと、その女が呉れたやうな次第で御座います。處が、このベルナボーといふ男の馬鹿さ加減と申しましたら、自分の妻が私の意に従ふなどと云ふことは決してあり得ないと云ふので、一千グルデンに對して五千の金を賭けた程ですから、それを考へると、どうも笑はずにやゝなれなかつたのですよ。然しその細君は凡てを私に許しました。それでまあ私はこの賭けに勝つたやうな譯です。がね。處で、その細君は世間の女が皆やることをやつたままです。ベルナボーも細君より寧ろ自分の馬鹿さ加減を罰したら好ささうなものです。何でも後で聞いた話に據りますと、巴里からゼノアに歸つて、その細君を殺させたとか云ふことで御座いますよ。」

ジネヴラはこの話を聞いて、直ぐに良人ベルナボーのわが身にかけての嫌疑を覺ると共に、このアムプロギウオロといふ男こそ、これ迄自分の經て来た艱難辛苦の唯一の原因であるを知りました。そして、どんな事があつても、この男の詐欺をこのまゝ見通しては置かまいと決心しました。で、シクラーノはさも／＼この話が面白かつたやうな振りをして、間もなくアムプロギウオロと大層親しくなりました。その結果、後者はその市が終つてから商品全部を携へて、一緒にアレキサンドリアまで遣つて參りました。まあ

こちらの思ふ盡へ掛つたのです。そこでシクラーノはアムプロギウオロのために一軒の家を周旋して、その上多額の金まで自分の手許から用立ててやりました。そんな譯で、彼はこの滞留から生じた非常な便宜のために喜んでアレキサンドリアに居つくことになりました。

ジネヴラがそんな事をするのも、身の潔白を夫ベルナボーの前に證據立てたいといふ外に、何一つ望みはありませんでしたので、當時アレキサンドリアに住んでゐた名望あるゼノアの商人達を介して、いろ／＼な口實の下にベルナボーをその地へ来るやうに説き伏せて貰ひました。ベルナボーは随分見すばらしい様子をしてアレキサンドリアに到着しました。そこでシクラーノは或友人に頼んで、自分の計畫を遂行する上に適當な時期が来るまで、その家に彼を匿まつて貰ふことにしました。一方シクラーノはアムプロギウオロを促して、皇帝の前に例の戀物語をさせた上、その御機嫌を取り結びました。

で、ベルナボーも既にこの地に来てゐる上は、最早自分の計畫の遂行を遷延すべきではないとシクラーノは考へました。そこで適當な機會を捕へて、アムプロギウオロとベルナボーの兩人を御前に喚問する許可を皇帝から得ました。かうして王の面前でアムプロギウオロに、釋便に行かなければ、力づくでも、彼がベルナボーの妻を口説き落

したと自慢してゐる事の真相が何うであつたかを自白させようといふので御座います。で、アムプロゴウオロとベルナボーとが御前に出頭しました時、王は多くの商人達を前にして、前者に向つて、六つかしい顔つきをされながら、一體何うしてベルナボーから五千グルデンの金貨を巻き上げたか、それを包み隠さず申し立てるやうに命令させました。アムプロゴウオロはかねて頼みにしてゐるシクラーノがその場に立ち會つてゐるのを見ました。處が、そのシクラーノが王よりも一層怒つたやうな顔つきをして、有體に申し立てないに於ては拷問にかけると嚇しつけるのですね。ですから、アムプロゴウオロは彼方からも此方からも歎鳴り立てられ、拷問を以て脅かされて、とう／＼ベルナボーを始め多くの證人達の面前で、事の成り行きをすつかり明瞭率直に白状しないではゐられませんでした。けれど、心の中では、その代償として高々五千グルデンの金と盗んだ品物とを返却せられる位に考へて居りました。すると、シクラーノは、王から任命された裁判官の一人として、直ちにベルナボーの方へ向き直りながら、かう訊ねました。「そこでお前はこの偽購の結果として、お前の妻を何うしたか。」

ベルナボーは答へました。「金を取られた腹立ちと、それから妻が自分に加へた汚辱——とまあ、私としては信ずる

外ありませんでしたからね、——それに對する羞恥の念とに迫られて、召使に命じて妻を殺させてしまひました。その男の申す處に據りますと、何でも妻の死體は澤山の狼が出て来て喰つてしまつたといふことで御座います。」

かういふ審理は王の面前で行はれましたので、一體どういふ譯でシクラーノがこんな事を始めたといふことは解らなかつたにしても、兎に角事の次第は王にもよく呑み込めました。すると、シクラーノは王に向つて、次のやうに申しました。「陛下、お聞きの通りの次第で、その妻はまあ何といふ戀人、何といふ良人を持つたことで御座いませう！戀人は憎むべき偽購を以て彼女の名譽を失墜せしむると同時に、その良人をも不幸の中に陥れました。すると、その良人は、長い間の經驗から自分で十分認めてゐなければならぬ管の眞實よりも、他人のあやふやな嘘に重きを置いて、妻を殺させた上、狼の餌食にまでしてしまつたのです。そればかりでは御座いませぬ、このアムプロゴウオロとベルナボーとがその女に對して抱いてゐる愛は、兩人とも長い間その女と一緒に暮しながら、再びその女に出逢つてもそれと認めることが出来ない程大きな愛なので御座います。けれども、陛下、陛下は今やこの兩人が如何なる刑罰に相當するかを明らかに承しておいでのこととは存じませんが、どうか私に對する特別のお慈悲を持ちまして、この

詐欺師を罰すると共に、欺かれた男をこのまゝお許しになつて下さいませうなら、私は陛下をはじめこの兩人の前にその哀れな女を連れて参りませう。」

王は、この事件ではたゞシクラーノに好意を見せたいとばかり思つてゐましたので、委細承知したから、早くその女を連れて来るが好いと申しました。ベルナボーはこの言葉聞いて、自分の妻は本當に死んだものと思ひ込んでゐただけに、少なからず驚きました。一方アムプロゴウオロも何うやら一種の不氣味さを感じて、たゞ金を返却するだけでは濟みさうにもないやうに思はれました。といつて、その夫人の出現が自分に取つて希望を齎すものか、それとも脅威となるべきものか、その邊は皆目見當が着かなかつたのですね。にも拘らず、彼は夫人の到着を好奇と驚異の心に燃えながら待つてゐました。

で、王がシクラーノの願ひを聴き容れると、彼は泣きながら王の御前に跪いて、最早男と思はれる必要は些ともないところから、その瞬間にそれ迄の男の作り聲を全く捨てて、かう申しました。「陛下、私こそその哀れな、不幸なジネヴラで御座います。この裏切者のアムプロゴウオロが無實では御座いますが、あまりにも甚しい汚名を私に被せ、又この殘酷で不公平な私の夫が召使に命じて私を殺させた上、狼の餌食にまでしようとして以來といふもの、もう六

年の間私は世界中を男装で彷徨き廻つてゐたので御座います。」

かう云つて、彼女は今まで着てゐた男の着物の胸を開けて、乳房を見せながら、王をはじめ立ち會ひの人々に、自分の女であることを證明しました。それから彼女はアムプロゴウオロに向つて、いかにも腹立たしげに、一體何時、相手が自慢してゐるやうに、彼女の許で一夜を明かしたことがあるかと詰問しました。アムプロゴウオロは彼女をそれと知ると、すつかり恥ぢ入つて、丸で壁にでもなつたやうに沈黙する外ありませんでした。

皇帝は今この今まで彼女を男とばかり思ひ込んでゐましたので、この言葉を耳にし、この有様を見た時には、すつかり愕然と返つて、自分の見たり聞いたことが悉く眞實であるといふよりも、寧ろ夢ではないかと幾度も思はれた程でした。が、その驚きも鎮まつて、凡て眞實であることが呑み込めました。で、それ迄シクラーノと呼ばれてゐたジネヴラの生活振りやら、確固たる精神、行狀、徳性やらを口を極めて譽め讃へました。それから似合はしい女の衣裳を持つて來させた上、相手の希望に従つて、彼女の伴侶となるべき侍女達をも彼女に與へました。そして、夫のベルナボーにも、本来ならば死刑に處すべき命を宥してやりました。ベルナボーはこれが自分の妻だと知ると、涙を流

しながら、いきなり彼女の脚下に跪いて、その宥恕を乞ひました。本来なら、そんな宥恕に値ひしない譯でしたが、彼女は快くその乞ひを許して、相手を立ち上らせながら、良人として優しく抱き締めました。

そこで王は直ちにアマプロギウオロをこの市の小高い丘へ連れて行つて、裸のまま柱に縛りつけた上、日向に曝して、身體中蜜を塗つて置くやうに、なほ白骨となつて自然に繩から摺り落ちて来るまでは、その繩目を解いてはやらないやうに命にしました。で、その命令が遂行された時、王はそれ迄アマプロギウオロの屬してゐたものを贈物として悉くジネヴラ夫人へ引き渡しました。その財貨は安く見積つても十萬ツブローネを下りませんでした。そればかりでなく王は立派な宴會を開いて、優れた婦人の模範としてジネヴラ夫人の名譽を表彰すると共に、夫人の夫としてベルナボーをもその席へ招待した上、彼女には裝飾品、金銀の食器、それから現金など、十萬ツブローネ以上のものを贈りました。で、この宴會が果てた後、王は一隻の船を購置させ何時でも氣の向き次第この船に乗つてゼノアへ歸るやうに暇を與へました。かうして夫婦は莫大な富を拂へて、喜び勇んで故郷に歸りましたが、其處でも亦禮を盡して迎へられました。特にジネヴラ夫人は既に死んだものとはかり思はれてゐましたのに、今やその純徳と智慧とは一世の

讚美的となつたのですから、その歡迎振りも一通りではなかつたのですね。

一方アマプロギウオロはその日のうちに柱に結び着けられて、蜂蜜を塗られたまゝ、その土地には殊に多い蠅、蜂、蛇などの類に刺されたりかまれたりしながら、非常な苦しみの下に死んで行かなければなりません。いや、そればかりか、死體も骨になるまで蟲類に喰ひ盡されてしまひました。そして、その白い骨は體で繋がつたまゝ、手も觸れられずに、永い間道行く人の目にアマプロギウオロの悪計の證據として残つてゐました。先づこんな風に、「人を誑はす、穴二つ」といふ諺は實證されてゐるので御座います。

第十話

モナコのバガニーノはリチアルド・フォン・チンチーカ氏の妻を奪つたが、リチアルドその後を慕ひ來つて、バガニーノと交り結び、己が妻を返すやうに求む。バガニーノは若し女にして夫の許に歸ることを望むなら、快く返さうと約束する。然るに女は更に夫の許に歸る意なく、夫リチアルドの死後遂にバガニーノの妻となつた話。

一座の者達は只今の女王の語つた話を、非常に美しい話だといつて賞讃しました。その中でも、この日の話の最後を承はつてゐるデイオネオは、特に先の話の賞讃しました。さて彼は女王の話の微頭徹尾、讚めやして置いて、次のやうに話をはじめました。

淑女諸子、多くの男達が世間を川歩いて、女から女へと戯れてゐる間にも、その妻達は家に在つて、手を拱いて坐つてゐるものだといふ風に——（恰も吾々が、妻子と共に生活しながら、何が一番彼女達を樂しませるものであるかを全く知らないでゐるかのやうに）、簡単に考へ込んでゐる、ベルナボーの馬鹿さ加減は幸福な結果に終つたにしても尙少しも情狀酌量の餘地はありません、が兎に角それが動機になつて私は急に次のお話をしたくなりました。貴女方はこの話をお聞きになつて、彼等が如何に偉大なる愚人であるかとお解りになるばかりではなく、自らを自然よりももつと優れた者と思惟して、まるで愚にもつかない妄想を抱き、他の方法では決して成就する事が出来ないうやうな事を欺瞞で以て達成しようとしたり、更に自然は無視することを許さないに拘らず、他人を同一に律しようとする横車を押すやうな人達が尙一層甚しい愚物であることに心づかれることと存じます。

昔ビサの町に、體力よりも智力に優れた、名をリチアルド・デイ・チンチーカと呼ぶ、一人の裁判官が居りました。この男は恐らく、自分の仕事部屋で發揮するその同じ能力でもつて、女の心をも贏ち獲ることが出来る位に考へてゐたらしいのです。處で彼は非常に富裕な身の上でしたから、懸命になつて、若い、美しい妻君を買はうとしてゐました。然し、若し彼が他人に對すると同様に、自分自身に忠告する事を心得てゐるやうでしたら、かういふ若い、美しい妻君を買ふ事などは寧ろ避くべき事であつたにちがひありません。處でその努力の結果、遂にロット・グラランデイといふ人が、自分の娘のバルトロメアを彼の妻に呉れました。この女はビサの市でも最も美しく、最も快活な少女でありました。一體ビサの市には蜥蜴より活潑でないやうな女は餘りないので御座いますが、彼女はその市で最も快活であつたのです。

さて、この裁判官は彼女を意氣揚々として自家に連れ歸り、途方もなく立派な結婚式を舉行しまして、初夜の晩には、今少しで失敗する所だつたのですが、ともかくも相手の感謝を贏ち獲ることが出来ましたが、何しろ瘦せぼちで、息切れのする性でしたので、翌朝生氣を恢復するためには強力な飲物や、香の高いスープ、それからいろ／＼な刺戟劑が必要でありました。

さてこのために裁判官は、將來自分の體力をこれ迄よりもうまく調節するやうにしはじめました。其處で彼はやつとの思ひで一冊の曆を妻に求めてやりました。それは恰度小學校の生徒に適したもので、恐らくラエンナの市で造られたものでした。といふのは、その曆の指定中には一年を通じて、一人又は數人の聖徒の祭でない日は殆んどないといつていゝ位でした。而もその聖徒に敬意を表して種々な理由から男女共お互ひに身を潔く保たなければならなくなつてみました。そればかりではなくその他にも、斷食日、四季の懺悔及斷食日、使徒や聖徒の斷食の前夜などが金曜日、十曜日及日曜日、大齋日の四十日と月面の盈虧、並びにいろ／＼な例外など、並べ立てられて、恰も彼が訴訟事件を取り扱ふ時のやうに、妻に對しても休日を守らなければならぬかのやうでありました。

かくの如き方法を、彼は長い間守りましたが、細君の方は、自分の日といつては殆んど月に一日もありません位です。すから少からず不満に思ひました。その上彼は、自分が祭日のことを妻に教へたやうに、誰かが彼女に平常の仕事日教へやしないかと、非常に嚴重に細君を監視してゐました。(以下六頁省略)

この話は仲間の者にも餘程可笑しかつたと見えて、誰一

なら、皆様と協同してそれを實行いたしたいと思ひから御座います。御承知の通り、明日は金曜日、次が土曜日で御座います。兩日とも、その日に頂く食事の點から見ますと、大抵の人にとつて餘り愉快な日では御座いません。その上金曜日には私どもの命のために死に給うた主の受難日として、私ども一同特別の敬意を拂はねばなりません。それで面白く話よりも、神を偲んで祈禱を捧げつゝ暮した方が穩當かと存じます。次の土曜日には、私ども婦人は髪を洗つて、その週間の仕事で浴びた塵埃をきれいにする習ひで御座います。なほその日は聖母マリアに對する敬虔の念から斷食をして、次の日曜日を尊ぶために、一日中あらゆる仕事を避けるやうにしてゐる方も決して尠なくは御座いません。従つてその日には私達も同様に他の日の生活法を守る事が出来ないことになりまして、例のお話休みに致しました方が好くはないかと存じます。さうなりまして、私達は都合四日間此處にゐたことになりまして。そこで、もし來客に妨げられることを防がうといひますなら、宜しく居所を替へて、どこか他の場所へ移ることが得策ではないかと存じます。勿論、その場所は既に考慮して、その手筈もして御座います。で、日曜日に晝寝の後で其處へお集り下さるまでには、十分考案の時間も御座いますことであるし、又本日のお話のために許された廣大な庭園から

人として、それがために頸を痛めぬものはなかつた位でした。それに婦人方も皆ディオネオの説に賛同して、ベルナポーは馬鹿に相違ないと申しました。さてその話も終りとなつて、一同の笑ひも納まりますと、最早時も晩く、物語も全部語り終へて、これ迄の順序から見ると自分の支配も終末を告げることになつてみましたので、女王は冠を取つて、それをネイフイレの頭に載せた上、口許に微笑を浮かべながら、「ネイフイレさん、今度はあなたにこの小さい民族の統治をお願いいたしますよ」と申しました。そして、その言葉と共に、彼女は腰を下しました。ネイフイレは自分の與へられた光榮に照れて、幾分顔を赧らめました。すると、その顔は朝日に照らされた春の薔薇のやうなすが／＼しい色に染まりました。その際彼女は少し眼を伏せましたが、それは曉の星のやうに光りました。然し、周圍のものが、女王に對する親愛を、つゝましかにあらはす嬉しさをなさ／＼やき聲もしづまつて、女王自身もやゝ心を落ち着けますと、彼女は幾分身を伸ばして、次のやうに申しました。

「不束ながら、私が選ばれて女王になりました。就いては前任者が遵奉して、皆様が暗黙のうちに御承認になつた方法に従ひまして、簡単に自分の考へを申述べたいと存じます。と申しますのは、もし皆様がその考へに御同意下さる見ましても、お話を選擇する自由を今少し制限して、特に運命の種々な活躍中の或一種に就いて話すといふことにするの亦一法かと考へられます。そこで、私は切望してゐたもの又は失つたものを再びその聰明によつて應じ得た人の運命を私達の課題にいたしたいと思ひます。その點に就いて、御銘々がこの一行にとつて有益である、少なくとも面白いものであるとお考へになる話を物語つて下されば、誠に幸甚に存じます。但しディオネオ様の特權は、例によつて何等掣肘せられるものでないことは、申すまでも御座いません。」

女王の意見と提議とは一同の稱讚を博して、萬事それに従ふことに決定されました。次いで女王は執事を喚び寄せ、食卓を用意すべき箇所と、自分の統治の間にして貰ひたいことを精細に説いて聞かせました。それから仲間の者と一緒立ち上つて、各自思ふがまゝに楽しんで宜しいと宣言しました。男も女も小さな庭園の方に行きました。そして、そこで夕食まで少時遊んでから、晩には愉快に食事を摂りました。食後一同席を立つと、エミリアは女王の希望に應じて、舞踏を一曲踊りました。それには、パムピネアが次のやうな歌を唱へ、自餘の者はそれに合唱しました。

友の望みを仇にして、われ口を噤まは

何れの少女かよく唄ふべき？

歡喜、希望、成就の源なる愛のキューピット

されば來れ、いざ來れ、

我等もろとも聲そろへ、

汝の好むわが惱み、

又は溜息さし指きて、

戀の焰を歌はせよ、

その灼熱の袖にこそ、わが喜びは生るゝを、

わが眞心汝も既に知るなれば。

焰の盃飲みし日に

われに一人のいとし男を

いましの連れしことありき、

その美、勇氣、學術は

ほかに比すべき人もなく、

況して勝れしもののあるべきや、

彼故に切なる胸の燃え立てば、

汝とわれの歌聲は、四方に響きて餘りあり。

彼に捧ぐる誠ゆゑ、

神の許せし彼の愛、

第三日

陽が昇るに伴れて、曙光は紅から燦たる黄金色に變つて來ました。その日は日曜日でした。女王は床を離れて、仲間の者を喚び起しました。この時既に執事長は必要な手周りの品と、さう云つたやうな準備に慣れた下男どもとを目的地に送り出してゐましたが、女王がいよ／＼出發しようとするのを見ると、迅速に殘餘の品々を車に積み込んで、その荷物に付き添つて、なほ御主人方の側に残つてゐた召使どもと一緒に大急ぎで出掛けました。眞個陣營でも移すやうな騒ぎで御座いました。

が、女王は静かな足どりで、例の淑女や紳士達をお供に連れて、恐らく二十羽程もあらうと思はれる鴛、その他の鳥の囀る歌の音楽に歩調を合せながら、緑の牧場や、昇る朝暈に悉くその琴を開き初めた花の中の餘り人も通らないやうな道を踏んで、西の方へ進んで行きました。そして、饒舌つたり、巫山戯たり、笑つたりしながら、まだ二千歩と歩かない、やつと一時間も陽に照らされたかと思ふ頃に、もう女王は一同を伴れて或る美しい立派な館に到着しました。館は平野に聳える小高い丘に立つてゐました。一

これぞわがいと高き悦び。
かくしてわれはこの世にて、
既に望みを遂げたれば、
神よ、御國に上る時、
日頃の誠めで給ひ、凡ての咎を宥しませ、
平和を望む心こそ、残る一つの願ひなれ。

この歌の後で尙いろ／＼歌はれた上、幾番も舞踏が續いて、種々の樂器が奏でられました。が、床に入るべき時刻だといふ女王の一聲に、各自燭臺に伴はれて、その部屋に退きました。續く二日間は、先に女王の提議した神聖な仕事に捧げられました。そして、何人も來る日曜日を鶴首して待つてゐました。

行は邸の中に入つて、ずらりと洒落な、一間毎に飾りつけのしてある、住居に必要なあらゆる設備の施されてゐる部屋部屋を見廻しながら、口を極めてそれを讚めそやしました。そして、こんな館の所有主は富裕で派手好みの人に違ひないといふ決心がなりました。それから下へ降りて見ると、廣い氣持のいゝ中庭があつて、客には上等な葡萄酒が一杯詰めてある上、盛んに湧き出て來る水は氷のやうに冷たかつたので、彼等の歡稱は更にその度を高めました。

その後休息でも需めるやうに、一同は豪地に上りました。そこは全庭園を一時の中に見下ろして、季節々々の花も豊富に、葉四阿なども配置されてゐました。で、腰を下ろすや否や、執事長は氣を利かして美味い干菓子と上等の葡萄酒で一行をもてなしました。それから彼等は塀で圍まれた庭園を開けさせて、その中に這入りました。が、一歩踏み入れると、忽ち目を驚かさやうな美しさに打たれましたので、仔細に各部を見て廻りました。見ると、庭園の周圍と中央を縦貫して廣い道が通つてゐましたが、それに葡萄の蔓を這はせた丸天井が出来てゐて、今年の豐作を想はせました。そして、無數の蔓が庭中に強い芳香を漂はせ、他の多くの花の香ひと一緒になつて、一行の人達をして、恰も東洋に産するあらゆる香料の中にある思ひをさせました。歩道の兩側は、白薔薇、赤薔薇、又は素馨などの生離

で埋もれ、朝ばかりか、日が高く上つてからでも、太陽に照られないで、芳香しい氣持のよい蔭を散歩することが出来るやうになつてゐました。この庭にどんな種類の、どれ程多くの草花が隈なく散在してゐるかを一々挙げようとしたら、逆も長い話になつてしまひさうです。然しわが國の氣候に堪へて榮えるやうな草木で、この園にあり餘る程ないやうなものは、確かにあまり稱讚に値ひしないものだと云つてもいゝでせう。

この園の中央に、一箇所本當に短い、殆ど眞黒に見える程濃い緑の草の生えた草原がありました。これは他の凡てのものに劣らず、いや、それ以上に大いに稱讚に値ひしてゐました。種々雑多な華麗な花がその中から咲き出で、その周りには新緑に燃える巖壘な柑橘や檸檬の樹が植つてゐました。そして、熟した實やまだ青い實、それから花などが眼に爽やかな蔭を造つてくれてゐるばかりでなく、その匂ひ高い香りでもつて嗅覺を喜ばせてゐました。この芝生の中央には驚く程美はしくいろ／＼な彫刻で飾られた、眞白な大理石の水盤がありました。その水盤の柱の上の一つの像があつて、そこから天然の噴水が、それとも技巧的なそれか、兎に角もう少し弱くとも水車を動かして得るだらうと思はれる位恐ろしい勢ひで、空高く水柱が噴出してゐました。その水は又嬉しうな音を立てて清澄な水槽の中

へ落ちて来るのです。で、水盤から溢れ出る水は芝生の下に隠れた溝を流れ、再び姿を現して、草原の周りの人工的に設備された美しい濠の中を流れ、それから幾條かの略同じ位な小流となつて、あらゆる方向に庭園を貫いて流れ、終に一箇所に合して、この美しい區域を後にしながら、水晶のやうに澄み返つて、谷の中へ落ち込んでゐました。尤も、その手前の所で二臺の水車を動かして、少なからぬ利益を地主に齎してゐました。

この園の眺望、その美しい設備、草花や噴水、又それから流れ出る小川などは、凡ての婦人達や三人の紳士連に大に氣に入りました。そして、もしこの地上で樂園を想像する事が出来るとすれば、その樂園は蓋しこの園の趣き以外のものではあり得ない、又現に眼前にあるこの美しさに果してどんな美しさを付け加へ得るか、それは自分達の知るに苦しむ處であると、異口同音に斷言した位で御座いました。で、一同は好い氣持になつて散歩したり、又は幾十となく異つた音色で互ひに競争でもするやうに啼いてゐる小鳥に耳を藉しながら、いろ／＼な葉四阿から取つて来た花で可愛らしい花束を編んだりしてゐましたが、その時、それ迄まだ他のものに氣を取られて心づかずにあつた、この庭の面白い特徴が眼に入りました。それは、この庭には殆んど百に上る種類の異つた動物の飼つてあることでした。で、

互に注意し合つてそちらを見ると、こゝには家兎が近づいて來たり、かしこには野兎が走つてゐたり、小鹿が寝てゐるかと思ふと牡鹿が口をもぐつかせてゐたりするのですね。その外にも未だ温順しい動物が、右に擧げたものと同じやうに人狎れて、嬉々として戯れ廻つてゐるのが眼に着きました。こゝに於てか、一同は又新たに大きな満足を加へることになりました。やがてこれを見たり、あれを見たりして、心ゆくばかりの散歩を済ませた時、あの美しい水盤の近くに食卓の用意をさせ、それから小唄を六つ程唱ひ、一寸舞踏をした後で、女王のお許しを待つて食事を攝りました。

堂々たる上に華麗で快適な設備を享樂しながら、一方では美味美食に一層心を浮き立たせられた結果、一同は食事が済んでからも新たに遊戯をしたり、歌を唱つたり、踊りを踊つたりして、女王が段々暑くなつて來たからと云ふので、隨意に休息する時間になつたことを宣言するまで、長い間打ち興じました。すると、他へ出掛けるものもあるし、又庭の美しさに心奪かれて、そこに踏みとどまつたまま、讀書又は圍碁、將棋に時を消す者もありました。が、中には又寝て暮すものもありました。が、午後四時になると、皆立ち上つて、睡眠を取つてゐたものは冷水で顔を洗つた上、女王の命に従つて、一同噴泉の傍に集合しました。そして、毎ものやうに座に就いてから、さて女王の提出した題材に

第一話(略)

ラムボレキオのマセツト一啞者を裝ひて、尼寺の庭師となりしに、尼達篋ひて彼と添寝をする話。

第二話(略)

一馬丁、アギル・フエリの妃と床を共にする。王秘かにこれを知つて、その馬丁を探し出し、髪を斷つ。髪を斷られた馬丁、同僚の髪をきり、それによつて、不幸を免れる話。

第三話(略)

一青年に戀した夫人、懺悔と良心の呵責とを口實にして、厳格な僧官を欺き、それに依つて自己の目的を遂げた上、相手にそのなす所の何たるかを知らしめなかつた話。

第四話(略)

ドン・フェリチエ、懺悔の勳行に依つて祝福に至ること

とをブツチオに教ふ。ブツチオがその勤行を勵む間に、フエリチエはその妻と逢瀬を娛しむ話。

第五話(略)

ツイマ(華奢子の謂)はフランチェスコ・ヴェルゼレジ氏に一匹の美しい馬を贈つて、その代りに彼の細君と話を交す許可を乞ふ。彼女が黙して答へないので、彼自ら代つて返答をする、かうして遂に萬事返答通りになつた話。

第六話(略)

リチアルド・ミストロはフィリツペロ・フジノルファイの妻に懸想する。然るにこの夫人甚だ嫉妬深いので、リチアルドは彼女を欺いて、彼女の夫フィリツペロが明日リチアルドの妻と或浴場で逢ふ筈であるかのやうに思はせ、彼女をしてその浴場へ行かせる。さて、彼女は良人に身を任せた積りであるが、實はリチアルドに身を任せてゐたといふ話。

第七話

テダルドその戀人との間に不和を生じて、フロレンスを去る。暫くして巡禮の装ひして再びその地に還

り、舊の戀人に逢つてその非を悟らせ、またこの女の夫がテダルドを殺したといふ嫌疑を受けて、將に死刑に處せられようとしてゐたのを救ひ、更に自分の兄弟連と女の夫とを仲直りさせ、自らは覺られぬやうに注意して戀人との仲を楽しむ話。

フィアメツタが話を終りました。一座の者は誰一人としてその話を褒めぬ者はありませんでした。その時女王は時間を空費しないやうに、直ぐ様エミリアに話をつゞけよと命じましたので、彼女は次の如く話し始めました。——先のお二人は好んで故郷のフロレンスを遠く離れておしまひになりましたが、私は再び舞ひ戻つて、私どもの市民の一人がどういふ風にして、一度失つた戀人と仲直りをしたかといふお話を致したいと存じます。

フロレンスにテダルド・デリ・エリゼエと呼ばれる貴族生れの若者が住んで居りました。この人はアルドブランデイノ・パレルミニといふ男の妻であるモンナ・エルメリナといふ貴婦人に深く想ひを懸けました。そして、模範的な行動によつて、當然その目的に到達いたしました。處が、この喜びも京の間で、いつも幸運に付き纏ふ悪運が現はれました。この婦人は前はテダルドに對して惜氣もなく恩寵を與へたのですが、何うした譯やら、それ以來急に男の心に

従ふことを拒むばかりか、男からの傳言など宛然馬の耳に風と聞き流すやうになりました。それがためにテダルドは快々として樂しまず、深い悲歎に暮れてゐました。尤も、彼のこの戀愛は深く秘め隠されてゐたもので、誰一人としてこの悲歎の原因を知る者は御座いませんでした。處で、この自分の方には何等の過失もないのに失はれてしまつたやうな戀を再び取り戻すために、彼も出来るだけの努力を盡して見ましたが、その努力も何の効果がないのを見て、いつそ世間を捨てよう、そして、自分をこんな不幸に陥れた女に、自分が日毎に衰へて行くさまを見る樂しみを與へないやうにして遣らうと決心しました。で、それがために彼は出来るだけの算段をしてお金を調達して、何から何まで打明けてある一人の親友以外には、友人にも親類にも自分の企てについて一語も洩らさないで、密かにフロレンスを去つてしまひました。

そこで彼はフィリツボ・フォン・サンドルチオといふ假名の下にアンコーナに赴いて、その地で或金持ちの商人の許に身を寄せ、その家の召使に雇はれまして、その人と一緒に船に乗つて、サイプレス島に向つて出帆致しました。テダルドの上品な動作や優雅な物腰が大層この商人の氣に入りました。そこで相手はテダルドに多額の給料を當てがつたばかりでなく、彼を仲間の位置に上せて、自分の商賣の

大部分を全く委せ切りに致しました。テダルドはその機に乗じて、熱心に事に當つた上、又それが巧く行きましたので、數年ならずして彼は手腕の優れた、有名な、そして富裕な商人になることが出来ました。で、彼はかうして新しい商賣に従事しながらも、時折りあの殘酷な貴婦人のことを思ひ出して、今もなほ失戀の痛手に悩みつゝ、何うにかしてもう一度その女に逢つて見たいものだと思ひを焦がすこともありました。七年間といふものは毅然としてこの心を押へ通して來ました。處が、ある日のこと、彼が以前に作つた詩で、かの貴婦人に對する自分の愛、自分に對する彼女の愛、それから二人で享樂した歡喜を詠んだものがサイプレスの島で誦はれてゐるのを聞きました時、彼には女が自分のことを忘れてしまふやうなことはあり得ないやうに思はれて、もう一度女に逢ひたい一念は焰と燃え、到底我慢してゐられなくなりましたので、急にフロレンスに歸る決心を致しました。そこで彼は自分の商賣をすつかり始末してから、たゞ一人の召使を伴つた切りてアンコーナまで戻つて來ました。其處から所持品を一切フロレンスにある仲間の友人の許に送つて置いて、自分は密かにジェルサレム詣りの歸途だと云つたやうな巡禮姿になつて、召使と一緒に故郷へ向つて旅路を急ぎました。フロレンスに到着して、彼は先づ二人の兄弟で經營し

てゐる一軒の小さな宿屋に旅装、解きました。その家は例の貴婦人の直ぐ近所にあつたのです。彼は何を措いても先づ第一に戀人の家の前に行つて、一目彼女の姿を見ようと致しました。處が、行つて見ますと、戸口も窓もすつかり閉ざれて、恰も彼女はもう何處かへ引越したのか、それとも死んでしまつたのではないかと思はれるやうで御座いました。で、とつおいつそんな事を考へながら、自分の兄弟の住んでゐる家の方へ遣つて来ると、今度は彼の兄弟が四人とも喪服を着て戸口の前立つてゐました。これを見て非常に驚きましたものゝ、數年前にこの地を去つた頃から見ると、自分の姿形は勿論衣裳まですつかり變つて居りますので、容易にその正體を見破られないことだけは分つて行つて、何故あの人達は喪服を着てゐるのかと訊ねて見ました。すると、靴屋の主人の答へはかうで御座いました。「あの人は、ずつと以前に家を出した兄弟のテダルドといふ人が殺されてから未だ二週間にならないから、あゝして喪服を着てゐるのです。何でもあの兄弟達は、私の聞き違ひでなければ、アルドブランデイノ・バレルミニとかいふ人がこのテダルドさんを殺したのだと訴へて出たので、今ぢやバレルミニは牢屋に繋かれてゐるといふことです。何故殺したかといふと、テダルドさんがその男の妻に懸想し

て、人知れずフロレンスに歸つて来て、女に云ひ寄らうとしたとかいふことで御座いますよ。」
 テダルドはこの話を聞いて、誰だか知りませんが、兎に角自分に大層よく似てゐて、自分がその男と間違へられてゐるのに少なからず驚きました。同時に又アルドブランデイノの不幸をも同情しない譯には参りませんでした。
 彼はそれから戀人の貴婦人が生きてゐるばかりでなく健康であることを聞いて、いろ／＼思ひに惱みながら、とつぶり日が暮れてから宿屋に歸つて参りました。そして、連れて来た召使と一緒に晩の食事を済ませますと、寢床は家中で一番上の階に用意してあると宿屋の者から附かされました。さて寢床に入りましたものゝ、寢臺が餘り上等でなかつた上に、晩の食事も大變貧弱な献立であつた爲めでもありませうか、いろ／＼な考へに悩まされて、彼はとう／＼夜半を過ぎてしまつても寢入ることが出来ませんでした。

立つてゐて、屋根から忍び込んだ三人の男がこの女に近づいて来る處でした。彼等はお互ひに親しげに挨拶を交した。後、三人の男の中の一人が女に向つて次のやうに申しました。「やれ／＼有難い、これでまあ俺達もやつと落ち着けるといふものだ。何しろテダルド・エリゼイを殺した下手人はアルドブランデイノだといふことをテダルドの兄弟達が證明してくれたし、彼奴自身も白狀して、今ではもうちやんと判決まで作製されたことは確實なんだからね。だが、油断大敵だから、もう暫く秘密は守つてゐなくちやならんぞ。だつて、若し俺達が眞實の下手人だといふことが分つた日には、今のアルドブランデイノのやうな目に、今度は俺達が遣はされなくちやならんのだからな。」
 この言葉を聞いて、若い女が大層嬉しさをうな様子を見せた後、三人は階段を降りて行つて寢室に入りました。テダルドはこれを見聞きして、人間の判断力がどんなに屢々、又どんなに大きな間違ひを仕出來す處のあるものであるかをつく／＼想ひ當りました。第一には自分の兄弟達が赤の他人を自分だと思ひ込んで、その死を悲しんだり葬つたりしたばかりか、遂には見當違ひの疑ひのために罪もない者を訴へて、偽證によつてその男の死を招來したことを考へました。第二には法律や裁判官達の盲目的な苛酷といふことも考へさせられました。一體裁判官といふもの

は眞實を究明する熱心の餘りに、屢々頭冥に陥つて、間違つてゐることまで無理に證言させ、外に向つては、神と正義との下僕だと云ひながら、その實不正と惡魔との手下になるやうな矛盾を敢てするものなんですわね。最後に彼は何うしたらかのアルドブランデイノを救ひ出すことが出来るかに思ひを廻らせ、この目的のために必要なことならどんな事でもしようといふ決心を固めました。
 で、翌朝になりますと、彼は自分の召使を後に残したまま、時刻を見計らつて、一人で例の貴婦人の家に遣つて参りました。折よく、その家の戸口が開いてゐましたので、その儘這入つて行つて見ると、取り附きの玄關の間に、その貴婦人が床上に坐つたまゝ、大きな悲しみに打たれながら、さめ／＼と涙に暮れてゐました。それを見て、彼は自分も同情の餘り殆ど泣きさうになりました。が、相手に近寄つてかう申しました。「奥さん、悲しむことは御座いませんで、今に慰藉が来るでせうからな。」
 これを聞いて貴婦人は顔を上げました。そして、泣きながらかう答へました。「有難う御座います。けれども、貴方は見知らない巡禮、何うして慰めたとか、私の悲しみだとか仰しやるので御座いませう？」
 そこで彼はかう云ひました。「奥さん、私は神様から遣はされたもので、貴方の涙を笑ひに更へ、且那樣を死から救

つて上げるために、コンスタンティノープルから只今此處に到着したばかりで御座います。」

貴婦人はこれを聞いて、驚いて申しました。「何ですつて、貴方はコンスタンティノープルから来た今この地へお着きになつたばかりで、何うして私だの私の夫のことだのを御存じでせう？」

そこで巡禮妻のテダルドは鹿爪らしくアルドブランディノのこの度の不幸について始めから話して聞かせた上、なほこの貴婦人の姓名から、彼女がアルドブランディノと結婚して何年になるといふことまで、自分の知つてゐることは、何も彼も饒舌り立てたもので御座います。

それを聞いて、貴婦人はすつかり驚いてしまひました。そして、これは蛇度豫言者に相違ないと思ひ込みましたので、彼の前に跪いて、若し貴方が夫アルドブランディノを救ふために遣つて來られたのでしたら、どうぞお願ひですから早速お救ひになつて下さい、購踏すべき場合ではないのですからと懇願致しました。

そこで巡禮は、非常に信心深い人のやうな態度をつつて、かう申しました。「奥さん、まづお立ちなさい。そして、もうお泣きになるには及びません。私がかれから申し上げることを好く注意してお聞きなさい。しかし、豫め御注意申して置きますが、この事は他の人にお漏らしになつては

いけませんぞ。只今貴女が歎いてゐられるその悲しみは、神様が私にお告げになつた處に據りますと、ある罪のため貴女に課せられたもので御座います。一つにはこの度の不幸によつて神様は貴女を罰しようとお考へになつたので、二つには、今後更に大いなる不幸に陥りたくないと思召したら、どうしてもこの罪を貴女は償はなくてはなりませんぞ。」

それに對して、貴婦人はかう答へました。「あゝ、私は澤山の罪を犯して居ります。ですから、特に神様が私に贖罪を求めていらつしやるのは、一體何の罪のことやら見當が着き兼ねます。若し貴方様にそれがお分りでしたら、何卒私に仰しやつて下さいませ。さうすれば、私は贖罪をするために、出来るだけのことは、何でも致すので御座いますから。」

巡禮妻のテダルドはかう答へました。「奥さん、申すまでもなく、私はその罪がどんなものであるかを存じて居ります。ですから、貴女にお訊ねするにしても、貴女から尙よく聞いて見るためでなく、貴女の懺悔によつて良心の苛責を増さうために過ぎません。さて本題に移りますが、貴女は以前に戀人をお持ちになつたことがおありでせうな？ さあ、仰しやつて下さい。」

この言葉を聞きますと、彼女は深い吐息をついて、一層

驚嘆してしまひました。と申しますのは、この戀について誰も知つてゐるやうとは思はなかつたからで御座います。

尤も、テダルドだと思はれた人が殺された當時は、それに似たやうな話が多少市中に聞えてゐる様でしたが、それもこの秘密を知つてゐる只一人の親友の口から不用意に漏らされたと云ふに過ぎないものであつたからです。そこで彼女は次のやうに答へました。「神様は本當に人間の秘密を貴方に啓示なされるものと思はれません。ですから、私も自分の秘密を貴方様に隠さうとは思ひません。仰せの通り私には以前不幸な戀人がありました。そして、私はその人をそれはく愛してゐました。ですが、今度その人が殺されました、そのために私の夫に災難が降りかゝつて参りました。勿論、私はその死を飽く迄悲しみ嘆いてゐるので御座います。と申しますのは、その人が旅へお出掛けになる前には、成程私はその方に辛く當つたかも知れませんが、その別離も、長い間の不在も、又その不幸な死でさえも、その方の姿を私の胸から掻き消すことは出来なかつたので御座いますものね。」

巡禮妻のテダルドはそれに對してかう申しました。「貴女が愛してゐられたのは、近頃殺されたその不幸な青年でなくて、テダルド・エリゼイその人でありました。ですが、何故貴女は又テダルドに對して腹を立てられたのでせう？」

彼はあの頃何か貴女のお氣に觸るやうなこともしたのですか。」

すると、女はかう云ひました。「いえ、あの人は私を怒らせるやうなことは決して致しませんでした。私があの人から遠ざかつた原因と申しますのは、或日私が一人の坊さんの許へ懺悔に参りまして、その賣僧から聞かされた言葉で御座います。と申しますのは、私がテダルドとの戀だの、二人の間柄だのについて打明けて申しますと、その坊さんは、今でも思ひ出すとぞつと致します程、私の罪をお責めになりました、そんな不義は罷めてしまはれない以上、私は地獄の底に墮ちて、永劫業火に苦しめられながら、悪魔の餌食となつてしまふと仰しやるのですものね。」

「それが怖ろしくなりまして、私はもうテダルドさんとは打解けまいと決心いたしました。で、誘惑から逃れるために、私はその後一切あの人からのお使者にも逢はなければ手紙も受け取らまいと致しました。その癖、心の中では、あんなに自棄になつて出奔したり身體を傷めるやうなことをなさらないうで、今少し我慢してゐて下さつたら、私もこの固い決心を投げ出してしまつたらうにと、いくら思つたか知れないのですわ。だつて、この世にあの方位可愛しいと思つた男は未だ他に一人もないので御座いますものね。」

そこで巡禮妻のテダルドはかう申しました。「奥さん、そ

れこそ今の貴女の不幸の原因になつた唯一の罪です。私はよく存じてゐますが、テダルドは決して貴女に戀を強ひるやうなことはしなかつた筈で御座います。最初貴女が彼を愛されたのも、たゞ彼が貴女のお氣に召したからで、云はば貴女は自ら進んで彼を愛されたのです。そこで彼も貴女のお心を推し測つて貴女に近づいて、だん／＼親しみを増して行つたのでした。で、その交際中も貴女は言葉や行爲で随分親しさをお見せになつたものだから、勿論彼の方でも以前から貴女を愛してはゐたのですが、彌が上にもその愛を募らせるやうな事になつてしまつたのです。さうだとしますと、いや、私は存じて居りますが、全くその通りでした。それなのに、一體どんな理由があつて、貴女はあんなに他所々々しく彼から離れるやうな事になつたのですかね。すべてかういふ事柄と申すものは、豫めよく考へて、若し罪として後悔しなければならぬものだとお認めになれば、初手から全然手出しをなすつちや不可ない處だつたのです。處が、貴女は彼のもの、彼は貴女のものになつてしまひました。成程貴女は、他の所有品同様に、貴女の勝手から彼が最早貴女のものでないやうにすることは出来ませう。ですが、貴女を所有してゐる彼から貴女御自身を奪ふことは、彼が同意しない以上、いはゞ盜賊同然で、甚だ不當な所業だと申さない譯には参りませぬ。

「處で、御覽の通り私も僧職にある身ですから、貴女の後生のために、僧職一般の風習に就いて少し許りお話しすることに致しませう。他人は兎もあれ、私に取つては、かうしたお話も不似合とは申されません。勿論、こんなお話を致すのも、今後貴女方が僧といふものについて今迄よりもつと正しい見解を抱かれるやうになつて頂きたいために外なりませんかね。

「成程、昔は僧侶といふものも確かに神聖な善良な人達であつたので御座いませうが、今は僧侶などと云はれたり、又はさういふ顔をしたりしてゐる人達を見ましても、それはほんの外形だけで、唯法衣を身に着けてゐると云ふに過ぎないのです。しかもその法衣にした處で、あれは決して眞物の法衣だとは申されません。と云ふのは、一體法衣は教團の創立者によつて、狭く貧弱に、且粗悪な布で拵へ、身には粗服を纏うても俗界に未練のないその靈に應はしくするやうに定められたもので御座います。それが當節の僧侶は、その法衣をあつた通り幅も廣く見事に、而もなかにか立派な布片で造つて、形や恰好で高僧の威儀を見せ、俗人が美服を纏ふと同じやうに、さうした法衣で教會や市中を練り歩いて少しも意に介しない有様です。そして、漁夫が川の中に網を投じて出来るだけ多くの魚を捕らうとしてゐるやうに、彼等僧侶は自分達のだぶ／＼した法衣の袖の

中に澤山の女信者だの、未亡人だの、その他愚しい男女を捲き込むことを考へてゐるだけで、他には何の心遣ひもなければ用もないといふ有様になつてしまつて居ります。

「さういふ譯ですから、この人達は實際に於ては最早決して法服を着てゐません、たゞその色合を留めてゐるに過ぎないのです。昔こそ僧侶といふものは人間を祝福に導いて行かうと努力したのですが、今では女達と金持だけに目を着けて、もうずつと以前から、たゞ聲を大にしたり恐ろしい話をしたりして、愚民の心を恐れ戦かすことにはばかり専念してゐる有様です。そして、そのお説教の中で、彼等は罪業がお布施だの看經だの償はれるものだと言つて、自分達の手許に皆から麵麴だの葡萄酒だのを届けさせたり、死者の靈魂のための回向だと云つては食膳を供へさせたりするやうに仕向けます。(處で、この坊さん達が本當に信心の志から出家したものなら宜しいが、たゞ汗水流して働くのが可厭さに坊主になつたまでですから耐りませぬや。さてこのお布施だの御祈禱だのといふものが私達の罪障を消滅させる一助になることは全く事實であるとしても、それを一生懸命に遣つてゐる人達が、若し自分達の獻じるものが何ういふ人間のためになるかを知つたとしても、恐らくそんな獻金などは寧ろ控へて置くか、でなければ豚にでも呉れて遣ることせうよ。

「處で、この坊主どもは、一つの富を所有する者の數が少なければ少ないほど、一人前の頭割は益々多くなるといふことを心得てゐますから、何人にも頼らないで、一人で獨占したいと思ふやうな品物から他人を遠ざけようとして、聲を大にして、罪の恐ろしいことを述べ立てることに力を盡してゐます。彼等は人前では肉慾を非難します。これは世人が肉慾を断念して、自分達だけで女を獨占したいためなのです。彼等は高利だの不正な利得だのを呪ひます。それと云ふのも、不義の富をその本来の所へ還すことを自分達に一任せようといふ腹なのです。そして、實はそのお金で、今少し好い法服とか、今少し好い地位とか、或ひは更に利益の多い僧正の地位などを買ひ込まうと云ふのですね。而もその金に就いては、その所有者はどうしても破滅に終るべきだなどと云つてゐたものですがね。

「若しも人がこのやうな事や又はその他の不正について彼等を非難しますと、彼等は次のやうな返辭をして、その大きな責任を免れようとするのです。いはく、『吾が言葉を守りて、吾が爲す所に習ふ勿れ』と。これでは宛然身を守りて、敵を撃つことが、牧者に取つてよりも羊に取つて一層容易なことであるかのやうに見えますよ。彼等の大部分は又、かうした返答でもつて胡麻化さうといふ當の相手が大概その言葉を自分達の意味とは違つたやうに解釋してくれるも

のだといふことを好く知つてゐるのですね。今日の坊主どもは他人が自分達の云つたやうに行ふことを望んで居ります。即ち世人は彼等の財布の中に金を満たし、彼等にあらゆる秘密を打ち明け、貞操を守り、辛抱強く、侮辱を宥し、悪評を放たぬやうにすべきだと云ふのです——勿論さう云ふ事は好い、立派な、敬虔な行爲には相違御座いませぬがね。たゞ何故人はさうしなければならぬのでせうか。と云ふと、それは一に、若し世間の人達が同様にさうした日には、自分達がしたくとも出来なくなるやうなことを、自分達だけで遣らうために外ならぬのですよ。

「お金がなくては怠けてゐられない位は、誰でも知つてゐることです。若し皆さんが銘々自分々の娯樂のためにお金を使つてしまつたら彼等坊主は僧院でのらくらしてゐる譯には行かなくなりませぬ。若し又皆さんが辛抱強くなく、他人の侮辱を宥さないやうでしたら、彼等坊主は皆さんの家庭に入り込んで、その名譽を穢すやうな眞似が出来なくなりませぬ。今更何を詳しく述べ立てる必要がありませう？ 彼等がそんな辯解がましいことを申し立てるのは識者の眼から見れば、彼等自らを非難してゐるに過ぎないので。若し彼等が節制ある聖い生活をする事が出来ないと思つたのなら、何故彼等は潔く良しく家に引籠つてゐないのです？ 若し又彼等が僧侶といふ神聖な地位に吾と吾身を捧

げようと一度でも考へたのなら、何故彼等はあの聖なる福音書にある『主は善を爲すこと善を教ふることを兩つながら始め給へり』といふ言葉に従はうとはしないのでせう？ 先づ第一に自ら進んで善を爲した上でこそ人を教ふべきです。教壇に立つては、大膽を上げて、偉さうにお説教をしてゐながら、陰に廻るとお追従を云つたり、惚れ込んだり、普通の女へは勿論、甚だしいのは尼さんの許にまで這ひずり込む僧侶はいくらあるか分りませぬ。そんな人間を私どもは模範にすべきでせうか。さうしたい者はするが可いのでせう。だが、それで好いかどうかは分つたものぢやありませんね。

「さて、妻としての貞操を破るのは容易ならぬ大罪だと云つて、貴女を叱つたあの坊主は正しいと致しませう。然し私はかう反問して見たいのです、偷盗は更に大きな罪ではないか。人を殺すとか、又は散々悲歎に沈ませた揚句、出奔させるとかいふことはもつと大きな罪ではないかと。何人だつてこれは承認する處でせう。一體男と女との親交は罪としても自然な罪です。偷盗、殺人、それから追放などといふものは悪意の所産です。處で、貴女が、自ら進んで彼のものとなりながら、再び彼から無理に離れてしまつたといふのは、取りも直さず盗みをしたも同様であることは、既に明かに申上げた通りで御座います。次に私は貴女が彼

を殺したのだと申上げない譯には行きませぬ。何故と云ふに、たとひ彼が自殺をしなかつたとしても、それは彼に對して日毎に冷酷になつて行かれた貴女のお蔭ではありませぬから。が、律法の定めによつて、ある犯罪に何等かの係りある者は、自らの行爲に依つてその罪を犯した者と同等であると考えますよ。加之、彼の追放と七年間の不幸な漂流とに對して貴女に責任があることは、到底否定することが出来ないのです。で、今挙げた三つの例の何れを取つて見ても、貴女はあの男と交際を續けてゐられた時よりも、ずつと大きな罪を犯していらつしやるのですね。

「處で又、あのテダルドといふ男は貴女からそんな虐待を受けなくちやならなかつたか何うかといふことが、こゝで問題になりますよ。勿論、彼はそれに値ひするやうなことはして居りませぬ。それは貴女御自身の仰しやつた通りです。それに又あの男がわが身以上に貴女を愛してゐたといふことは、私がよく存じてゐます。あのテダルドが他人の疑ひを招く惧れなしに、自由に貴女のことを話し得るやうな場合、何人よりも先づ貴女に對して拂つてゐたやうな尊敬、崇拜、憧憬を捧げられたものは未だ嘗てなかつたやうに思はれます。彼は自分のあらゆる幸福も、名譽も、自由も凡て貴女の掌中に藏つて置いたのでした。彼は高尚な青年ではなかつたでせうか。彼は他の青年達にも優つて美し

くはなかつたでせうか。彼は青年に應はしいやうなことから、何を遣らせても手際よくはなかつたでせうか。彼は愛せられてはゐなかつたでせうか、尊敬せられてはゐなかつたでせうか、到る處彼は世人から歓迎せられなかつたでせうか。かういふ事柄に就いても、貴女は私に『否』とは云はれないでせう。何うして又貴女は一人の馬鹿な、下劣な、嫉妬深い坊主の好い加減な言葉なぞに惑はされて、あの男に對して殘酷な仕打ちに出でようといふやうな決心が出来たのでせうね？

「一體、女が男を侮つたり輕蔑したりするのは、何といふ奇妙な錯誤に陥つたものでせうね？ それ處か、女としては、自分が何であるか、又如何に偉大な高貴な氣象が他の凡百の者を描いて特に男性に與へられてゐるかを考へて見たなら、男から愛されるといふことは身の幸福と褒め讃へなくてはならない筈ですがねえ。さう思つたら、女は何にも優つて男を尊敬し、一生懸命に男の氣に入るやうにして、その愛を失ふまいと努力すべきです。それなのに、おせつかいな生臭坊主などの言葉に乗せられて、貴女は何をせられたか、それは貴女御自身でよく御承知でせう。思ふに、その坊主は自分で貴女の情夫になりたかつたのですね。それだから相手の男をその地位から放逐しようといふので、大いに策を弄したものでせうよ。

「で、さういふ事は、人間のあらゆる行爲を秤にかけてお裁きになる正義の神様としては、決してお見通しにはならない罪です。それなればこそ、貴女の旦那様はテダルドのために、罪もないのに死の危険に陥るばかりか、貴女は貴女で、何の罪もないテダルドを無理に引離さうとされたその時の男の苦しみと同様のそれを忍ばなければならぬのです。で、若し貴女がこの困厄から解放されたいと思召すなら、次の事を私にお約束なさらなければなりませんぞ。勿論、お約束ばかりではなく、後ではそれを實行なさらなくてはなりません。それは他でもない、若しあのテダルドといふ男が長い追放の旅から再びこの土地へ戻つて来ましたら、その時は貴女も彼に恩恵、愛情、好意を示して、あの無智な坊主の云つたことを愚かにも信用した以前に、彼が占めてゐた地位を與へ、再び親しい交際を許して遣らなければ不可いのです。」

かう云つて巡禮委のテダルドは話を終りました。そして、貴婦人の方でも非常に注意してその言葉を聴いてしまひました。彼女は彼の提唱する論據を全然正しいものと考へ、彼の言葉を聴いてゐる間に、自分は自分の罪のためにこんな不運に遭つてゐるのだと固く信ずるやうになりました。そこで彼女は次の様に申しました。「貴方様のお言葉が眞實であると共に、これ迄私が神聖だと考へてゐました教會の

方などは全くお言葉通りのものであることはよく分りました。なほ私がテダルドに對して執つた態度が大層間違つてゐたことも判然分りました。で、若し出来ることなら、私は只今貴方様が仰せになつたやうな方法で、喜んでこの過失を償ひたいと存じます。けれども、何うしてそんな事が出来ませう？ テダルドは最早歸つて来ることは出来ません。だつて、あの人は死んでしまつたのです。で、人間の力に及ばないことを何うして貴方様にお約束しなくてはならないのか、私にはどうも分り兼ねますの。」

そこで巡禮委のテダルドはかう答へました。「奥さん、神が私に啓示し給ふ處に據れば、テダルドは決して死んでは居りません。彼は立派に生きてゐます、そして、若し再び貴女の愛を得られるなら、彼は幸福に違ひありません。」

夫人は答へました。「失禮で御座いますが、仰しやることにお氣をお付け下さいませ。私はこの家の戸口に短刀で刺し透されて死んでゐるテダルドを見たので御座います。この兩腕で私はあの人を抱きました。そして、あの人死顔に涙を流いだもので御座います。その涙ゆゑに多分世間では私のことを兎や角申すやうになつたので御座いませう。」

そこで巡禮はかう申しました。「奥さん、貴女が何と仰しやいませうと、私はテダルドが生きてゐることを確信を以て申し上げます。そして、若し貴女が先刻私の申しました

ことをお約束下さつた上、それをお守りになりますなら、恐らく貴女はテダルドに近々お逢ひになることが出来るでせう。」

貴婦人はそれに答へました。「私は喜んでお言葉通りに致しませう。いゝえ、かう申してゐる間にも、もうその通りに致してゐるので御座います。この私に取つては、夫が無事で放免されることと、テダルドが生きてゐるのを見ることよりも喜ばしいことはない筈で御座いますものね。」

テダルドは、今こそ自分の正體を露はすと共に、夫の身に關して一層確實な希望を抱かせて相手の婦人を喜ばせてもよい頃合ひだと思ひましたので、「奥さん」と云ひ出しました。「旦那様のお身に關して安心して頂きたいために、私は貴女に一つの秘密をお知らせ致します。が、その秘密は一生お守りになつて下さい。そして、何人にもお漏らしになつてはいけませんぞ。」

貴婦人は前からこの巡禮の敬虔な態度に絶大の信用を置いてゐましたので、それを聞くと、相手を奥まつた、人気がない室に案内しました。そこでテダルドは、それ迄非常に注意深く藏ひ込んで置いた指環を取り出しました。これは彼が以前この婦人と過ごした最後の一夜に相手から贈られたもので御座います。彼はその指環を夫人に見せて申しました。「奥さん、貴女はこれを御存じですか。」

貴婦人はその指環を見ると、すぐにそれと覺つてかう申しました。「はい、これは以前私がテダルドに與へたもので御座います。」

そこで巡禮は立ち上つて、巡禮の外套と帽子とを急いで脱ぎ捨てながら、フロレンス人の口調でかう申しました。「それでは貴女は私がお分りになりますか。」

見ると、相手がテダルドなので、彼女は死んだ者が生きた人の姿を藉りて地上に彷彿ひ出たのを見るやうに、すつかり驚いてしまつて、相手が怖くてなりませんでした。ですから、サイブラス島から歸つて来たテダルドを歓迎するやうな身振りを見せる處か、墓穴の中から蘇つて来た人でも見るやうに、彼から逃げようと致しました。テダルドはかう云ひながら、彼女を引き戻しました。「奥さん、お疑ひになつてはいけません、私はあなたのテダルドです、生きてゐますし健康でもあります、死んだことなどありません、貴女や私の兄弟達が何と思はうとも、私は未だ一度だつてあの世へ往つたことなどありませんよ。」

これを聞いて、婦人は少し許り勇氣を回復しました。そして、彼の聲が分つて見ると、これこそテダルドに相違ないと合點が行きましたので、彼女は相手の頸に縋り着いて泣きながら接吻しました。そして、かう申しました。「私の可愛いテダルド、あゝ嬉しい、貴方が又歸つて来て下さら

「奥さん、今は心からの挨拶など時を過してある場合ではない。私は早速出て行つて、貴女の夫のアルドブランディノを再びお手許へ返すやうに心配したいと思ひます。多分明日の晩方にならない間に、何とか吉報をお聞かせすることが出来ることと思ひます。若しも私が今考へて居るやうにあの方の救助に就いて好い知らせを手にすることが出来ましたら、私を明晩お宅へお寄せになつて下さい。さうすれば、私は今のやうに急いだりしないで、ゆつくりと落ち着いた貴女とお話しすることが出来るでせう。」

そこで彼は再び巡禮の外套と帽子とを身に着けて、もう一度夫人に接吻しました。そして、うれい希望で彼女を慰めた後、夫のアルドブランディノが囚へられて、放免の望みも絶え、今はもう目録に迫つた死の恐怖に怯えてゐる獄舎に赴きました。テダルドは教師として獄卒の許可を受けた上、その中へ這入つて行きました。そして、アルドブランディノの傍に坐つて、かう申しました。「アルドブランディノさん、私は貴方の友ですぞ。神も貴方の冤罪を憐れに思召され、貴方を救ふために私を遣はされたので御座います。ですから、若し貴方が神に對するつゞましい心からして、私が今貴方に要求する小さな捧げ物を承諾して下

さるなら、死の判決が下されようといふ明日の晩ならないう間に、貴方は放免の宣告を聞くことが出来ませうぜ。」アルドブランディノはそれに答へました。「有難う存じます。たとひ私は貴方を知らず、何處かでお目にかゝつたやうな記憶もないとは云へ、かうして私の放免に骨を折つて下さるからには、仰しやる通り貴方は眞個私の友に相違御座りませぬ。實際私は、世間で申しますやうに、死刑の宣告を受けなければならぬやうな、大それた罪を犯した覚えは更に御座りませぬ。が、他の事では随分數々の罪も犯しましたから、それで神様が只今のやうな境遇に私を陥れになつたもので御座いませう。ですが、若しも神様が今私にお慈悲をお懸け下さいませうでしたら、私は神様に對するつゞましい心からして、些細な事は云はずもがな、たとひどのやうな事であらうとも、喜んでお引請け致す考へで御座います。況んやたゞお約束するなどいふことは勿論です。ですから、何卒何事に據らず貴方のお氣に召すことを御要求になつて下さいませ。さうすれば、私は、此處から無事に出て行くことが出来さへすれば、必ずそのお約束を實行することで御座いませう。」

人だと思ひ込んでしまつたればこそ、貴方をこんな目にも遣はせたのです。ですから、彼等が貴方に宥しを乞うた場合には、何卒これからは彼等の友達になつて、兄弟のやうに交際つて戴きたいもので御座いますね。」アルドブランディノはそれに答へました。「自ら辱しめを受けたものでなければ、復讐の快味は分りません、また人間がどれ程一生懸命になつて響を返さうとするものであるかも知れないものです。それにも拘らず、私は、神様の憐理によつて放免せられた一心からして、喜んで彼等を宥しませう。いや、この言葉と同時にもう宥しました。加之、若しも私が生きてこの牢獄を出ることが出来た上、あらゆる危難から免れることが出来ましたら、この事に關しては貴方のお氣に入るやうに取り計らひませう。」

巡禮はこの答に満足して、それ以上くはしいことは何にも云はずに、明日の日が、未だ暮れ切らない間に、相手を放免するといふ確報が到着するに相違ないから、氣を落さないで待つてゐるやうに、呉れ／＼も力を附けて遣りました。

そこで彼はアルドブランディノの許を去つて、お役所へ出懸けました。そして、その時分最高の地位を占めてゐた貴族に逢つて、次の様に申しました。「閣下、何事に據らず事の眞相に觸れるといふことは、誰でも喜んで努める處で

御座いますが、取分け閣下が就いてゐられるやうな地位を占めて居られる方々に取つては、無事の民を宥しめることなく、眞の犯人を罰するためにも、この事は極めて肝要なことで御座いませう。そこで眞犯人が罰せられて、閣下の御名聲が揚ると共に、當然受くべき者の頭上に禍ひが下るやうにと思ひまして、私は實は推參致したやうな次第で御座います。御承知の通り、アルドブランディノ・パレルミニは世間から随分手酷い扱ひを受けました。そして、閣下御自身も、テダルド・エリゼイを殺したものは、このアルドブランディノに違ひないといふお考へで、彼に對して將に死の宣告を下さうとなさつてゐます。が、閣下のお考へは確かに間違つてをります。今晚中にも私はその十分な證據をお目に懸けて、眞の殺人犯者を閣下にお手渡し致したいと存じます。」

この大官はアルドブランディノに大層同情を寄せてゐましたので、この巡禮僧の言葉をよく聞き入れて、いろ／＼この僧とも談合をした後、この僧に案内をさせて、自ら件の家へ赴き、寢入つたばかりのその家の主人である二人の兄弟とその召使とを有無を云はせず引捕へました。大官は事の眞相を知るためにこの三人の者を拷問に懸けようと思ひましたが、彼等はそんな手数を煩はすまでもなく、始めは一人々々、次いで一同口を揃へて腹藏なく、銘々の罪状